

幼馴染が彼氏作ったから俺も彼女作りたい

仮面

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

幼馴染に彼氏ができた。別に幼馴染のこと好きだった、とかじゃないけど物凄いモヤモヤするから、俺も彼女作ろうと思う。どうやったら出来るのか解らないけど。

某掲示板の某SSをかなり意識している節があります。

# 目次

## 一学期

死にたい。	1
モテたい。	11
暇を潰したい。	20
ぼけーつとしたい。	29
サボりたい。	38
予定を作りたい。	47
教えてもらいたい。	55
勉強したい。	64
負けたくない	72
勝てない	81
怖い。1	91
怖い。2	100
退院したい。	108
夏休み	
断りたい。	117
はつこい。	126
叫び散らしたい。	134
見に行きたい。	142
番外編 テストのけっか	151
真摯に向き合いたい。	154
頼りたい。	162
吸いたい。	171
楽しみたい。	180

作りたい。 |

喧嘩したい。 |

初恋。 |

おっぱいを揉みたい。 |

探さない。 |

告白されたい? |

誰かのご飯を食べたい。 |

友達になりたい。 |

二学期

頭を下げたい。 |

閑話 陰キヤとビツチ |

時間を潰したい。 |

熱くなりたい。 |

本気になりたい。 |

どうしたい? |

## 一学期 死にたい。

人が悪夢を見る時というのは、大体心の中でモヤモヤするものがあつたり、不安なことがあつたりする時だ。

悪夢の種類にも幾つかあるんだろうけど、そもそも夢というものは大体覚めてしまったらどんな夢だったか思い出せないんだから種類もクソもない。目が覚めた瞬間に、「あー、なんとなく嫌な夢だったなー」とか物凄く臆気な記憶で目覚めを良くしたり悪くしたりする。大体悪くする。

つまり今日、俺、神崎晴人が物凄く嫌な気分が目覚め、その瞬間に何となく嫌な夢だった気がしているのは、多分悪夢を見たからで、なぜ悪夢を見たのかと聞かれたら、多分モヤモヤすることがあるんだろう。

時計を見ると六時五十二分。あと八分したら目覚まし時計がクツうるせえ音で叫び出す頃だ。目覚まし時計に起こされた所で目覚めは悪いのだからたまには早起きして学校に行く用意を進めようと思う。八分早く起きただけで早起きと呼べるのかは別として。

毎年毎年「今年の暑さは過去最高です！」なんてボジョレヌーボーのチラシみたいなことほざく天気予報士にはイライラするが、実際毎年夏の暑さはだるくなっていったる気がする。制服とかいうカッターシャツは暑苦しいので登校ギリギリまで着ない。制服がかかってるハンガーを手に取り、寝間着のままリビングへ向かう。しよぼしよぼした目を擦り、階段を踏み外さないようにゆっくり降りる。この前踏み外して姉ちゃんにアホ程笑われたし。

「おはよ晴人」

「んあー」

リビングでは大して面白くもない朝の情報番組をぼけーっと眺めながらコーヒーを啜る我が姉、神崎雨の姿があつた。肩くらいまである髪の毛は茶色に染め、女性にしては高めの身長。めちやくちやはつ

きりした顔立ちで、今は椅子に座って足組んでるもんだから、なんと  
いうか、「女帝」って感じ。

「台風来てんだって」  
「マジで？」

テレビ画面は台風の進路を示しており、そのまま進めば日本に上陸  
する旨を気象予報士が話してらっしゃる。うわ、直撃じゃん。あ、で  
もテスト遅れるかな？それはラッキーかも。

「いつもより起きんの早いね、まだパン焼いてないけど」

「悪夢で起こされた。いいよ別に、先に顔洗うし」

「おー、引きずってんね」

「そんなんじゃねーよ」

「ハムいる？」

「いる」

姉ちゃんのニヤニヤを黙殺して洗面所に向かう。マジで引きずつ  
てないし。というかそもそも気にしても無い……いや、気にはしてる  
けど。

乱暴に水を顔に叩きつける。夏だから、冷えた水が顔にぶつかるの  
は三割増し位で気持ちがいい。特に今日は目覚めが悪かったから余  
計に気持ちがいい。ついでに髪の毛の寝癖を直しておく。まあ別にそん  
なに付いてないけど。

「寧ろこの寝癖、割と自然でかつこいいんじゃねえの？」

鏡の前でボケた顔してる俺に話しかけてみる。かつこよくねえ  
よ、つて俺の中の俺が呟いた。えー、イケてると思うんだけどな、今  
日の寝癖。

「いや、寝癖以前に顔がかつこよくねえよ？」

うっせえ。知ってるわそんなこと言われなくても。誰だそんなこ  
と言ったやつ。俺か。

姉ちゃんは美人なんだけどなあ……なんか俺の顔はそうでもない。  
女みたいな顔してる気がする。しかも中途半端に。見てんの嫌に  
なってきた。やめよ。

リビングに戻るとトースターから食パンが二枚飛び出していた。

テーブルにはレタスとハムが皿に盛り付けられており、俺が普段座ってる位置には麦茶の入ったコップも用意されている。

「なにその髪型？」

「寝癖直した」

「中途半端に直ってないけど。後ろの方とか」

「自分じゃ見えねえし」

「だからモテないんだよ」

トーストにマーガリンを塗りながらククツと笑う。モテないのは寝癖のせいなのか。なるほど。

「それだけじゃないけどね」

「エスパーかよ」

「何年あんたの姉やってると思ってるの？……ほら、塗ったから食べな」

コップの隣に置かれていた空の皿の上にマーガリンが塗られたトーストを置く姉ちゃん。自分のトーストにはマーガリンを塗らずにそのままかぶりついていた。ダイエット中らしい。

「まあ、その寝癖もちゃんと直したら詩織ちゃんも振り向いてくれるかもね」

「まあ、最近増えた二キロの体重を減らしたら新しい彼氏も出来るかもな」

「いっぺん死ねば？」

腹立つこと言われたから腹立つこと言い返したらすっげえ素直に辛辣な言葉吐いてきやがった。弟に言うセリフかよそれ。

「てか、俺詩織のことはどうとも思っていないから」

「あっそ」

そりゃあ、昔結婚の約束とかしたよ。何回も互いの家でお泊まりしたよ。でももう高二だし。そりゃあ彼氏だつて出来てもおかしくないだろ。

日高詩織は俺の幼馴染でクラスメイトだ。保育園の時に親同士が仲良くなつて、家が近かったこともありきょうだい同然のように一緒にいた。小学校中学校も当然一緒。何故か高校まで被ってしまい、現

在高校二年生、クラスまで同じである。

セミロングの黒髪をサイドテールにしており、人当たり良好、誰とも仲良くなる。ちよつとアホの子で、たまにド天然をぶちかます系女子。可愛くなかったらメツタメタにいじめられる系女子だが、ルツクスがかなりいいのでそういうことも無く。同性から嫌われてるとかいいう話もあんま聞かないから上手いこと立ち回ってんだろうな。

今でも一緒に飯食ったり、急に家に来たり行ったりする仲だつたりして、学校で言い合いなんかすると「また夫婦喧嘩かよ」とかクラスメイトに言われたりもしてた。その度に詩織が「ちがつ、そんなじゃなくてー！」ってバタバタするのを見て更にかかわれたりもしてた。

そんな詩織に彼氏が出来たのだ。お相手はバスケット部のイケメン。名前忘れた。バスケットが上手いらしい。

詩織に彼氏が出来たことで夫婦喧嘩といじられた時の「そんなじゃなくてー！」がマジで「そんなんじゃなかった」ことが発覚し、クラスメイトにめちやくちや謝られた後に同情された。いやお前らが勝手に勘違いしただけやん？

「なんかごめん」

「照れ隠しだと思ってた」

「よくよく考えたらお前と日高は無いわな」

「お前色々ダメだし」

「詩織ちゃんが神崎のこと好きになる理由無いもんね」

「お前色々と終わってるし」

これら全部詩織が付き合ってから言われたことです。マジふざけんなよ。後半割とただの悪口じゃねえか。

トーストは先に耳を綺麗に食べてから、真ん中の部分にレタスとハムを乗せる派だ。姉ちゃんも同じ食べ方をする。詩織はそんなの気にせずにバクバク食べる。

「まあ、解らないでも無いけどさ」

「何が」

「別にー。あ、今日仕事ラストまでだから夜遅い」



「あいよ」

姉ちゃんは俺と六つ歳が離れてる。モールの中にある服屋で働いてる社会人。まあこの人は事務とかOLとかよりも、そういう営業とかの方が向いてるだろう。背高いから服とか映えるし。

両親は県外で働いてる為、姉ちゃんと二人暮らし。たまに休日に帰っては来るけど、最早二人で生活することに慣れてしまったので逆に帰ってきたら気まずい。何喋ればいいのか解んねえし。まあ生活費とか家賃はちゃんと入れてくれるからいいんだが。そんな訳で家事全般、二人で分担。ご飯は姉ちゃんが作る方が美味いから基本姉ちゃんの仕事になってる。

「ごちそうさま。寝癖直してくる」

「後ろのねー、右耳の上の方。ぴよんってなってるから濡らして櫛で梳きな」

なんだかんだで姉ちゃんは俺に甘いと思う。

くく

俺の通ってる高校は歴史ある云々かんぬんで多くの若人が社会へ翔いたらしい公立高校である。らしい。詰まるどころボロい。古い。ちなみに偏差値は中の下くらい。門だけ異様に綺麗。立て替えたから。

そんな無駄に綺麗な門をくぐる。

「暑っつい」

まだ六月も半ばだったのにこの暑さマジで何なの。外に出た瞬間に体力削られる。ホント高校近い所選んでよかった。歩いて十五分。神では？

「アスファルトに溶かされる……」

つい言葉に出してしまうくらい暑い。さっさと教室入ってしまおう。

大体高校生にもなってきたら一クラス四十数人、まあ色々な奴がい

る訳で。教室の中が一つの地球の縮図になってんじやねえの、って思ったりもする。

例えば、教壇の近くではしゃぎ回っている運動部の連中。多分朝練終わりなんだろうな、クソ暑いのによくやるわ。そんな後なのにあんなだけはしゃげるあいつらは……

「ガキ」

「聞こえてっぞ神崎！」

やべ、声に出た。

で、なんか俺の机の周りで漫画読んで笑ってる連中は……

「陰キヤ」

「殺すぞ神崎」

やべ、声に出た。

で、後ろの方できゃつきゃしてる派手な女子連中。髪の毛の色も睫毛の長さもスカートの長さすら皆色々と違うのすげえな。あいつらは……

「ビツチ」

「死ねよ童貞」

やべ、声に出た。

「そーゆーとこだよ、ハル」

ふと後ろから声をかけられる。姉ちゃんの次くらいによく聴く声。親の声より聴いた声。もっと親の声聴け。いや帰ってこないからしょうがない。

「思ったことすぐ口に出すから「色々」と終わってる」って言われるの」

「そういう体質なんだよ」

「そんな体質はありません」

いつも通りのサイドテール。幼馴染で彼氏持ちの日高詩織がそこにはいた。

「おお、離婚調停だ」

誰だ今離婚調停とか言った奴。

「てかお前珍しく早いな。いつも遅刻ギリギリなのに」

「え？あー……うん。まあね」

頬を赤らめてぽりぽりとかく。いや何処に赤らめ要素あったんだよ。よくわからん。

けど、なんか、あんまり見たことない顔してやがった。あれか。恋してる顔か？

ちよつとイラツとした。

「ムカつく」

「なんで？」

「俺も知らん」

本当に俺も知らん。

けど、なんかムカムカする。

あー、やっぱ気にしてんのか。

別に詩織のことが好きだ、とかそんなことは無い。けど、なんかイラツとする。

独占欲？幼馴染に？

アホじゃねえの？……でもそんな気がする。

「嫌な夢見たから機嫌悪いんだよ」

嘘は言ってる。そう言ってから俺の机へ向かい、俺の席を占領してる陰キヤ共の声を掛ける。

「どいてくんね？陰キヤ君たち」

「いやお前もどつちかと言うと陰キヤだぞ？」

え？マジで？俺自分のことバリバリ陽キヤだと思ってたわ。

まあクラスで一番仲いいのかこの陰キヤ君たちの中の一人である時点で俺もお察しである。そいつが現在進行形で俺の席を占領してる。

「おい、どけよコバ」

「解った。解ったから蹴るな」

眼鏡を掛けたこいつ、小林亮太。通称コバ。ルックスは悪くないのだが、如何せん趣味がエロゲーとかいう気持ち悪さでクラス全員から若干引かれてるダメな奴。エロゲー趣味が無ければ普通に面白い奴だから割と仲良くなれた。

席を退いてくれたので鞆を置き、椅子にもたれかかる。暑い。なん

で陰キヤ組、皆俺の机の周りにいるの？

「神崎氏、何故、今日は日高氏が早くに登校していたか気になりませぬか」

「須田、普通の話し方してくれ」

丸眼鏡をかけたチビ、須田がイタイしキモい喋り方で訳の分からんことを聞いてきやがる。今機嫌悪いの見えてねえのかなコイツ？

「なんでだと思っうー？」

「幼馴染とは言えアイツの行動原理を全部理解してるわけじゃないぞ俺は」

「だろっうねー、絶対神崎が想像出来ないと思っうよー」

「そう言われると腹立つと同時に気になる」

俺が想像出来ないこと？ごめんマジで解らない。というか俺が想像出来ないことらしいから俺がわかるはずないか。

「日高、高見と一緒に登校してたんだよ、今日。バスケット部朝練あるのに」

「……高見って誰」

……あ、あいつの彼氏のバスケット部の。思い出した。高見玲音。そうだ、キラキラネームみたいなのやつ。

へえー。朝起きるの超苦手系人間の詩織が。彼氏と登校する為に早起きして、一緒に登校。確かに俺はあいつの彼氏でもなんでもない。ただの幼馴染だから、成程俺には想像出来ないことだった。

ただ、それなのに。  
なんかムカつく。

高見玲音は名前負けしない高身長爽やか系のバスケット部で、顔が良く運動神経も良いというのに変に気が弱い奴……らしい。同じクラスなったことないからよく知らない。

けど噂によると草食系なんだとか。どっちから誘ったんだろっうな。多分詩織だろっうな。一緒に登校しない？って言ったんだろっうなー。私頑張って起きるからねって。

「あれ？高見どうしたのー？」

なんというか。

この感情が解らん。

……ただ、ひとつ言える事は。

「……死にたい」

「振られたもんな」

「だから元々付き合ってもねえって」

あ、今日見てた悪夢思い出したわ。

学校の体育館。沢山の観客。響き渡るドリブルをつく音。俺はすげえ必死な表情で高見玲音をコート上で睨み付けてる。lonl。目の前にはドリブルをつく高見玲音。

相手がバスケットで勝てるわけなのに、なんとかして勝とうと必死になる俺。姿勢を落として、絶対ゴール前には行かせるもんかって鼻息荒くしてる。

高見の視線が左へ動いた。これは左から来る。体重を移動させる。その瞬間に高見は右へ動いた。フェイントだ。

「うえっ!？」

口からすつげえ情けない声が漏れる。必死に右に戻ろうとするけど体が言うことを聞かない。足が軽い。地面についてないみたいだ。尻が重い。地面についているみたいだ。

あ、俺尻餅ついたんだ。俗に言うアングルブレイクってやつ？

「頭が高いぞ、負け犬君」

高見が俺に笑顔でそう言うと、ゴール下でも無いのにそのままシュートを放った。いやせめてもうちよい前行ってから打てよ。ここからじゃ入ったらスリーだぞ？

ボールは綺麗な軌道を描いてポストとゴールに入った。

「俺の勝ち。今日のラッキーパーソンは詩織、つておは朝でやってたんだよ」

観客がどっと沸く。俺は立ち上がることも出来ない。詩織が走ってコートの中の高見に抱きつく。尻餅ついて立ち上がれない俺にもくれず。

「おい、置いていくなよ」

震える手を伸ばそうとするのに、バスケット相手に1 on 1挑んでた疲れが今来たのか、呼吸すら満足に出来ない。全身に力が入らない。

「神崎晴人君、ボツシユートです」

いきなり姉ちゃんの声が拡声器で聴こえてくる。その声はどうやら俺以外は騒ぐのに夢中で気が付かないらしく。地面にいきなり穴が出来て、俺一人がすっぽり穴に落ちていく。

「ふざけんなクソ姉貴何考えてんだよおおお!!!」

って叫びたかったけど声も出ない。

「おい助けてくれ!落ちる!死ぬ!」

って助けを求めたかったけどやっぱり声も出ない。

「詩織!!」

って呼びたかったけど。その言葉は声に出せた気がしたけど。

穴に落ちる寸前に、高見と詩織がキスしてるのが見えた気がして。

穴の底には、大蛇が大口を開けて待っていた。

「……はっ!」

「はっ!じゃねえから。神崎、お前いつまで寝てんの」

気が付いたら教壇に担任の皆川が立っていた。口悪いけどちっちゃくて可愛い。生徒人気もある。……あれ?てことは今現代文の授業?

「皆川ちゃん、今、何時限目?」

「先生と呼べつつつてんだろ。二時限目」

どうやら俺は悪夢を思い出しているうちにまた夢の中だったらしい。

「……死にたい」

「……神崎あんた具合悪いの?保健室行く?」

あ、やべ。口に出た。

皆川ちゃんは割と心配してくれるいい先生だと思います。

モテたい。

「卵焼きよこせよ」

「無理」

俺の昼休みは二パターンに分かれる。

コバと須田と三人で教室で食べるか、中庭で一人で食べるかの二パターン。で、今日はコバと須田と食べるパターンである。

「お前の姉ちゃんの卵焼き美味しいんだよ」

「だから？」

「よこせ」

「無理」

俺の弁当は姉ちゃんが作ってくれる。たまに自分で作ることもあ  
るけど。中学生の時からずっと姉ちゃんが作ってくれる。……よく  
よく考えたら俺の姉ちゃん、超ハイスペックなのでは？

「大体な、晴人。お前の周りは色々と恵まれすぎなんだよ。両親は出  
張？ 転勤？ 知らんけどどつちも県外。一緒に住んでるのは美人のハ  
イスペック姉ちゃん。昔から一緒にいる可愛い幼馴染。エロゲー  
かっつての」

何言ってるのこいつ。

でも確かに言われてみればラノベの主人公みたいな生活してるの  
な、俺。

「なのになんでこんな色々ダメな子になったんだろうねー」

「いつペン死ね」

たまーになんで須田と仲良くしてるのか解らなくなる。

「日高は寝取られたしな」

「殺すぞ」

たまーになんでコバと仲良くしてるのか解らなくなる。

でもなんか、寝取られたって言い方。すんと落ちてきた気がし  
た。別に付き合ってたわけじゃないのにな。

夢のことを思い出しても、やっぱり気にしてたんだろうな。多分、  
勝手に小さい頃から一緒だったから、小さい頃のままにいるんだー、

とか思ってたわけだ。もう高校生なのに。

「でもさ、マジでやばくね？」

「何が」

「こいつは姉ちゃんいるとはいえ、俺ら位だぜ？彼女いたことないですみたくない奴。もう高二だぜ？もうすぐ夏休みだぜ？来年は受験だぜ？ここで彼女出来なかったらいつ出来るんだよ？」

なんか訳分からんこと言い出した。

「確かにー……よくよく考えたらそうだねー」

いや乗るな。

……いやでもそうなのか。そうなのか？

「おい振られてナイーブなのは解るけどな、晴人。俺達このままでいいのか？このまま女の子と遊ぶこともなく童貞のまま夏を終えていいのか？」

「暑さで壊れたか？」

「お前にだけは言われたくないわ。で？どうなんだ？」

どうなんだ、と言われましても。

まあでもどうせならモテたいしチャホヤされたい。高見みたいに見えるが上手くてイケメンだったらそりゃーチャホヤされるだろうし、男だったら誰でも一度はそういうの憧れる。男だったらモテキの映画見て「俺にだって……！」とか思う。そういう風に出てくるんだ。つまり答えとしては。

「そりゃあ良くねえけど」

「だろ!?俺達童貞チーム、この夏休みで頑張ってモテようじゃねえか……！」

何言ってるのこいつ。

「てかー、コバ氏はルックスは悪くないんだからエロゲ趣味無くしたら普通にモテそうだよねー」

「エロゲーは俺にとって人生だから絶対に外せない」

そういうとこだぞ。お前が女子からドン引きされてるの。

ぶっちゃけ「抜くためにエロゲーやってないから」とか言われてもそもそもエロゲーな時点で非ゲーマーやライトゲーマーからは総じ



てドン引きされるの解ってんのかなこいつ。しかもお前普通にそれで致してるし。学校にエロ本とか同人誌持つてくるし。

「モテたくないのか!？」

「そりゃー」

「モテたい」

「彼女欲しくないのか!？」

「そりゃー」

「欲しい」

「イエス!それこそ男子!正常な!」

「なんなのこれー?」

「知らん」

「俺達はモテる為に戦うのだ!」

こいつ一人で意味わからんヒートアップしてるな? 弟に彼女でも出来たか?

……でも、正直少し興味はあった。

なんで付き合ってもない、ただの幼馴染なだけの詩織に彼氏が出来ただけで俺はこんなに気にしているのか。ダメージを受けているのか。

逆に、俺が彼女を作ったらアイツにダメージを与えられる気がして。やられっぱなしっていうのは、なんか嫌なわけで。

「……乗ってやるよ、コバ」

「流石晴人、傷心のバツイチよ」

「殺すぞマジで」

「え?じゃあ僕もー」

こうして俺達童貞三人の、モテる為には何をすればいいのか考える会が発足された。

「童貞共がなんかやってる」

「うるせービッチ」

あ、やべ。声に出てた。

~~~~~

六限目の体育も終わり、終礼も終わらせたら放課後。俺は特に部活とか入ってるわけじゃないし、このまま帰ってしまってもいいのだが、今日は姉ちゃんへの帰りも遅いし家に帰ってもやる事ないし、はてさてどうしたもんか。

「ねえ、神崎」

女子の声。俺に声掛ける女子なんていたっけ？姉ちゃんと詩織位では？……やばい。冷静に考えるとそれってやばい。涙出てきた。

もうガラツガラで人が殆どいない教室で俺を呼んだのはビッチ集団の一人でありサバサバ系女子、織田香澄だった。赤っぽい髪をショートカットにしており、左耳にはピアスを空けている。あの髪色は校則に引っかかりそうなもんだが。

「アンタ、詩織が付き合う前になんか言われたりしなかったの？」

「は？何が」

呼び止められたから股間でも蹴り上げられるかカツアゲでもされるかと思った。

「いや、別に言われてないならいいんだけどさ。正直あたしもアンタと詩織が付き合ってると思ってたから」

「付き合ってたねえよ。てかそれと付き合う前になんか言われたとどういう関係があるんだ」

俺は今日その話題に関しては虫の居所が悪いぞ？なんてっただって悪夢にうなされるくらいだからな。

織田は髪を指で弄りながらちよつと考えた表情をしてからストラップがジャラジャラ付いた鞆を背負って歩きだした。

「いや、いいや。ごめん神崎、あんま触れてほしくない話題だった？」

「パンツの色聞かれる方がまだマシなレベルの話題だな」

「何それ？……あたしは今日は薄緑だよ」

「えっマジ？見せて」

「嘘だよ。死ね童貞」

なんで今俺罵倒されたの？絶対先にパンツの色言ったアイツが悪

いじゃん。クソビッチが。

「なあ織田」

「何？」

あれ、俺今なんで呼び止めた？

「……彼女ってどうやったら出来るの」

咄嗟に出た言葉がそれ。コバのせいだ。

別に織田とは仲が良い訳じゃない。というか多分、クラスの女子ほぼ全員に嫌われてるし、俺。

だけど、声を掛けてくれたから、こんな早くに話が終わってしまるのがなんか寂しくて。どうでもいい話でも繋がっていたい。陰キヤカよ。陰キヤでした。

「何、アンタ彼女欲しいの？なんで詩織取られる前に告白しなかったの」

織田は振り返ってバカを見るような目でニヤニヤしていた。化粧で作られたつり目はその表情にマッチしており、DSの女豹みみたいだ。

「なんならあたしと付き合う？貢いでくれるなら付き合っただけでもいいよ」

「奴隷の間違いじゃねえの？」

「パンツも見せてあげるよ？一分千円」

「援交じゃねえか」

無茶苦茶言っただけ。やっぱこいつビッチだわ。

「どーするの？」

「俺はお金じゃ買えない愛が欲しいの」

「キモっ。じゃ、あたし帰るから。……まあそんな気にするなって」

ヒラヒラと手を振って教室を出ていく織田。結局あいつは何が言いたかったんだ。

「……あいたっ」

織田が教室を出ようとした瞬間、ドアに躓いてこけた。

あいつのスカートはビッチらしく、かなり短めになっている。具体的には太ももが見えるくらい。

そんな奴がこける。俺は真後ろにいる。つまり。

「薄緑、嘘じゃねーじゃん。ラッキー」

「死ね童貞」

見える。

思ったより普通のパンツだった。どうせならもうちよいエロいの履いててくれたら嬉しいのに。

「ごちそうさまです」

「マジで死ね」

多分こんなこと言ってるから俺は女子から嫌われるんだと思う。でもしょうがない。すぐに声に出してしまう体質なんだもの。

……あ。結局どうやったたら彼女が出来るか聞けなかった。取り敢えず金を払えばそれっぽい関係にはなれるらしい。いやアホか。

〃〃〃

「その曲、聴いたことある気がする。あれだろ、俺らの世代じゃないだろ」

「お母さんがアタシを産んだ頃くらいに流行ってたやつ。大室哲哉は天才だね」

俺が風呂から上がると、姉ちゃんはCDを聴いていた。なんかのアニメのエンディングとかじゃなかったっけか。働いてる服屋で仲良くしてる先輩に貸してもらったらしい。

「言われてみれば小室哲哉っぽい気もするな。その曲、前誰かカバーしてなかったっけ」

「色んなアーティストがカバーしてる。……あんだ小室哲哉っぽさとか解るんだ」

そりゃあ姉ちゃんが小室哲哉の曲よく聴いてるからな。なんかそれっぽいなー、って思ったりはする。

こういう曲が昔は流行ったんだなー、とか考えてみると面白い。正

直俺は最近の流行りとかよりもちよつと前の曲の方が好きだ。それこそ、宇多田ヒカルとか。宇多田ヒカルは今も活動してるか。

「なあ姉ちゃん」

「何？」

「どうやったらモテる？」

「あんた引きずりすぎじゃない？」

「そうらしい」

朝はごめん。見栄張った。気にしてました。

「で？なんかモヤモヤするから俺も彼女作ってやるー！ってわけ？」

「エスパーかよ」

伊達に俺の姉貴を十六年やってない。

「朝も言ったけどね、別に気持ちが変わらないわけじゃないよ」

ハードボイルドなミュージックが流れ続ける。俺この歌好きかもしれない。

「詩織ちゃんはあたしにとって妹同然みたいなどこあるからね。そりやあ彼氏出来た！って聞いた時には……なんだろう、お父さんの気持ち？あー、詩織ちゃんが大人になっていくー、遠くなっていくー！とは思ったわけよ。昔は「お姉ちゃんー！」ってはいでた子がいつの間にかそんなになってんのねー、って思うとね」

親戚のおじさんみたいなこと言い出したぞ。

でもなんとなく言いたい事はわかる。

「あんたなんか同じ年だしき、双子みたいに育ってきたわけじゃん、お風呂ではしやぎ過ぎてあたしに怒られたりさ。あんたにとって詩織ちゃんって半分、自分みたいなもんなんだよ。それが自分のところからどっか行っちゃった気がしたから、そりやあ引きずらないわけないじゃん？自分の半分がどっか行っただよ。下半身が引きちぎられたようなもんよ」

「なんで下半身限定なんだよ、上半身かもしれないねえだろ」

詩織が俺の下半身みたいな存在ってなんかエロい。

「まあ、そりやあ祝福してあげるのが一番いいんだけどね。あんたはガキだから釈然としないわけよ」

「誰がガキだクソ姉貴」

自覚あるけど。大いに自覚はあるけど。

高校生にもなって彼女でもないやつに彼氏が出来たくらいでダメージ受けてるアホはガキとしか言えねえ。ガキで陰キャって最悪じゃね？

「で、どうせなら詩織ちゃんにもその自分のモヤモヤをぶつけてやる！って思っただけで彼女作ろうとしてる辺りも最高にガキ」

うっ。

「いいんじゃない？それで。あたしはそういうやられたらやり返せ精神は嫌いじゃないし」

「えっ」

えっ、今の流れ俺絶対「バカじゃないの？」って蔑まれるか怒られるかのどっちかだと思っただけですけど。

神崎雨という人物が俺の姉貴であることを忘れていました。この人俺と割と似てるんだった。

「まあ、あたしでもあんたかバスケット部のイケメンどっちか選べ！って言われたらバスケット部のイケメンを選ぶけどね」

「泣くぞ」

思ったことがすぐ声に出してしまうのは姉も同じらしいです。

ただどムカつくことに姉ちゃんの言葉は割とすとんと心に収まった。今まで当然のようにあったものが、いきなり別のものに流されてしまった感じ？昼にコバが言っただけ「寝取られた」って表現もあながち間違っちゃいないのかもしれない。

「で、どうやってたらモテるのかだけ。あんたは思ったこと全部言わなければいけません」

「姉ちゃんに言われたくねえんだけど」

「悪かったわよ。……ハードボイルドになればいいんじゃない？この曲をかつこよく歌えるようになる、とか」

「何言ってるの？」

まあ確かにこの曲カッコよく歌えたらちよつとかっこいいかもしれないけど。

「ちなみにこの曲、名前なんて言うの」

「Get Wild」

やっぱり名前も聞いたことありました。もうしばらくCD借りてるだろうし聴き込んでみるか。一応割とモテる姉ちゃんの意見だし全く効果ないとは思えない。

「まああんたはガキだし精々ハーフボイルドってところかなー」

「俺は姉ちゃんと二人で一人前だから」

「あたしは一人で一人前だから。フィリップは別の子を探して」

先に振ってきたのは姉ちゃんなのに冷たくあしらわれた。

姉ちゃんの中の地球の本棚からモテる方法を検索した結果、ハードボイルドになるとモテるらしい。一応コバにそうやってスマホでメッセージ送っておくか。

五分もしたら返信が返ってきた。

『お前何マジになってモテようとしてんの』

「死ねっ!!マジで死ね!!!」

「うわびつくりした!何、発作?」

姉ちゃんに心配された。

暇を潰したい。

「台風のコース変わって直撃しないんだろ？なんで今日こんな雨降ってんの？」

「まだ梅雨だからでしょ。はいパン」

姉ちゃんから渡されたパンを齧りながらテレビに映されている天気予報を眺める。台風の進路は少し逸れて日本に上陸することはほぼ無くなったらしいが、世間は六月。絶賛梅雨の真っ最中なので本日は大雨である。うわー、学校行きたくねえー。

「雨降って涼しくなるなら別にいいんだけどさ、この時期の雨って止んだあとに湿気マシマシでムシムシするんだよな。結局クソ暑い」

「あたしなんかそもそもお客さん来なくなるからクソ暇になるからね」

「雨の日に服買おう！とは思わねえもんな」

雨が降って喜ぶのは農家と物好きだけだ。俺も割と物好きで変わってる奴だとは自覚してるが、それでもやっぱりお日様に見守られて過ごしていたい。どうせなら警報出て学校休みになってくれ。有り得ないか。

そういえばなんで雨をテーマにした曲って恋愛ソング多いんだろう。それも大体ちよつと切ないやつ。雨で気分沈むのに「雨の日に聴きたい曲！」みたいなやつ大体失恋ソングだったり片思いソングじゃない？雨の日こそ鼻血吹き出そうな熱い曲聴いて雨水全部蒸発させろよ、って思う。例えば……

「紅だアアアアアア!!」

「うるさい」

姉と世間は俺に厳しい。

「……今日は店の中、USENじゃなくてX流すか」

思いつきり影響されていますやん。というか姉ちゃん店の中の音楽決める権利あるの？強くない？

くくく



今日の昼飯も教室で食べる。理由は至極単純、まだ雨降ってるから中庭で食べたらびっしょびしょになるのです。

「卵焼き」

「だめ」

「シヨタボで」

「だめだよ」

「ロリボで」

「だめだお」

「きも」

じゃあティツクトツクのネタを振ってくんなよ。あーゆーのはぶりっ子してても許される女の子がやるからいいんだよ。実際あれに登録してる人つてめちやくちや可愛い子割と居るよな。大概がイタイけど。

「そーいや前にそれ織田がやってたよー、いろんな声でダメって言うやつ」

「あいつのロリボはしんどいわ、悪い意味で」

あんな赤っぽい髪の毛でつり目でSMの女王様みたいなロリっ子がいてたまるか。

「アタシの話した？クソ童貞」

「いたのかよ」

どうやら教室内で聞こえてたらしく、背後から件のビッチ女王様の声が聞こえてきた。うん。こいつの顔と雰囲気でロリボはやっぱしんどいわ。

「なんならアンタがティツクトツクの真似事して遊んでた時からいた」

「死にたい」

後ろで思い出し笑いみたいな声が漏れ出ている。うわこれめっちゃ馬鹿にされてる感じる。うぜー。はずい。

「てかアンタ等、ティツクトツクとか興味無いと思ってた」

「詩織があーゆーの好きだからな、見て見てーとか言っつて色々見せら

れた」

「あれ超可愛い子とかいっぱいいるじゃん、目の保養」

「好きなユーチューバーがやってるから」

「……そんなことだろうと思った」

溜息をつけてそのまま教室を出ていった。あいつもなんかよくわからん奴だな……。正直俺からしたらあいつがそういうのやってるのも意外なんだが。そんな動画撮るならハメ撮り撮るもんなんじゃないの？ビッチって。クソ偏見？まああいつ割とキツつい顔してるけど美人だし、似合わないとかは無いけど。

「日高の奴はそういうの好きそうだよな」

「何本か一緒にやらされたことあるぞ」

「今は高見氏とやってるんじゃないのー？」

「シンプルに傷付くからやめてくれ」

「やっぱ傷心のバツイチじゃねーか」

よくよく考えたらそんな動画ティックトックにあげてるから俺ら付き合ってるの間違えられたんじゃないの？

「暇だし」って言って俺の家に遊びに来た時。いきなり「これやってみたいんだけどさー、相手いないんだよねー、ハルなら一緒にやってくれるかなーって」って言いながらなんか可愛い子と雰囲気イケメンの二人が手遊びしてる動画見せられて、二時間くらい練習して、動画撮って。

「幼馴染だから息合うよね、私達」

ニコって笑って、ありがとね、楽しかった！って言って動画保存して、そのまま見直してふふっ、って笑って。

今は相手、いるもんない。てか今俺とやってたらそれこそ浮気だもんな。なんかほっぺにチューするやつとか動画に撮って投稿してるのかもしれない。

……別にいいんじゃないの？俺に関係ないし。めっちゃくちやムカムカするけどね。このイライラを何処にぶつけたらいい？

「……晴人悪かったって、黙るなよ。すぐ声に出るのがお前のダメなところだけど喋らなかつたらお前のアイデンティティゼロだぞ？」

コバが少しだけ心配そうな顔で俺のことを覗いていた。

色んな奴から「色々とだめ」「終わってる」とか言われる俺だけでも、それでも俺と付き合い持つてくれる奴らは結構良い奴らが揃ってると思う。担任の皆川ちゃんも含めて。

「……そういえばそろそろテスト前だな」

「折角謝ったのに開口一番嫌なこと言うなよ……」

そこまで勉強が苦手な訳では無いがどうせ部活もしてねえんだ。そろそろちまちま進めておいてもいいかもしれない。

くくく

昼休みには「そろそろちまちま進めておいていいかも」とか考えてたのに六限目ガツツリ寝てしまった。人間なんて大体そんなもん。やろう！って思ってもやらない。

けど六限目寝てる時に夢を見た。図書室でなんか本を読んでる夢。折角なんで今日はちよつと図書室で勉強してから帰ることにしようかな。放課後の図書室とかほぼ誰もいないし。

案の定図書室はビツクリするくらいに人がいなかった。窓から見える景色は物凄く灰色。まだめっちゃ雨降ってる。グラウンドが見えるけど流石にどの運動部も今日は外でやってないらしい。今日昼過ぎには雨止むんじゃないか？

適当な席に座って世界史のノートと資料集を広げる。暗記系は早めに綺麗に纏めてしまつて、詰め込んで、前日にもう一回詰め込み直す。これでもいい取れる。

世界史、日本史って卑怯だと思う。大体歴史で男の子が燃えるのって戦国時代とか、三国志とか幕末とか、その辺じゃん。女子も最近は薄桜鬼とか戦国BASARAとかでやっぱりその辺に興味を持つけど、高校の授業とかだとその辺って瞬殺で終わるんだよな。だから冷める。織田信長はショットガンを使わないし豊臣秀吉はパンチで日本列島にクレーターを作らない。伊達政宗はレッツパーリー！しないし本多忠勝はガンダムじゃない。

「……あつ」

めちやくちや静かな図書室に、ちよつと低めの女性ボイスが響いた。しかも俺の近くな気がする。ちよつとビククリして思わずそっちの方を見てしまうよね、まあそりゃ。

ミディアムヘア？っていうの？割と長めの黒髪。ほんのちよつと日焼けした感じのする肌に、やたらとデカイ目が凄く印象的な女の子が俺の方を見て立っていた。やっぱ、声に出しちゃったよ、みたいな顔してる。えーと……知らない子だ。

「……俺になんか用？」

「いや、その……ごめんささい、つい声が出ちゃって」

愛想笑いで誤魔化そうとしてる。ちよつと日焼けしてるからかな、笑った時に見える歯がめちやくちや白く見える。

「背中に「バカ」とか書かれてた？」

「いや、書かれてないけど」

「……ごめん、俺君のこと知らないんだけど」

「私も。名前と学年は知ってるけど」

え、なんで？俺そんな有名じゃないよ？悪評はもしかしたら立つてるかもしれないけど。え、待って怖くなってきた。俺どういうルートでこの子に知られてるの？

「……なんで知ってるの」

「いや、うん」

このノリ絶対いい方向に広まってねえだろ。なんだ、「口悪いゴミン」とか言われてんの？「超絶陰キヤ」とか？それとも「童貞」？誰が広めてんだよそもそも。

「教えてくんない？」

「……あれだよね、神崎君だよね？……詩織ちゃんに振られたって」

「紅だアアアアア！！」

「そこ！図書室では静かにしてください！」

予想外の方向から飛んできたから思わず叫んでしまった。おかげで図書室の先生から怒られた。慰める奴は元から何処にもいない。

というかこの子、その噂で俺見て「あつ」って声出したのかよ。め

ちやくちや失礼じゃねえか。

「……なんか、ごめん。やっぱショックだよね」

しかも叫び声に若干引いた拳句謎の同情食らってるし。慰める奴はいたわ。

「……誤解なんだけど、俺元々詩織とは付き合っていないから。幼馴染なだけで」

「え？そなの？詩織ちゃんのティックトックでたまに二人で色々やってたから付き合ってると思ってた」

やっぱりあの動画シリーズが勘違いに拍車掛けてんじゃねーか!?

取り敢えず図書室の先生がこっちめちやくちや睨んでるから気まぐずい。予定とは違うけどさっさと片付けて雨の中帰るとするか。

「あの動画シリーズはあいつの暇潰しに付き合ってただけ。じゃあな、日焼けちゃん」

ちよつとなんかイライラしてきた。昨今の若者はすぐイライラするね、とか言われるけど知ったことか。ストレスだらけの社会が悪いのだ。キレル高校生の見出しになってやろうか。

「あー、待ってください」

呼び止められた。

「えつと、二年六組の石黒凜香っていいいます。その、噂で勝手な事言つてごめんなさい」

石黒凜香と名乗った日焼けちゃんは深々と頭を下げる。……この手の話題で謝られた事ないから俺どうしたらいいのかわかんないんだけど。しかも先生めっちゃ睨んでるし。俺がなんか暴言吐いたみたいになつてない？これ。

石黒ちゃん……いや、初対面の人にちゃん付けもどうよ？石黒さんが顔を上げた。

「で、ごめんなさいついでになんだけど……暇ならちよつと付き合ってくださいませんか」

「は？なんで」

「や、私女サカの部員なんだけど、今日部活オフなの忘れてて部室行ったら誰もいなくて」

女サカつて女子サッカー部のことか。日焼けしてるのはそういうことなのね。

「……で、今日パパもママも仕事で七時位まで帰って来なくて、私今日部活あるし大丈夫でしょーって家キー持ってなくて」

家キー？……家のキー、家の鍵か。え、何？そういう略語流行ってるの？

「友達とか皆部活か帰ったかで、今私ぼっちで暇なんだよね。購買でなんか奢るし、私の暇潰しに付き合ってくれませんか」

さつきまで初対面だった、しかも異性にそんなことお願いするのか。流石にちよつと恥ずかしいらしく指で頬をポリポリしている。大きい瞳がキョロキョロしている。

……まあ、別に俺も用は無いし。なんか奢ってくれるらしいし。暇潰しに付き合うくらいはなんてことはない。

「……俺でいいなら」

「やった！ありがとね、神崎君」

~~~~~

食堂の端の方の席に陣取り、奢ってもらったジュースを飲みながら雨が止んで時間が経つのを待つ。その間、他愛も無い話をする。

意外にも話のネタは尽きなかった。石黒さんがどう思ってるかは知らないが、俺は割と楽しい。

「え、じゃあお姉さんと二人暮らし？いいなー」

「よく言われる。でも意外とそうでもないぞ？」

「でもさ、そういう暮らし憧れない？……あ、そういう暮らししてるから憧れとかじゃないのか」

「石黒さんは兄弟とかいないの」

「呼び捨てでいいよ、同年だし。お兄ちゃんと妹がいるよ。どっちも二つ違い」

「それくらい歳の差だと「きょうだい」って感じるな。うちは六つ

違うから」

「てことはお姉さん社会人？かつこいー」

喋っていて解ったこと。石黒凜香、十七歳。つまりもう誕生日は迎えてるらしい。部活は女子サッカー部で、ポジションはトップ下？らしい。サッカーよく知らないから解らんが、フォワードの一つ後ろって言ってたから……多分イナズマイレブンのジェネシスで言うとうるビダのポジション？だと思う。

電車通学で片道三十分くらい。つまり六時半位まで暇潰しに付き合えばいいらしい。今が五時過ぎなのであと一時間半。兄と妹がいる。

「でも本当に付き合ってると思ってた」

「まあよく一緒にいたのは事実だしな」

「テイクトゥク見てると仲良さそうだもんね」

「俺自分が映ってるやつ半分くらい見てないんだけど」

「インスタールしてないの？」

「してない」

パリピ御用達、みたいなのはちよつとしんどい。

「見る？私インスタールしてるし幾つか詩織ちゃんのやついいねしてるし」

「自分が変なテンションで音に合わせて手遊びしてる所見るのしんどくないか？しかも相手役今彼氏いるし」

「それもそうか。……今、一緒に何かやる？」

「なんでだよ……」

「いいじゃん。お近づきの印」

歯を見せて笑う。なんとというか、石黒は無邪気、って言葉が似合う気がするな。俺とは大違いだ。俺は邪気に満ち満ちているから。

「えー、詩織ちゃんとはやるのに私とはやってくれないの？」

「あいつは幼馴染だからそういうのやるのに抵抗無いんだよ。あのシリーズの手遊び難しいし」

「顎乗せてくれるだけでもいいよ」

「俺の顔面偏差値でやってもキツいだけだわ」

「確かに」

「急に辛辣になったな」

無邪気すぎる。素直に口に出し過ぎてる。

「冗談だよ。じゃあこれやろうよ」

悪戯っぽく笑ってから、俺にスマホの画面を見せてくる。内容は簡単なアルプス一万尺。途中でカメラに向かってキメ顔するだけ。

「もしくはめ組のひと」

「それ詩織にやらされた」

「知ってる。私それいいねしたもん」

「……暇潰しになるなら、アルプス一万尺くらいやってやんよ」

「やったー……あ、ついでに連絡先交換しようよ」

「あいよ」

鞆の中から俺のスマホを取り出す。画面には、コバからのメッセー  
ジを受信した旨がお知らせされていた。気になるので先にそちらを  
開封する。

「悪い、ライン来てるから先そっち見る」

「はーい」

メッセージを開く。

『お前何で女子と二人でイチヤイチャしてんだよ、死ね』

「見てたのかよ!？」

「え、何が？」

あいつ筋金入りに拗らせてるなあ……とかイチヤイチャして  
ないし。



ぼけーつとしたい。

「ただいま」

「おかえりー。雨止むまで学校居たの？」

「暇潰ししてた」

家に着いたのは夜の七時前。六時半まで喋ったりティックトックしてたからまあ妥当な時間と言える。

我が家のルール（姉弟のルール？）として「ただいま」と「おかえり」は必ず言うことになっている。二人しかいないけど、ちゃんここが帰る場所なんだよ、って意味も込めて必ず言う。

何故か詩織も家に来る時は「お邪魔します」じゃなくて「ただいまー！」と言う。最近はそもそも来ないけど。そりやそうか。彼氏いるのに他の男の家に何故来るのかって話だ。

「ご飯出来てるよ。食べる？」

「先着替えてくるわ。仕事やっぱ暇だった？」

「めちやくちや暇。そもそもモールに人が入ってないよアレ」

まあそうだろうなー。昼過ぎには止むって言ってた雨、結局さつきまでずっと降ってたし。しかも結構本降り。

部屋着に着替えて制服は洗濯カゴに入れておく。ノリで買ったけど外に着ていくには恥ずかしい、だるんだるんした猫がプリントされたTシャツ。フキダシには「動きたくないニャー」と情けないフォントで書かれている。わかるぞ。俺も出来れば動きたくないニャー。

「おまたせ」

「あいよ。ほら座んな」

テーブルに置かれていたのは大量のもやし炒め。これ絶対二人分の量じゃないだろ。

「……多くね？」

「つくりすぎた。まあ残ったら明日の朝ごはんになるし」

別にもやし炒め好きだからいいんだけどね。一瞬この量を食えと言われるのかと思ってヒヤヒヤしたわ。たまに姉ちゃんは分量をミスってアホみたいな量作ることがある。一回餃子が八十個くらい

あつた時は眩暈がしたね。

「いただきます。……結局店の音楽、Xかけたの？」

「よくよく考えたらあたしXのCD持ってなかった」

ホントだよ。我が家にX JAPANのCD無いじゃん。母ちゃんがそういう系の音楽好きだけど多分出張先の方に持つてつてるだろうし。

「代わりにRCサクセションの雨上がりの夜空に流しといた。まだ雨が上がってなかったけど」

この雨にやられて姉ちゃんイカれちまつたかな？というかとてもじゃないが23歳の女性が店の中で流す音楽じゃないだろ。知ってる俺も俺だけでも。

「そっちはCD持つてんのかよ……」

「父さんの部屋にあった」

成程。父ちゃんなら確かに持つててもおかしくないわ。

てか俺が学校行つてから出勤までにそれっぽいCD探してたのだよ。姉ちゃんも暇だな。

平安時代の貴族なんかはあまりに暇すぎて一日中ぼけーつとしてたらしいが、現代人も大概暇を持て余してると思う。やることは沢山あるのにね、ぼけーつとしてる。俺だけかもしれないけど。

くくく

人間つてぼけーつとする時間がきつと必要なんだと思う。

ディスカバリーチャンネルとかでサバンの何かとか観ててもさ、ライオンとか狩りしてない時ずつとぼけーつとしてるじゃん？ぼけーつとするのは生命体に必要なんだよ。

自分で自分にそう言い聞かせながら自分の部屋のベッドの上でぼけーつとする。ホント、もうすぐテストだしちよつとくらい勉強しておくかー、ってなんなの？ってレベルでぼけーつとしてる。飯食ったし眠い。風呂入らなきゃならんがもう少しぼけーつとしていたい。

スマホがメッセージの受信を知らせた。誰だ。俺のスマホなんか

基本あんまり鳴らないぞ。あー、スマホのところまで行くのがめんどくさい。

「腕よ伸びろー」

……伸びるわけもないのでそのまま放置。めんどくせ、あとで見たらいいや。

……ぴこん！

また鳴った。なんだ？クラスのグループラインなら通知切ってるはずなんだが。

……ぴこん！ぴこん！

「うっせえー！わかったからー！」

腹立ったから仕方なく立ち上がってスマホを開く。

一体こんな連続で送ってくる奴誰だよ……と思って通知を見ると石黒だった。そうだ、今日連絡先交換したんだった。メッセージの内容を確認する。

『凜香です。今日は私の暇潰しに付き合ってくれてありがとね』

『あ、今日撮ったティックトックの動画どーぞ（？▽？）』

一緒に送られてきていた十五秒の動画。今日撮ったアルプス一万尺みたいなやつの中の動画のことか。御丁寧になんか絶妙にキモかわいいキャラクターのスタンプまで送ってきていた。なんだこのキャラクター。

既読付けちゃったしなんか返信しとくか……え、これなんて返信したらいいんだ？まあいいや、当たり障り無い感じで。

『動画ありがとう。こちらこそ楽しかった』

こんな感じか？

石黒はなんか絵文字顔文字スタンプの三段活用してるけど、これ俺もなんかそういうの使った方がいいのかな。俺がやったらアイドルのツイートにリップ送りまくってるおっさんみたいな文章になるかな。

普通に喋ってる時は自分でも引くレベルで口を滑らせて思ったことなんでも言うのが俺なんだが、ラインやメールみたいな、そういう文章で会話する時は物凄く悩んでしまう。

なんか句読点とか付けたら冷たく見えるかな？とか、絵文字顔文字

は使った方がいいのかな?とか。そんなんで悩んでる時点で陰キャだとは思うが、悩んでしまうものは仕方がない。

まあいいや、送信しちやえ。

送信した瞬間スマホが鳴った。

「えっ石黒返信早くね!」

ビックリしてスマホ投げちまったじゃねーか。着弾点がベッドの上で助かった。

墜落したスマホを取り上げて画面を見ると、着信を知らせているらしい。しかも相手石黒じゃねーし。詩織だし。

……ん?なんで詩織が俺に電話してきてんの?まあいいや、出たら解る。

「もしもし?」

『あ、もしもし?私だけど』

電話越しでも聞き慣れた声。彼氏が出来ても声が変わるわけじゃないから当たり前っちゃ当たり前なんだが。

「珍しいな、この時間だったら電話じゃなくて直接家に来てるだろ、普段なら」

現在八時半。俺と詩織の家は徒歩五分圏内であり、あいつの母親も割と適当な人だから今の時間に用があるなら直接家に来るのがいつものあいっだ。

『そうしようかなー、って思ったんだけどね。玲音君に怒られるかなって思って』

「ああそうかい。彼氏持ちは面倒だな」

そういうことかよ。いやまあそりゃそうだわな。夜に彼氏放つたらかして他の男の家に上がり込んで、って噂でも立ったら良くないわな。なんかムカつく。

「で?何の用だよ」

『……ハル、なんか怒ってる?』

「別に」

『いや、用っていうほどじゃないんだけどね。最近喋ってなかったから』

「そりやお前に彼氏が出来たから当然だろ」

『え、なんで?』

「なんでってそりや……あれだよ。前みたいに夫婦喧嘩だー、とかでからかわれたらそれこそ高見が怒るだろ」

半分嘘だ。俺の幼稚な独占欲と謎の嫉妬が邪魔して、俺が避ける。自覚してる。

『あー、確かに。気、遣ってくれてるの?』

「いや別にそういうのじゃねえけど」

気は確かに遣ってる。でもそれは高見の為に、詩織の為に、では無い。自分の自尊心?肯定感?なんかそういうもののために気遣ってる。

『まあいいや。……ハルってさ、リンちゃんと仲良かったんだね』

「リンちゃん?……あー石黒か」

『うん。ティックトック観たよ』

そういや俺まだ自分の動画観てないわ。いや別に特別みたいもんでもないけど。

『ハルってさ、やるまではめんどくさいー!とかだるー!とか言う割にさ、やり始めるとノリノリだよね』

「うっせえよ」

どうせやるなら全力でやった方が楽しいからな。なんでもかんでもやるなら全力で、が俺のモットーである。もうジャンケンとかも全力。体育の球技とかもとにかく全力。「はー俺体育とかマジだりーバレーとか何が楽しいのー」とか言っって手を抜いてる奴ってダサいじゃん?小学生相手のかけっこでも全力だよ。勝ったら全力で喜ぶよ。ドン引きされるけど。

『ハル、ティックトックはインスタールしてなかったよね?』

「してない」

『じゃあアレ、リンちゃんのスマホで元動画観て練習したの?』

「んあー。そうだな」

『ふーん、仲良かったの知らなかった』

「知り合ったの今日だからな」

というかお前と石黒が仲良いことも知らなかった。

意外とそんなもんだ。詩織と高見が付き合うくらい知り合ってるとも思ってたなかった。幼馴染でも知らない事くらいある。姉ちゃんの元カレだつてよく知らないのだ。

『知り合つていきなりティックトック撮つたの?』

「いきなりステーキ?」

『言つてないけど』

「お近づきの印だつてよ」

『むー』

詩織はなんか釈然としないことがあると昔からむー、つて唸る。「む」と「ん」の間くらいの音で唸る。なんか釈然としないことでもあるのかよ?」

「お前も高見と撮ってるんじゃないの?」

『まだ撮つたことないよ』

あ、ちよつと意外。じゃあ詩織とティックトック撮つたことある男つてまだ俺だけなのか。

……ちよつとだけ優越感。どうだ高見。これが幼馴染つてもんよ。

『次の土曜に撮る約束してるけどね。今練習してもらってるの』

優越感とか無かった。既に練習してるとかどんだけティックトックに賭けてんだよ。バスケの練習しろバスケの。

……あーあ。

高見が、嫌な奴なら良かったのにな。

今日の電話もどうでもいい内容なんかじゃなくて、「付き合つてみたものの玲音君が怖い」とかそういうのなら。なんか、俺なりに頑張つてさ、詩織を守らなきゃ!幼馴染だからな!みたいな?そういうのがあつたかもしれないのに。

そんなこと考えてしまつてる自分が嫌になる。

なんというか、クソ惨めだ。

『……ハル?』

「なんもねーよ。いいじゃん、そんな前から練習してくれるなんて尽くされてるじゃん」

『褒めてるの？それ』

「勿論」

勿論、嫌味だ。

だけど別に詩織は一切合切悪くない。なんなら高見も全く悪くない。悪いのは俺だよ。俺の幼稚な独占欲だよ。

高見が悪かったら楽なのに。

逆に、詩織が悪女だったらそれはそれで楽だったかもしれないのに。

悔しいけどあいつらお似合いカップルだと思っただよな。俺高見のこと全っ然知らないけど。

こんなことばっか考えてしまつて。

自分の半身を裂かれた感じ。

姉ちゃんの言うことは間違つてない。

俺の心の半分が切り取られた気がする。

じゃあ詩織と俺が付き合いたかった？と聞かれるとそうじゃない。

でも、取られてこんな思いする位なら告白しとけば良かったのかも

なあ、つて思う。好きでもないのに、繋ぎ止めるために告白しとけば、

なんて。やっぱ悪者は俺だ。

悪は成敗される。独占欲に染まったこの俺を、慰める奴はどこにもいない。

「悪い、そろそろ風呂入らなきゃ姉ちゃんにどやされる」

『あ、沸いた？じゃあそろそろ切るね』

「おう。また明日学校で」

『うん。急だったのにありがとね。おやすみ』

電話が切れた。

風呂入らなきゃ。

身体にへばりついたドロドロした感情を洗い流したい。

……あ。ラインきてる。石黒から。

『これからもたまに絡んでね(？▽？)』

既読付けちやっただじゃねえか。

あー。

なんて返せばいいんだろうな。風呂入ってる間に考えるか。少しの間既読無視させてくれ。

階段を降りて風呂場へ向かう。多分もう沸いてると思うんだけど……。

脱衣所のドアを開けた。

「……」

「……覗きにしては堂々とし過ぎじゃない？」

トツプレスの姉ちゃんがいた。

姉ちゃんは背が高いしスタイルがかなりいい方……だと思う。それで上は裸、下はパンツ一枚。

先に風呂入ろうとしたのね、ごめんなさい。でも「先はいるよ！」って一声かけてくれたっていいと思うの。俺の股間が立ち上がったしまうじゃないの。

姉ちゃんも俺の股間が立ちあがりヨしてるのをズボン越しに見てしまった。

「……フツ」

なんか笑われた。

「電話してるみたいだったし先入ろうと思ったの。声掛けなかったのは悪かったわ」

「いや、いいんだけど。ごめん」

フリーズしてた頭を無理やり動かして扉を閉めた。収まれ、俺のヒプノシスマイク……！

「エクスカリバー（笑）は収まった？ふふっ」

「半笑いで聞くのやめて貰えます？セクハラだぞそれ」

「一緒に入ってあげようか？」

何を言ってるんだこの姉貴は。

「慰めてあげるよ？」

「性的に？」

「性的に慰めて欲しいの？」

「……流石に実の姉にそれは嫌です」

解った。声掛けずに風呂入ろうとした姉ちゃんにも落ち度がある



からこうやってセクハラして俺を辱めてるんだこの人。やり口汚ねえ。

……まあ、元はと言えば姉ちゃんのほぼ裸を見て覚醒した俺のロンギヌスが悪いんだけどね。

サボりたい。

「煙草なんか吸っていると動けなくなるぞ」

校舎の裏で煙草を吸っているのを見かけたから声を掛けた。別に仲良くもないけど。

高見の顔をまじまじと見たことなんか無かったから、どんな顔しているかとか臆気にしか知らなくて。近くで見ると本当によけメンだった。煙草吸ってる姿も絵になるくらいに。いやダメだけどね。

「よく知らない人にそんなの言われる筋合い、無くない？」

高見はフツと鼻で笑って肺の中に煙を入れる。

よく知らないだと？俺が勝手に意識してるみたいでめっちゃ惨めじゃねえか。夢の中でなら俺はお前と1 on 1 やってただぞ？負けただけ。

「三井ですらグレてる時も煙草は吸ってなかったんだぜ？」

「だから何」

なんか俺、まるで相手にされてなくね？

だが俺は神崎晴人。諦めの悪い男。

無理にでも俺と対等の位置までずり下ろしてやる。ここで自分がこいつの位置まで昇ろうとしない辺りが俺のアイデンティティ。

「それ、顧問にチクるぞ」

そしてずり下ろしてやる！と息巻いてやるのがチクリという器の小ささもアイデンティティ。

「やってみれば？」

そうやって高見は俺の方へずんずん歩いてくる。お、おう。なんだよ、やんのか？言っとくけど俺はお前より身長が五センチ位低いからな？金的パンチに気を付けろよ？

殴られた。

「痛ったあ!?!めっちゃ痛……」

蹴られた。

スポーツやってる奴って筋肉あるからさ、めっちゃ痛い。あつ、顔はやめて！痛い！顔はやめて！これ以上不細工になったらどうする

の？

あ、口の中切れた。血の味がする。

ボッコボコにされて、最後は後頭部掴まれて地面とフレンチキスさせられた。頭がぼーっとする。全身が痛い。なんか感覚が鈍い。

「玲音君ーここにいたんだ」

聴覚だけ、嫌になるほど鋭敏だった。誰の声かなんて、見えてなくても解る。

「もう、また煙草？バレても知らないよ」

「今バレたんだよ。だから黙らせた」

「え？……あ、ハルじやん。元気？」

元気に見えるのかこの状態が。立てねえ。身体を動かさせねえ。口からは空気しか漏れてこねえ。

「……ねえ、玲音君。私もう限界」

「そんなに？……こいついるけど、いいの？」

「いいの。早く触ってよ」

「詩織ちゃん、悪い女だよな」

聴覚だけはずっと鋭敏。見えないし動けない。口の中は鉄まみれで空気が漏れ出ている。でも耳だけはずっと、いつもより鮮明に聴こえている。

くっそ惨め。死にたい。

あー。なんなんだろ、ホント。

「いつまで寝てんの、晴人!?もう七時半だけど!?!」

「ひゃいっ!?!」

目が覚めた。あれ?目覚まし時計鳴ってなくね?

目の前には姉ちゃん。余りにも起きなかつたから起こしに来てくれたのかな。

「……おはよ」

「おそよう。なんかうなされて目覚まし叩き落としてたみたいよ」

むくりと起き上がって地面を見たら電池が飛び出した目覚まし時

計が落ちていた。……そっか、夢か。

高見が悪い奴だったら良かったのにな、そしたら俺が頑張って守ってやれるのにー!とか昨日思ってたけど前言撤回。ボコボコにされそうなのでそんなことなくていいです。

惨めだわ。

夢の中で高見と詩織がやってたことが、夢の中では音しか聞こえなかったけど、なんかすごく鮮明に残ってる。幼馴染でそんな想像してる自分がすげえ嫌で。

でも、やってるんだろうな。いや、まだやってないにしても、そのうちやるんだろうな。

「死にたい」

「あんた何の夢見てたの……?」

そんでもって一番死にたいのはそんな夢を見てたのにも関わらず立ち上がってる俺のロンギヌスだよ。罪悪感とか、惨めさとかどこに行っただって感じ。頭の中で大塚明夫さんボイスで「ロンギヌス!」って聴こえてくる。まあ俺は穴があっても貫けないんだけどね。童貞だし。

「……てか姉ちゃんは仕事の準備しなくていいの」

「あたし今日休みなんだよね」

姉ちゃんの休みの日は不定期だから土日休みって訳でもない。普通に平日が休みの時もある。今日がそうらしい。逆に土日に働いてる時も多い。

「あんた起きてこないからパン二枚とも食べたんだよ? 太るじゃん」

「……悪かった。何かまだある?」

「昨日の残りのもやし炒め」

「それ食うわ。もうちよいしたら降りる」

「あいよ。チンしとく」

「ありがと」

布団に隠れてて俺の魔剣を見られることは無かった。良かった。昨日見られたけど。

昨日風呂入った後の記憶がイマイチ無い。ちゃんとライン返信し

たっけ？俺。ふと気になったからスマホを開く。

「こちらこそ」という最高に短くて要件オンリーの文をちゃんと返してた。既読付いてる。なんかパンダが目を輝かせてるスタンプが来てた。

「……あー。なんか今日学校行きたくねえ」

昨日、詩織と「また明日、学校で」とか言ったけど、多分今日は俺は詩織と話すことは無いだろう。それも別に詩織が悪いわけじゃない。基本的に俺が悪いのだ。

ロンギヌスが収まった。朝ご飯食べよ。

姉ちゃんはなんだかんだで俺に甘いと思う。

カレー然り、お味噌汁然り、作り置き出来る食べ物は大体二日目が一番美味しいと相場が決まってる。

一階に降りてもやし炒めと白ご飯をかきこんでいると、もやし炒めもその例には漏れないらしいということを実感した。なんか昨日より美味しい気がする。

「あんたが今考えてること当ててあげようか」

「何」

「学校行きたくねえ」

「エスパークだよ」

なんで当てられるんだホントに。世の中の姉ちゃん皆そうなのかな？

「カラオケ行こっか」

「は？」

いきなり何を言い出すんだこの姉貴は。俺学校あるんだけど。姉ちゃんは休みかもしれないけどさ。

「あたしが高二の頃ってあんたまだ小学生だから秘密にしてたけどさ、あたしがあんなくらしいの頃は学校行きたくない日はサボってカラオケとか行ってたんだよね」

「え、マジで」

いややりそうではあるけどね。マジでか。俺が小学生の頃ってまだ母ちゃん家に居たよな？堂々とサボってたのかよ。

「行きたくないもん無理に行く必要無くない？義務教育じゃないし仕事じゃないんだから。今だけだよ、サボりが出来るのは」

イケないことを教え込まれている気がする。でも実際今日は凄まじく学校に行きたくない。

このイライラを歌って解消出来るなら、そうしたい。

「昼間フリータイム、予約しとくから」

「……うつす」

今日、俺は初めて学校をサボった。

くくく

学校をサボってカラオケに来ているので、学生証なんかを受付で見せる訳にもいかず。俺は大人料金で姉ちゃんと二人で昼間フリータイムで歌い通すことになった。

元々歌うことは嫌いじゃない。中学生の頃はギターをほんのちよつとだけかじったりもしたし。

開始一時間とはかく叫ぶような曲を歌った。なんかもう社会に反抗してやるー！って位叫び散らした。歌詞もそんな感じのやつを選んだ。

「globe歌いたい。マークやってよ」

「あいよ」

姉ちゃんも俺も、歌うジャンルは特に決まってるない。JPOPも歌うしアニソンも歌うし、ボカロもロックもヘビメタも歌う。二人でデュエットもやる。globe歌う時は、姉ちゃんがKEIKOで俺がマーク・パンサー。ラップは苦手だけど全力でやる。

姉ちゃんが入れた曲はAnytimesmokingcigarette。夢の中で煙草吸ってた高見を思い出す。今となっては煙草は百円玉二個じゃ買えなくなったなあ。

ムシャクシャした気持ちは思春期のせい。こうやってアホみたいに叫んでると楽しいのも思春期のせい。青春狂騒曲を入れた。サンボマスターの曲は歌ってて気持ちいい。叫び散らせるし、なんか今の

気分に合わせてる。

「それ聴いてるとNARUTO読み返したくなるよね」

「あー、わかる」

中忍試験とかやってる辺りが一番ワクワクしたよね。ロック・リーと我愛羅のバトルとか。

ロック・リーを見てると「俺も努力しないと」とか思ってたけど、今の俺は果たしてどうか。

「へびメタ入れていい?」

「どうぞ」

姉ちゃんがGargoyleの完全な毒を要求するを入れた。うわ、あの曲歌いづらいだろ。

完璧に歌い切ってた。うわー、すげー。喉痛そう。

母ちゃんの影響で聴いたけど、その辺のへびメタは周りの人誰も知らないから、姉ちゃんも俺も友達とカラオケ行く時は滅多に歌わない。家族で行く時だけ。

「どんどん行こう。次何入れる?」

「サンホラ入れようぜ」

「おっけー。じゃあその次少女病で」

女の方がオタクの数は多い気がする。というか擬態してるオタクが多い気がする。うちの姉ちゃんもこんなナリしてかなりのオタク味をお持ちである。絶対クラスのビッチ集団にも一人くらいうたプリクラスとかいると思う。

二人で聖戦のイベリアを三曲歌い切る。俺がシャイターンとサアデイ先生、姉ちゃんがライラと流浪三姉妹。侵略する者される者は二人でする側とされる側に分かれる。

「こういうの歌ってるとき、厨二病は不治の病だっと思うよな」

「わかる。いつまで経ってもこういうのかっこいいもんね」

ちなみに俺等姉弟は進撃の巨人からリンホラに入ってサンホラにハマった人である。

そんなゴリツゴリ歌いまくってたら二時間で疲れた。飯休憩を挟むことにする。最近のカラオケ飯は割と美味しい。

「久々にカラオケでヘビメタとかサンホラ歌った気がする」

「姉ちゃんの友達にローランいなさそうだもんな」

「バンギャはいるからヴィジュアル系の曲は歌ったりするけどね」

「ヴィジュアル系とかABCしか知らねえ」

そのABCもかなりマイルドなヴィジュアル系らしいから俺のそっち方面の知識はほぼ無いに等しい。あ、5D'sのエンディング歌ってたグループもヴィジュアル系なのかな。

「何かさ」

「何？」

「楽しい」

最近あんま感じてなかった気がする。楽しい。

昔って、小さい頃って何してても楽しかったんだよな。極論、「うんこ」って一言言うだけで死ぬほど楽しかった。

変に歳取って、変に気取るようになるのと心の底から「やばい超楽しい」みたいな感覚が磨り減っていく気がする。

今日初めて学校サボって、それでカラオケ来て、叫び散らす。背徳感と高揚感。楽しい。

成程、校舎の裏で煙草吸うのも似たような感覚なのかもしれない。いや校舎の裏で煙草吸ってるやつなんて今どき居るのかどうかは知らんけど。少なくとも俺の夢の中には居た。

「あんたはさ、全力で遊ぶくせに楽しんでないんだよね。遊び方がヘタクソ」

昨日のティックトック、送られてきてたから観ただけど、結構やっぱり全力でやってたんだよな。でもなんかそれでも思い返して楽しかったか、って言われたらそうでも無かった気がする。

「あんたがモテないのってそこにもあるんじゃないの？心ここに在らず、みたいな」

「じゃあどこにあるんだよ」

「そんなもんあたしが知ってるわけ無いでしょ。自分で探せばか」  
心ここに在らず。

多分一番一緒にいる時間が長い姉ちゃんだから、言ってることは間



違ってないんだろいな。

スマホが鳴った。詩織からラインが来てた。

『どうしたの?』

そっか、今昼休みの時間なのか。

皆学校にいて、俺だけカラオケにいる。

ちよつと優越感。

「人生初のサボり」

送信した。すぐに既読が付く。

『心配した私がバカだった』

『お姉ちゃんも一緒?』

「うん」

『卑怯だぞ笑』

「お前もサボればいいじゃん笑」

『そんな度胸ない笑』

なんか、昨日の夜なんであんな惨めだったかわからなくなってきた。俺って単純。

スマホが鳴った。今度は織田からだった。

『サボり?』

なんでこいついきなり俺がサボってること認定してんの?

「お前と一緒にするな」

『ごめん』

『風邪?』

「サボり」

『死ね(笑)』

俺が休んだだけでなんでこんなライン送って来るんだ。というかサボっただけで殺されるの? 魔女裁判過ぎない?

ラインが鳴った。今度はコバかよ。

『風邪か? 来週来た時にノート見せてやる』

持つべきものは友達だと思えました。なんだ、こいつ良い奴じゃん。ごめん、風邪じゃなくてサボりなんだよね。

「サンキュ。別に風邪とかじゃないから大丈夫」

『そか。お大事に』

なんかお辞儀してるスタンプが送られてきた。  
なんか優越感。

「ワールドイズマインでも歌うか」

「あんたがそれ歌うの普通にキモイんだけど」  
傷付いた。優越感とか無かった。

予定を作りたい。

昨日、夜に学校から電話がかかってきた。よくよく考えたら朝に「学校休みまーす！」って連絡入れてなかったから無断欠席扱いになってたらしい。でも俺今まで学校休んだこと無かったから、なんかあったのかなって皆川ちゃんが電話してきた。やっぱ皆川ちゃん優しい。

電話は姉ちゃんが取ったんだけど、まー面白かった。

女は皆女優とはまさにこの事、って思ったね。

「すみません、晴人が熱出すなんてホント今まで両手で数えられるくらいしかなかったもので、はい。それに両親も出払っているものですから、私も少し取り乱してしまいました……はい。今は自室で寝ています、起こしてきましょうか？……すみません、ありがとうございます。す。今後はしっかりこういう際には学校の方にもまずご連絡させていただきます。ご迷惑をお掛けして……いえいえそんな！はい、月曜日は登校できると思います。はい、ありがとうございます。はい、失礼致します……」

熱なんか出してないし自室で寝てません。隣で笑い堪えています。ごめん皆川ちゃん。姉ちゃんがそんなかしこまって当然のようにスラスタ嘘言うの面白すぎるんだ。しかもちよつと裏声。

電話切ってから物凄いドヤ顔してた。笑った。腹抱えて二人で笑い転げた。

「ヤバくない？あたし女優目指そうかな」

「皆川ちゃんなんて言ってた？」

「いえいえ、そんな大丈夫です。神崎さんのお宅は親御さんがどちらも遠方で大変ですもんね、お姉さんの苦労は……みたいな」

「ふひ、ぶっはっはっは!!傑作!傑作だあ!!」

「笑い方キモいって!ふふっ、あははっ!」

もうずっと笑ってた。死ぬほど楽しかった。優越感とかじゃない。もうなんだろう、全知全能感。

どれくらい面白かったかと言うと、一日経った今日の朝でも思い出

し笑い出来るくらいに面白かった。

「んふっ」

「笑い方キモいって」

本日は土曜日ですが姉ちゃんは出勤らしい。家一人かー、片付けでもしとくか？

「なんかやつといて欲しいことある？」

「ドラクエXIのレベル上げ」

「それは自分でやってください」

なんかトイレ掃除しといて、とかそういうのが来ると思ってた。てか旬は終わっただろ、ドラクエXI。面白かったけどさ。なんで今やってんだよ。そういえば発売された時期姉ちゃん社会人一年目で摩耗してたんだった。やる時期逃したー！って叫んでたの今思い出した。

「あたしのカミュのレベルを上げる位なら自分の男としてのレベルを上げたいもんね」

「上手く言った！みたいな顔してるけど別に上手くはねえよ？」

ダメだ。ドヤ顔でこっち見るのやめて。昨日の電話思い出す。

そういえば小学生の頃、「俺の姉ちゃん、一緒にドラクエやってくれるんだぜー！」って自慢したら姉ちゃんに「あんた何あたしのオタ趣味バラしてんだ!!」って言われてボコボコにされた記憶がある。あの時はなんて理不尽でボコボコにされるのだろう、って思ってたけど今なら解る。ごめん姉ちゃん。

「んじゃ、そろそろいつてきまーす」

「いつてらっしやい」

挨拶は大事。古事記にもそう書かれているらしい。

~~~~~

さて。

昼飯は作るのめんどくさいから適当に外で食べるとして。何しよるか。

姉ちゃんドラクエのレベル上げするくらいならソシヤゲのランク上げをしたい。というかテスト前にかしこさを上げておきたい。かしこさのたねを落とすのはどいつだ。

取り敢えずテスト前になると自室の掃除を始めてしまうバグを予め解消しておく為に、午前中は自室を片付けるところから始めよう。片付け、掃除と言っても俺の部屋に置いてるものはそもそも少ない。

服を入れる箆筒、勉強机、中学時代使ってたギター、ベッド、本棚。これくらいだ。あと本棚の上にあるゾロのフィギュア。ゲーセンで取れたやつ。クローゼットの中に色々入ってるし、断捨離でもするか？……いやそれやったら余計散らかるな。

取り敢えず勉強机の周りを整理する。ついでに机の引き出しも整理。

「……なんだこれ」

引き出しの一番上の段を取り敢えず全部引っ張り出すと、アルバムみたいなものが出てきた。これいつのんだ？ 下の方にあつたから割と前か？

取り敢えず開いてみる。

「……なつつかし」

俺がまだ小学生くらいの頃の写真があつた。父ちゃんに高い高いしてもらって満足そうに笑ってる俺。仮面ライダーの変身ポーズをキメ顔でやっている俺。……うわ、姉ちゃんが幼い。髪の毛がまだ黒い。

夏祭りに行った時の写真だ。わたあめを持って満足そうな俺と、りんご飴を持って俺の横に立ってるのは……これ詩織か。小さい浴衣を着て全力でピースしてる。そのちよつと後ろでお姉さん、って感じで笑ってる姉ちゃん。

この頃はよくきょうだいと間違えられてたよなあ。小学二年生くらいか？ まだその頃って彼氏彼女とか一切どうでも良くて、「誰が好きだ」とかそういうものにも興味があまり無い時代。そんな事よりもポケモンリーグで波乗りしたらなぞのばしよに行けることの方がよっ

ほど重要だったんだよな。

それが二年くらい経って、高学年になってきたら急に「○○って誰々のことが好きらしいぜー」とか囃し立てる輩が現れるんだよな。今思えば思春期の極みかよ、って感じた。

俺等が「付き合ってる」とか「夫婦」とか言われ出したのもこの辺りから。つい最近まで言われてたんだから実に七年くらい言われていたことになる。

「……よくもまあ、七年間も同じようなかからかい方が出来たよな」

そんな事言われてなかったら惨めさとか感じなかったのかもしいない。だって見てみろよ、俺。この写真の俺めっちゃ無邪気に笑ってるんだぞ？今の俺こんな無邪気に笑えるか？姉ちゃんに「笑い方キモいって」って言われるような笑い方しか出来なくなっちゃったよ。

なんとなく、この夏祭りの写真をスマホで撮る。写真を写メで撮るって変な感じ。そして詩織に送る。……てか片付けしてたんだった。取り敢えずこのアルバムはまたどっか奥の方でいいんじゃないかな。

五分くらいしたらラインが返ってきた。思った以上に早かったな。

『なっつかし笑』

全く同じ感想が返ってきた。まあそうなるよな。

『その写真、うちにもあるよ』

『マジ？』

『マジ』

まああつてもおかしくないわな。詩織も写ってたから俺も送ってみたわけだし。

てかこの写真の存在、俺全く覚えてなかったんだけど。詩織はうちにもあるって知ってたってことは、あいつたまにこうやってアルバムとか見返したりするタイプなのか。……まあ確かにそういうのやりそうではある。意味もなくカメラロールとか眺めてそう。高見とのツーショットとかあるんだろうなー。

逆に高見とカメラロール見てて俺とのツーショットとか俺とふざけてるティックトックとか見たら高見どんな顔してりやいいんだよ。

ある意味俺よりしんどくない？それ。大丈夫？

……そうならないように俺との写真は消してるかもなー。それが無難だもんな。あいつと遊んだりする時、大体あいつのスマホで写真撮るから俺のスマホにあいつと遊んでる時の写真あんま残ってねえんだぞ。

そーいや今日土曜か。あいつ今日高見とティックトック撮るって言うってたなあ。

……。

「掃除進まねー」

テスト前は勉強したくないから掃除をする。「掃除をしよう！」って思ってたやってるんじゃないかと、「勉強したくないし掃除に逃げるか」思考。じゃあ「掃除をしなくては」と思ってる時は別のものに逃げてしまふ。思考の海に逃げてるわけです。

先、昼飯食べに行こうかな。牛丼でいいや。安いし、早いし、それなりに美味しい。

くくく

お昼は五百円以内に収め、自室掃除午後の部スタート。今度はCDプレーヤーで音楽を流しながら作業を始める。Get Wild、まだ覚えてないし。カッコよく歌えたらモテるらしいから(姉ちゃん曰く)。

取り敢えず引き出しのものは全部出しておいたので、いらぬものをまず捨てる。小学生の頃買ったポケモンの塗り絵はいらぬ。コバから借りてるエロ同人誌。いる。中学時代の教科書。これ多分いらぬ。国語辞典。まあ一応いる。

で、居るもの用途別に並べて引き出しや棚に仕舞う。エロ同人誌はなんかブックカバーを付けておく。いらぬものは一つにまとめて紐で縛っておく。紐、家にあったかな？取り敢えず端に寄せておこう。

埃を拭き取り、一階から掃除機を持ってきて床も綺麗にする。真剣

に始めると意外とサクサク進む。時計を見ると気が付かないうちに一時間も経っていた。

掃除終わったら何するかなー。

ちよつとテスト勉強して、気が向いたらドラクエのレベル上げ、やってみるか。

~~~~~

「ただいまー」

「おかえり」

姉ちゃんが帰ってきたのは七時過ぎだった。今日は五時に終わる、って言ってたはずなので少し遅めの帰宅である。なんかあったのかな。

「今日すっごいお客さん来ててさ、五時過ぎにピークが来たの。そんな時間にピーク来る!?!って思いながら手伝ってた。で、疲れたから出来合いのお惣菜買ってきた」

「お疲れ」

遅かった原因はそれらしい。販売業はそういう時あるよね。

「一応「帰り遅くなるー」ってラインしたけどね。既読ついてなかったし見てないと思って」

「え、マジ? 見てなかった」

スマホを開くと確かに新着メッセージが届いていた。全く気が付かなかつたなあ。今更だけど既読付けとこ。メッセージを開く。

『ほら、あつた』

あれ? これ姉ちゃんからのラインじゃなくね? 誰?

一緒に添付されてる写真を開く。そこには今日俺が写メったあの写真と全く同じ写真と、横に写りこんだ女の手が写った写真があった。

詩織かよ。というか本当にあいつの家にもあの写真あったのな。

「どしたの……うわなっつかし。あたしの髪の色がまだ黒い」

横からスマホを覗き込んできた姉ちゃんも俺と詩織と同じ反応を



していた。やっぱり最初は懐かしさに溢れるよな。

「そろそろ夏祭りかー。詩織ちゃんも彼氏と行くんだらうけどあんたはどうするの?」

「人をいじめて楽しいかクソ姉貴」

詩織は一緒に行く彼氏がいるんだらうけど、俺には一緒に行く彼女はいないの! あんだーすたん?

もう三人で祭り行くことは無いだらうなー。三人じゃなかった。この時は詩織のお母さんと、俺等の母ちゃんも一緒だった。まあ、俺と詩織と姉ちゃんの三人ならワンチャンあるかもだが、それに加えて母ちゃんも一緒ってのは絶対もう無いんだらうなー。

気が付かないうちに「もう二度と無い」ってことが現れる。それってすごく残酷。

「まあ、今年の夏はあたしも彼氏いないし。一緒に行つてやつてもいいよ」

「え、マジ? 奢ってくれる?」

「死ぬ。……あたしも祭りは行きたいけど、一人で行くの嫌だし。友達皆カップルで行くらしいし」

この歳になって家族で祭りかよ、とか思われるかもしれないし、言ったら笑われるかもしれない。けど、別にいいのだ。どうせなら姉ちゃんと二人で全力で夏祭り楽しんでやる。

夏休みの楽しみがひとつ出来た。

「あの、二駅くらい先の花火あるやつにしようぜ」

「あー、なんかツイッターで宣伝見たかも、それ。いいよ」

ホントは彼女と行くのが楽しいんだらうけどね。いないもんはしょうがない。コバとか誘っても来るか解らないし。

ラインが鳴った。詩織だ。

『この時みたいなき、夏休み、どこか遊びに行けたらいいね』

いやお前は彼氏と行けよ。俺と行つたらあらぬ噂をかけられるぞ。

「お前は彼氏と行けよ笑」

なんか悔しいので笑マークを付けて返信する。別に俺は気にしてませんよアピールです。

『そうなんだけどね笑』

『どうせならお姉ちゃんもお母さんも一緒に花火とかしたい』

……確かにやりてえな。

やりたいけど、なんとなく「じゃあやろうぜー」って言えない自分がある。何でだろうな。どうせなら夏休みの予定は沢山入れた方が絶対楽しいのに。

「予定お前が組むなら乗るけど」

『えー笑 めんどくさい仕事私に押し付けるじゃん笑』

「言い出しっぺ」

無料スタンプで兎がニヤニヤしているスタンプを送り付ける。というか高見はそういうの許してくれんのかよ？流石にそれは俺から聞くの嫌だから聞かないけど。

『予定出たらその日空けといてね。お姉ちゃんにも空いてる日聞いてみる』

本当にやる気かよ。大丈夫？俺あとで高見にボコボコにされたりしない？悪夢の見すぎ？

ちよつとだけ。ちよつとだけ、夏休みが楽しみになってきた。まあ、その前に一学期のラスボス、期末テストがいるんだけども。

「うわ、マジでレベル上げしてくれてるじゃん、ありがと。一しか上がってないけど」

「ゲームのレベル上げじゃなくてお勉強してたんですー！飽きたからしよーがなくなっつきレベル上げ始めたんですー！」

お礼言ったあとに文句言うの腹立つなクソ。

教えてもらいたい。

「お前が休むなんてマジでビックリしたぞ。ほら、これノート。貸し  
一つな」

月曜日、学校に行くとコバが少し心配そうな顔をして二冊ノートを渡してくれた。うーん、持つべきものは良き友よ。こういう時は一切の罪悪感を感じないね。感謝しかない。

「サンキュ」

しかもご丁寧に俺がノートをいつも一切取っていない数学は渡して来ない。だって家で問題集さえやつとけばある程度点数取れるし。

「いいご身分じゃん不良少年」

後ろから肩を小突かれる。痛ってえな、誰だ?……織田かよ。

「アタシもサボりはあんまりしないのにね」

「おい織田ビッチ、お前と晴人を一緒にすんなよ」

持つべきものは友である。でも今のはちよつと罪悪感。

てかうサビッチみたいに言うのやめろよ。笑つちやうじやねえか。

「うっさい二次オタ。エロ本でも読んでシコつてろ」

「あんだと!?知ってんだぞ、お前の鞆に付いてる缶バッジシリーズの中にヒプマイの麻天狼のロゴあるの」

「え、マジ?お前よくそんなの見てたな」

でも多分それ地雷だと思うぞ。

「はあ!?お前マジでどこ見てんの!?クソ童貞!!死ね!!」

「痛ったあ!?!」

うーわ、ビンタされてら。そらそうよ。これに関しては色々申し訳ない気もするがコバが悪い。

……にしてもクラスのビッチ集団の中にも一人位うたプリクラス  
タいると思ってたが、まさか織田がシンジユクの女だったとはなあ  
……流石に予想外だった。まあ今人気だもんね、ヒプマイ。

……なんか織田の奴、姉ちゃんにちよつと似てるな。

くくく

「納得がいかねえ」

「いや流石にコバ氏が悪いでしょー」

ヒリヒリ痛んでいるらしく、昼休みもコバは頬をさすっていた。最近暑いから中庭に行く気になれない。

「あのクソアマ……」

でも元はと言えば金曜の休みはサボりだろ、って俺が織田に言われたのがムカついて突っかかって、その結果ビンタされてるんだからかなり罪悪感。だってマジでサボってた訳だし、織田そのこと知ってるし。

「まあいいや。そんな事よりもお前ら！モテる方法だよ、俺はひとつ見つけてしまった！」

「こいつの心の中忙しいな。」

「おお、それはー？」

「それはだな……壁ドンだ!!」

「はっ？」

「えっ」

壁ドンって……こいつ何年前の流行りに乗っかろうとしてるんだ。二年くらい前にその流行は終わったぞ？

俺と須田が「こいつ何言ってるの」「みたいな顔をしていると、どうやらその顔が「壁ドンって何ですか聞いたことも無いです」の顔と間違えたらしく、ドヤ顔で説明してきた。

「なんだあ陰キャ共？やっぱり知らなかったか……仕方ない、教えてやろう。壁ドンとは」

「いや知ってるから」

「その流行りはちよつと前に過ぎたよー」

「……えっマジ？壁ドンってもう時代遅れ？」

いや、時代遅れかと言われたらそうでもない気がするけど……。そもそも壁ドンで女を落とせるのは超イケメンだけだつて。多少ルックスが良い程度じゃ壁ドンでは落とせないって。

「じゃあシミュレーションしてみよう。コバが壁ドンをしたとする。

須田が女子ならどう思う?」

「そのままおっぱい触られるんじゃないかとドン引きする」

「解ったかコバ?これが現実だ」

「俺ってそんなに信用ないか」

趣味はエロゲーだと明言してる奴が女子から信用あると思われてる方がおかしい。ゲテモノ料理店やってる人に「得意料理振舞ってやるよー」って言われたら遠慮するのと同じ感じ。

「てか須田あー!お前もなんかモテる方法出せよ!」

「逆ギレするなよコバ……」

壁ドンが時代遅れだったことと自分の信用の無さを須田にイライラでぶつけてどうする。

須田はうーんうーん悩んでから自虐的な笑みを浮かべた。

「いや、ほら。俺ってチビだしー?その時点でダメなんだよねー」

「歳上の女の女の人なら「可愛いー!」ってモテるかもしれないだろ!?!おい晴人!お前の姉ちゃんのタイプってどんな男なんだよ!」

「知る訳ねーだろ」

姉ちゃんの好みのタイプ?……最近はどうな男を見てかつこいって言ってたかなあ……。記憶を掘り起こす。

そういえば織田の奴、ヒプマイ好きだったとはなあ。割とマジでびつくりした。……ヒプマイ?

あ、そうだ。最近姉ちゃんヒプマイの左馬刻がかっこいいって言ってたわ。

「……えっと、ワイルドな感じのヤンキー。身長はかなり高め俺様系がタイプなんじゃないの?最近はそのような感じ」

オタ趣味バラしたら姉ちゃんに半殺しにされるのでなるべくはぐらかす。左馬刻はヤンキーというかヤクザだけでも。

「ほらー!俺と真逆じゃん!?!」

あ、ホントだ。なんかすまん。

「……うん、頑張って生きろよ」

ほら、ヒプマイ繋がりだと乱数もチビだけどあんな感じのキャラでオネーサン達を落としてるらしいし、何とかなるよ。頑張れ。

……絶対コイツらと作戦立てても夏休みモテないと思う。

〃〃〃

「神崎、お前この後職員室来い」

なんか終礼で皆川ちゃんから呼び出し食らった。え、なんで？

まさか金曜のサボりバレた？いや姉ちゃんの演技は完璧だったはずだろ。まさか俺が隣で笑い堪えてる時に声入ってた？

俺が呼び出し食らうなんて今までで初めてなのでクラスが一瞬ザワつく。あいつ何やったの？みたいなの。

二人だけ、哀れみと嘲笑の瞳で俺を見てくる奴がいる。俺がサボってたことを知ってる詩織と織田だ。

うわー、行きたくねえー。

終礼が終わり、皆川ちゃんが職員室へ帰る。教室を出る直前に、「さつきと来いよー」と念を押された。え？マジでなんなの？

「ハル、バレたんじゃないの？サボり」

「呼び出される理由がそれ以外に考えられない」

鞆を背負ったまま少し同情するような表情でこっちに来たのは詩織だ。

「まあでもサボり自体は悪いことだしね。お姉ちゃんそういうの好きそうだけど」

「姉ちゃんが高二の頃はサボりまくってたらしいぞ」

「いいなー。私そんな度胸無いけどさ」

頑張っつてね、と謎の応援をされた。職員室に行くのに頑張るもクソも無いだろ。

足取りが重い。でもこれよく考えたら違うのでは？それだったら姉ちゃんが一番怒られるべきだろ？だってあんな声色まで変えて電話受けたんだぞ？怒られるべきは姉ちゃんなのでは？サボったのは俺だけだ。

勝手に責任転嫁することで心の平安を保つ。

職員室はノックして入るのがルールだ。どこでもそうか。

「失礼します。皆川先生は……」

「あー、こっちー！神崎こっちー！」

流石に職員室の中では皆川ちゃんにも先生を付ける。皆川ちゃんはブンブンと手を振って自分の場所を知らせてくれていた。背が低いからそうしないと見えないもんね。

恐る恐る皆川ちゃんの方へ行く。いいよ座って、と促されたので椅子に腰かける。

「金曜なんだけどさ」

来た。やっぱバレたか。土下座の用意をしておこう。

「お前が寝てる間にな、お前のお姉さんと電話でお話したんだよ」

……ん？なんかこれ話の方向が違うぞ？

「お前が熱出した時にな、どうしたらいいかパニックって学校に電話するの忘れてたって。両親が家に居ないから晴人を守るのは自分だけなんですって。……いいお姉さんだな」

なんか真剣な顔で話されてる。

これアレだ。ただ姉ちゃんを労いたいだけだ。やめてくれ。その辺の話八割方嘘だから。俺隣で聞いてたから。笑っちゃう。今笑ったらマジでまずいけど笑いそう。

「これ、お姉さんに渡しておいてくれ。つまらないものだけど多分家事とかで大変だろうし、スキンケアの足しにでもって」

そう言っただけ渡されたのは多分なんかの化粧品？美容クリーム？そんな感じのやつ。やばい。姉ちゃん渾身の嘘で皆川ちゃんから貢物を獲得しやがった。面白すぎる。

「……神崎お前なんて顔してんだ？」

「いや、あの……えっと、姉ちゃんがそんなこと言ってたんだなって、思うと……」

必死に誤魔化す。笑いを堪えてる顔だとバレないように。

「……そうだよな、家族の想いって中々見えないよな。大事にしてあげろよ」

「はい……大事な姉ちゃんなので……」

もう限界だ。泣いてるふりして両手で顔を覆う。美容クリームみたいなものを持ちながら。

「そんだけだ。もういいぞ」

「はい、失礼しました……」

俺は役者にはなれないな。笑い堪えるのも満足に出来ないもん。姉ちゃんすげえ。流星のハイスペックである。

皆川ちゃんが生徒に人気ある理由は多分この辺なんだろうなあ。口がめちやくちや悪いけどすげえ生徒を思ってるのは確かに解る。

さて、今日は用もないし帰るか……

「……あつ」

「あつ」

職員室を出てすぐに目が合った。女子サッカー部のユニフォームを着て、動き回るのに邪魔にならないように髪の毛をポニーテールで縛った石黒と。

「神崎君じゃん。何か提出物でもあつたの？」

「いや、担任に用があつただけ。今から部活？」

「うん。明後日からテスト前で部活無くなっちゃうからさ、今日と明日はハードなんだよ」

白い歯を見せて笑う。ハードなら気が滅入りそうなもんだが、あまりそういった雰囲気は見て取れない。日焼けした肌は練習で付いたんだろうが、さてはこいつサッカー大好き少女だな？

「その割には楽しそうだけど」

「そう？部活自体は好きだからかな。テスト期間が恨めしいんだよね」

テスト一週間前になると、ほぼ全ての部活は休みになる。学生の本分はあくまでも勉強だから勉強しなさい、ってことなんだろう。成程、帰宅部の俺からしたら関係無いが、石黒にとってはキツイ話か。

「勉強、苦手なのか？」

「かなり苦手。いつも赤点ギリギリ。赤点取るとコーチに怒られるんだよねー」



「そりやまた難儀だな」

「難儀なんです。神崎君は得意？」

「苦手では無いか」

「いいな」

どうでもいいが前初めて会った時は制服で、髪も下ろしてて。当たり前だけどスカートで。

今はサツカーユニフォーム着てて、髪の毛はポニーテールで。当たり前だけどハーフパンツで。

印象がかなり違うもんだ。元々活発そうに見えてたけど、部活スタイルだと更に活発そうに見える。なんだろう、可愛い男の子？みたいな印象すら受ける。

「……つと、顧問かなんか用があつたんだよな、悪い。呼び止めた」  
「全然大丈夫。話し掛けたの私からだつたし、ラインでも言ったじゃん？また絡んでねー！って」

そういやそんなこと言ってたな。

「部活頑張れ」

「ありがと。じゃあね」

本当にスポーツ少女、って感じた。俺体育とかも得意ではないからなあ……あんだだけスポーツに打ち込んでる姿は素直に凄いと思う。

高見もバスケ上手いって聞くし、きつと同じなんだろうな。スポーツに打ち込んでる。

俺、そんな打ち込んでやったようなもの、無いからなあ。色々なものに雑に手を出して、広く浅く色々やって見る。一つのものに全力で打ち込んでしまうと、それで挫折すると立ち直れない気がするんだよな、俺。

俺も石黒を見習って今日は家で勉強に打ち込むことにしよう。

くくく

今回の最大の敵は物理だと思う。元々苦手なんだよな。数学つぽ

いけどちよつと違う。助けてくれラヴアンドピースの天才物理学者。俺が物理を勉強しないのは勝手だ。だがその場合、テストで痛い目を見るのは誰だと思う？万丈だ。……いやテストで痛い目を見るのは俺か。

「晴人ー！夜ご飯出来たけどどうするー？」

一階から姉ちゃんの声が聞こえてきた。え、もうそんな時間？やっぱり苦手科目は思うように進まねえな。

「片付いたら降りるー！もしアレだったら先食べといてー！」  
アレだったら、つてどれだよ。

筆記用具をペンケースに納め、問題集とノートを閉じる。扇風機のスイッチを切ったところでスマホが鳴った。電話か？

「悪い、姉ちゃん電話！先食べといて！」

「はあ!?あたしの飯より大事な電話なの!?!?!?!五分で降りてこい！」  
「いやホントごめん！」

怖。ごめんなさい。

スマホの画面を見ると、電話してきていた相手は……石黒？何でだ？全く理由がわからない。

取り敢えず通話ボタンを押して耳にあてた。

「もしもし?」

『あ、神崎君?ごめん、急に電話して』

電話越しに学校の「間もなく最終下校時刻です。部活延長のない生徒は……」というアナウンスが聞こえている。まだ帰ってる途中か？

「いや別に電話はいいんだけど。なんかあつた？」

『うん。あのさ、神崎君って、勉強苦手では無いんだよね?』

「まあ、それなりに」

部活もしてない、バイトもしてない。だからと言って遊び呆けている訳でもない学生が勉強苦手だったらいいよもってこいつなんなの?ってなるし。

あ、なんかこれデジャヴ。図書室で初めて会った時のこと思い出す。

『今回のテストで赤点取ったら、誰であろうと次の練習試合、レギュ

ラーから外すつてコーチに言われてさ。割と皆マジで勉強しないとやばいんだよね。でもその中でもトップクラスに赤点取りそうなのが私で……』

「俺に勉強を教えてほしい、と」

『……そういうことです』

やっぱりな。暇潰しに付き合ってくれ、って言われた時と同じ感覚を感じたのはそれか。

「他に頭良い友達とかは？」

『皆自分のことに手一杯みたいでさ、女サカのメンツはそもそも馬鹿ばっかりだし』

まあ、私が筆頭なんだけどねー、と笑いながら続ける。

いや、ぶつちやけ勉強を教えることに関しては別に問題無い。教えているうちに自分の頭の中にも入ってくる、っていうのは割とマジであるし。

なんというか、コバに乗せられて女誘ったみたいな気になるのが嫌なんだよなー。

『……あつ、勿論自分の勉強に集中したい！とかだったら全然断つてくれていいよ』

なんとなくフィードバックするのは、練習がハードだって言っているのに楽しそうに笑っていた石黒の姿。

本当にサッカーが好きなんだろうなー。

「……俺でいいなら、全然教えるけど」

『ホント!? やったあ！ ありがとね、神崎君』

「取り敢えずもうすぐ飯だからもう切るぞ？ あとでいつやるかとか決めるのでいいか？」

『私は教えてもらいう側だから神崎君に合わせるよ』

「そうか。じゃあまた後でラインする。部活お疲れ様」

『ホントにありがとね！ じゃあね！』

電話が切れた。

……飯食ったら勉強しよ。教える側が解ってなかったら笑いもんだし。

勉強したい。

いよいよテスト期間が始まった。

俺は一昨日取り決めた協定により、石黒のやつに勉強を教えることになってる。ちなみにそのことは(俺は)誰にも言っていない。別に言う必要も無いし聞かれないし。コバ辺りに言ったら殺されそうだし。

とは言っても毎日教えるわけじゃない。俺だつて自分の勉強時間が欲しいからね。今日……つまり水曜、金曜、土曜、そして月曜日。この四日間教えることになってる。まあ増えたり減ったりするかもしれないが。

という訳で放課後、俺は待ち合わせ場所の食堂入口で石黒を待っていた。本日は日本史を教えることになっている。日本史とか教えることあるか？覚えるだけだろ。

「お待たせ。ごめんね、教えてもらおう側の方が遅くて」

「気にすんな。適当に空いてる席でやるか」

「よろしくお願いします、センサー」

白い歯を見せて笑う石黒。別に待つのは慣れてるから全く問題ない。詩織とか遊びに行く約束しててもたまに三十分位遅刻することあるし。あいつは朝弱すぎ。

~~~~~

「お前、全部無理矢理暗記しようとしてるだろ」

「え？だって日本史って暗記じゃん」

いや、まあそうなんだけど……そう言つて無理矢理暗記出来るやつは記憶力お化けだぞ。

うーん、どうやって説明したらいいかな……？

「でもそのやり方で赤点ギリギリなんだろ？」

「……恥ずかしながら」

「んじゃそのやり方はお前には合っていないんだよ」

石黒の日本史の勉強の仕方は至極単純。問題集の単語をひたすら覚える、というものだった。それ小テストみたいな一夜漬けバトルには使えるけどさ。というかそれなら俺教える必要無かったじゃん？

「これ、俺のやり方だから石黒に合うかどうかは解んねえけど。日本史……というか歴史は世界を広げると覚えやすい」

「世界を広げる???どういうこと?」

俺は日本史の資料集と自分のノートを広げた。

俺は定期テスト前は、歴史に限っては教科書や問題集よりも資料集を使うことが多い。いや、勿論教科書や問題集も使うが。

「ただ覚えようとするより、ストーリーがあった方が面白いだろ? ……例えば今回のテスト範囲にもある元寇ってあるじゃん。元っていう国を作ったのは?」

「えーと……チンギス・ハン?」

「フビライ・ハンな。ここごっちゃになるから注意しとけよ」

「そつちかー」

そつちかー、って二択クイズみたいなノリだな。でも確かにここはごっちゃになる。中国に侵攻したのはチンギス・ハン。元を作ったのはフビライ・ハン。

「じゃあ、チンギス・ハンはどんな奴だったと思う?」

「え?えーつと……」

石黒は問題集をペラペラと捲りながら大きな瞳をキョロキョロと動かす。多分それ、問題集には載ってないぞ。

「チンギス・ハンは元々は遊牧民族だったんだよ。先祖代々、馬に乗って、羊を追い掛けて生きてたんだ。で、物資が足りなくなったら他の国を襲って確保する」

まあ正確にはちよつと違うんだが、別にそこまでテストに出る訳じゃないと思うので些細な問題である。

「盗賊みたいだね」

「そんな感じだな。でも所詮盗賊だったんだよ。野蛮な民族だったけど大して大きな勢力じゃなかったんだ」

実はこの辺りの話、俺は割と好きだったりする。だから今回の日本のテスト範囲は割と俺にとっては楽しい範囲だ。まあ一番好きなのは戦国時代なんだけどね。

「けど、盗賊のチームはモンゴルに沢山あったんだ。チンギス・ハンはそのチームを全て統合して、超デカイ盗賊チームを作り上げた。元々馬の扱いが上手な盗賊共だし、当時の馬は今で言う戦車みたいなもんだ。盗賊チームは国と戦争出来るレベルまで強くなった」

「皆で協力して国を盗もう！ってこと？」

「国を盗む……そうだな、そんな感じ」

成程。その発想は無かったな。国を盗むってかっけえな。

「チンギス・ハンが作った盗賊チームはめちゃくちゃ強かった。当時の国のうち四十はこのチンギス・ハン盗賊団に滅ぼされたらしい」

「四十!?強っ」

「馬の扱いが上手かったのもあるが、遊牧民族の馬は頑丈だったらしい。チンギス・ハンはどうとう中国も自分の手に収めた」

石黒は問題集から完全に目を離して聞いている。

「けどそんなチンギス・ハンにも勝てないものがあつた。寿命な。

チンギス・ハンが死んでその後を継いだのがフビライ・ハン」

「成程……チンギス・ハンが国盗り盗賊団を作つて、フビライ・ハンは後継者つてこと？」

「大体はな」

「何か、面白いね。私、歴史が面白いって思ったの初めてかも」

白い歯を見せて笑う。そしてノートにすらすらと何かメモを始めた。

個人的なやり方なんだが、暗記系の科目はただ言葉を覚えるよりも、こうやってストーリーや何かを覚えた方が印象に残る気がする。その方が興味が湧いたり楽しくなったりするから。興味があつたり楽しいものはすぐ覚えられるし。徳川將軍より斬魄刀の始解の解号の方が覚えられたりするのそういう事だと思う。

そういったストーリーやエピソードは意外と資料集の方が載つてたりする。俺は資料集の端とかに書いてる「豆知識エピソード」みた

いなやつが割と好きだ。

「続きは無いの？モンゴル国盗り物語」

「名前付けたのかよ……そうだな、フビライ・ハンが後を継いだ時、そろそろ盗賊をやめよう！もつとビッグになろう！って思ったんだよ。という訳でフビライ・ハンが中国の王様になって、新しく「元」っていう国を作った」

「盗賊団が国になった！」

「そう、国になったんだ。だけどフビライ・ハンも元々は盗賊団の一員。まだ盗み足りなかったんだ。だから元は今度は日本に狙いを定めた。当時、日本は黄金が沢山ある凄いい国だって思われてたんだ」

「ワンピースの空島みたいだね」

「そうだな。本当に、そんな位の金があると他の国からは思われていたんだ」

片や黄金で出来た大鐘楼。当時の日本はなんだっけ、死ぬ前には真珠を飲むとか、金よりも鉄の方が少ないとか、金のレンガで家を作るとか思われてたんだっけ。空島より余程尾びれついてるな、これ。

「フビライ・ハンはそれが欲しかった、そんなもん無いのにな。元は日本に侵攻して来た。これが元寇のうちの一つ、文永の役」

「これ、確か日本は勝ったんだよね？」

「勝った……とは言えないんだなこれが」

これ、ホントに運が良かったただけな気がする。

「元は戦争するつもりで日本に来た。日本は決闘するつもりで立ち向かったんだよ。どうなると思う？」

「え？それ、どっちも同じじゃない？」

「同じじゃないんだよ、これ。そうだな……元はサッカーの試合をするつもりで、グラウンドに十一人立ってて、ベンチにも控え選手がちゃんと座ってたんだ。日本は1 on 1するつもりで、グラウンドに一人しか立ってなかった。どうなると思う？」

「……元のワンサイドゲームになるね」

「そういう事。しかも元の弓は日本のより高性能で、更にてつはうつという爆弾みたいなものまで持っていた。日本は為す術もなく元の

軍隊にボツボツにされたんだ。博多湾まで攻め込まれた」

「勝ち目ないじゃん」

「ホントにな。元の軍隊も絶対に負けない、急がずにゆっくり戦っていけばいい、と思つて夜になったら船に戻つて休んでいたんだ。日本には夜中に奇襲するほどのパワーも残つてなかったしな」

「うわー、なんかそれムカつくね」

「なんというか、石黒の反応が面白い。成程、相手がこうも一々反応してくれると教えてる（話してる？）立場もだんだん面白くなってくるな。」

「だけど、ここで船に戻つたのが元軍最大のミスだったんだ」

「おっ？日本軍反撃？」

「夜中に物凄い嵐が船を襲つたんだよ。船は沢山沈み、一万人以上の元の軍隊が一夜で死んだ。なんとか生き残つた奴らもヘトヘトだ。朝になったら日本軍に殺された」

「えっ、じゃあたまたま嵐が来たから勝てたの？」

「そういう事になるな。これが文永の役」

「えー！日本頑張れよー」

まるでスポーツの国際試合で不甲斐ない試合をした日本代表に愚痴を言うようなノリで当時の日本軍に文句を言う石黒。思わず笑つてしまった。

「まさか負けるとは思つてなかったフビライ・ハンは日本侵攻軍が負けた、と聞いてびっくり仰天。ならもっと多くの軍で日本を攻めようと再度軍隊を日本に進軍させた。これが元寇のうちのもう一つ、弘安の役」

「え、でもたまたま嵐が来たから勝てたけどさ、文永の役で日本はボロ負けしてたんでしょ？勝ち目無くない？」

「そう思うだろ。元の軍隊さん、なんと今度は日本に上陸する前に大嵐に見舞われたんだ。十万人いた軍隊のうち、八万人がここで死んだ」

「えー！また!？」

「そう。所謂神風つてのはここから来てるらしいが……まあ上陸出来



た船もあつたんだが前みたいに博多湾まで行けずに対馬止まり。これが弘安の役」

色々かいつまんだから事実には齟齬はあるが、ここまで追いかけたらなんとなく解るだろう。

「なるほど、当たり前だけど昔の人も生きてたんだもんね、こうやってストーリーがあると覚えやすいかも」

「だろ。こういうので関連付けて覚えていくと歴史系はわかりやすくなるぞ」

「神崎君、勉強も楽しんでやってそうだね」

「も?」

「うん。ティックトックも全力でやってくれたじゃん?全部全力!つけて感じる」

全部全力。

全然そんな事ない。

確かにやるなら全力で楽しむのが俺のやり方だ。だけど多分本気でやってることなんてひとつも無い。

それこそ石黒のサッカーみたいな。そういうものが無い。

「石黒だつてサッカー全力だろ?スタメンなんだろ」

「あれ、私スタメンって言ったっけ?」

「赤点取つたら練習試合レギュラーから外されるんだろ?別に普段からレギュラーじゃなかったら焦らないだろ」

「あ、そっか……はい。私実はスタメンなんです。凄いでしょ」

まだ三年生が引退してないのにスタメンっていうのは素直に凄いなと思う。だからこそ赤点取りたくないんだろうな。ドヤ顔で白い歯を見せて笑う姿は少し俺には眩しかった。こんな奴、周りにいなかった。良くも悪くも、俺も姉ちゃんも詩織も。ここまで何かに熱中するタイプじゃない。

「赤点回避したら練習試合見に来る?」

「そういうのは回避してから言うもんだぞ。てか、練習試合って見れるもんなのか?」

「見れるよー。会場うちのグラウンドだし」

うちの高校の女サカはそれなりに強いらしい。いつも県大会でベスト8とか、いい所までは行ってる……らしい。まあ、予定が空いていたら石黒の出てる試合を観に行くのも悪くは無いかもしれないな。

「お前の必殺技、見れる？ファイアトルネードとか」

「そんなの出来るわけないじゃん。小学生の頃は憧れてツインブーストとか友達と練習したけどね」

女子でもサッカーやってたらやっぱ一回はやるんだ、イナイレの必殺技特訓。サッカーやってない俺でもノーザンインパクトとか真似しようとしたからな。やっぱ皆一回は通る道なのか。

「神崎君、ここは元寇でいいのかな？」

「んあ？……そうだな、「二回にわたって」みたいに書いてて年号とかも無かったら元寇でいい。年号とかが書いてたら文永の役か弘安の役を疑った方がいいな」

「おっけー。……お、ほんとだ。合ってた。えっと、博多湾まで攻め込んだのが文永の役、対馬までしか行けなかったのが弘安の役……どっちが先だったっけ」

「さーてどっちだったかな」

「意地悪ー！教えてくれたっていいじゃん」

「もうちょい自分で悩め。ジュース買ってくる」

喋り過ぎて喉カラカラだ。

「あ、私ナタデココ入のぶどうジュースがいい！はいお金」

「しれっとパシリにしたな、俺を」

まあ別についてだからいいけどさ。ナタデココ入のやつ、購買で割と売れてるけど俺飲んだことないな。あれ美味しいのか？折角だし俺もそれにしようかな。

購買は食堂を出てすぐの所にある。食堂と購買専用の地下一階。テスト前に食堂で勉強する奴は意外と多いので、昼休み程ではないにしろ購買もそれなりに混んでいた。取り敢えず目当てのジュースを二つ買い、食堂へ戻る。

「ほら、これだろ」

「それ！ありがとね」

「進んだ？」

「三問くらいは解けた。今は教科書とノート見ながら流れの確認中」

石黒のノートは小綺麗な字で整頓されていた。端の方になんかよくわからん猫の落書きをしているのはなんだ。俺もたまにやるけどね、ノートに落書き。

「元寇、勝ったはいいけどやっぱり日本も大損害だったんだね。御家人が生活出来ない位に大変になったって書いてた」

「そう。そういう弱みにつけ込んで商人が借金を進めてくる。それが高利貸し」

「うわー、いつの時代も人の弱みにつけ込んでお金稼ぎする奴がいるんだね」

単語丸覚え戦法よりもストーリーや流れで覚える戦法の方が石黒には合っていたらしい。この感覚でやれば日本史は赤点を取ることには無いだろう。

「折角ジュース買ってきたしちよつと休憩するか」

「やったー！お喋りしようよ」

「俺、さっきまで喋りっぱなしだったんだが」

俺の喉と舌はもう少し酷使されることになりそうだ。

負けたくない

石黒に教える時間も必要だから今回のテスト期間はちよつとハードかな、とか思ってたけど、いざテスト期間に入ってしまったえば思った以上にそうでも無かった。

ある程度自分の勉強時間も確保されてるし、石黒は思った以上に教えたことはすんなり吸収する。本日金曜の教える予定だった数学もある程度やり方さえ教えてしまえば、応用問題以外は時間さえかけたら自分で解けるようになっていた。

「やり方が解ってくるのとちよつと出来る気になるよね」

「基本数学のテストは基本のA問題だけ出来たら五十点は取れるようになってる。応用問題も途中式だけでも合つてたら加点されたりするからもうちょい詰めたら六十点位は狙えると思うぞ」

「ホント!? 私高校入ってから六十点とか取ったことないや」

時刻はもう七時前だ。もう梅雨も明けかけているし本格的な夏だ、この時間でもまだ夕日が空を明るく照らしてくれている。

石黒が電車に乗る駅までの道と、俺の家に帰るまでの道は途中まで同じなので、こうして一緒に帰っている。

「得意科目位あるだろ、それでも六十乗らないのか?」

「私の得意科目は体育なのです。リフティングテストとかなら百点満点貰える自信あるよ」

「俺としてはそつちの方が羨ましい」

「え、なんで?」

なんで? って言われたらなんだろうな。体育の授業でサッカーとかバレーとかやると、やっぱり経験者がカッコよくリフティングしたりスパイク決めたりするじゃん? あれ、やっぱり普通に憧れるんだよな。

「勉強出来るよりスポーツ出来る方がモテるだろ? 男は」

「あー、玲音とか?」

何の気なしに口から零れた言葉から、高見の話が来るとは思わなかった。

でも確かにイケメンで高身長で、バスケット上手かったらそりやモテるわなあ……。てか下の名前呼びかよ。

「まあ確かに玲音位イケメンでスポーツ出来たらモテるんだろうね、実際彼女いる訳だし……。あ、ごめん。振られたんだっけ」

「振られてねーよ」

こいつはマジで無邪気で言ってる。付き合いめちやくちや浅いけど解ってきた。イラツとはするけど怒るに怒れない。だって悪気無いことが解ってるから。

「でも意外だったんだよね。私、玲音とは去年同じクラスだったんだけどさ、バスケットしてる時は司令塔！って感じでバチバチしてるけどそれ以外の時はなんかふにゃふにゃしてる？感じだからさ。まさか詩織ちゃんに告白するとは思いましなかった」

へえ、高見から告白したのか。

なんとなく情景が浮かぶ。多分今みたいな夕日が綺麗な日で、部活が終わってから詩織を呼び出す。部活終わりだから汗をかいてて、それを拭くことで緊張を解して、何回か深呼吸。詩織の目を真っ直ぐ見て、告白する……。みたいな。

「まあ、でもあんまり心配はしなくていいと思うよ。玲音、ふにゃふにゃしてるけど良い奴だし、超優しいし」

「別に心配はしてないっての」

「そうなの？結構気にかけてるんだろうな、って勝手に思ってた」

「何で」

「え、だって神崎君超優しいじゃん」

「はっ」

あまりにも予想外な答えが返ってきた。どっかに俺が優しい要素あったか？

「私図書室で初めて会った時、正直めちやくちや失礼かましたじゃん？そんな失礼な子の暇潰し付き合ってくれる人中々居ないよ。……。まあ、だから今回も勉強教えてー！って頼んだんだけどね」

あー、確かに石黒の第一印象は「紅だアアアア!!」だった。いや意味わかんねえわ。……。どっちにしろ、開口一番かなり失礼なことは

確かに言われたな。

まあでも、あの時俺ただ単に暇だったただけだし。俺にとっても暇潰しだった訳で。

「……あ、私こっちだから。また明日も宜しくね」

「おう。また場所と時間はラインしてくれ」

「はい。今日はありがとね」

分かれ道。右に曲がれば駅。左に曲がれば俺の家。一緒に帰るのはここまでで、ここからは互いに一人で帰る。

明日は土曜日なので放課後に食堂で！という戦法が使えない。別に学校は開放されてるから食堂だか図書室で勉強は出来るんだが、「休みの日まで学校で勉強したくないー！」という石黒のワガママでまだ何処で勉強するか決まっていけないのだ。……まあ、気持ちは解らないでもないけどさ。

今日も喉を酷使したなあ。先週のカラオケから喉の調子がおかしい気がしないでもない。

くくく

「ただいま」

「おかえり」

「おかえりー」

なんか返ってくる声が一つ多い。

足元を見た。なんか靴の数が多い。

「……聞いてないんだけど、俺」

「ラインはしたんだけどね」

金曜日で、月末で。

親父さんは仕事が忙しいらしく帰りが遅いそう。お母さんは会社の飲み会に参加することになったらしくて。

詩織が俺の家に来ていた。

「何時までいるの」

「お母さんが帰ってくるまで」

詩織のお母さんは結構突発的に飲み会とかに参加するらしく、参加してから「あ！詩織のご飯作ってない！」ということに気が付くらしい。で、大体そういう時は姉ちゃんに連絡して「ごめん！詩織に夜ご飯食べさせといて貰っていい？」って言う。今回もその例らしい。「悪い晴人、ご飯できるのもうちよいかかる」「いやそれはいいんだけど」

……いや、何も言うまい。詩織のお母さんに文句を言う訳にもいかんし、ラインを見てなかった俺が悪い。

「……取り敢えず部屋来るか？」

片付けといて良かった。

「うん、私も勉強したいし」

「あ、でも先着替えたいからちよい待って貰っていい？」

「りようかい。着替え終わったら呼んで」

~~~~~

適当な部屋着に着替えて、俺の部屋で二人で勉強する。とは言っても俺は自分の勉強机で、詩織は誰か来たとき用の小さなテーブルでだ。CDから流れているのはAAA。所謂作業用BGM。

幼馴染だから、別に一緒にの部屋に居ても特に干渉しない。中学生位からそうだ。各々勝手にやりたいことをやる。話しかけられたら話すし、互いに話すことも無かったら無理して話すことも無い。二人で同じこととして遊ぶこともあれば、隣に居るのに全然別のことしてる時もある。

多分、幼馴染だからそれが許される。

「ねえ、ハル」

「んあ？」

「サボった時、どんな感じだった？」

「……めちやくちや優越感。楽しかった」

思えば、俺が詩織と高見が付き合ってる事を知ってから、詩織が俺の家に来たのは初めてな気がする。もう少し自分の中で感情が渦巻

くかと思っただけど、思った以上にそうでも無かった。

多分、幼馴染だから許されてる。

「いいなー。サボって何してたの？」

「姉ちゃんとお八時間カラオケで歌ってた。おかげで喉カツスカス」

「もうすぐテスト前だったのにサボりとか余裕じゃん。点数勝負しようよ、負けた方罰ゲームで」

「お前それで俺に勝ったことないだろ」

「むー。サボってるハルには勝つからね」

「喋りながら手を動かしてる俺と、むーって言って手が止まってるお前。勝つのはどっちだろうな」

「うわムカつく！絶対勝つから」

しかもちよつと声真似似てるし、って悔しそうに呟く詩織。そりやそうだ、お前のそのむー、っていう唸り癖何回聴いてると思ってるの。「……高見ってどんな奴なの」

気が付いたら聞いていた。自分でも意識してなかった。帰りに、石黒とその話をしていたからかもしれない。

「え？……うーん、優しいかな」

いつの間にか俺の手も止まっていた。

「なんかね、ハルにちよつと似てるかもしれない。ハルもさ、変なところ優しいじゃん」

また言われた。俺が優しいってどういうことだよ。

「私の好きなおかずをしれつと一っだけ残してくれたりとか、別にハルが気を遣う必要のないのに玲音君と私の事に気を遣ってくれたりとか」

あー、確かに詩織とご飯を食べる時は詩織の好きなおかずは何気に譲ってるかもしれない。でもそれ、俺の好物とお前の好物が違うだけだからな。高見のことに關しては別に気を遣ってる訳じゃない。

「私一年の時同じクラスだったんだよね、玲音君と」

「てことは石黒も同じか」

「あ、知ってたんだ。そう、リンちゃんも同じクラスだった。その時からちよつと仲良かったんだけど、二年になってから告白されて、玲音



君ならいいかな、って思ってたオツケーした」

石黒。お前自分と高見が同じクラスだった、ってバラすならついでに詩織とも同じクラスだったこと教えとけよ。全然知らなかったわ。「ちよつと普段は頼りないけどね、優しいよ」

勉強机に向かつてるから詩織の顔は見えないが、きつと楽しそうな顔をしてるんだろう。声色で何となくわかる。

なんというか、なあ。

これは勝てない。勝ち負けじゃないけど。

「勝てんわ」

「え、何？もしかして今回テストヤバい感じ？私勝てちゃう？」

何勘違いしてんだこいつ。例えば授業をサボろうが石黒に勉強を教えてて俺の勉強時間が削られようがお前にゃ負けねえよ。

これ以上詩織に負けたくないんだよ。高見にはどう頑張ったって勝てそうに無いんだから、お前には負けたくないんだ。

「……全教科の総合点数で勝敗決めるからな」

「オツケー。今回私自信あるんだよねー。罰ゲームは？」

「高見に好き！って告白する」

「え？」

「高見に好き！って告白する」

大事なことなので二回言いました。

「……それ、ハルが負けたらどうするの？」

「え、ちゃんと高見に好きです！って言うよ？」

「……バカかな？しかもそれ、私あんまり罰ゲームにならなくない？」

「いやちゃんと罰を遂行したか確認できないとダメだから」

「えー!? 恥っず！別のにしようよー！」

「じゃあ晩飯奢りな」

俺だつて冗談で言ってたよ？もし負けて高見に好きです！って言う羽目になったら嫌だし。幼馴染が彼氏に好きです！って言ってるところを確認するの色々としんどいし。

「晴人！詩織ちゃん！ご飯出来たー！」

下から姉ちゃんの叫び声が聞こえてきた。そっか、そろそろそんな

時間か。

「んじゃ、負けた方晩飯奢りな」

「絶対勝つからね」

負けらんねえ。何か、ここで負けたくねえ。

くくく

「あ、そうだ。お姉ちゃん夏休み期間いつ空いてる？皆で花火しようよ」

飯食ってる時にいきなり詩織が言い出した。あー、そういえば皆で遊びたいって言ってたな。お前が予定組むなら乗るぞ、って言ったんだった。

「花火なー、確かにやりたいね。あたしもう七月はシフト出てるし予定入れちゃってるから、やるとしたら八月かなー。早めに詩織ちゃんが「この日がいい！」って言ってくれたらその日は休みで申請するけど」

「え、マジ?!じゃあ早めに希望日出すね!ハルもその日は空けといてね」

「へいへい」

夏休みの予定がまたひとつ増えた。遊ぶ予定はまあ、多いに越したことは無いんだけどね。

こういうことが出来るのも、ある意味幼馴染の特権なのかもしれない。どうだ、高見。お前の彼女は預かった。返して欲しくば……返して欲しくば……思いつかない。別に預かってても無いしね。

「ごちそうさま」

唯一の男子であることもあり、三人で飯食つてると一番最初に食べ終わるのは決まって俺だ。先に自分の皿を流しに片付けて、一足先に自分の部屋へ戻る。勉強しなきゃだしね。

「勉強?」

「俺等、テスト期間だし」

「私も食べ終わったらそっち行くー」

「そうだった。じゃああたしは下でドラクエでもやってるわ。お母さんから連絡来たらまた呼ぶ」

「ありがとね、お姉ちゃん」

こういう時に家族がゲームやってると気になって見に行きたくなっちゃうんだよねー。姉ちゃんのプレイング上手くないから見るとイライラするんだけども。

一足先に自分の部屋に戻り、やりかけていた問題集とノートを開く。さて、始めるか……と、思ったところでスマホがなった。電話だ。

「もしもし」

『あ、もしもし？凜花です』

相手は石黒だった。

『ラインで文字打つのめんどくさいから電話しました』

「気持ち解らんでもない」

『だよ。めんどくさいよねー。明日、どうしよっか』

「どうするって、学校嫌なんだから」

となると適当なファーストフード店か安いファミレス、カラオケ辺りが安牌だと思うんだが。あ、カラオケだと多分勉強せずに歌い散らかすからダメだわ。俺が。

『うん、やだ。制服着ないといけないし』

我が学校は登校日じゃなくても学校に来る時は絶対に制服を着なくてはいけない。いや、どこも同じかもしれないけどね。

「んじやあ適当にサイズとかでいいんじやねえの？」

「さて私も勉強するぞー！……って、ハル電話中？ごめん」

『今詩織ちゃんの声が聞こえた気がした』

「あー、悪い。雑音が入った」

「ちよつとハル、私の声が雑音ってどういうことよ」

『やっぱ詩織ちゃんの声だ！やっほー！』

いや電話越しに叫ばないでくれ石黒。耳が痛いわ。

通話環境をハンズフリーに切り替える。

「誰と電話してるの？」

「石黒」

『やつほー詩織ちゃん！浮気？』

「そんなんじゃないよ！」

石黒いきなりとんでもない爆弾落としやがったな。それ俺も返答に困るぞ。

「今日こいつの飯が無かったから俺ん家で食べただけ。取り敢えず明日どうすんだよ」

『え、じゃあ明日私も神崎君の家行きたい』

「なんでだよ」

『楽しそうだから』

こいつ勉強のし過ぎで頭おかしくなったんじゃないのか。

「ハル明日遊ぶの？」

「ちげーよ、今回石黒に勉強教えてるんだよ」

「むー、余裕じゃん。絶対夜ご飯奢らせてやる」

「ばーか、ハンデだよ」

『え、なにになに!? 修羅場!』

「ちげーよ!!……ああもう收拾がつかん！一回切るぞ！」

石黒はアホだということが解った。それも相当なレベルの。

「……勉強すつか」

「そだね」

そしてこれが賢者タイムである。

## 勝てない

詩織のお母さんは十時くらいまで飲んでいたらしく、結局詩織が家に帰ったのは十時過ぎだった。酔っ払いながら我が家まで来て姉ちゃんと俺に「あんがとね、雨ちゃん、ハル君」と言ってお土産になんかよくわからんたらこを渡して帰って行った。あの人酒そんなに強くないんだからさ、あんま飲むなよ。

そして本日土曜日。今日も今日とて石黒と勉強である。

あの後ちゃんとラインして、勉強場所はサイズでやることになった。流星に家上げるのはなんか違う気がする。

という訳で、外行き用のシャツに普通のパンツという当たり障りない格好で駅まで迎えに行く。「定期圏内だしそっちまで行くよー」という石黒の配慮で学校の近くのサイズになったのだ。ぶっちゃけ助かる。

「暑っつ」

早めに駅に着いてしまったので日陰で涼みつつ、自販機でジュースを買う。ペットボトルの蓋を開けた所でスマホが鳴った。取り敢えず一口飲んでから確認することにする。

『あと四分で着くよ（・・・ω・・・）』

多分一つ前の駅に着いたんだろうな。今の時間は十時五十二分。集合予定が十一時だったからいい感じだ。

「あいよ」、とだけ返信し、入道雲がもくもくしている青空をぼんやりと眺めてみた。ペットボトルをなんとなく掲げてみる。

うーん、夏だ。このクソ暑い天気も。腹立つくらいの陽射しも。もう全部ひつくるめて夏。この夏の間にもてるぞー！とか言ってたヤツ誰だっけ。俺だったわ。

踏切の音が聞こえる。電車そろそろ来たのかな。夏に踏切の音を聞くと何故か思い出すのは千と千尋の神隠し。あの水上列車のシーン好きなんだよな。ワンピースの海列車も好きだ。

電車が駅に止まり、改札から数人の人が降りてくる。ここの駅は通学時間じゃなかったらめっちゃくちや空いてる。

「お待たせ！早いね、神崎君」

「いや待ってねえから大丈夫」

石黒は首元がぼっくり開いたダボダボのシャツと、その中にタンクトップ。ホットパンツにサンダルというまあなんとも夏らしく、まあなんとも石黒らしい（そんなに石黒のこと知らないけど）格好をしていた。肩からは小さめのスポーツバッグのようなものを提げている。その中に勉強道具を詰めているのだろう。

「じゃあ、行こっか！宜しくね、センサー」

だから俺はセンサーじゃないってのに。

〃〃〃

安さと美味さが確立された最強のチェーン店ファミレス、サイゼリオン。通称サイゼ。取り敢えず俺も石黒も昼ご飯を食べていないので昼ご飯とドリンクバーを注文。腹が減っては何とやら、だ。

「サイゼの間違い探して異様に難しいよね」

「それな。いつもチャレンジするけど二つくらい見つかんねえ」

子ども向けの絵柄なのに難易度が凶悪過ぎる。絶対これテストプレイしてないだろうって文句言いたくなるレベル。

「ドリンクバー、何か入れてこようか？」

「いいよ、自分で入れる」

流石に女パシらせるのもなあ。なんとなく嫌だし自分で行きさ。

「ちえー、お茶とコーラ混ぜてやろうと思ったのに」

「小学生かよ」

自分で行くって言ってよかった。ヤバいもん飲まされるところだったぞマジで。小学生の頃はドリンクバーを意味もなく混ぜまくって遊んでたなあ……意外と三つ位なら混ぜても美味しいんだよアレ。お茶とか入ったら不味いけど。

ドリンクバーでジュースを入れて帰ってくると、間もなく料理も運ばれてきた。俺はライスとチキングリル。石黒はドリアとパスタとポテト。え、そんなに食べるの？

「それ全部食べれるのかよ」

「え？余裕」

うそやん。俺よりたべるやん。

とうかさそんだけ食べてその体型はなんなの。その分動いてるのか。理解した。

「高校上がってから食べる量は増えたよねー。食べないと動けないし」

「練習ハードなんだっけ」

「うん。まあ今日は体より頭を使うんだけどねー。帰ったら筋トレするけど」

男の俺が筋トレしてなくて女の石黒が筋トレしてる……え、つら。俺腕立て伏せとか五回くらいしか出来ないんだけど。

頭の中で自由の翼が流れる。ミカサも腹筋割れてるんだっけ。石黒なら立体機動装置も使いこなせそうな気がする。

パスタをフォークでくるくる巻いて美味しそうに頬張る。いつも印象的な白い歯にたらこのピンクが少しついてた。うわー、いい食べっぷり。

「おいひい」

「飲み込んでから喋れ」

なんとというか、無邪気というかこいつ子どもみたいだな。……高校生はまだ子どもか。俺もまだまだ子どもだし。

~~~~~

二時間くらいみっちり勉強して、少し休憩を入れることにした。俺もなんだかんだで今回の範囲はかなり頭に入ってきてるし人に勉強を教えるのは割といいのかもしれない。

「あー……くっそお、絶対山月記とか大人になっても使うことないじゃん!?李徴が虎になった理由とか私が知ってるわけないじゃん!」

現代文に悩まされている石黒は「もうやだ、虎が嫌い。阪神ファン

やめる」と訳の分からないことを言いながら必死に李徴の心境を紐解いていた。うん、確かに山月記は難しい。言葉も少し昔チックだな。

「神崎君、先生になればいいのに」

「は？なんで」

「授業より教え方解りやすい」

別に普通に教えてるだけなんだけどな。

「学校の授業は皆に向けての授業だからな。一対一なら教える人に合った教え方が出来るからじゃないのか？」

「そういうものもあるのかな。でも私神崎君の教え方好きだよ」

「どーも。大学生になったら家庭教師のバイトでもすっかな」

「いいじゃん、私依頼する」

「意味わかんねー」

大学生なあ。もう来年には受験勉強やってるとか考えられない。というか考えたくない。俺特に将来の夢とか無いし。

「石黒はサッカー選手目指してるのか？」

「え？うーん、なれるならなりたいよね。日本代表になりたい」

数年前に女子サッカーが世界一になったことはスポーツに疎い俺でも知ってる。キャプテンの人が国民栄誉賞みたいの貰ってなかったっけか。やっぱ憧れなんだな。

「ホントはね、私橘行きたかったんだ」

「橘？」

「橘女子高校。サッカー部超強い。でもサッカー推薦取れなくてさ。私頭悪いからどんなに頑張っても橘は無理だつて言われて」

あの時ほど勉強しとけば良かったー！って思ったことは無かったなあ。そう呟く石黒の顔は今まで見たこともないような顔をしていた。

「まあ別に今も強いチームだからいいんだけどね。全国出場が狙えるか、って言われたら難しいからさ」

中々地区大会じゃ目に留めてくれる人いないからねー、と呟く。

「高校生になってまだプロを目指してるような子、そう居ないけどね。」



特に地区大会ベスト8くらいの学校じゃ」

「現実が見えてくる時期だもんな」

しまった。今のは失言だったかな。

それでも日本代表になりたい、と思ってサッカーやってる石黒はやっぱり凄いなと思う。まあ、俺は石黒がどれ程サッカーが上手いのか知らないからあまり適当なことは言えないんだけども、それでもやっぱり凄いと思う。

「だから大学に行ってもサッカーは続けるよ。プロになれなくてもサッカーに関わる仕事がしたいかなー」

ちゃんと、やりたいこととか、将来の夢を持ってるのってすげえと思う。俺なんか小学生の頃の将来の夢すら覚えていないのに。

「神崎君は大人になったらやりたいこととかないの？」

「俺？あー……休みの日をちゃんと取って、家でダラダラできる会社員になりたいかな」

「なにそれ、夢が無いー！」

母ちゃんや父ちゃんみたいに、休みも取らずずっと何処かで働いてるような人にはなりたくない。まあ、あの二人は社畜というか「仕事が好きだから」「働くのが好きだから」とかいうよく解らない人種なんだけど。もし結婚して子供が出来てある程度育った後でも、子供を放つたらかしのしないような人になりたいな。

正直、俺も姉ちゃんもたまにすっげえ寂しくなるんだよな。中学生の頃は詩織のお母さんのご飯をよく食べさせて貰ってた。あの時は家に「両親」がいる詩織が羨ましくて。

今でこそ慣れたけど、あの時が一番詩織と「きょうだい」だったと思う。姉ちゃんもまだ大学生で、料理を練習し始めて。姉ちゃんが詩織のお母さんに料理を教えて貰っている間に俺と詩織は二人でゲーミングしたり、喋ったり。

「……神崎君、どしたの？大丈夫？」

「んあ？……あ、悪い」

つい考えてしまった。

「ジューズ入れてくるね」

「おう」

昨日のことも考えたらまあ、今もやっぱり詩織とは「きょうだい」のような気はする。けどなんかあいつに劣等感？を感じてるのは常にあいつが俺の持ってないものを持ってたからで。中学生の時は「両親」が羨ましくて、今は「恋人持ち」が羨ましい？……でも俺、そんなにカップルに憧れは無かったけどな。

「解んねー」

自分の気持ちがいマイチ解らん。誰か心を数値化してくれ。

コーラを一気飲みする。ちよつとだけ心がスッキリした気がした。

「ただいまー……って今飲み切ったの？私が行く前だったら一緒になんか入ってきてあげたのに」

「混ぜるんだろ」

「バレてたかー」

石黒がメロンソーダを入れて帰ってきた。こいつに渡したらどんなゲテモノが注がれるか解ったもんじゃない。

「続き、やるか？」

「お願いします」

机に再度ノートや教科書を広げる。もう少し現代文を詰めたら、英語も少しやる予定だ。

石黒がペンを握ったその時に。

「凜花？」

突如、石黒が声を掛けられた。なんか聞いたことあるような、無いような、そんな声。俺と石黒は同時に廊下の方に振り向く。

180センチに迫るのでは、寧ろ超えているのでは？という高身長に、短く切りそろえた黒髪。服装はシンプルだが、体格の良さが見て取れる。そして爽やか系イケメン！みたいな顔。なんかのモデルとかに似そうな男がそこに立っていた。

「あつ」

俺は思わず声を出してしまった。

「玲音じゃん。何してんの？」

「いや、俺が聞きたいんだけど。凜花がファミレスで勉強とか何事」

高見玲音。詩織の彼氏だった。

「失礼なー！今回のテスト赤点取ったら次の練習試合レギュラー外されるからさ」

「あー、女サカ何人かそんなこと言ってたかも。それで勉強か」

なんかふにやふにやしてる、と石黒が言ってた理由が解るかもしれない。声色が元々柔らかいのもあるが、なんというか、体格と声の大きさが合っていない。

「……えっと、詩織の幼馴染の……神崎君、だっけ」

「どーも。詩織の彼氏の高見君つすね」

うわー、なんかムカつく。いや別になんというか、うん。モテるやつは敵じゃー！みたいな。

「呼び捨てでいいよ。凜花に勉強教えてるの？」

「俺も呼び捨てでいい。そういうことです」

何故か知らんが微妙に敬語を使ってしまったのはなんなんだろう。

「凜花、お前あんま他の人に迷惑かけんなよ？」

「解つてますうー！玲音こそ次のテスト大丈夫なの？」

「やばい。山月記が意味不明過ぎる」

解る。山月記難しいよな。

「てか高見、お前はここで何してんの」

「えっと……息抜き。勉強し過ぎで疲れたからおやつ食べようと思つて」

なんで金かかる上にわざわざ歩かなきゃならんここまでおやつ食べに来るんだよ！家でポテチ食えよ!!

解つた、こいつもちよつと変わってる奴だ。

「神崎、ちよつといい？」

「え、いきなり何」

「話がある」

なんかいきなりお呼び出し食らったんだけど。え、何？怖い。心当たりしかない。十中八九詩織のことだろう？だってちゃんと喋るの初めてだもん。共通する話題それしか無いもん。

「あー……悪い、石黒。先始めといってくれ。すぐ戻る」

「はい。気を付けてー」

何故か俺は高見に着いて行ってこいつの席に相席することになった。何で？怖い。てかこいつマジで一人でサイズ来てたのかよ。

「なんだよ、話って」

一応、ビビってませんアピールをする為にちよつとぶつきらぼうに言ってみる。内心ビクビクだ。蘇るのは最近見た悪夢。

「……あのさ、神崎」

何？今からlonelyですか？負けの方はボツシユートですか？それとも今からボツコボコにされるんですか？そこに詩織が来てキスからおっぱじめるんですか？

「……詩織ちゃんって、靴のサイズ何センチ？」

「知るかよ?!?!」

何で?!?なんでそんなこと聞くの?!?何?!?足フェチなの?!?怖い!この人怖い!え、大丈夫?詩織足とか舐められてない?!?足の裏くすぐったいよお……とかそういうニツチなことしてるの?!?解らない!俺既にこいつが解らない!

「いや、あの、ごめん。色々と過程が飛んだ」

「いやどの過程を経たらその結果に辿り着くのか解らない」  
帰っていいですか？

「えつと、ほら。もうすぐ夏祭りシーズンじゃん。綺麗な柄の鼻緒がついた下駄をプレゼントしようって思ったんだけど、下駄ってたでさえ鼻緒ズレを起こしやすいから、サイズの合ったやつをプレゼントしたいなって」

「あ、あー。成程」

ちゃんと過程を聞いたらまあ、納得出来る話だった。あー良かった。俺の幼馴染は彼氏に足を舐められて興奮する変態になったのかと思っただわ。

こうやってしれつと夏祭りデートに誘える訳か。なんというか、上

手いしカツコイイな。高校生のお財布じゃ浴衣は買えないもんな。

「悪い、俺も流石に詩織の足のサイズは知らん。23.5位だとは思  
うけど」

「というか初対面で話す内容それかよ。やっぱこいつ変わってるら  
しいわ。」

「いや、俺もごめん。いきなりこんな話しちやって」

全くだよ。

「あ、ライン教えて貰っていい?」

「え、別にいいけど何で」

「えっと……俺より神崎の方が詩織ちゃんのこと解ってるだろ?多分  
詩織ちゃん、俺にたまに気を遣ってるんだよ」

「……それで?」

「俺じゃ詩織ちゃんの全部を支えられないから、詩織ちゃんと一緒に  
支えて欲しい」

……何なのこいつ。

すつげえイケメンで。変わってる奴で。

「なんというか、勝てない。何なのこいつ。詩織が付き合ってる理  
由、ちよつと解った。」

「嫌味が無いんだ、こいつ。純粋に詩織のことが好きで、多分めっちゃ  
くちや好きで。でも、まだ付き合いが浅いからあいつのことよく知ら  
なくて。それを見栄はらずに言っつて。あいつに喜んでもらおう為に、俺  
に頭下げる。」

勝てない。こんなイケメンになりたかったなあ。

「ほら、俺のQRコード」

「ありがとう」

「詩織泣かしたらぶん殴る。俺の姉ちゃんも一緒にお前をぶん殴る」

「肝に銘じるよ」

俺の「きょうだい」みたいな幼馴染だからな。泣かしたらボッコボ  
コにする。

でもその前に、「もし高見が嫌な奴なら良かったのに」とか思ってた  
過去の自分をぶん殴る。

……にしても俺は詩織の親父かよ。なんかそんな感じのこと言っ  
ちやっただじゃねえか。

怖い。 1

テスト初日が終わった。

手応えは割とある。なんだかんだで人に教えたら自分も覚えられる作戦(?)は上手くいったらしい。

今日のテストの手応え次第では、石黒に勉強を教える日をもう少し増やすか、という話をしていたのだが、ラインで手応えはどうだったか聞くと「今回はいける! 久々にいける気がする!」という自信満々な返信が返ってきたので、残りの日程は俺自身の勉強時間に充てることにした。

……よくよく考えたらこのテスト期間色々あったな。石黒と勉強して。詩織が彼氏出来てから初めて家に来て。石黒と勉強して。高見と初エンカウントして。……石黒と勉強して。姉ちゃんが酔っ払って下着でリビングで寝て。……石黒と勉強して。

「石黒と勉強しかしてねえな」

色々あった、と言いつつイベントの半分が石黒との勉強だった。わろた。

あ、そういうえば詩織と点数勝負するんだったわ。今日の手応え、ラインで聞いてみるか。「今日手応えあった?」という石黒にも送った文章を送信する。

現在はお昼の二時過ぎ。姉ちゃんは仕事なので、リビングで勉強している。動画サイトで作業用のアイリッschuss音楽を掛けながら。もうやだ物理嫌い。こんなの大人になっても使うことないじゃん!?! ……と言ってた石黒の気持ちも少しだけ解る。

ラインが鳴った。詩織かな。

『アンタ凜花に勉強教えてたの?』

織田だった。意外すぎてびっくり。え、てか織田も石黒のこと知ってたの? あいつの交友関係広すぎじゃない?

「そうだけど急にどうした」

『いや、アタシも頼めばよかったと思った』

まあ大体見た目通りなんだが織田も勉強は出来ない。二人を同時

に教えるとか俺には無理だけどね。

『凛花のティックトック見たけどアンタら仲良かったんだね。意外』  
「言うほど仲良い訳でもないぞ」

多分仲の良さで言ったらお前の方が仲良い気がする。……いや、よく考えたら俺別に織田と仲良く無かったわ。なんかこうしてたまにラインするけど。

そういえばこいつ、ヒプマイ好きなのがコバにバレてブチ切れたな。……乱数みたいなチビって、リアルでも需要あるのかな？

「なあ、織田。怒らないで聞いて欲しいんだけど」

『何』

「ヒプマイのき、シブヤの乱数って好き？」

『マジで忘れて。お願いだから』

オタバレはどうしてもしたくなかったらしい。なんか織田がマジで姉ちゃんに似てる気がしてきた。

「いや、別に誰かにバラすとかないから」

既読は付いた。けど返信が来ない。あー、これは怒らせたかなあ。あのビンタ痛そうだったよなあ……喰らいたくねえ。

『私はあるまり好きじゃない。友達には好きな子いるけど』

あ、返ってきた。良かった……！

……ふと思ったんだが。織田の奴が俺にしばしばラインを送ってくる理由ってもしかして、

「なあ、織田。俺にちまちまライン送ってくるのって、もしかして学校内でオタ話出来る知り合い探ししてるから？」

こういうことなのではなからうか。コバはエロゲ趣味がメインだから女性向けコンテンツはほぼ無知だし（よくよく考えたらなんでもいつヒプマイ知ってたんだ）、須田も履修してるジャンルが割と萌え系アニメだから。俺はなんというか……姉ちゃんの影響もあって割と雑食だし？

『あー、うん笑 童貞だし上手いこと勘違いさせてオタバレしようとは思ってた』

こいつクソだわ。この辺もちよつと姉ちゃんに似てる。いや別に



いいんだけどさ。

「乱数みたいな奴がリアルにいたらモテると思う?」

『私は絶対嫌だけど騙される女は居ると思う』

良かったな、須田。チビでも望みあるぞ。

織田はこの感じだと結構なオタクなのかな? まあ、麻天狼の缶バッジならパツと見オタク向けコンテンツには見えないから大丈夫っしょ、って思ってたんだらうけど。

……ふと気になった。

「お前誰推しなの」

『一二三。言ったら殺すしオタバレさせたら殺すから』

とんでもない奴と契約を結んだ気がする。

にしても、へえ……織田はホストが好みか。シャンパンタワーを浴びる系女子か。……自分でも何考えてんのか解らなくなってきた。これも全部物理のせいだ。おのれ物理。

「織田ってさ、物理得意?」

『アタシに勉強のこと聞いている時点でダメだつて解んない?』

全くもつてその通りでした。

はー。物理は平均割りそうだよなあ。石黒みたいに赤点ギリギリ、とかそういうのは無いと思うけど。

スマホが鳴った。電話か?

普段詩織や石黒はラインの通話機能を使って電話をかけてくるのだが、これは電話番号で掛けてきてる音だ。え、誰?

画面を見ると詩織のお母さんだった。因みに名前は理恵さんという。

「もしもし、理恵さん?」

『あ、もしもし? ごめんね勉強中に。雨ちゃん仕事?』

「仕事。姉ちゃんに伝言?」

『いや、それならいいんだけどね。ハル君今家?』

「家だけど」

話が見えない。

『詩織さあ、そっちに行つてない? 今日「テスト終わったら食堂でご飯

食べてすぐ帰ってくる」って言ってたんだけど、まだ帰ってなくて  
「んあ?……俺の家には来てない」

どういうことだ……? 詩織のことを考えるとあいつは親に心配は  
かけさせないように理恵さんに「この時間に帰る」って言ったらちや  
んとその時間に帰る。何かあつて遅れる、とかだったらちやんと「こ  
ういう事情で遅れる」って連絡を入れるはずだ。

「なんか連絡とか来てねえの?」

『来てないのよ。一瞬最近できたらしい彼氏君といえるのかなーとも  
思っただけどさ、そういう時あの子ちゃんと連絡入れるじゃん?』

「だよな。詩織にラインはした?」

『した。既読付かない』

なんか嫌な予感がしないでもない。

「俺彼氏の連絡先知ってるし色々聞いてみるわ」

『ごめんね、ハル君。私ももう一回詩織に電話してみる』

「あいよ。また連絡しまーす」

電話を切った。なんか心の中がモヤモヤする。最近感じてたモヤ  
モヤとはちよつと違う気がする。

取り敢えず高見にラインしてみるか? 「お前、今詩織と居る?」つ  
て聞くのなんか嫌なんだけどもなあ……ラインするのめんどくさい  
し電話しようかな。

高見のプロフィールを開き、無料通話ボタンを押そうとする。

その瞬間、電話が鳴った。忙しいな、俺のスマホよ。相手誰だ……

コバ?

「もしもし?」

『あ、もしもし!?なあ、日高つてさ、大学生位の男子と仲良かったりす  
る!』

「はあ?」

なんかコバのテンションが高い。しかも聞いていることの意味がわ  
からん。どういうことだよ。

……いや、待て。嫌な予感がしないでもなかったのはもしかして

……

『今俺テス勉の休憩に散歩してただけどさ、なんかあんま見たことない車が走ってて！ちらつと後部座席見えたんだけど、日高みたいなサイドテール見えたんだよ！しかもうちの制服着てんの！あいつそんな友達居たか!?俺なんか嫌な予感が――』

電話を切った。

おい、まじかよ？

確かに詩織は顔はかなり良いと思う。ちよつと見た目も純朴そうで、腕つぶしも弱そうだ。

ぶつちやけ……襲ってレイプするには充分な材料は揃ってる気がする。

嫌な予感がする。悪い方向にばっか考えてしまう。

取り敢えずそのまま高見に電話だ。数回のコール音が嫌に長く感じる。

『もしもし、神崎?』

『おい高見!今お前何処にいる』

『え、学校』

『詩織は!?』

『今日は一緒じゃないけど』

最悪だ。コバが嘘つくとも思えないし、うちの制服着ててサイドテールの女の子はそうそういない。そして帰ってない。理恵さんに連絡も出来てない。ほぼ確実だ。

「っああ!クソかよマジで!!」

『ちよつと待って、神崎話が見えない』

『多分!いやほぼ確実!詩織が下衆男に拉致られたんだよ!!』

『……え?』

「俺の友達が知らない野郎共と車乗ってんの見たんだよ!まだどうか解らんけど嫌な予感しかしねえ!お前も探してくれ!彼氏だろ!」

『詩織ちゃんが!』

「だからそう言ってるんだろ!」

電話が切れた。切れる直前に椅子と机が思い切り倒れたような電話越しに聞こえた気がした。

やばい。はつきり言って探すにしてもどうすりゃいいか解らない。理恵さんに言うべきか？いやもしかしたら違う可能性もあるし下手に心配させるのも変な話だ。

どうする？どうする？おい、神崎晴人！こういう時に限ってテンパってんなよ！高見に八つ当たりしてどうする！？

こういう時、こういう時は……

「助けを求めるなら……！」

スマホの機能、緊急通報。登録している電話番号か、警察や消防にしかかけられない本当に「緊急」の時にしか使つてはいけない電話。しかし、これで電話を掛けると相手がマナーモードでも音が鳴る。俺は唯一登録している電話番号を緊急通報した。

『もしもし!?緊急通報して何!?なんかあったの!?』

「もしもし姉ちゃん!? 工作中に悪い! 多分だけど詩織が大学生位の男子に拉致られた!!」

『はあ!? それマジ!?』

「ほぼ確実!」

『解った、早退申告してあたしも探す! なんかあったら連絡して来い! 解った!』

「ごめん、サンキュ!!」

これで拉致とかレイプとかじゃなかったら、コバのやつマジでぶん殴る。

もう一回コバに電話。

『もしもし晴人!? 俺このままだとやべえ気がするよ、もし日高の奴が無理やり……』

「言うなバカ! 車、どの道をどっちに走っていった!？」

『うえっ? ああ、えっと、俺ん家来たことあるよな? あそこの一本道! 一方通行だから進行方向に向かって行つてた』

コバの家の一通道……あそこか! なんとなく解った。

「サンキュ! なんかあったら連絡してくれ、俺もそっちの方向かう!」  
すぐに電話を切る。でもあの一通道、その先が結構色んな方向に行けたはずだ。どうするよ……!？」

一回思考を整理だ。コバが見たのは詩織だと断定して。なんで詩織を拉致った？どう考えてもレイプやら輪姦やらが目的だろう。大学生位、つてコバが言つてたし誘拐して身代金、とかそういうのは無いと思う。だったら車で何処に行く？カーセックスじゃないんだろ、制服着てたつて言つてたし。だったらどつか人目に付かない、声を出してもバレない所……？

ラブホやカラオケはダメだ。人がいるから普通に詩織の様子がおかしかつたら誰か通報するだろうし、叫んでしまえば勝ちだ。となると廃墟とかそういうのか？そんなのあるのか？ダメだ、俺そういう「隠れ場所」みたいな場所が全っ然解らん！誰かそういうの知つてそうなやつ……!?!

いたっ！

『もしもし？さっきまでラインしてたじゃん、急に何？』

「織田！ツタヤの近くに一方通行の道あるだろ!?!その辺で不良とかの溜まり場になりやすい所知らねえか!?!人目につかない！声も通らないような場所！」

ビッチヤンキーの織田なら何処か知ってるかもしれない。

『はあ？いきなりどうしたの』

「いいから早く教えろよ!!」

『ああうつせえバカ!……ちようどツタヤのある道まっすぐ進んで、小さい路地一個曲がったらボロい神社がある。人来ないし奥まってるから声も通らないから青姦スポットつて聞いたことある』

「そこか！悪い！」

電話を切る。取り敢えずスマホは何時でも音が鳴るようにしておく、自転車の鍵を乱暴に取つて無理矢理靴を履く。マジふざけんなよ、昼間つから何されてやがんだアイツ……!?!

「マジで頼むから……ホントやめてくれよ……!?!」

心臓が異様な速さで脈動していた。

~~~~~

死ぬ程怖い。

いきなり後ろから口塞がれて、そのまま腕と足掴まれて、パニックつても出来ないまんま車に乗せられた。車の中で手を縛られて口の中に何か詰められて、横にいる男の人にナイフを見せられた。

え？え？何これ？

涙も出ない。喉がひくついている。空気が漏れそうだけど、口に詰められたものが邪魔で呼吸が出来ない。涎が止まらない。

怖い。

怖い。

「ドコでやるっ？」

「取り敢えず念の為ブラブラ回って神社だろ？」

「おっけい」

「おい、変なことすんなよ？別に俺らお前に傷付けようとは思ってねえんだ。キズものにしようとは思ってるけどな」

下品な声、笑い声。誰でもよかつたんだろうか？なんで私なの？

あー、これ私今からレイプされるんだ。無理矢理犯されて、痛いこといっぱいされるんだ。

頭がそう理解出来た瞬間、涙がバカみたいに流れてきた。手の震えが止まらない。暴れて逃げたいけどそんなことしたらナイフに刺されちゃう。

どうしよう。どうしよう？どうしよう！

怖くて仕方が無い。呑気にダンスミュージックをかけてドライブしているこの男達が怖い。怖い。怖い。

「そろそろ行くか、神社」

神社ってどこ？助けを求めたいけど誰にも求められない。

くくく

私が転がされたのは人気の全く無い、古くさくて見たことも来たことも無いような神社だった。境内の裏にはマットレスが敷いてある。あー、私以外にもここでやった人、居るんだね。レイプか合意は、知

らないけど。

「おら、そこに座れ！」

お腹を蹴られた。胃の中がゴロゴロする。髪紐が解けた。痛い。暑い。体が重い。

涙と汗が止まらない。暑くて仕方がない。怖い。怖いよ。

身体に力が入らない。うつ伏せに倒れてしまった。聴覚だけは何故かとても鋭敏。「誰からやる?」「取り敢えず腕がそうぜ」そんなゲスみたいな声がとても鮮明に聞こえる。

聴覚だけが鋭敏だから。ごろん、って仰向けにされた時も、男の顔はいまいち見えていなかったし。怖くて、怖くて。

ぼごっ、とかいう鈍い音が聞こえて。

「お前ら全員ぶっ殺してやるあ!!クソア、アあ!?!殺すぞボゲエアっ!!」

聴覚だけは異様に鮮明で。お兄ちゃんみたいで弟みたいな幼馴染の、聞いたこともないような雄叫びが聞こえた。

## 怖い。2

自分の喉が裂けるかと思った。

足の震えが止まらない。でもコイツらはマジで許せねえ。

全員詩織の方を向いてて良かった。不意打ちで一人の頭に鉄拳ぶち込めたんだから。手がジンジンする。人を殴るって、こんなに痛いのかよ。

俺が殴った一人は呻いたまんま、残りの三人が俺の方をじろりと睨む。足が竦む。さっき何叫んだかも覚えていない。息が荒い。心臓が死ぬ程ドクドクしている。

「なんだよおめえは」

「いきなり殴って叫んでんじゃねえよ!?!」

俺よりよっぽど凄むのに箔がついてやがる。普段の俺なら小便漏らしてるレベルに怖い。

「俺の女にてえ出すんじゃねえよ」

自分の声がさつきと比べて圧倒的に弱々しいことが自分でもわかる。不意打ちで一人沈めたけどあと三人。絶対無理だ。しかもノリで言っちゃったけど、俺の女でもなんでもない。

はつきり言おう。俺は喧嘩が超絶弱い。小学生の頃に詩織と殴り合いの喧嘩して勝てた試しが一度もない。そもそも人を殴り慣れていない。

俺が例えばボクシングでもやってたら。素人のパンチには当たらず、無駄のないジャブでこいつらをボッコボコに出来ただろう。史上最強の弟子だったら。それはそれはもう沢山の武術でボッコボコに出来ただろう。

だが現実是非情なのである。俺は喧嘩慣れしてないガキなのだ。けど。だけど。

詩織泣かす奴は絶対ぶっ飛ばす。

「死ねクソヤロオアアア!」

思いつきり拳を振り抜いた。空を切る。じゃあ逆手で腕を振り回した。空を切る。無理矢理拳を当てに行く。空を切る。



「暴れんなー」

後ろからすつげえ衝撃。背骨が折れたんじゃないやねえの、ってレベルの痛みと同時に、うでが満足に動かせない。というか動けない。羽交い締めにしたんだ、って気付いた頃には鳩尾に拳叩き込まれてた。

胃の中掻き混ぜられる感覚。全身の力が抜けるのに、体が重たくて異様に感覚が鋭い。全身から「痛いー」っていう信号が送られてくる。崩れ落ちたいけど、羽交い締めになされててそれも許されない。

「弱っ」

「何こいつーイキリかよ」

もう一発殴られた。やばい。ゲロ吐きそう。目の前がクラクラする。反転してる。痛いです。

ぼんやりした瞳に、すつげえ怖そうな顔してる詩織が見えた。よかったー、服着てる。ごめん、助けに来たけどめっちゃやカツコ悪いわ。怖かったよな。口になんか詰め物までされてさ。叫べないし助けも求められねえよな、それじゃ。俺を応援も出来ねえよな。俺がプリキュアなら応援パワーで勝てたかもしれねえのに。まあプリキュアじゃないけど

いきなり映った視界が空に書き換えられた。一瞬遅れて首と顎に激痛が走る。アツパーカットかな。痛すぎてなんも考えられねえ。頭がフラフラするしゲロは吐きそうだし。意識飛びそうだし。

あー、これ口の中切れてるわ。めっちゃ血の味する。デジャヴ。夢の中でもこんなこと考えてた気がする。ある意味あれは正夢かー。

また顔面を殴られた。これ以上不細工になったらどうしてくれるだよ。息が出来ない。

「……しね、ばーか」

もう反撃するには悪口言うしか無いんだけど。俺一人じゃどうにもならんわな。ミスった。せめて警察に電話してから来るべきだった。

しばらく二人にボコられ続ける。痛いとかもう感じない。千から七を引きつけてるから……とかではなく、多分体がもう痛みを受け付けてない。ずっと羽交い締めだから、一番きついのは倒れたいのに倒

れられないこと。

でも、絶対意識だけは保っていた。

多分、俺が気絶したら「よっしやー邪魔は消えたー」って感じでいよいよもって詩織が脱がされる、輪姦される。それだけは絶対に許さねえ。だから死んでも意識は飛ばさない。ずっと恨み言吐いて目エ開け続けてやる。

「こいつサンドバッグのクセにトバねえ！」

「うぜえんだ……よっ！」

「いつ……!?っフウー！……ゲス野郎が、しね」

喧嘩つてのは再起不能にした方の勝ちだ。何回ダウンを取ったら勝ち、みたいなルールは無い。テンカウントのされてても、後で起き上がったら負けじゃないんだよなあ。

俺が不意打ちした野郎が起き上がりやがった。クソが、気絶してろよな。……俺の筋力じゃ無理か。ここからは三人にボコられるのか。痛いなあ……。失敗した。警察を呼んでから来るべきだった。

起き上がりやがった野郎は何故か俺の方ではなく……俺の後ろを見ていた。

「……!?おい、カズー後ろ——」

「んあ？……おっ！……!?」

ふと、羽交い締めが解けた。俺はそのままその場に崩れ落ちる。

「詩織ちゃん、無事なんだろうな……！無事じゃなかったら……お前から全員殺す……！」

ファミレスで聞いた声と同じ。だけど雰囲気は圧倒的に違いすぎる。でも解る。誰が来たかはすぐ解る。……悪いなー、俺もう満身創痍だから立てるかもわかんないぞー？

正真正銘、詩織の彼氏。高見玲音がそこにいた。

「んだよ!?このアマ股緩すぎじゃね!?二人とやってんのかよ!?!」

「おい、俺の幼馴染をアバズレ呼ばわりすんな……お前とはちげえんだよー！死ねー！」

めちやくちや気に障ること言われたから無理矢理立って、野郎の股間を思い切り殴り付ける。ボロボロだけど、急に来たイケメン君に皆

気を取られているから股間潰しは綺麗に決まった。二度とセックス出来ないようにしてやろうか。

「クソア！・てめえはまたサンドバッグなってるや！」

頭を踏みつけられる。地面に思い切りぶつけられ、鼻に激痛が走る。

「お前なんなんだよ！死ねよ！」

「うっせえ！女拉致って楽しいんかポケット！」

聴覚だけは鮮明だ。高見がすげえ叫びながら殴り合いしてるのは解る。あー、くっそ。勝てねえわ。多分俺より喧嘩強いだろうしな、あいつ。

けど四人もいるんだ、俺もあいつもボッコボコにされんの解ってる。だから俺も必死に抵抗するぞ。……拳で。

「だあアアア！」

踏みつけられた足を両手でしっかり握って、無理矢理頭からどかす。そのままフラフラになりながら立って、足を思い切り引く。

「うおっ!？」

そしたら当たり前だけどこける。マウントを取る。さっきまでのお返しだクソ野郎。

「ああっ！うるあっ！でい！っんう！」

ぼごっ、ぼごっ、とずつと顔を殴り続ける。おら、口の中切れよ！血の味を味わえよ！俺は何発殴られたっけ？五十発位殴ってやる。

「調子乗んなよ陰キャア！」

いきなり後ろから服掴まれて引きずり降ろされた。背中が地面に擦れてめちやくちや痛い。そして脇腹を蹴られる。吐いた。

「ヴおえっ」

喉が気持ち悪い。口の中は甘ったるさと鉄っぽさでいっぱいだ。水が欲しい。

もうなんも考えらんねえ。死んでもいい。こいつらボコるまで気がすまねえ。そう思ってた時。

「お巡りさん、こっちー!!」

「んあ!?!サツ!?!」

「誰だ!」

「いややばくね!?!逃げるか!?!」

誰かの叫び声が聞こえた。お巡りさん……誰かこの騒ぎ聞きつけて警察呼んだか!?!それは誰か知らんがナイスだ!聞き覚えのある声な気がする。

野郎共は一斉に慌てふためきやがった。ざまあみやがれ。

「……嘘だよバーカ!歳下をよってたかってボコって恥ずかしくねえのかタコ!悔しかったらレイプじゃなくて彼女作ってラブラブエツチしやがれクソ童貞が!!……ひいひいごめんなさい!!」

……コバの声だ!あいつ、あんなにテンパリながらこの場所見つけたのか。

「ぶっ殺す!!!」

あいつ煽りスキル高いな!?!しかも言うだけ言って逃げんのかよ!?!あいつ足遅いから捕まるんじゃないかねえの!?!

だけど一瞬また全員の視線はコバの方へ行った。そしてコバにブチ切れて追いかけてしようとしたチンピラに向かって一足先に高見が走り出す。

「あああああああああつ!!」

物凄い叫び声と共に飛び蹴りを放った高見。チンピラはコバに夢中でその飛び蹴りを顔面にくらい、そのまま地面に倒れて気絶した。あと三人。だけどこっちは俺は死にかけ、高見もよく見たら顔が腫れている。望み薄い。

「あー、やっぱ。頭クラクラする」

そんな高見の眩きが聞こえてきた瞬間。

「ぎっけんなよテメエら!死ねよ」

野郎の一人が高見に向かって走り出して……

ドスツ。

「えっ」

明らかに殴るとか蹴るとかそういうのじゃない音が鳴った。

高見の脇腹に何かが刺さってる。赤い何かがドロドロと落ちていく。

俺の中でなんかギレた。

「何やってんだお前っ!!」

体が自分でもびっくりするくらい勝手に動いた。自分の身体能力とは思えないレベルの跳躍力でナイフぶっ刺した野郎に飛びかかる。そのまま顔面を殴り、落ちた顔面を両手で掴んで膝蹴りを無理矢理入れる。そして股間を蹴り上げた後に蹲ったそいつの身体を両腕で地面に叩き付けた。鼻が折れてるかもしれない。

「痛ったあ……！初めて刺された、洒落にならん……！」

高見も刺された部分を抑えてその場に蹲る。俺もその場に倒れ込んでしまう。あと二人。あと二人……あと二人……！身体がいよいよもって動かない。

「あは、あはは？あははははっ！やっ倒れたかよ糞ガキ共！」

「くっそ……ナイフは卑怯だろ、殺す気かよ……」

お前も殺すぞって言うてたじゃねえかよ。俺ら二人ともだっせー。スマホが鳴った。取れねえよ。通話ボタンとか押せねえよ。

ラインの無機質な音が神社に鳴り響く。

「んだよ、ママから電話だぞ？アッハッハッハッハッ！」

「うっせー童貞共、てめえ等こそママのミルク吸ってろ」

毎日聞いている女の声が聞こえた。あれ？俺場所教えたっけか？

「おい、晴人！電話したんだから出るよ」

「この状況みてそれ言うかよ……痛っつ」

神崎雨。姉ちゃんがラスボスみたいな雰囲気背負ってやってきた。働いてたまんまの格好だから、無駄にオシャレである。その上着動きづらかっただろうに。てか電話してきてたのアンタかよ。

「……で？こいつらボコツたらいいの？」

「……おい、お姉さん？もしかして喧嘩するつもり？」

「喧嘩？しない。私の大事なお友達を返してもらおうか……一方的に私

がアンタらボッコボコにするかのどつちかだから。喧嘩じゃなくてイジメ」

「は？」

さも当然、みたいな口調で姉ちゃんは言い切った。

「ナイフ刺さってる少年が詩織ちゃんの彼氏さんかな？……それ、抜くなよ。多分ここだろうと思っで一応救急車も呼んでっから。痛いだろうけど耐えな」

そう言うとお着を脱ぎ捨てて、腕まくりをする姉ちゃん。そう、うちの姉ちゃんは……

「覚悟しろよ、ぶっ殺してやるから」

異様に喧嘩が強い。

くくく

姉ちゃんが来てから決着は一分で着いた。何がやばいかって、自分から殴りかかったらアウトだから、相手から殴りかかれるまで一切攻撃しないことだよな。あくまでも正当防衛のもとボッコボコにするのちよつとよくわからなかった。

姉ちゃんが詩織の口の詰め物と縄を解いた瞬間に、詩織は全力で走って俺と高見に向かって抱きついた。

「怖かった……！玲音君、ハル、ごめん……！ひぐつ、なんか、すごい怪我して……」

……高見の奴が「俺一人じゃ支えられない」とか言ってたけど、俺も一人じゃボッコボコにされてただけだし。なんというか、なんとも言えないな。

「取り敢えず、詩織ちゃん？」

「痛いから抱きつくのはやめろ」

気持ちは分からんでもないけど、俺も高見も重傷だからな。

全てが終わってから「よかったー！お前ら無事かよー」と走って帰ってきたコバを殴る権利はあると思う。俺も高見も。

でもコイツのおかげで助かった瞬間もあったんだよな。あの隙に

高見がドロップキックぶちかました訳だし。

警察も救急車も先に姉ちゃんが呼んでくれていたみたいで、事件は驚く程迅速に解決した。

俺と高見は仲良く病院送り。姉ちゃん、詩織、そしてコバも警察から事情聴取。クソ野郎共四人は逮捕。全員成人済みらしいので顔写真付きで名前も公開だ。やったぜ。

「……なあ、高見」

「……何？」

「俺ら、明日テスト受けれるかな」

「絶対無理でしょ……下手したら詩織ちゃんも、小林君も」

「だよなあ。後日だよなあ」

「そうだね。……現代文、教えてくれない？」

「おー」

後から聞いた話なんだが、事件に計画性は無かったらしく、テスト期間の女子高生でそれなりに美人のやつだったら誰でもよかった、という無差別的な犯罪だったらしい。偶然そこに居合わせた詩織はマジで運が悪かった、としか言い様がなかった。

俺は全身打撲で全治三週間。一週間は入院。高見は脇腹を数針縫った拳句に打撲も重なり同じく一週間は入院。二人とも骨折れてないのは不幸中の幸いだろうか？詩織も精神状態やら云々の検査等があった為一日入院。で、その後は警察から話を聞かせて欲しい、ということではやはり一日は潰れそうらしい。

俺達三人は仲良く後日、終業式までの休日どこかでテストを受ける羽目になるのであった。

そして病室。なんと三人とも同じ病室である。

「口ん中切れたからさ、もの食べるのめっちゃくちゃ辛い」

「痛った！箸持てない」

「……二人とも大丈夫？」

「大丈夫じゃない」

「……やっぱ二人、似てるね」

散々だよくそやろーめ。

退院したい。

「病院って暇だなー」

「そうだね」

人生で初めて入院というものを味わい、病室のベッドでダラダラしている俺と高見。初めて病院で一夜を過ごしたけどやばいな。夜の病院マジで怖い。

皆は今頃テスト二日目だろうなー。詩織は今朝退院して家に帰った。今日は学校に行かなくていいらしい。そりゃそうだね、てか多分警察の所行ってるだろうし。

「今の時間誰かにラインしようにも皆学校だしね」

「それな。……誰か隠れて電源付けてねえかな、鬼電してやろうぜ」

「……テスト中に鳴ったらカンニング類似行為でアウトじゃなかった？」

馬鹿野郎。だから面白いんだろうが。

一応昨日の夜にかけて姉ちゃん、理恵さん、そんで高見の家族が面会に来た。理恵さん泣いてた。俺あの人が悪酔いして泣いてるところしか見たこと無かったからびっくりした。泣きながら「ありがとう」と「ごめん」を繰り返してた。理恵さんが謝ることじゃねーのにな。その後詩織を思いっきり抱きしめてたな。

姉ちゃんは……うん。まあ取り敢えず姉ちゃんだった。

「晴人、お前なんであたしの弟なのにあんなに喧嘩強いのか？」

「姉ちゃんはなんで俺の姉ちゃんなのにあんなに喧嘩強いのか？」

「……くせんのレベルだぞあれ。見てて怖かったもんな。」

「まあでも詩織ちゃん守れたんだしその根性は認めてあげる。はいこれ暇つぶしになりそうなもの」

「あ、それ素直に助かる」

袋を渡された。中には音楽プレイヤーと漫画数冊。……と、これはどういうことだクソ姉貴。

「おいクソ姉貴。どう考えてもこれは女が持ってきたらダメなやつだろ」



最後に見えたのはどう見ても成人向けDVD。所謂AV。しかもコスプレナースもの。どこで見つけてきたのか問い質したいし入院してる時にこれ渡すの悪意の塊だろ。

「それ二個前の彼氏の私物。一回一緒に観た」

「変に生々しいこと言うのやめてもらっていいですか」

中身は俺にしか見えてないけど話の内容は詩織にも高見にも聞こえてんだぞクソ姉貴。

「え？ハル、何入ってたの？」

「エロビデオ」

「えっ……ええっ!?!お姉ちゃんそんなの観てたの？か、彼氏と？」

「あれ？詩織ちゃんは彼氏と観たことないの？」

「な、無いよっ！普通は無いよ!?!」

「あらあ、ウブ♡キスした？ねっとりした方の」

「タチ悪すぎじゃね？俺の隣のベッド誰だと思ってるの」

この姉貴性格悪すぎる……。いや、前に「あたしの詩織ちゃんがー!」みたいなこと言ってたし意地悪気分で復讐してるのか？これ？というかそれは復讐というのか？あてつけというものでは？

「そうだ、詩織ちゃんの彼氏君。この子泣かせたら二度とバスケットが出来ない身体にするからね、覚悟しろよ」

「え？あ……はい。すみません」

ほら、めっちゃビビってるじゃん。あのチンピラをボッコボコにしてたあとだから冗談に聞こえないんだって、マジで。

「うーん、でも確かにイケメンじゃん！詩織ちゃん、誘惑する時は胸元のボタン一個だけ空けて、「酔っちゃった……」って言って肩に頭乗せて腕絡ませて、おっぱいをほんのちよつとだけぶにっつて押し付けたら……」

「お姉ちゃん!?!やめて！恥ずかしいから！あと私まだ未成年!!」

この姉貴、セクハラする為に来たのか？

酔って顔が紅潮して、腕絡めて胸を押し付ける詩織の姿を想像してちよびつとだけゲイボルグが反応した。隣の高見も絶妙に変な顔してるから多分反応してる。良かった、こいつも正常男子。

高見の両親は、なんか良い人そうだった。真面目そうなお父さんと、美人なお母さん、って感じ。こいつがイケメンなのはお母さんの遺伝子を受け継いでるらしい。顔めっちゃ似てた。

「……そういえばさ、神崎」

「んだよ、今コバにラインしようと思ってたのに」

「やめなよ、カンニングになったらどうするのさ……その、お姉さんは来てたけど。両親は？」

あー。そういや来てないなあ。普通息子が入院したら来るもんな。そりゃ何故？って思うわな。

「どっか忘れたけど県外で仕事してる。仕事人間だから俺ら放ったらかし」

「……なんか、悪いこと聞いたね。ごめん」

「慣れっこ」

そう、慣れっこ。

いつの間にかずっと一緒に居るのは姉ちゃんだけになって。母ちゃんや父ちゃんよりも詩織や理恵さんの方が一瞬に居るようになって。

遠くの家族より近くの他人、とはよく言ったもんだと思う。正直詩織の方が母ちゃんより家族、って感じするもんな。

「昨日、お前が寝てからスマホに電話はかかってきてたんだよ。ちよつとだけ喋った。大丈夫か、見舞いくからね、って言われたけどいつ来るか、本当に来るかわかんね」

「なんとというか、苦労してるね」

ちよつと意外な答えが返ってきた。割と、「姉ちゃんと二人で暮らしてる」って言ったらいいなー、とかそういうの憧れるー、とかそう言われることが殆どだ。石黒とかそうだったしな。

今、こうやって病院にいるから余計にそう思われてるだけかもしれないが、ちよつと意外な答えだった。

変な奴。

「……寝るわ、暇だし」

老人みたいな生活してるな、俺ら。

くく

結局昼ご飯の時間までガッツリ寝てたらしい。目が覚めたら看護師さんが俺の机にご飯を運んでくれていた。ちようど今起こすところだったのかなんとか。病人食なあ。不味くはないけどパンチが欲しい。

「看護師さん、これ塩マシマシとか出来ない？」

「だーめ。生活習慣病になるよ」

だよねー。姉ちゃんもどうせなら塩とかお見舞いに持ってきてくれたらいいのに。なんだよ、見舞いの品がコスプレナースものAVつて。しかもDVDプレイヤー無いから観れねえし。いやあつても観ないけどさ。

もそもそと栄養満点、味付け控えめの食事をとる。あー、姉ちゃんの飯が食いてえ。濃い味が食いたい。アスパラベーコンとか食べたい。

「あ、そういえばお母様がお見舞いに来てるわよ、晴人くん」

急に看護師さんに言われた。

……え？

「母ちゃんが？なんで？」

「なんでって……そりゃあ息子が入院してるんだから当然でしょ？」

……そりゃそうだけど。昨日も電話で行く、とは聞いてたけど。

思ったより早かった。ちよつとびっくり。

「良かったな、神崎。ちゃんと来てくれたって」

「……複雑」

何喋つたらいいか解らん。ごめん、入院したー、とか軽いノリで言えばいいのか？神妙な顔付きで心配かけてごめん、とか言えばいいのか？昨日どんな感じで喋つたっけか。

「ほら、お見えになったわよ。お邪魔にならないように私はドロンスるわ」

看護師さんが扉の方を指さしてからそそくさと出ていった。入れ

違いに部屋に入ってくる、久々に見る昔はずっと一緒だった人。

神崎美和。俺と姉ちゃんの母ちゃんだ。

「晴人、あんた……」

ベッドの上の俺を見てなんともまあ、ぐしやぐしやみたいな顔をした。

「……久しぶり。悪い、心配かけて」

「馬鹿！ そんなになってるって思わないじゃない！」

怒られた。

この歳になって、母親に怒られるって、なんか新鮮だ。

母ちゃんは口では怒ってたけど、顔が泣きそうになってた。なんなんだよ、本当に。

「詩織ちゃんをすっかり助けたのはよくやった！ けどね、私あんたにそんなボロボロになって欲しくないの！」

無茶言うなよ。

アンタら両親が仕事ばっかしてるから、姉ちゃんだってボロボロなんだぜ？

もう少し帰ってきてくれたっていいじゃねえか。急に来て、いきなり怒られたって困る。

「……ごめん」

何故か、謝ることしか出来なかった。

「……お母さんもごめんね。仕事でもう出なきやいけなくて。晴人の一番好きな果物、買ってきたから。後で食べて」

そう言うのと紙袋をベッドの脇に置いて、そして俺を思い切り抱き締めた。痛いです。

「……痛い」

「ごめん、怪我してんだもんね。……また電話するわ」

「おう。……あざす」

嵐のようだった。そのまま母ちゃんは部屋を出て行った。

紙袋の中にはみかんが幾つか入っていた。  
みかんが一番好きなのは姉ちゃんだったの。俺が一番好きなのは桃。

「なあ、高見」

「何？」

「母ちゃんに怒られるって、どんな気持ち？」

「うーん……難しいな」

この歳でも、子どもっていうのは親に怒られるもんなんだろうか。……多分だけど、一生誰かに怒られるんじゃないかな。その中でもお母さんって、普通は生まれた時からずっとお母さんだから。怒られるのは普通だし……怒られちゃったな、位に考えるのでいいんじゃないの？」

よくわからないけどね、と一言付け加えた高見。

そうか。怒られることは普通だし、そんな非日常的な事でもない。

「そっかー。怒られちゃったなあ」

母ちゃんと、「普通」のことが出来た。

そう考えるなら、これだけ怪我しても何か得があったのかもしれない。

そして高見は変わってるけどなんというか、自分の考えみたいなのは持つてるしすぐズレた奴でもない、という事も解った。

「嬉しそうだね」

「怒られて嬉しいわけないだろ」

「それもそうか。……ちよっと寝るね」

「おう」

隣で高見がもぞもぞと身体を動かし、暫くすると寝息が聴こえてきた。

……音楽でも聴くか。姉ちゃんが持ってきてくれた音楽プレイヤーとイヤホンを取り出し、ランダム再生のボタンを押した。

流れてきたのはSound Horizonの11文字の伝言。

……こんな時に母親の愛、みたいな曲を流すなよな。

~~~~~

うとうとしながらずっと音楽を聴いていた。多分、一時間以上は聴

いている。なんだかんだで音楽をずっと聴いている、っていうのは暇つぶしになる。

もう今は多分学校も終わって、次のテストに向けて皆勉強している頃だろう。俺らもちよつと位は勉強しないとなあ……。

扉が開いた。看護師さんか？それとも誰か見舞いに来た？

「玲音、神崎」

「……えつ、杉山先生」

まさかの、見舞いに来たのは体育教師の杉山先生だった。結構ベテランの先生で、女子人気が高い。割とノリが良いけど怒るとめっちゃくちゃ怖い、みたいな「The 体育教師」みたいな先生。……あ、そういうえばバスケット部の顧問だっけ。

「玲音は寝てるのか？」

「そうっすね」

俺はこの先生、あまり得意ではなかったりする。なんというか、体育教師って独特の雰囲気があって、怖くて苦手なんだよね。特にこの人、生活指導の担当だったりするし。

「おい、玲音！起きろ！」

「ひゃいつ!?え、杉山先生!?何で!？」

「見舞いに来たんだよ」

どう考えても今のを見て見舞いとは思えないんだが。

「色々と言いたいことがあってな。……世間体、というものがある。日高を護る為、とは言えど人様に暴力を振るってしまった君達に、学校は嚴重注意という処置を取る事になった。君達は退院したら、校長室で嚴重注意を受けることになる」

大人の世界なんぞ見せたくないんだが、と続けた杉山先生。なんで向こうが悪いのに俺らが怒られなきゃなんねえんだよ、って言いたいのが、それこそ世間体を学校が気にしなきゃならんのだろう。

あー、嫌になるね。わざわざそれ言いに来たのかよ、この先生は。

「……だが、俺は君達に嚴重注意という処罰は不適切だと思っている。……これからな、社会に出たとしても、こういう理不尽はあると思うんだ。だからこそ言うぞ。……お前ら、二人ともよくやった。そして

助けてやれなくて、本当にすまなかった。子どものお前らが入院する程体を張って、俺達大人は、教師は警察から話を聞いてやつと動けたんだ。後で嚴重注意は受けるだろうがお前らは間違っていない。俺がこんなこと言ったらそれこそ嚴重注意では済まされないが……その時の校長先生の話なんぞクソ喰らえ程度に考えろ」

校長先生だって本意ではないのだから。

あー。なんというか。

俺の学校、校舎はボロいし歴史だけ積み重なったよくわからん学校だけだ。

教師は良い人が揃ってるんだなあ。

杉山先生はビックリするくらい、本当にビックリするくらい深く頭を下げていた。高見がびっくりしつつ、でも頭はあげてほしくて、でも言われたことが心に刺さりすぎて、どうしたらいいのかわからなくなってフリーズしてる。そりゃあ、お前顧問だもんな。

「退院したら胸を張れ。君達二人は我が校の誇りだと俺は思う。そして君達が不当に虐げられるようなことがあったら、次こそ俺が、先生が絶対守ってやる。……高見、練習の復帰は無理しない程度に少しずつでいい。まずは万全にしろ。……二人のテスト日程、その他諸々を纏めたプリントだ、あとこれは皆川先生からの見舞いの品。早く治して帰ってこいよ」

皆川ちゃん、鳩サブレーとか普通に嬉しいぞ。甘い物食べたかったんだよ。母ちゃんがくれたみかん酸っぱかったし。

「えっと、」

「その」

「「ありがとうございます！」」

高見とハモってしまった。杉山先生の体育の授業、高三では受けられるかな。

早く退院して、皆川ちゃんにもお礼言わなきゃな。テスト中だし忙しいんだろうな、それなのに見舞いの品は杉山先生に預けてくれて……いい先生だ。

「おい、高見」

「何？」

「……退院したらバス教えてくれ」

「現代文教えてくれたら、いいよ」

解る。山月記、難しいよな。

テストでは良い点、取れるといいな。



## 夏休み

断りたい。

退院しました。まだ完治してないけど。

高見も退院しました。まだ完治してないけど。

また時々病院に行って怪我の経過は見せたりしないといけないらしいが、取り敢えず退院しました。別に怪我が痛くて生活に支障が出る！とかも特に無かったので、もう今はたまにあちこちがジンジンする程度だ。高見の奴は刺された所がたまにかなり痛いらしいが。

「当たり前だけど家の方が落ち着く」

「そりゃそうでしょ」

学校の方は既にテストは終わっているらしく、今は教師陣が鋭意採点中……ということとで授業は無いらしい。明後日辺りにテスト返却が行われ、その後に終業式。そして夏休み……といった予定らしい。

つまり今日は部活動でもない限り登校する必要はないのだが……俺は制服に着替えていた。理由は至極単純。

俺と高見の二人は今日からテスト二日目が始まるのだ。……あ、あと詩織も二日位は一緒にテスト受けるらしい。

コバとか須田とか、石黒辺りに「テスト、どんな問題出た？」ってラインで聞こうとしたら、先にコバから「お前らのテストは問題変わるらしいぞ」ってラインが来てました。そりゃそうだよな、俺みたいなやついるもんね。

「あんたはいつまでテスト受けるの？」

「今日と明日……明後日に終業式して、その次の日で終わり」

杉山先生からもらったプリントにはそう書いてあった筈だ。つまり夏休みの初日の午前中はテストで潰れることになる。俺と高見だけ夏休み延長してくれないかな？

「あー……どんまい。名前欄に間違っただアレクサンドロス大王って書いてちやダメだからね」

「どういう間違いをしたらそうなるのか教えてくれ」

「……そっか、アンタは世代じゃないのか、バカテス」

姉ちゃんが遠い目をした。

バカテスは知ってるけどさ、そんなネタは俺は知らん。

たまに思うけど姉ちゃんのオタ知識は何処から湧いてるんだろうか。ライトオタクの筈なのになあ。

くく

「はい終わり！解答用紙回収すつぞー」

試験監督の皆川ちゃんの声と共にシャーペンを置く。物理意外と行けた気がする。55点くらいは取れたんじゃないか？

隣で呻いている高見、そしてなんとも言えない表情で終わってるのに答案用紙を睨む詩織。……やっぱ三人だけでテスト受けるのって変な感じするな。

「……おい神崎」

俺の答案用紙を回収した時に皆川ちゃんの手が止まった。

「……え、何すか」

「それ、何？」

皆川ちゃんが指さしたのは俺のテストの問題冊子。他の二人と変わらないはずだが？

「え、皆川ちゃんから配られた問題冊子ですけど」

「先生って呼べつつつてんだろ。……いや、じゃなくて、その冊子に描かれてるやつ」

「あー、これっすか？ピカチュウ」

「高二になってテスト終わった後に冊子に落書きとかするなアホ……しかもブサイクだし」

え、だって時間余ったんだもん。

よくテストや模試なんかを受けると、時間が余ったら後で自己採点出来るようにしておく、とか間違いが無いかが再度見直す、なんて言われたりするけど俺はそういうことは一切しない。面倒臭いし、何より

別に自己採点したからってそのテストの結果が変わる訳じゃないから。見直したって結局その時の自分の実力が変わる訳でもないし。

だからこうしてピカチュウを落書きしてたんですが、ブサイクらしいです。なんでー？俺デブチュウの時代の方が好きなんだけどなー。

「ハル、昔から絵心無いよね」

「お前には言われたくねーよ」

お前はピカチュウ描く！って言ってクリーチャーを生み出す系画伯だろうが。

「まだ一応テスト中に含まれんだぞお前ら！カンニング類似行為にしてやろうか!？」

皆川ちゃんがキレた。真ん中で高見が物凄く笑いを堪えている。笑笑笑笑、大爆笑してカンニング類似行為にされてしまえ。

「……あ、神崎。お前このまま残れ」

「え、なんで」

「話がある」

ピカチュウ描いたから俺だけカンニング類似行為ですか？てか最近よく皆川ちゃんに呼び出し食らうな……。

「はい、じゃあテスト回収したので一旦これを職員室に持ち帰ります。

日高と高見は解散、お疲れ様。神崎は待機」

「先生お疲れー!」

「どうもっす」

「マジでなんでなん?」

関西弁が混じるくらいには意味がわからない。

「……じゃ、俺部活行くから。二人ともお疲れ。神崎はまた明日」

「玲音君頑張ってるねー!……どうする?折角だし終わるまで待つてよ  
うか?」

高見は荷物を纏めてそのままバスケ部の練習に向かった。……あいつ、まだ傷痛いらしいのによくやるなあ。詩織は特に用もないらしいのであとは帰るだけらしいが……一人で帰るのもなんとなく寂しいから待つて貰ってもいいんだが、高見がそれを許すのか?」

「……神崎。別に二人で帰るのは良いけど、俺は幼馴染パワーには負

けねえぞ」

教室を出たばかりだから聞こえていたのか、扉からひよつこり顔を出して頬を紅くしながらそんなことを言ってきた。何なんだあいつは。勝ち負けとか無いだろ。

「お前が一人で帰りたく無いんなら待つてればいいんじゃないの？」

「じゃあ待つてる。中庭いるね」

「あいよ」

詩織も出て行った。

……なんか、一人が久々に感じられる。

昨日の昼間まではずっと病室で、高見と同じ部屋だったから。流石に昨日は姉ちゃんも家にいてくれたから、帰ってきてからも一人じやなかったから。今日、この教室に着いた時も、先に高見が来てたから（詩織は遅刻ギリギリだった）。

一人だからと言って別段静か……という訳でもなく、窓の外からは男子サッカー部のボールを蹴る音と掛け声が、蝉の鳴き声が、陸上部が地面を蹴る音が聞こえてくる。……男子サッカー部つてことは、今日は女子サッカー部はグラウンド練習じゃないんだな。

「……暑っつい」

毎年「去年よりも暑い！」とか言われているこのヒートアイランド・ジャパン。流石の我がボロボロ校もこの暑さの中クーラーも無く授業を受けろという程鬼畜では無いので、この部屋も今は冷房がかかっているのだが、それでも尚暑い。快晴の空の下でボールを蹴っているサッカー部には頭が下がるね。多分体育館も蒸し風呂みたいな暑さだろう、高見もよくやるよ。詩織も待つならクーラーの効いてる図書室とかにすりゃあいいのに。

「……待たせたな、神崎」

「うっす」

皆川ちゃんが帰ってきた。額には汗が浮かんでいる。廊下も暑いんだらうなー。

「で、話って何すか」

「あー。お前さ、文化祭の実行委員とか興味ない？」

「無いです」

ある訳ねえだろ。もう面倒臭そうな匂いがプンプンするもん。

我が校の文化祭は十月の末に行われる。クラス単位で出店をやったり、部活単位で出店をやったり。有志でパフォーマンスしたり、文化部の発表があつたり……と、まあ普通にそれなりの文化祭なのだ。

しかしそれなりの文化祭、ということは準備もそれなりに大変なのである。

「あー、いや。実行委員つつつても」

「嫌です」

「いや、だからちよつと話だけでも」

「嫌です」

「話聞けよ神崎イ！」

「嫌です」

「さっきのピカチュウカンニング類似行為にするぞ」

「汚ねえ！やるのが汚ねえぞ皆川ちゃんよオ！」

職権濫用だ。パワハラだ。訴えてやる！……何処に訴えたらいいんだ？

「実行委員つつつてもな、文化祭そのものの実行委員じゃない。とうかさんな大役お前に任せたら文化祭が滅ぶ」

どういう意味だ。とうかさ俺をなんだと思ってるんだこの先生は。

「じゃあ何すか」

「クラスの出し物の実行委員だよ。高二的の演劇コンクールと、あと当日なにやるか」

「……めんどくせ」

文化祭の本祭は土曜日なのだが、その前日の金曜日に何故か高二は演劇コンクールという名の催し物をやることになっている。クラス単位で演劇をして、最優秀クラスは本祭でも発表、という形になっている。つまり今俺が頼まれているのは、クラスリーダー……みたいなもんなのか？

「大体なんで俺なんですか」

「この役割、部活やってない奴じゃないと出来ないから。男女一人ず

つ。あたしのクラスで帰宅部の男子、あんたと小林だけなの」

えっ、須田って部活やってたの？知らなかった。

「なんでコバだとダメなんですか」

「あいつに実行委員任せたら本祭無理やりメイド喫茶とかいかがわしい店とかにするだろ、絶対。あと演劇の女子の衣装も絶対ヤバくなる。それされて怒られるの、あたし」

「すげえ説得力ある」

本質的にあいつはただのスケベ野郎だからな。……あれ？これは  
が非でもコバにやらせた方が俺にもメリツトあるくね？メイド喫茶  
とかにしてくれたらクラスの女子のメイド姿拝めるじゃん？織田と  
かみたい不良少女がすげえ恥ずかしそうに「……ちっ、お帰りな  
さいませ」とか言うんでしょ？アリじやね？

「おい神崎、何考えてるかバレてっからな」

「げっ」

顔に出てたか。

「というか小林よりはお前の方がまだ人望あるだろ？割に柔軟な考え  
してるお前の力が借りたいんだ。頼む」

「えー……」

なんか皆川ちゃんって背低いから頼む！って言われたらちっちゃ  
い子に意地悪してるみたいでちよつと嫌だな。面倒臭いけど、まあ、  
別に……

「……いいっすけど」

「ホントか!?良かったあ……小林にも一回聞いたら「女子の衣装全部  
俺が決めていいんすか!」って言われて干されることを覚悟してたん  
だ」

あいつ欲望に正直に生きすぎだろ。

「じゃあ、今日は終わり。学年主任にはお前がやるって言っとくから。  
また明日な」

「うっす」

なんか上手いこと乗せられた気もするが……まあいいや。折角な  
ので全力でやる。目指すは演劇コンクール一位、そんでもって本祭の

出し物も大成功で終わらせる。……そう上手くいくのかな。まあいや。

詩織は……中庭だったな。

~~~~~

「悪いな、待たせて」

「いいよ別に。私も暇だし」

そういえば中学時代はこうやってよく一緒に帰っていた。中庭を抜けて下駄箱で靴を履き替える。

「で、話なんだったの？怒られるようなことした？」

「学校に来てもしなかったのに怒られるようなこと出来るわけねえだろ」

お前を助けた代償に入院生活送ってたんだよこちとら。

「文化祭のクラス実行委員やれって言われた」

「……へ？」

「へ？って何だよ。俺がやるのおかしいか？」

「い、いやー、そうじゃないんだけど……あつ」

なんだこいつ、明らかに変な反応した後になんか気が付いたような表情になりやがったぞ？

……ちよつと待て。クラス実行委員って「男女」一人ずつって言ったな？そんでもって「部活やってない奴」だったっけか。俺のクラスで部活やってない女子って、織田率いるビッチ集団と、あと……

「あつ」

まさか。

「お前も……？」

「……うん。私が女子のクラス実行委員です」

マジかよ……。いや、別に全然良いけど。

「よくよく考えたら私のクラスで部活やってない男子、ハルか小林君しか居ないもんね」

「お前、絶対織田とかに押し付けられただろ」

「……というか、あの子達に任せたらダレそうだし……どうせなら文化祭楽しみたいじゃん？」

一理あるな。別に織田とかが適当な人種、って訳でも無いが、実行委員で皆をちゃんと引っ張ってくれそうか？と言われると首を振りたくなる。

これ高見になんか言われそうだなー。まあいいや、しーらないつと。

そもそも冷静に考えたら詩織と組めるのは普通にラッキーだ。何かしら決めあぐねた時に互いの家で作戦会議出来るし、互いになんとなくどういう事がやりたいか、とかどういう風に言ったら怒らない、とかは理解してる。この上なく連携は取りやすい。

「俺、どうせなら演劇コンクール優勝したいんだよね。ついでに言うなら本祭の出し物も大成功させたい」

「うっわ、欲張り。いいじゃん、私も頑張るよ。……今年はなんか、お店の売上競走とかあるんだって。お店やらない？食べ物作るの」

「面白そうじゃん。姉ちゃんとかから売れそうなんも聞いてみるわ」

「そっか、お姉ちゃんもいるの心強いね。じゃあたまーにハルの家行くね、お姉ちゃんと三人で作戦会議」

「おう」

唯一の問題点は詩織と俺の二人が高見に怒られる可能性がある事だが……浮気じゃないし、割とマジで偶然実行委員が被っただけなので仕方が無いのだ。……ちよつと悪い気もするが悪く思うなよ。

「じゃあ、今日の夜ご飯食べに行くから」

「……は？」

「後でねっ！」

詩織はそのまま走って帰って行った。

……いや作戦会議の予定速すぎませんか？取り敢えず姉ちゃんに許可取らないといけないんだが。

「仕事中にラインごめん。なんか詩織が夜ご飯食べに来るらしいけど」

取り敢えずラインを送る。すぐに既読が付いた。休憩中かな？



『りよー。多めに作るわ』

許可取れちゃったよ。しかもいとも簡単に。  
「……家着いたら片付けるか」

はつこい。

「だから、普通にネタとか挟んだ劇じゃ最優秀は取れねえって」  
「でもその方が生徒ウケは良くない？」

「そうかもしれないが審査するのは頭の固い先生方だぞ」

「えー、でもハルに脚本任せたらめちやくちや重たい話書きそうだしー」

詩織はマジで夜ご飯食べに来て、そのまま俺の部屋で演劇コンクールに何をするか、という話し合いが始まっていた。

本気で賞を取るなら脚本を考える所から真剣にやらなくちゃいけない。だから二人で案を出し合ってるのだが……

「一からと出来るわけねえだろ。有名な戯曲とかから引つ張つてくるのがベスト」

「オリジナリティある方が絶対面白くなるじゃん！それに戯曲から引用したー！とか言っても解んない人いっぱいいるし。私とか」

意見がめちやくちや割れるのだ。

「お前が言う通り、ユーモアもオリジナリティも絶対必要なのは解つてんだよ。けどそれを全面的に出すには俺らのクラスには演劇部も居ねえ。あーゆーのは慣れてる奴らがやるもんなんだよ」

「むー」

「唸つてもこれは譲りません」

やるなら勝ちたいんだよなあ。まあ実質役の振り分けとかはこいつに任せた方がスムーズに進むんだろうけど……。さて、どうやってこの頑固者を攻略したもんか。

「別に既存の作品を丸々使うわけじゃねえよ。ストーリーやキャラクターを改変するんだ。例えばそうだな……ロミオとジュリエットをやるとするだろ？ロミオの親友、マキユーシオを女性に変える、とかな」

「マキユーシオって誰？私ロミオとジュリエットは「おおロミオ！貴方はどうしてロミオなの!？」しか知らない」

マジかよ。……いや、普通の人のロミオとジュリエットの認知度つ

てそんなもんか。俺も金太郎って熊と相撲を取る、位しか知らないしそんなもんだろう。えーつと、どう噛み砕いて説明したらいいかな……。

「ロミジュリは、言っ飛ばせば二人の許されざる恋の物語なんだよ。で、ロミオには親友のマキューシオって奴がいるんだが、そいつが女性だったら……もしかしたら、それだけ仲が良かった二人だ。ロミオはジュリエットが好き。ジュリエットもロミオが好き。だけどマキューシオもロミオが好き……っていう人間関係が完成する」

「昼ドラみたいになったね」

「両思いなのはロミオとジュリエットだが、二人の恋は許されない。けどマキューシオとロミオなら許される恋だ。ロミオはどちらのアプローチを受けるのか!?!……どうだ、面白そうに聞こえないか?」

「面白そうだけど……ドロドロしそう」

まあストーリーを改変しないならマキューシオ、ジュリエットの従兄弟のティボルトに殺されちゃうしね。めっちゃくちゃドロドロすると思うよ。

なんだったらティボルトはマキューシオに恋をしていることにするか? 愛ゆえに傷つけ、殺してしまった……的な。昼ドラ展開過ぎるかな?」

「ハルの主張は解ったけどロミオとジュリエットは却下。ちよつと重すぎ」

えー。これで重いのかよ……。

「てか、他のクラスはどんなことするんだろ」

「まあ普通に考えて既に考えてるクラスなんかそう無いだろ」

俺もお前とじゃなかったら連携取るの面倒臭いしまだ企画してなかった。

「ハル、他なんか無いの?」

お前さつきまで俺に考えさせたら重たい作品しか生まれないからヤダって言っただろうが! なんていきなり頼ってんの……。意外とロミジュリの改変案は面白かったのか?

「昔話とか童話とかの改変もいいんじゃないやねえの? 白雪姫とか」

「おお、可愛いやつがきた」

つつても白雪姫の改変案がパツと思いつかない。……グリム童話原典宜しく最後にお妃様に復讐して終わり！じゃ流石にまずいよなあ。生徒ドン引きの審査員も苦い顔になりそう。適当に童話と言ったけど俺 M・r・c h e n の知識しか無いしなあ。

「……姉ちゃんに意見を仰いでみねえ？」

「白雪姫浮かばなかったんでしょ」

「浮かばなかった」

バレてる。まあそりゃ考えてる仕事の結果出た言葉が姉頼りならバレるわな。二人で一旦リビングまで戻る。姉ちゃんはジューズを飲みながらテレビを見ていた。

「姉ちゃん、演劇コンクールの案とかない？」

「んあー？演劇？んー……」

テレビから目を離して考えてくれる姉ちゃんはやっぱり俺に甘いと思う。俺というか、俺らに甘いと思う。

「……あ。ロミオとジュリエットでさ、マキユーシオもジュリエットに恋した！とか面白いんじゃないの？」

「ハルとお姉ちゃんってホントに似てるよね」

「今俺もちよつとビックリしてる」

マジか。考えること殆ど同じか。流石姉弟。

多分こういう所で好みが似るからここまで仲の良い姉弟でいれるようになったんだろうな、って気はする。

「といふかなんでお姉ちゃんもその、マキユーシオ？って知ってるの？」

「映画観たから。四十年前位のやつ」

「あれのジュリエット役やってる人めっちゃくちゃ美人よな」

なんか詩織がドン引きしてらっしやるが、俺ら姉弟は普通に適当なDVDとかレンタルビデオ店で借りて観るからな。ロミジュリも四十年前位のやつ、二十年前位のマフィア改変されてるやつと両方観た。面白かったなあ。

「といふか詩織ちゃんそろそろ帰らなくて大丈夫？遅いけど」

「えっ……うわっやばっ!？」

「やつぱり……晴人、近いけど送ってやんな」

「あいよ」

本当にすぐそこだけどつい最近、ほんの少し前にあんな目にあってるんだ、男が送っていくのは当たり前前の行動と言える。

「あー……ごめんね、ハル。ありがと」

「まあ俺が付き添って意味があるかはともかくな」

まあいいよりはマシだろう。

徒歩五分も無いから楽ちんだし夜中にコンビニ行くより近いから全然苦にはならん。

「んじやちよつと行つてくるわ。鍵開けといて」

「あいよ。詩織ちゃん、またおいで」

「お姉ちゃんありがとー、またね!」

サンダルを履いてドアを開ける。夜だがまだ少し暑い。外が真っ暗、っていうだけで普段歩いている道も少し特別感あるよね。ちよつと暑いから今日は特別感半減だ。

「んじや行くか」

「うん」

歩幅は自然と合わせられる。昔は詩織が走り回るもんだから必死に走って追いかけてたが、今は普通に歩いてるだけで歩幅は自然と合うようになった。

「玲音君もさ」

「ん?」

「歩幅合わせてくれるんだよね」

「あいつ、背高いから意識して合わせてくれてんだろうな」

あいつのなんというかぼーつとした顔のまま、詩織の隣で少しゆっくりめに歩いている姿を思い浮かべる。うーん、なんとなくモヤッとはするがやはり似合ってると思う。

「ハルは意識して合わせてないの?」

「姉ちゃんとお前は意識しなくてもなんとなく合わせられるようになった」

これに関しては本当に付き合いの差だと思う。前に石黒と帰った時は少し意識しないと俺の方が早かったし、やっぱりこういうのは付き合いの長さがものを言う気がする。

「そっか。……ハルと玲音君が怪我した時さ」

「んあ？」

「ハルさ、俺の女に手を出すな！ って言ってたじゃん？」

「えっ、俺そんなこと言った？」

「言った」

あの時は頭イッてたからなあ、何叫んでたかとかイマイチ覚えてない。そんなこと言ってたのか。

「あれさ、ちよつと嬉しかったんだよね。ハルのことを初めてかっこいい、って思った」

それなりに、いやかなり付き合いは長いが初めてか……俺ってそんなにかっこいいシーン少ないのか……。

「高見に怒られっぞ」

「かもね。……私、多分中学生位の頃はハルのこと、好きだったんだと思う」

「は？」

いきなり何を言ってるんだこいつ。

中学生位の頃？俺らが一番夫婦だー！ ってからかわれてた時代か？その頃、俺の事が好きだった？

何言ってるんだ、本当に。

「好きだった……うん。好きだった。夫婦だー、って言われるのもちよつと嬉しかったし、本当にお嫁さんになれたらいいなー、って料理を練習したりしてた」

真っ暗だから前をしつかり見えていないと足を踏み外して転びそう。しつかり前を見ていないと。隣で歩いている幼馴染の顔なんかを見てると転びそうだから、見れない。

どんな顔をしてこいつの顔を見たらいいのか、解らない。

「というか、多分今もちよつと好きなんだと思う。……ホントはね、最初は玲音君からの告白、断ろうかな、って思ってたんだ」

夜の道は少しだけ特別な気がする。昔はこんな夜遅くに、俺と詩織の二人で歩く……なんて有り得なかった。危ないから、つて姉ちゃんと理恵さん、母ちゃんなんかが付いてきていた訳だ。当たり前。

いつの間にかこんなに大きくなっただなあ、俺達。

いつの間にか二人で色恋の話をするようになったなあ。それがまさか、俺の事が好きだった、とかだとは思わないじゃん。

この場から逃げ出したい。けど、逃げ出したらそれは詩織を殺すことになりそうな気がして。

「じゃあ、なんで高見の告白、オツケーしたんだ」

「うーん……怒らない？」

「ここまで聞いと言って言わない方が怒るわ」

「そだね。……フェアじゃなかったんだよね」

「は？」

俺はたまにこいつの言っている意味が解らなくなる。フェアじゃなかった、つてなんだよ？

「だってそうじゃん。私はハルのこと好きだったからさ、どうやったら私の気持ちを伝えられるかなー、でも伝えない方がいいのかなー、つて悩むんだよね。でもハルってさ、アホだから。そんなことで悩んだ事ないでしょ？」

「失礼な」

少なくともお前が高見と付き合った、つて聞いた時は結構悩んだぞ。理由はまた違ったけど。

「だから玲音君と付き合うことにしたの。そしたら、ハルに気持ちを伝える、伝えない、つて悩まなくていい。ハルはもしかしたら私みたいに何か悩むかもしれない。私の悶々とした気持ちを食らえー！つて感じ」

「……アホか」

こいつアホだ。

確かに俺はすつげえ悩んだ。正直ちよつと病んだ。病んだ？……病んでたな。病んだ。幼馴染なのに寝取られた気がして、正直しんどかった。

けど、その為にオツケーするのはアホだろ。俺にアホって言えねえだろ。

「それでもちよつと好き、って思ってしまうのはダメだよねー。勿論、玲音君がすごく好き。一番好き。最初はちよつと不純な理由で付き合ってたけど、すごく優しく、カツコよくて、楽しくて。付き合ってるうちに好きかわかる、って本当なんだなって思った」

当たり前だろ。あいつは俺よりかっこいいし、多分俺より優しい。思ってることが口に出る、とかそんなも無いだろうし。

「……ねえ、ハル。一つお願い」

「……なんだよ」

「私を振って」

……。

詩織の言いたいことは理解出来る。

「幼馴染だしさ、また家には遊びに行くよ。家族巻き込んで遊ぶよ。けど、私は一回、ここでハルに振られて、ちゃんと玲音君一筋にならないとダメ」

多分、詩織が急にそんなこと言った理由はその俺が叫んだ「俺の女に手を出すな」みたいな発言なんだろう。そのせいで、昔好きだった感情が少し押し戻ってきた……そういうことだと思う。

だが、正直俺の頭の中はパンクしそうなのだ。そもそも詩織が俺の事を好きだった、とか本当に知らなかったし解らなかった。その時点で容量オーバーしかけてるのに、この短時間に情報量が多すぎる。

俺は果たして詩織のことをどうしたかった？

幼馴染が彼氏作った。その時は独占欲に駆られた。好きでもないけど俺が先に告白しておけばよかった、とクソみたいなことも考えた。

本当に告白しておけば。今頃俺達は付き合ってたかもしれない。

じゃあ、俺は詩織の事が好きだったのか？

……解らない。

「……俺を巻き込むなよ。勝手なことばっか言って、俺に振ってくれとか、意味わかんねえし」



それが詩織の考えたケジメだとしても。

俺は詩織を振る、ということをしたくなかった。

出来ない。

「……そうだよね、ごめん。すぐく気持ち悪いこと言って」

「……家、着いたぞ。明後日、テスト返却と終業式の日にまた」

「うん。ありがと、ごめんね。……じゃ」

タイミングが良かったのか、悪かったのか。いつの間にか詩織の家の前まで到着していた。

鍵を開けて家の中へ消えていく詩織を見送ってから、ゆっくり踵を返して歩いていく。

振りたくなかった。

それが何故かは解らない。ケジメだとしても、詩織を振れなかった。

俺も、中学生位の頃はあいつの事が好きだったのかもしれない。

もし、告白して、振られたら。幼馴染っていう関係も壊れてしまいうで怖くて、すぐにその気持ちをどっかに封印したのかもしれない。

今、振ってしまったら。その頃の自分が死んでしまうような気がして。

ちよつとだけ、高見が羨ましくなった。

夜の道っていうものは少しだけ特別感が増す気がする。暗い道は前をしっかりと見ていないとすぐに足元を掬われそうな気がして、ずっと前を見ている。

だけど、少しだけ上を見てみると。腹立つくらい三日月だった。

あーあ。失恋した。

多分、俺も今もちよつと好きだった。

サラバ、俺の初恋。

叫び散らしたい。

『赤点全部回避ー!!ほんとありがたいとうね!!』

すっげえテンションの高いスタンプと共にラインが届いていた。石黒は無事、テストを乗り切ることが出来たらしい。

今日から夏休み。俺と高見はテスト最終日。なんで土曜日まで制服着て登校してテストを受けねばならんのだ。

ぶっちゃけテストの点数は悪くないとは思うが、どんな問題が出たか、手応えがどうだったか、とかそんなこと一々覚えていない。

なんというか、思った以上にダメージを負った。高見と詩織が付き合った時ほどじゃないが、俺は思った以上にメンタルが弱いらしい。

いつの間にかダメージを受けて凹んで、そして寝たら忘れて治る。そして朝ご飯を食べてる辺りで傷が疼くように思い出し、またしんどくなる。多分、生きてる限りそんなものの繰り返し。心臓に泥を塗りたくって、風呂に入っても落ちやしないのだ。

俺が気付いてないだけで皆そうだと思うし、俺が解っていないかっただけで昔からそうだと思う。ただ、自覚するとしんどいだけで。

「おめでとう。俺も今テスト全部終わった」

取り敢えず石黒にラインを送っておく。

『お疲れ様(\*、\*)』

あいつ今日は部活じゃないのか。今昼間だけど。……あ、そういやグラウンド男子サツカー部が使ってたわ。

どっか行くかなー。姉ちゃん家居ねえし。

どちらにせよ着替えたいたので取り敢えず一度家に帰るか。

「あれ?ハルト?」

「んあ?……あつ」

学校を出たところで呼び止められた。少し日焼けしている赤茶色の髪の毛のお兄さん。サングラスを掛けているその姿はプールとかにいるちよつと柄悪めのパリピ……みたいな人。マジか、こんな所で会うとは。

「郁也さんじゃん」

郁也さん。姉ちゃんの元カレである。半年くらい前までは付き合ってたんじゃないかな。結構ノリの良い人で、たまに家にも遊びに来てたから俺も仲良くさせてもらってた。なんならラインも知ってる。

「久しぶりだなあ。お前ここの高校行ってたんだ、妹もここなんだよ」「マジで?」

まあ、俺交友関係狭いから知り合いじゃないと思うけど。

「テストの結果が散々だったからカラオケ奢れ!」って妹に言われて学校まで迎えに来たんだよ。ハルトも来るか?」

「いや妹知らねえから気まずいっしょ流石に」

カラオケはちよつと行きたいけど。取り敢えずなんかあったらカラオケで叫ぶのが俺のやり方なので。

「雨、元気してる?」

「姉ちゃん?クソほど元気だよ」

たまには休めってくらいには。

「郁也さん新しい彼女出来たの?」

「二ヶ月位前に告白されてなんとなく付き合ってみたけど振った」

「なんで」

「合わなかった」

そういうこともあるのか。姉ちゃんとは一年半位付き合ってたから結構長かったのかな。

「あそこまで体目的っぽく来られたらセフレでいいわ」

「昼間っから学校の前で生々しい話するのしんどいからやめて」

工事現場勤めだったっけかな。郁也さんの体つきはすごくカッコいい。綺麗なマッチョ、って体してる。

「あ、妹来た」

「え?どの子……え?は?マジで言ってる?」

「……なんで兄貴と神崎と一緒に居るの」

「あれ?香澄、知り合い?」

まじかよ。

俺の狭い交友関係の中で微かに繋がってる赤髪ヤンキーの女王様、

織田香澄が郁也さんの妹だった。

成程、染めてる髪の色似てる。

「同じクラス。てかなんで兄貴と神崎が知り合いなの」

「ハルトのお姉ちゃん、俺の元カノ」

「あー、結構前にラインのアイコンだった人」

こんなことってあるんですね。世間って狭い。というか郁也さんの名字、織田ってこと初めて知ったわ。

「知り合いで良かった。ハルトもカラオケ来いよ。奢るぞ？」

「えーと……」

この場合、どうしたら良いのだろうか。

~~~~~

「採点機能付ける？」

「どっちでもいいよ、早く歌おうよ」

ついてきました。というか車に乗せられた。

いや、カラオケは確かに行きたかったけど、そんな兄妹水入らず、みたいな所に転がり込んで良かったのだろうか？迷惑な気がするんだが。しかもこういう場合、何の曲入れたらいいか迷うんだよな。取り敢えず郁也さんと織田の入れる曲から流れを予測しないと……。

「……神崎の前で歌うの、なんか恥ずい。先歌ってよ」

「絶対やだね」

そういやこいつヒプマイ好きなんだっけ。意外とオタジャンルの曲も入れても大丈夫な感じなのか？……いや、郁也さんがいる前で織田がそっち系統の曲を歌うとは思えん。学校では擬態してる訳だし。

「郁也さん何歌うの？」

「俺？割となんでも歌うけど」

「俺、郁也さんの歌聴きたい」

「あー、俺から？何入れっかなー……」

目線で「よくやった」みたいに語りかけてくる織田に笑った。最初に歌うのは嫌だったらしい。気持ち解る。最初つて何入れたらいいかマジでわからん。カラオケ一曲目の為に作られたボカロ曲とかあった気がする。

「んじや最初だし無難にいくかー」

郁也さんが入れたのは祈り花。うわあ、センスいいなあ。俺その曲好き。

郁也さんの歌唱力は普通に高かった。なんというか、安定して上手い。きつちり音程合ってるし聴きやすいし……なんか最近皆歌うまいよね。

「じゃ、次ハルトな。大体歌うジャンルつて雨と同じだろ？」

「姉ちゃん、郁也さんという時は何歌ってたの」

「うーん……色々」

とても解りやすい答えをありがとう。

今の気分に合わせてる曲でも入れるか。今の気分、今の気分……？あ、これでいいや。

「それ、アタシらの世代じゃなくない？」

「好きだからいいんだよ」

globeのFaces Places。なんとなく思い切り歌いたかったし、これにした。ちよつと長めの曲をいきなり入れるのもどうかと思つたが、まあ気にしない。

踊り疲れた夢なんてありやしない。俺がどうしたいかなんて誰にも解らない。誰か、汚れた俺を拾ってくれ、救ってくれ。一オクターブ下で叫び散らした。

「……神崎、あんためちやくちや歌上手いじゃん」

「すげえな。そういうや雨も上手かったっけ」

なんかめちやくちや褒められた。何故か知らんがうちの家族は皆異様に歌が上手い。俺はあまり上手くないと思つてる（実際家族では一番下手だ）が、人前でガチで歌うとびっくりされたりする。

「アタシこの後に歌うの普通にイヤなんだけど。ハードル高い」

「さつさと歌え。俺ちよつと喉休める」

「えー……」

織田が入れたのはONE OK ROCKのWherever you are。こいつも中々センスいいじゃねえか。やっぱオタジャンルは隠していくつもりなのか？てかこいつも普通に上手い。「歌い終わってから気付いたけど神崎の前なら擬態する必要も無いのか、オタバレしてるし。アニソンとかじゃんじゃん入れよ」  
「やっぱり擬態してたのか。というか郁也さんの前では擬態してないのね。」

「あー、あれだぞ。こいつ普通に家にBL漫画とかあるから」

「兄貴っ！言わなくていいの!!」

「マジ?」

「忘れるバカっ!!兄貴もさっさと次入れてよ!!」

結構深みにハマってるオタクじゃねえか。

なんとなく郁也さんがあの姉ちゃんと一年半位付き合ってる理由がわかった気がする。オタ趣味に抵抗ないタイプの人だ。見た目そんな感じじゃないのにな。

郁也さんが入れたのは地球最後の告白を。あ、思いつ切りボカロ曲とかも歌えるんですね。

……これ、サンホラとかは流石に封印するべきだろうけど姉ちゃんとカラオケ行くのと変わらない気がしてきたぞ。

~~~~~

郁也さんの「色々歌う」と言ったのはマジだったらしく、洋楽、ロック、アイドル、ボーカロイド、アニソンと本当に色々なジャンルの曲を歌っていた。織田も同じように多ジャンルを歌う。本当にこれ姉ちゃんと来てる時と遜色ないぞこれ。

「アンタ、Kも知ってるの?」

「作画に惹かれて観てた。この歌好きなんだよ」

「それ、イメージソングだっけ」

「そう」

俺は叫び散らすような歌が、バラードかの二択で攻めていたけど、ここでパターンを変えてみた。angeliaのいつかのゼロから。ラスサビの歌詞を無性に歌いたくなつたのだ。今の俺が泥だらけだからかもしれない。輝ける炎は何処にあるんだろうな。王に仕える人生なら……王に一生を捧げることだけを考えて生きていけたかもしれない。それはそれで楽なのかもな。

「……ちよつと休憩」

歌い疲れた。

「神崎、アンタそれだけ上手いならアタシと組んで文化祭有志の出し物で歌わない？」

「やだよめんどくせえ」

只でさえ実行委員みたいな面倒臭いの。演劇は脚本までやつたらあとは全部詩織に投げよう。出店はちよつと作戦思いついたしそつちにかかりたいし。

「……そういえばさ、これ聞いていいのか解らないけど。郁也さんさあ」

「ん？俺？」

「うん。なんで姉ちゃんと別れたの」

ぶつちやけ家に遊びに来てた時もかなり良い雰囲気だったし、（俺がいたからかもしれないが）必要以上にイチチャイチャもしていなかった気がする。なんというか、安定していた。だから別れた、って姉ちゃんから聞いた時はちよつとびっくりした記憶あるんだよな。あの後三日位姉ちゃん沈んでたし、勝手に振られた、と思ってたんだが実際どうだったのかは聞いてなかった気がする。

「あー……あいつと別れた理由な。まあ、譲れないものがあつたというか……コードギアスで誰推しかで争って別れた」

「は？」

「兄貴、それマジで言ってる？」

「いや、俺らの世代だとこれ結構バチバチ争うもんだぞ。ルル派かスザク派か、とかカレン派かC・C・派か、とか。俺はシャーリー推しだったんだが雨はシャーリーがあんま好きじゃなくて喧嘩した」

「くっだらな！兄貴バカでしょ？」

いや、確かに姉ちゃんはシャーリーがあまり好きじゃなかった記憶があるけど。え？それが原因で別れたの？オタクの恋愛難し過ぎない？推しが違ったり解釈違いが生じたら拗れるの？無理じゃね？

「……ごめん、流石に嘘。なんというかなあ、俺くらいの歳になると結婚もちよつと考えてくるんだよ。雨のやつはまだ当分結婚するつもり無さそうで、その辺りでちよつと揉めた……って言うのが正しいのかな。別に嫌な別れ方したとかそういう訳じゃないけどな」

結婚。

そっか、郁也さん姉ちゃんより二つ年上だったっけ。二十五か。確かにちよつとずつ結婚も考え始める歳だわな。

対する姉ちゃんに結婚するつもりがまだ無かった、って訳か。確かに郁也さんは結婚も視野に入れたお付き合いのつもりだったが、姉ちゃんはまだ結婚を考えられない、って言われたらまあ、揉めるだろうな。

「こういう話は蓋さえ開けてしまえば大した話でもないだろ？なんならたまにまだ雨とラインでやりとりしてるぞ」

「マジかよ」

「兄貴にいい女が転がり込んでこないのはその辺りに理由があるね」

姉ちゃんもそうなんじゃねえの？そろそろ男見つけるよマジで。

「ハルトはいないのか？彼女」

「いない」

ちよつとその話するのやめてくれ。今ちよつとダメージ受けるから。

「まあ、お前雨に似てるもんな。雨もそうなんだけど「威嚇してるからな！近寄んなよ！」みたいなオーラ出てるんだよ。こう、内側に魅力は詰まってるけど、それを針と鎧で塗り固めて見せてない、みたいな。グイグイ来る奴はその良い部分に触れられるけど、そうじゃなかったらあまり好かれないタイプなんだよな。……しんどいだろうけど、まあ頑張れ。愚痴ライン位なら聞くぞ？」

「郁也さん流石。落とし方を解ってるね」



「ははっ、俺がヤリチンみたいに言うのやめろよ」

威嚇してるつもりは無いんだけどな。

ただ、姉ちゃんと結構付き合ってただけあって、なんか姉ちゃんが喜びそうなこと言うのは上手い。基本俺と姉ちゃんは似てるので、つまり俺もそういうことを言われると嬉しいもんだ。今の、俺が女ならイチコロで惚れてるね。横で織田が呆れているが気にしない。

「神崎の尖り方でグイグイいける女子なんてそれこそ幼馴染の詩織位でしょ」

「あれはグイグイ来るといっつか、戦車がキヤタピラで蹂躪しに来る感じだぞ。ガールズアンドパンツァーだぞ」

「……ふふっ、ちよつと想像したら笑える」

というかお前も割とグイグイ来るよな。こいつはその鎧に向かって槍刺しに来てる感じあるけど。

「そろそろ出るか。悪いなハルト、付き合わせて。家まで送るぞ」

「マジ？車で？乗せてもらおう」

姉ちゃんから『家帰ったらお前居なかった。どこほつつき歩いてんの』というラインを見るのはもう少し先の話であった為、家の前に着くと姉ちゃんと郁也さんが鉢合わせするという事実を知るのももう少し先……というか後の祭りになってからの話である。

見に行きたい。

「そんな、馬鹿な……」

信じられない。

マジかよ。これは夢か？

「平均点めちゃくちゃ高い……」

俺と高見のテストが返却され、通知表も一緒に渡されたのだが。

なんか過去最高点を更新した。現代文に関しては何んかクラス一位らしいです。正直どんな答え書いたか覚えてなかったので実感が無さすぎた。

高見は結構ヤバイ点数が幾つかあったらしく、かなり渋そうな顔をしていた。まあ、あいつテスト終わってから部活行ったりしてたもんな。いや勉強しろよ。

ちなみに通知表もテストも職員室で返却されたので、物凄く気まずかったです。まあ職員室クレーヤー効いてるからそういう意味では快適だったけど。

今日は特に学校に残る用事も無いのでさっさと帰ることにする。夏休みの課題も中々に笑えない量あるし。……大学のオープンキャンパスのレポートとか何書けばいいか解らんしそもそも特に行きたい大学とか決まってる。どうしようか。

「やつほ、神崎君」

「んあ？あー、石黒。テスト大丈夫だったんだってな、お疲れ様」

「うん、全部回避した！ホントにありがとね、怪我もう大丈夫？」

「なんとかな」

女子サッカー部のユニフォームを着て、額に汗を浮かべた石黒と出くわした。今日は動くからだろうか、髪の毛はしっかりポニーテールである。

「今お昼休憩なんだよね、ご飯一緒に食べない？」

「あー……家に作り置きあるから、飯は遠慮しとく。学食の唐揚げ位なら食うけど」

食べなかったら姉ちゃんに半殺しにされるからね。

「おっけー！じゃあ弁当持って食堂行くから先行つといて！」

そう言い残すと石黒はとたたと擬音が聞こえてくるような駆け足で部室の方へ走り抜けて行った。うわー、足速い。トップ下って足が速い方がいいのかな。スポーツはなんでも速いに越したことはないか。

というか俺が石黒に付き合うことは確定らしい。

〃〃〃

「弁当でかくね？」

「そう？これくらい食べないとやっていけない」

唐揚げは売り切れていたので購買で小さなドーナツを買って食堂の適当な席に着いたのだが、石黒の弁当箱がでかい。タッパーかよってレベルででかい。そういやこいつサイズでもめちやくちや食べてたな。

「てふとどうらっは？」

「飲み込んでから喋れ」

「んー。……んっ、テストどうだった？」

「めちやくちや良かった。俺もびっくりしてる」

「えー、やったじゃん！怪我の功名だね」

「使い方間違えてるけどな」

マジで怪我したんだよ。しかも多分その怪我関係無いし。

「ねえ、赤点回避したことだしさ、ホントに練習試合見においでよ」

「あー、そんなこと言ってたな。いつなんだよ」

「明日」

急すぎる。

「別に予定は無いから行けるけどさ、俺が見に行つていいもんなの？」  
「いいもんなの！応援は沢山いる方が頑張れる」

練習試合だから見に来る人少ないしー、と愚痴気味に零す石黒。人前に立つと本領を発揮するタイプなのか。

「何時から」

「二時半にキックオフだったと思う」

「勝つなら見に行く」

負けるの見てるとしんどいし。

「見に来てくれるなら勝つよ」

石黒が白い歯を見せて笑った。その笑顔はテスト前によく見ていた笑顔……とは少し雰囲気違った。

凄味がある。勝負師の目をしていた。

こいつ、マジですごいかもしれない。ちよつと怖かった。

一瞬、言葉を失った。沈黙の中、石黒が弁当の中の卵焼きを食べる。

「……じゃあ、行く」

「まい？ やつふあー！」

「飲み込んでから喋れ」

実際、石黒が全力で打ち込んでるものってどんなものなのか、っていうのは興味あるし。

「ごちそうさまでした。……ねえ、私思うんだけどさ」

「なに」

「神崎君、って言いにくいんだよね。六文字もあるじゃん？ 長い」

人の名前呼ぶ時に文字数数えてる奴初めて見た。しかも長いって。割と名字が四文字の奴いるだろ。「石黒さん」でも六文字だぞ。

「という訳で、私もハル、って呼んでいい？ もしくはハル君」

「呼び方くらい好きにしろよ。別にいい」

「やったー！ じゃあハル君って呼ぶことにするね！ ほら、詩織ちゃん  
はハル、って呼ぶじゃん？ あれ可愛いなー！ っと思ってたんだよねー」

詩織はずっと俺のことハルって呼ぶな、そういえば。いつからだっ  
たかとも思い出せない。

俺のことをハルって呼ぶのは詩織だけだ。理恵さんはそれに君が  
付く。つまり、今思えば日高家の人しか今まで俺の事をハル、って呼  
ぶ奴はいなかった訳になる。

まあ、名前の呼び方なんて本当に誰に何言われようとどうだってい  
いのだが。

「……これ聞いちゃいけないかもしれないけどさ」  
「んあ？」

「ハル君、詩織ちゃんとなんかあった？」

あー。

なんでわかったんだ？

正確に言えば別に何も無かった。俺が気付いてなかった初恋に気がついて、それがただ散っただけで。関係性が変わったとかそういうのも一切無い。

「あつたといえばあつた。無かつたといえば無かつた」

「何それ」

「どうでもいいことだよ」

本当になんでわかったんだ、こいつ。

「……私がさ、詩織ちゃんの名前出した時にさ。ちよつとしんどそうな顔したんだよね。私が初めてハル君に声掛けた時みたいな」

初めて声を掛けられた時……あー、詩織の元彼と思われてた時の話か。俺、そんなにしんどそうな顔してたのか？今も、その時も。

「まあでも、しんどいよね。私幼馴染とかいないから解んないけど、お兄ちゃんに彼女出来た時、なんとなくめちやくちやムカついたもん。うがー！って感じだった」

うがー！って感じはちよつと解らない。

「だから明日は私がズバツと勝つところを見て楽しもう！ね？ちやんと来てね」

「なんだそりゃ。わかったよ、行く」

こいつなりの気遣いなのだろうか。

石黒と一緒にいる時は大体食堂な気がするな。サイゼも広義の意味で捉えたら食堂だし。違うか。

グラウンドの上の石黒を見るのは初めてになるんだろう。

くくく

「ただいま」

「おかえりー。遅かったね」

あれ、姉ちゃん今日仕事じゃなかったっけ。なんで家に居るんだ？  
「シフト表の手違いであたし今日休みだったらしくてさ。行つてすぐ帰ってきた」

「成程。飯食うわ」

「先着替えてきたら？チンしといてあげる」

「サンキュ」

お言葉に甘えて先に着替えることにする。もう外に出る用事も無いし適当な部屋着でいいや。少しヨレたシャツと千円のジャージを履く。リビングに戻るとレンジで温められたチャーハンが机に鎮座していた。

「姉ちゃん、たまにはワガママ言つていい？」

「何よ」

「飯食つたら久々にゲームしよう」

「そんなこと？別にいいけど。ワガママって言うから夜お寿司食べた  
いとか言うのかと思った」

あ、それもありだな。

まあ別にそこまで特別お寿司が好きって訳じゃないんだけど。

~~~~~

「おら死ねっ！下スマ！」

「はあ!?今の当たり判定おかしいでしょ!？」

全力でスマブラをする高校二年生の弟と社会人の姉。今んとこ五勝六敗である。姉ちゃんスマブラは上手いんだよなあ……。ステージは終点のアイテム無し。俺のファルコンパンチが火を吹くぜ。

「ああ!?躲された!」

「バーカ!はい投げ!復帰阻止!ヤバイ超楽しい!」

「弟に手加減とか無えのかよクソ姉貴!」

「手加減したらアンタに負けるでしょ!？」

仲はいいけどゲーム中は暴言が飛び交うのが神崎家です。

てかやばい。残りストックがもう無い。ワンミスも許されない。

「うっわ何今のえっぐ! やばい死ぬ死ぬ」

「バーカ死ね!」

「くっそ悠長にアピールで煽ってきやがるうっぜえ!」

「煽られる方が悪いのよ?」

友達無くしちまえ! アピール煽りで友達無くしちまえ!!

「はー、久しぶりにやると楽しいね。お茶入れてくるわ」

「あいよ」

キャラクターセレクトの画面のまま放置して姉ちゃんがお茶を入れに行く。俺もコントローラーから手を離して、指を適当にほぐしていた。いやほんと指先が痛くなる。

「はい、お茶」

「サンキュ」

一息つく。

……あ、そうだ。聞きたいことあったの思い出した。

「なあ、姉ちゃん」

「んー?」

「郁也さんと別れたのって俺が理由?」

多分、そうだろうな。そんな気がする。

郁也さんの話を聞いた限りじゃ、そうなんじゃないかって思うんだ。

学校で、石黒に「詩織と何かあったか」って聞かれた時。俺は「大したことじゃない」って言った。多分、俺にとってもあいつにとっても、大したことだったと思う。

だけどなんとなく、見栄はりたくて、石黒とも気まずくなる気がして、言えなかったんだよ。

多分、郁也さんもそうだ。ルルーシュ派だとかスザク派だとかでごまかして、「大したことじゃない」って言ったけど。多分、あれは俺を騙す為の、傷つけない為の嘘だ。嘘というか、言えなかったんだ。

「あんた、昨日郁也からなんか聞いたの？」

「別れたのは結婚の意思の認識の差、みたいな感じに聞いた。姉ちゃんが結婚を考えられなかった理由、俺がまだ高校生だからだろ？」

「……はー。あんたつて変なところ勘が鋭いよね」

やっぱりそうか。

俺と姉ちゃんは似てる。多分、もう暫く……具体的に俺が大学を卒業するまでかな。それまでは姉ちゃんは結婚するつもり、無かったんだと思う。でもそうなるかと五、六年先だ。それまでに結婚したら、父ちゃんも、母ちゃんも、そして姉ちゃんまで俺の側から離れるかもしれないから。

傲慢かもしれないけど、姉ちゃんは俺を放ったらかしにしてそういうことは出来ない。

「……勘違いしないでね。あたし、今の生活気に入ってたんだよ。あんたをちゃんと面倒見るのも楽しいし、たまに詩織ちゃんが来て、仕事して、友達と遊んで。しばらくはその生活をしていただけなの。こうやってさ、あんたとアホみたいにゲームしてるのだって楽しいしさ」

無理している。ちよつと解る。

多分、あの時珍しく三日位沈んでたのは、それ程に郁也さんが良い人だった、つてのもあるんだろうけど、俺に振られた（振った？）理由を愚痴ることが許されなかったから。自分で抱え込んでたんだろーな。

アホじゃねえの。俺に当たればいいのに。

「……俺は、姉ちゃんが結婚してもそれなりに一人で頑張れるけどな。最悪母ちゃんと父ちゃんの出張先に引越すし。気まずいけど」

「あんたがあたしの婚期に口出しすんじゃないよ。……大丈夫。婚期遅れちゃっても、あたし顔と性格がいいからさ、婚活パーティーとか行ったら引く手数多になるからさ」

「性格が良い奴はアピール煽りなんかしないけどな」

「うつせえクソが。まあ郁也は良い奴だったけどねー」

思い出すのは車で郁也さんに送ってもらった時に鉢合わせた姉



ちやんと郁也さんの雰囲気。険悪では無い。だけどカップルだった時みたいな良いムードでも無い。

なんというか、収まってる感じ。そこにいるから、そこにある。無理はしていないが完全にリラックスしている訳でもない距離感。

互いが互いの距離感を把握している感じ。

多分、姉ちゃんも郁也さんも、今でもちよつと好きなんだとは思いますが、多分二人はもう一回よりを戻すってことはしないとも思う。

その距離感が、定着してしまっただから。

一度掴んでしまった距離感は、簡単に覆らない。

俺も、詩織も、幼馴染ですつと一緒にいた頃の距離感以外が解らない。だから俺もしんどいし、多分あいつもしんどい。

「……なんかいうかしんどいわな」

「あんたが辛い思いしてるのはあんたのせいじゃないよ。あたしと一緒に、貧乏くじ引くタイプだから」

そんな所まであたしに似なくてもいいのにさ、と続ける姉ちゃん。

「ほら、さっさとキャラ選べな」

「……おー」

それでも時計の針は左には回らないし、心がリセットされることは無い。だから、取り敢えずは今を楽しむのだ。今は、泥だらけの心を洗うのが出来なくても。上から綺麗な絵の具で塗り固める事くらいは出来るから。

「あ、俺明日女子サッカー部の練習試合見に行くから」

「ふーん。行ってらっしゃい」

ステージは終点、アイテム無し。

夏休みの終点が来るまでには、何か面白いアイテムを持っていたいよな。コバとモテる大作戦やっても無駄だとは思いつ、どうしたもんかね。

「だああ！なんで今のガード出来んだよ!?おかしいって絶対」

「はい横スマ……うっそ、今の避ける!？」

「おらりベンジじゃ喰らえ！いよつしやあ！ざまあみやがれ！」

「うっぎ！姉貴に手加減とか無いの!？」

「手加減したら負けるだろ!？」

取り敢えず神崎家は平和である。

……ワガママを言うなら、確かにもう少しの間。あと三年くらいは、こつやつてアホみたいにゲームをしたいかな。姉ちゃんには結婚して欲しいけどして欲しくない。

## 番外編 テストのけっか

英語

次の日本語を英語に直せ。

驚くべき、素晴らしい

神崎晴人の解答

Marvelous

教師のコメント

正解です。

高見玲音の解答

wa o

教師のコメント

驚くべきでワオ!ですか。発想は面白いですが間違いです。

石黒凜花の解答

b i k k u r i !!

教師のコメント

ビックリマークを付けて驚いてる感を演出しても間違いです。

現代文

次の単語の読みを答えよ。

自尊心

日高詩織の解答

じそんしん

皆川ちゃんのコメント

はい、正解な。

石黒凜花の解答

じとうしん

皆川ちゃんのコメント

なんとなく覚えてたことは解った。

織田香澄の解答

自尊心が行き過ぎたから李徴は自我すら失って虎に成り果てたけ

ど、きつと袁☒はそんな李徴すら受け入れて、虎の姿でも人の姿でも愛情で心を溶かして……（以下長文が続く）

皆川ちゃんのコメント

誰がBLにしろつつつた。自尊心の読みを書け。

日本史

御家人が高利貸しからの利息が払えずに困窮していた際、御家人の借金を帳消しにする、という令が出された。この令をなんと言うか。

日高詩織の解答

徳政令

高見玲音の解答

徳政令

神崎晴人のコメント

まあ簡単だよな。

石黒凜花の解答

ほのぼのレイク

神崎晴人のコメント

あれほど教えたのに……！解らなくても適当なこと書くんじゃねえよ……！

石黒凜花のコメント

ごめん！何も書かないよりはマシだと思った！

~~~~~

「……あのさ、石黒」

「なに？どしたの？」

「お前本当に赤点回避したの？」

「した！結構危ないのもあったけどね」

多分危ないというかストレスだろうな。ほのぼのレイクは無いわ。笑えねえし。あれだけ教えたのに間違えられるから余計に笑えねえ。

「……あ、そーいや詩織と点数勝負してたんだ。あいつ平均点何点なんだよ」

毎回俺に負けてる上に、今回に関しては俺は自己最高レベルの出来だ。負けるはずが無い。

「……おい逃げるな詩織、お前平均幾らだよ」

「うっ……聞かないで」

「こいつさては相当悪かったな？」

「賭けは俺の勝ちだな。何奢ってもらおうかな」

「あんまり高いのはやだなー」

「やっぱ焼肉か？人の金で食べたら美味しいものランキング一位に焼肉か？いや、ちよつとオシャレなレストランで Pasta と 피자、なんかもいいかもしれない。もしくは寿司？回らない方のお寿司屋さん、行っちゃおう？」

「いや、やっぱ夜は焼肉つしよー!!!」

「むー……圧倒的に負けたから何も言えない……」

「……なんつって。冗談だよ。飯はいいからさ。代わりに頼みがあるんだ。すっげえ真剣な頼み」

「……え、何？」

「俺を恨まないでくれ」

「はっ!」

目が覚めた。

「……夢か」

午前五時。まだ寝れるな。

……それにしても、夢の中のハルは、どうして私に「恨まないでくれ」って言ったんだろう。

真摯に向き合いたい。

「うわー、まばらな人」

我が校のサッカーグラウンドの脇に添えられた、気持ち程度の観客席にはちまちまと人が座っていた。普通に観客席じゃない所に地べた座りしてる人もいる。

二時十分。グラウンド上では既にユニフォームを着た選手達がアップがてら軽く動いている所だった。適当に空いている場所に腰掛けて、俺を呼んだ張本人である石黒の姿を探す。

「……あ、いた」

オレンジ色のユニフォームを着て、ベンチの近くでボールをコロコロと蹴っている石黒。いつもの天真爛漫！といった感じではなく、やる気！元氣！強氣！みたいな感じだ。なんか、こう、オーラが出てる。練習試合の相手チームはどうも県外からバスで来たチームらしく、全国大会の出場も狙える程の強さなんだとか。まあ我が校も狙おうと思えば狙える位なので、同じ位の強さなのではないだろうか。

……それなら別にこの土のグラウンドじゃなくてさ、どっか芝生のグラウンド借りたら良かったんじゃないかねえの？公立校だから部活に回すお金があまり無いのは解るけどさ。

先にコンビニに寄って買っておいちごオレにストローを刺している、グラウンドから選手の姿が消えていった。そしてベンチで監督を中心に円が組まれている。お、作戦会議って感じ。必殺タクティクスとかあるのかな。それともジャイアントキリングみたいの名采配とかあったりする？

口の中が甘ったるくなりだした頃、選手達がそれぞれのポジションについた。オレンジのユニフォーム、かっこいいな。相手の白も綺麗だ。……あ、相手のデیفエンダーの子、可愛い。

先攻は我が校らしい。二時三十分。キックオフのホイッスルと共に、俺の初めての女子サッカー観戦が始まった。

くく

「うう……うーん？」

これどうなんだろう、押してる……のかな？

前半も残りわずか。そもそも俺のサッカーの知識が乏しいせいもあるのだが、どつちがどのくらい有利なのか解らない。うちのフォワードの先輩二人は背が高いので（片方は170超えてるらしい）無理矢理高いボール上げて合わせてるが、キーパーがめちやくちや手いんだよ。あとあのディフェンダーの可愛い子。あのポジションはセンターバックっていうんだっけか、あの子がすげえ献身的に守備してる。なんというか、シュートコースがすげえ絞られてるんだよな。そうやって守られた後のカウンターが早い。けどなんだかんだで点は取られてない。

石黒はなんというか……相当動きにくそうにしている。何かずつとマークされてるんだよな。ボールには触ってるんだけど、前の二人にパスさせて貰えない。というか前に蹴れなくて後ろに戻さざるを得ない感じだ。きつちり潰されてる。

もしかして、石黒つてそんなにマークしないとヤバイやつなのか？前半がアディショナルタイムに入った。こつちのボールだ。攻め込むのはラストチャンスか？

コート中央辺りでボールを回している。おい、あんま時間無いんだぞ、早く攻めろよ。あと一分位しか無いぞ。

ボールが前に出て……石黒がそれを受けた。けどどやっぱりマークが厳しい。あのマークしてる奴ゴリラじゃん。誰だよ女子サッカー部に男子混ぜた奴。髪短いから余計男子に見えるわ。

多分ここが前半ラストプレー。必死にマークを外そうとしているんだが、ゴリ子の奴、見た目に反して意外とすばしっこい。あんなゴリラ反則だろ、キーパーもゴリラみたいだしさあ。おい、時間無いぞ、早く……！

「決めろよ石黒！」

無意識に叫んだ。つい言葉に出てしまったてらしい。

そして俺が無意識に声に出した瞬間、石黒が無理矢理ミドルシュー

トを蹴った。多分、本当に一瞬ゴリ子の向こうにゴールが見えたんだろう。徹底的にマークしてたゴリ子の脇を抜けてすんげえスピードでゴールに迫る。

しかしあのキーパー、ゴリ美の反応が早かった。キャッチはできなかったものの石黒のシュートをしつかり弾き、ゴールを決めさせてはくれなかった。

「だぁーくっそ、ゴリラシスターズめ！」

だけどまだボールは生きてる、フォワードの先輩とあの可愛いディフェンダーの子がボールに向かって走り……

ディフェンダーの子が思い切りクリアしたところで前半終了のホイッスルが鳴った。

観てて疲れる。なんせあのゴリ子、容赦が無いから石黒吹き飛ばされるんじゃないの？って思わないでもないわけよ。しかも基本的にサッカーって、バスケみたいにめちゃくちゃゲームスピードが早い訳じゃないから、普通にぽけーっと観てるんだよな。だけど石黒までボールが回ってる時はそりやあもう得点のチャンスな訳でしつかり観ようとするから、こう、気持ちを追いついてこない。

にしてもあのゴリラシスターズは反則だわ。ちゃんと檻の中に入れてとけよな。ちよつと前にジャンプでやってた少年サッカーの漫画に居たヒロインの子、よく男子相手に戦えたなって感心するわ。セクターバックの子が余計に可愛く見える。けどあの子が最後に上手いことクリアしたから前半に点が取れなかったんだよなあ……かわいからゆるす。ゴリラシスターズなら許さなかったが。

「……暑っつい」

よくこんな暑さの中プレー出来るよな。そりや石黒も日焼けするわ。いちごオレがちよつとぬるくなっている。

後半がもうすぐ始まるらしい。選手達がまたグラウンドに現れた。次は相手のボールから始まる。

勝つって言ってたんだから勝てよな。

石黒が、こつちを見て笑った気がした。あー、叫んだの聞こえたかな？いや、気の所為かもしれんが。というか多分気の所為なんだと思



うが。

後半開始のホイッスルが鳴らされた。

くくく

後半から我が校の攻め方が変わってきた。

前半は縦に高いボールを上げて、背の高いフォワード二人がそれを受け、というわかり易く身長差の暴力を仕掛けていたのだが、後半に入ってから縦より横に広げたパスを増やしている気がする。まあ、確かにさつきまでその作戦で前に運んでもしっかりシュートコース絞られてたからな。コートを広く使ってディフェンス陣を掻き乱したいんだろう。

どうも我が校の女子サッカー部は高い攻撃力が売りらしく、とにかく攻める。守りが薄い訳じゃないのだが、割と常にフォワードのどちらかは前にいて、あまり守備にも参加していない。そして後ろでボールを奪ったらすぐに前に蹴る……というのが定石らしい。石黒は最前線の少し後ろでボールを受けて、ゴールアシストを決めるのが仕事らしいのだが……まあ、今日はゴリ子にしてやられている。

そんな「ガンガンいこうぜ！」みたいなチームだが、ガンガン行かずに広くコートを使う「バツチリがんばれ」的な作戦もしっかりとこなしていた。中盤でボールがコロコロと回る。攻めの突破口を探ってる感じだ。

「じれったいよなあ」

こうなつてくると、サッカーの試合展開はゆっくりになつてくる。まあこれだけ暑いし、後半も始まったばかりだから、スタミナ管理とかもあるんだろうけども。観てる側としてはこう、でかい動きが欲しいよな。いきなり化身とか出てきたら燃えるんだが。

……あ。石黒が走った。パスを貰う気か？当然のようにゴリ子がマークする。今のまま貰うと前半と同じで戻さざるを得なくなるぞ？

……いや、なんかさつきに比べてあいつ足速くね？ゴリ子が置いて

いかれそうになってないか？今ならゴリ子を抜けるのでは？

パスが出る。ちよつと遠いか……？あれ間に合うか？いや、あれ間に合うぞ？あれ、間に合うぞ!?

まばらな観客が湧き始める。すつげえ決定機になるかもしれない。ゴリ子を抜いたら石黒はフリーだ。あの足の速さならあの可愛い子も既に間に合わない。いける！

「いけるっ、いけっ!」

ボールに間に合い……ああっ!?!ゴリ子てめえ今のはファウルだろっ!?!絶対今のわざとだろ!?!石黒が勢いよく転ぶ。痛い。あれは多分痛い。

「ゴリラあー野生に帰れっ!」

ホイッスルが鳴った。あ、やば。ヤジ聞こえちゃいました?……あ、違った。ゴリ子にイエローカードだ。……まあ、相手視点から見たらあれファウル貰わないと止められなかっただろうしな。くそっ、ゴリ子上手いな。

石黒は特に怪我とかも無かつたらしく、そのままフリーキックのキッカーになっている。直接シュートを狙ってもいい、少し高めのボールを上げてフォワード二人に繋いでもいい、敢えて普通にパスを出してもいい。いいポジションだ。どうする……?

石黒が助走をつけて思い切りボールを蹴った。あれは……直接狙いに行った!いいんじゃないのか!?!位置的にはディフェンス陣を上手く抜けてる!あとはあのゴリ美の反応次第……!

「……うわあまじかよ!?!今の入んねえの!?!」

ゴリ美上手すぎじゃね!?!ちよつとその守備力日本代表にくれよ。かなり良いコースに飛んで行った石黒のシュートはまたもやゴリ美に阻まれた。だが弾いただけで、しかも弾き方も良くなかった。そのままコートから外れていく。コーナーキック獲得だ。まだまだ得点チャンスである。

コーナーキックのキッカーは三年生のミッドフィルダーの人だ。さつき石黒にパスを出した人。ここはやっぱりセンタリングを上げて身長差を活かすのか?どう考えてもそれが一番得点になりそうだ

が……？

蹴った。やっぱり高いボールだ。場所も悪くない。ゴリ子、先輩方、可愛い子も同時にジャンプする。いける。先輩が頭一つ抜けてる！そのままヘディングシュート。これは決まっ……らない！

「はあっ!？」

ゴリ美！そんなに頑張らなくていいから！ボールは弾かれてジャンプしていた選手達の脇を通り抜ける。

「……あっ」

観客がまた湧いた。

一人だけそのボールの行き先に飛び込んでいる選手がいたのだ。

石黒だ。

なんかもう確信した。これ決まるわ。

そのままダイレクトで蹴る。さっきまでのミドルシュートみたいな、めっちゃくちな勢いは無いけど、絶対外さない、みたいなボール。そのままボールと一緒に走り抜ける位の勢いで飛び込んでいる。

ホイッスル。ゴールネットが揺れる。

「うおおおおおっ!?!？」

観客が湧いた。

一点先制。決めたのは石黒だ。

グラウンド上で走り回ってゴールを決めた喜びをバタバタさせながら表してやがる。白い歯を思う存分見せて笑っていた。

すげえなあ。

かっこいいわ。

多分、あの位置のボールに飛び込めたのは運もあつたと思う。けど、なんかそういう運とか、勝ちに対する嗅覚がすげえ強い奴っていないじゃん？そういうものが備わってるように見えた。

簡単に言うなら、「勝利の女神に愛されてる」。なんか、そんな感じ。多分、そういう運つていうのは身に付けなきゃいけないもんで。

長い間、サッカーを楽しんでやって、好きでいて、真摯にやってくるから、そういう女神に見守られてる？そんな感じ。

努力があるから、運がついてきてる。

努力があるから、運が良かった時にそれをモノにできる。それが、すつげえかつこいい。

俺の周りって、そういう奴今までいなかったからなあ。

試合が再開された。

真摯にやって、努力する。

真摯に向き合うって、なんなんだろうな。

ふと思いつくのは詩織と二人で夜に歩いてた時のこと。実は中学生の頃から好きだった、って言われて。でも振ってくれって言われて。

多分、俺は好きだったって言われて舞い上がった。俺も、多分好きだったから。童貞が夢見る両想いってやつだ。だからこそ、振ってくれっていう言葉は来るものがあつた。

詩織は詩織なりに、高見と真摯に向き合う為にそういう事を言ったんだと思う。詩織なりに、俺と、俺への恋心と真摯に向き合う為にそういう事を言ったんだと思う。

俺はそれに真摯に向き合う事が出来なかった。俺も、詩織のことが好きだったから。高見っていう彼氏がいるのに、まだどこかで夢を見て、振ることが出来なかった。

よくよく考えてみたら「別にそういうわけじゃないのに寝取られた気分」とか思ってたが、今の俺の方がよっぽど寝取る気満々に思えてくるじゃねえか。

じゃあ、どうすれば真摯に向き合えたのだろうか。あそこで、ちゃんと言われた通りに詩織を嘘でも振らなきゃいけなかった？

そうしたら今度は俺の気持ちに真摯に向き合っていない。ジレンマだ。

最初から、二人ともずっと幼馴染のままが一番良かったんだと思う。変に異性として意識したからダメなんだよ。

高いボールが上がる。うわ、到着点石黒の所じゃね？やばい、ゴリ子相手じゃどう考えてもフィジカル負けする。……ああ、やつぱり。ボールはそのまま弾かれてあの可愛い子の下へ。鋭い縦パスで中盤までボールを運ぶ。あの子上手いなあ。相手チームは守備寄りの

チームなんだろうな。守って守って、カウンター！みたいな動きが多い。ソーナンスみたいだな。

後半もアディショナルタイムに突入した。このまま守り切れれば勝ちだ。今は相手ボール。こちら側も最後ということもあり、全員が下がって守備に回っている。多分、もう一度ボールを奪って前まで持っていけたらもう勝ちだ。

さっきコーナーキックを蹴った人がボールを奪った。すぐに縦パス。前に走っていた石黒にボールが渡る。これ、あいつまたシュート打てるんじゃないの？……いやダメだ。めちやくちやシュートを警戒されているのか、シュートコースにがちりゴリ子がいる。その後ろにはあの可愛い子も控えている。ここは落ち着いて後ろに戻して確実にボールをキープするべきか……？

石黒はそうしなかった。後ろではなく、斜め前に速めのボールを蹴った。そこに走り込む170越えの先輩。いやそれは流石に追いつけなくね!? だけど追い付いたらダメ押しの二点目が狙える。良い判断……なのかな？

「どうでもいいわ、ノツポさん！ 追いつけ!!」

タツパがあるから足も長い。足が長いから歩幅も広い。ノツポさんはギリギリで石黒の鬼畜パスに追い付き、そのままシュートを放った。ゴリ美の逆を付く綺麗なシュート。二点目だ。

そして鳴らされるホイッスル。練習試合は二対〇で我が校の勝利で終わった。

……石黒、ワンゴールワンアシストかよ。半端ないって。他のスタメン先輩ばつかやのにそんなんできひんやん、普通。

頼りたい。

『もしもーしー！勝ったよー！』

「お疲れさん。見てたから知ってる」

夜ご飯も食べ終わり、自室で適当に課題を進めていたら電話が掛かってきた。石黒だ。

あの後試合が終わったら俺はすぐに帰った。多分後片付けとかその他諸々色々あるだろうし、別に試合観たらあとはそれで良かったし。一応家に着いてからラインで「お疲れさん。すごかった」とだけ送信はしておいた。

「てか、お前マジで凄かったのな。ワンゴールワンアシストって大活躍じゃねえかよ」

『ふっふっふー。実は私、結構凄いです』

一切謙遜せずに言い切りやがった。でもまあ実際凄かった訳だし、あまり嫌味にも聞こえないし。素直に自分の実力をありのままに捉えてるんだろう。……こいつがアホだから謙遜という言葉を知らない可能性はあるが。

『前半の最後の方で一回だけ叫んでるの聞こえたんだよねー。ハルくんって意外と熱くなるタイプ？』

「意外もクソも、俺はいつだって全力ですぐ思ったことが口に出るだけぞ」

そのせいで終わってる、って言われたりするんですけどね。直す気は無い。というか多分直らない。

『あんな応援されたら頑張っちゃうよねー。やけにマークが強いから前半はずっと大人しくしようと思ってたけどついやっちゃったじゃん』

応援されると力が湧くってのはマジなのだろうか。いや、こいつに關しては応援されたからちよっと調子に乗ってみた、って感じか？今の話を聞いてる感じだと。

思った以上にゴリ子のマークが厳しかったから、前半は体力温存と「それだけマークされていたら何も出来ませーん！」ってアピールし

ていたらしい。そして後半から攻め方を変えつつ、隙を見て飛び出して前にボールを運んだり、あわよくば自分でゴールを決めようと狙っていたんだとか。

「てか他県の学校なんだろう？なんでそんなマークされてたのお前」

『あー、一月にも一回練習試合したの。その時は引き分けだったんだけど、その時にゴール決めたり決定機作ったりしてたからかな』

割と交流あるんだよね、あの学校と。石黒はそう続けた。

一月ってことはまだ一年の頃か。当時の三年は時期的に引退してはいるだろうとは言えど、すげえな。その時も決めてたのかよ。なんでこいつもっとすげえ所に居ないんだよ。絶対我が校以外にも引く手数多だっただろ。

『いやー、でもこうやって勝てたー！って喜べるのも試合に出れたのもハルクンのおかげだよ。ホントにテスト期間ありがとね』

「おう。俺も過去最高点取れたし問題ねえよ」

試合も勝ってたしそれなりに楽しかったし、まあ良かったのではないだろうか。

『じゃ、お風呂入ってくるねー！ばいばい』

「あいよ」

通話が切れた。

さて、俺も風呂入りますかねー。

少し前に何の気なしに脱衣所に入ると半裸の姉ちゃんと出くわした一件以降、風呂に入る時は先にリビングに行って、姉ちゃんに「風呂入ってくる」と一言置いてから入るようにしている。リビングになかったら基本的に風呂に入ってるからそのままリビングで待機だ。というわけで今日もリビングに入って姉ちゃんに一言かけてからいこうと思ったのだが。

「……何？その格好」

「んあー？」

ビックリするくらいだらしない格好でテレビを見ていた。タンクトップに下はパンツしか履いていない。その状態でクッション二つにもたれかかって大口を開けてテレビを見ているのだ。……この姿

が晒されたら多分当分はこの人彼氏できない。

「風邪ひくぞ」

「あー……そだね」

なんか様子がおかしい。飯作ってた時とかは割と普通に見えてたんだが……なんか顔赤くね？

「……酒飲んだ？」

「飲んでない」

姉ちゃんは酒にすこぶる弱い。一口飲んだら顔が赤くなるくらいには弱いのだが……今日はそういう訳でもないらしい。

まさかとは思うが。

「熱計った？」

「計ってない」

「体温計何処だっけ」

「大丈夫だって」

「何が大丈夫なんだよ」

「んあー……ちっ」

本当に大丈夫な人はいきなり体温計って言われたら「なんで？」とか聞くだろ。「大丈夫だって」って先に保険かけるってことは大丈夫じゃねえんだよな。

さて、体温計何処にしまったかな……多分この筆筒の絆創膏とか置いてる……あつたあつた。

「はい、計る。んで服着てズボン履け」

「あんたは私のオカンかよ……」

「しんどくても勝手に一人で溜め込む姉ちゃんが悪い」

「それ言っとくけどブーメランだから」

そう言いつつも素直に体温計を腋の間に挟む姉ちゃん。風邪ひくぞ、じゃなくてマジで風邪ひいてる説があるな。風呂は一旦後回しにするか。

ピピピ、と体温計が計測を終えた音を鳴らす。腋から体温計を抜き出し、姉ちゃんが表示されている数字を見る。そして溜め息をついた。



「何度？」

「八度六分」

「高熱じゃねえか……いつからしんどかったの」

「んあー？……朝」

全然気付けなかった。その状態で仕事行つて飯まで作ってたのかよ。そりや今そんな格好しててもしようがないわ。……いやしようがない。悪化するわ。

「取り敢えずあとで濡れタオル作るから今日は風呂我慢して。んでパジャマに着替えてさっさと寝ろ。オツケー？」

「大丈夫だって……だから嫌だったんだよ熱計るの」

「アホか。大丈夫じゃなさそうだから熱計らせたんだよ」

「あー、はいはい……悪い、迷惑かける」

こういう時に変な所で自分を責めるのが姉ちゃんである。俺に迷惑かけないために勝手に自分で背負いこんでしれつと壊れるのが姉ちゃんである。

取り敢えず濡れタオル作るかー。明日以降どうするかはまた考えるとして。

くくく

姉ちゃんが熱を出すなんて本っ当に久々のことだ。多分一年ぶり位だと思う。

明日は流石に仕事を休むらしい。有給を消費するのが勿体ないー！とか叫んでたけどしようがないと思うよ。

で、明日はもうずっと姉ちゃんの部屋で寝てて貰うわけだが、家事は俺も一通り出来るから問題ない。飯も別に俺が作れるから問題ない。

問題は「姉ちゃん、俺の作る飯超絶嫌い」という一点のみだ。

俺の飯が不味い、とかそういう訳では無い。自分で作って食ってみても普通に美味しいし、詩織に食わせた時も美味しい美味しいって言いながら食べていたから間違いは無い。だが、姉ちゃんだけは本当に

「まつずー」しか言わず、最悪リバースする。

出来合いのおかずを買いに行ってもいいのだが(どちらにせよ食材をかう為にスーパーには行かねばならんし)、まあ、気が強い人程、弱っている時は弱々しいというか。

姉ちゃんは風邪を引いたりすると途端にすっげえ泣き虫になるのだ。情緒不安定レベルで。

だからあんまり外に長時間出るのもなあ……。

スマホのライン通話ではなく、電話番号からかける方の通話ボタンを押し、アドレス帳を開く。

なんだかんだで、遠くの親戚より近くの他人。こういう時に頼りになるのは母ちゃんよりも……

『もしもーし、どうしたの？雨ちゃんじゃなくてハル君が電話してくるの珍しいね』

「あ、理恵さん？ごめん夜に。ちよつとハプニングで」

こういう時は家が近くの幼馴染マザーがとても頼りになったりする。

『ハプニング？雨ちゃんになんかあった？』

「うん、熱出した」

『うっそ、マジで!?!あっちゃー……美和は仕事で家いない……んだよね？だからハル君から私に電話来てるんだもんね』

「察しが良くて非常に助かります」

去年に姉ちゃんが熱出した時も理恵さんの力をちよつとだけ借りた気がする。あの時は昼ご飯作って貰ったんだっけ。昼からは郁也さんが来てくれたから大丈夫だったんだが。

『雨ちゃん、ハル君のご飯食べられないもんね。二人ともご飯は食べた？今から作りに行こうか？』

「食べた。明日の昼と夜、お願いしたいんだよね。材料あんま無いから買いに行きたいんだけど熱出してる時の姉ちゃんを家に一人にさせときたくない」

『甘えんぼさんになるもんねー。おっけー、明日の十一時位に材料買ってそつち行くわ』

「ホント助かる。ありがとう理恵さん、材料代はちゃんと払うから」  
『いらぬわよ材料代とか。あんたホントそういうところ大人だよねー、詩織に見習わせたいわ』

いや、流石に申し訳なくね？パシってご飯作ってもらって材料代まで払ってもらうのは。

『いいのよ。アンタら姉弟は頑張り過ぎだから。……雨ちゃんが食べやすいものの方がいいよね？暑いけど、おうどんとかにしとく？』  
「……あざつす。多分理恵さんの作るもんなんなんでも食べると思う。食べやすいものの方が嬉しいけど」

『りよーかい。ハル君も変に気負って熱出したらダメよ、それすると雨ちゃんまた気苦労増えちゃうから』

「あいよ。んじゃ、明日宜しく御願います」

『任せな！じゃ、切るよ。雨ちゃんにお大事に言つといて』  
「うつつ」

電話が切れた。

酒飲んで無かつたら基本的に頼れるよなあ、理恵さん。

風呂場に小さめのバスタオルを持ち込み、水をぶっかけてよく絞る。風呂に入るといふ行為は人間が思っている以上に体力を使っているらしく、今の姉ちゃんが風呂に入るのはちよつとアレな気がする。ので濡れタオルで身体を拭いていただくことで我慢してもらおう。

「ほい、濡れタオル。ちゃんと拭いとけよ」

「んあー？ありがとう」

「明日は理恵さん来てくれるから。んじゃ、俺風呂入る」

「あいよ」

声に覇気がない。熱がある、って自覚してしまつたら急にしんどくなるもんなあ。解るぞ、その気持ち。まあ俺も滅多に熱出さない人間だけでも。

風呂上がつたら食器洗うかー。

くくく

風呂も上がり、食器も洗い、姉ちゃんを（半ば無理やり）部屋に帰らせて布団に寝かしつけ。部屋に戻るとスマホにラインが届いていた。開けてみると詩織からだ。まああれだな。理恵さんから色々聞いたんだろう。

『お姉ちゃん、大丈夫なの？』

「あんまり大丈夫じゃなさそう」

『珍しいね』

「ホントにな」

夏風邪みたいなもんなのだろうか。薬とか家にあつたつけかな？理恵さんに風邪薬も頼んどけば良かった。

「理恵さんにさ、明日風邪薬も買ってきて欲しいって言っついて貰っていい？」

『オツケー。なんかこれ！ってやつある？』

「無い。俺薬とかよくわかんないし笑」

『だよね笑 伝えとく』

薬局で買える薬って第二类医薬品までだったつけ？よく知らないが、飲み合わせとかそういうのも無いから風邪薬ならなんでもいいはずだ。

さて、何となくではあるのだが姉ちゃんが熱出すと落ち着かない。身近な人が、家族が熱出したりするとなんとなく忙しくなくて、それであつて夜とか意味もなく眠くならなかったりする。俺は割と早寝するタイプでこの時間には眠くなつていてもおかしくはないのだが、なんとなくまだ起きていたかつた。

課題でも進めるか？……やだな、そんな気分ではない。ゲームでもやるか。机の上に置いてある3DSを手に取り、電源ボタンを押す。……うわ、充電切れてやんの。スリープモードで放置してたか。充電器何処にやったつけ。

灰色のプラグを挿しながら、ベッドの上に寝転がってどうぶつの森をプレイする。DSが発売された頃のやつ。たまーにやりたくなるんだよな。起動した瞬間リセットさんに怒られた。そっか、前充電切れで落ちてたのか。

このゲームが発売された頃って、多分俺は小学生にもなっていない位の話で。姉ちゃんが「もうあんまりゲームしないし」って俺に譲ってくれたんだっけな。何が「もうあんまりゲームしないし」だよ。めちゃくちゃPS4でドラクエやってんじやねえか。今でもたまーにテニプリの学園祭の乙女ゲーとかやってんじやねえか。ブレイブリーデフォルトとかやってんじやねえか。

昔は姉ちゃんって、歳も離れてたから本当にすごく「お姉さん！」って感じがしてて、なんとというか遠かった。なんで今はこんな軽口叩きながらスマブラとか出来るようになったんだろうな。まあ、良いことだからいいんだけども。

釣り竿を構えて釣りをする。シーラカンスとか釣れねえかなあ。あれって雨の日しか釣れないんだっけか？そもそもシーラカンスってこんな浅瀬にいていいのだろうか？まあゲームだし許容範囲？

眠たくなってきた。

くくく

「何してるの」

後ろから声を掛けられた。何って……

「犬を撫でてんだよ」

「ハル、動物そんなに好きだっけ？」

「まあ、人並みには」

おお、よしよし。可愛いワンコだなあ。

「そのわんちゃん、可愛いね。どこの子？」

「んあ？」

後ろから声を掛けていた詩織が俺の隣にしゃがみ込む。

確かに。このワンコは首輪を着けている。つまり飼い犬なのだろう。しかしリードが無い。まさか見えない革紐で繋がっているのだろうか？……んなわけないか。飼い主さんは何処にいるんだ？

「言われてみれば、飼い主さん見当たらねえな」

「探してみる？」

「んー……俺が新しい飼い主になるとか」

「バカかな？」

そもそもここは何処だ？なんか見覚えがあるような無いような、多分あっちの方に俺の家はあるんだけど、ここが何処かは解らない。

ワンコが吠えた。

「うわびつくりしたあ」

「ハル、ビビリすぎ」

くすくすと笑う詩織。その手にはリードが握られていた。

「あれ？お前犬飼ってたっけ？」

「え？あ、うん。可愛いよ。見に来る？」

いつの間に……。どうしようか、ちよつと気にはなるのだが。でもその前に、

「その前にこのワンコの飼い主を……あれ？」

ワンコは居なくなっていた。あれ？何処行った？

「どうしたの？」

「さっきまでいたワンコが消えた」

「え？わんちゃん居たっけ？」

「居た。絶対居た」

なんでなんだ……？

~~~~~

目が覚めた。

よくわからん夢を見ていた気がする。

吸いたい。

「朝ご飯、お粥でも作るか？」

「あんたの飯は食べない」

「頑なだよな……じゃあ、トーストは食べれる？」

「……いらぬ。冷蔵庫の上の方にウイダーあるからそれ持ってきて」

一日明けても姉ちゃんの熱は下がらず、予定通り理恵さんに来てもらうことにした。先に起きた俺はトーストを焼いて食べ、姉ちゃんに朝飯どうするかを聞いたのだが。ウイダーなんかあったっけ？

リビングに戻って冷蔵庫を開ける。……あ、あったわ。風邪の時こそちゃんとしたもの食べなきゃいけない気もするが、こういう時にウイダーみたいなゼリー状のものが食べやすいのはとてもわかる。ちゃんと栄養も入ってるし。

ウイダーと、ついでお茶も入れて姉ちゃんの部屋に戻る。

「ほら、朝ご飯とお茶」

「ありがと」

普段の覇気が無さすぎる。多分今スマブラしたら勝てる。しないけど。

「しんどい？」

「そうでもない」

嘘つけ。めっちゃくちやしんどそうな顔してるぞ。

かと言ってそう言う人多分今の姉ちゃん沈んじやうからなあ。

「……寝て昨日よりはマシになったんじゃねえの？もっかい寝る？」

「えー、洗濯とか」

「俺がやるから」

なんでこの状態で家事をしようとするのかね。自己犠牲かよ。アホなのかよ。

「取り敢えず寝ろ。なんか欲しいもんある？」

「……彼氏」

「郁也さん呼ぶ？」

「……呼んだら殺す」

「ごめん」

冗談言うから冗談で返しただけじゃん。殺す、とまで言わなくてもいいんじゃないかな。

「ここにいて」

「いるよ」

「しんどい」

「知ってる」

「……音楽聴きたい」

「何がいい？」

「……なんか、落ち着くやつ」

アバウトすぎてどれを流したらいいのか解らん。姉ちゃんの部屋にどんなCDがあるのか知らねーし。……あ、音楽プレイヤーあった。スピーカーに繋いで、プレイヤーに入っている曲を適当に選ぶ。ジャンルが広すぎて解らん。姉ちゃん洋楽も聴くのかよ。

取り敢えず俺も知っている曲が良かったから君という名の翼をかけておく。そのままコブクロが流れ続けるようにしておこうか。そんな激しい曲も無いし。

「これでいい？」

「……もつと、激しいやつがいい」

「落ち着きたいんじゃないのかよ」

「激しい方が落ち着く」

「さいですか」

激しいやつなんかどれだって激しいだろ。でも、あんまり叫び散らすような激しさはダメだろうな……楽器が荒ぶってる系の方がいいか？ガブリエル・コードとかどうだろうか。

「……あ、これでいい」

「いいのかよ……」

前奏でストリングスが荒ぶる感じの曲調いいよな。解るけど熱出してる時に聴くとしんどくないか？

「んじゃ、俺課題やってるから」



「やだ……」

「は？」

「あたしが寝るまでここにいて」

「あー……あいよ」

二十三にもなつて何言つてんだ、とも思うが高校生くらい？の時から親に甘えられない生活送ってきてるんだ。しかも弟の世話をしつつ。風邪の時くらいは甘えてもバチは当たらないと思う。課題やりたいけどしやーないしこのまま姉ちゃんが寝るまで姉ちゃんの部屋にいるか。

〃〃〃

「やつほ、早く着いちやった。雨ちゃん大丈夫？」

「今寝てる。ホント急なのにありがとう、理恵さん」

姉ちゃんが寝静まつて一時間。理恵さんがスープの袋を手にとって我が家に到着してくれた。理恵さんのご飯は美味しいので素直に俺も楽しみである。

「あ、はいこれお薬。先にお昼作っちゃうね。夜をおうどんにするからお昼はお粥さんにしようと思うんだけど」

「助かります。姉ちゃんが食べそうならなんでもいいよ」

そういえば理恵さん、大阪出身なんだっけ。おうどんだったり、お粥さん、という言い回しに関西感を感じるなあ。方言つてのは面白い文化だと思う。詩織に一切方言移ってないのもなかなか面白い。親父さんが関西の人じゃないからなのかな。

「ハル君には唐揚げも買ってきてるからね」

「マジ？ありがとう」

お粥だけじゃ足りないなー、とは思ってたんだよね。

父ちゃんも母ちゃんも仕事で家を出たばかりの頃、理恵さんはよく我が家に来てくれて、姉ちゃんや俺の代わりにご飯を作ってくれたりした。その為冷蔵庫や食器、調味料なんかも勝手知ったるものであり

一切の迷いなくキッチンで動くことが出来る。日高一家に神崎一家は頭が上がらない。

俺が料理を教えて貰ったのも理恵さんだったりする。

「……多分さ、雨ちゃんがハル君のご飯食べないのってさ」

「んあ？」

「プライドもあるんだと思うよー。ハル君、料理上手いもん」

「どういうこと」

美味かったら食うんじゃないの？

「雨ちゃん、責任感強いからさ。「弟に料理作らせるような手間をかけさせない！台所は女のテリトリーよ！頑張るもん！」みたいな所ある気がするのよね。だけどハル君も料理出来ちゃうからさ、こう、一回甘えちやったらダメだ！って思ってるんじゃない？」

あれ、お醤油何処だっけ？とボヤク理恵さん。んー。んー……？イマイチ解らんないな。

「あとはまあ、男が料理出来るのって意外と女の子からしたら悔しいのよ？詩織とかハル君の料理初めて食べた日、めっちゃくちゃ悔しそうなお顔で「私にも教えてー！」って言ってきたもん」

「あー、一時期狂ったようにお菓子とかご飯食わされたのそれか」

なんか週一位のペースであいつの作った料理を食べさせられた時期があった気がする。しかも毎回ドヤ顔なのめちゃくちゃムカついた覚えがある。そんなに美味しくなかったし。不味くもないんだけど。負けたくなかったのか、あれ。

「まあ、しんどかったらいつでもご飯くらい作ってあげるから」

「それはそれで頼りきりな気がして嫌なんだよなー……あつ」

こういうことか。

なんとなく、姉ちゃんも俺の飯を食ってしまおうと頼ってる気がして嫌なのか。

……ちよつとだけ、気持ち解るかもしれない。

理恵さんが色々やってくれるのは嬉しいけど、やっぱ家族じゃないから遠慮しちゃうんだよな。姉ちゃんからしたら俺は「弟」で、「歳下」だから、遠慮してるのかもしれない。

ある意味俺は、「弟」で「歳下」だから得してるのかもしれないな。得してる、って言い方はすごく狡い気がするが。

「……はい、お粥さんでーきた。雨ちゃんの部屋持っていくね」

「あざす。俺はもうちょい後でいいわ」

絶対今食べたら舌火傷するし。

「じゃあ、私はハル君が食べる時に一緒に食べようかな」

くくく

「ご馳走様でした」

「あーい。この家の喫煙スペースって何処だっけ？」

「ベランダ」

「どうもー」

お粥は美味かった。惣菜の唐揚げも普通に美味しい。久々の理恵さん飯は美味しい。

姉ちゃんは相変わらずぐっすり寝ている。絶対暑さと過労による風邪だと思っしゅっくり寝てほしい。

「ハル君も吸うー?」

未成年になんてことを。

「冗談だよ。こっちおいで」

「なんか理恵さんが言うのと冗談に聞こえねえんだよなあ」

「流石に吸わせたら美和にどやされる」

そらそうよ。

ベランダが開いてるから風が気持ちいい。けど日差しだったり、ムワツとする暑さが直に来るのは気持ち悪い。こんなに暑いのに、自分の鼻先に火をつけるんだからタバコってのはよくわからない。

「……っフウー。ハル君は吸ったことあるでしょ」

「んあ?……ない」

あります。

「嘘ばっかり」

バレました。

なんでバレたんだろう。吸ったことある、って言っても三回くらいしか吸ったことないんだけどなあ。匂いが付いてるとか無いはずなんだが……。

「雨ちゃんが高校生の時超吸ってたじゃん？やっぱハル君も吸うんだろうなって」

「あー、姉ちゃんは吸ってたなあ」

何回か母ちゃんが怒られてるところを見た事がある。だっせえの、もうちよつと待てば合法的に吸えるじゃん？って思ってた気がする。

その歳になってみないと解らないものってのはあるらしいな。俺も同じことをしてる。姉ちゃんみたいに沢山は吸ってないけど。

「どーだった？タバコを吸った感想は」

未成年になんてことを。

「身体に悪い味がした」

世の中、良いものだけ食べている訳にはいかないんだなって実感した。悪い味で、気分が悪くて、煙たくて、だけどすつげえ高揚感。未成年だからこそ、「今俺は悪いことをして大人になった」って感じがした。階段を二段飛ばししてる気分。

それと同時に、寿命を縮めてる気もした。一分の寿命を捧げて、今一秒だけすつげえ生きてる実感を貰う感じ。

「なんだろうなー。自傷行為でストレス発散してるメンヘラの気持ち解った気がした」

「何それ。ハル君って面白い目線持つてるよね」

目に見えてないだけで、体内を傷つけてる感じ。痛くない。気持ちいい。けど、なんか罪悪感？よくわからないけど、最終的には気持ちよかった気がする。

「詩織は吸ったこと、ないだろうな」

「あの子は無いね。吸ったら絶対私が解る」

「親ってそういうもんなの？」

「親ってそういうもんなの」

そういうもんなのか。

まあでも小学生の頃なんかは、隠し事してもすぐ母ちゃんにバレていた気はする。今なら余裕で隠し通せると思うけどね。

「だからさ、私正直なこと言うとき、詩織が彼氏作った時はびっくりしたんだよね」

「なんで？」

「あの子、ずっとハル君のこと好きだったと思うから」

「……あー、そういうことね」

それも解るもんなのか。俺は全く気付かなかったんだけどね。

母親つてのはすげえんだわな。

「俺も、多分好きだったよ。詩織のこと」

……今でも、少し好きかもしれない。そこまで言う必要は無いし、それを当人の母親に言うのも恥ずかしいから言わないけど。

「でもさ、幼馴染のまままで居たかったんじゃないかな。俺も、詩織も」  
「……っはあー。ハル君解ってる？あんだ、詩織のこと好きだったんなら振られたようなもんだよ？私が言うのもなんだけど、詩織とか、彼氏にムカついたりしないわけ？」

ホントにそれを母親が言っているのかよ。いや、多分そういう事でもないんだろう。

理恵さんは、ある意味俺達にとつてもう一人の母親だから。理恵さんに取つても俺達は子どもみたいなもんだらう。

「……別に。振られたから、失恋したからって今までの関係が変わるわけでも無いし」

「……詩織は良い男を逃したなー。なんかハル君は大人になっていく、というより悟りを開いてる気がするよ」

「なんだそりゃ」

「雨ちゃんも、ハル君も、他人に向けるべきナイフを自分に刺してるんじゃないの!?!」って思うことあるわけよ私は」

ポエミーだな。別にそんなつもり無いけどなあ……俺も、割と姉ちゃんも言いたいことはズバツと言っちゃやうから寧ろナイフ他人に刺しまくってると思うんだが。

「雨ちゃんが元気になったら、理恵お母様が頑張っている二人には焼

き肉を奢ってあげよう。詩織には内緒で」

「……あとでバレたら「もー！おカーさん！ハルだけずるいー！」ってめちやくちや怒るやつ」

「あははっ、似てる！大人つてのはズルいからバレないようにやるのさ。あの子がデートに行ってる時とか」

理恵さんの奢りで、焼き肉。悪くない。

そこに実の娘を連れて来ない辺りはどうなんだ、と思わんでもないが。

だけど、悪くないな。夏休みの楽しみがこうやってまた一つ増えた。

「……てか、娘がデートに行く日とか解るの？」

「あの子変な所真面目だから。「この日は玲音君とあそこに遊びに行く！」ってちゃんと報告してくれる。安心出来ていいよね」

昔からその辺り律儀だよなあ。遊びに行った先で事故とか起こしてもすぐに親が駆けつけられるように、って言っついても報告してたっけか。俺の家に来る時でもちゃんと「ハルの家に行く！」って言っつてから来てたらしいし。

「というわけで、焼き肉行くからね」

「うっす。楽しみにしてる」

「……何の話してるの」

後ろから気だるそうな声が聞こえてきた。振り返ったらまだまだ調子の悪そうな姉ちゃんの顔。

「起きた？」

「トイレ行つたついでに見に来ただけ」

「雨ちゃん、元気になったら焼き肉連れて行ってあげる」

「……え、いいの？」

「あと夜はおうどん。もうちょつと寝て、いけそうならリビングで三人で食べよっか」

「おっけー。……あたしも一本吸おうかな」

「寝ろ」

姉ちゃん、成人してからはあまり吸わなくなったけど吸い始めたら

一本で終わらないだろうが。

……成人してからはあまり吸わなくなった、つてよくよく考えたら  
おかしくね？

楽しみたい。

「風邪引いたのがあのタイミングで良かったわ」

「本来は引かないのが一番いいんですけど」

俺と姉ちゃんは珍しく電車に乗っていた。窓から見える空はオレンジ色に染まっており、電車の中の人は心なしか浮かれて見える。浴衣を着ている人もチラホラ見えるな。

今日は姉ちゃんと行くって約束していた、夏祭りだ。

くくく

「うわあ、思ってたより人多いね」

「うわあ、ホントだよ……」

花火も見られるってこともあるのか、それともメインステージでやっているよさこい踊りや和太鼓、バンド演奏が集客しているのか、祭りの人の入り具合は俺達の予想を上回っていた。浴衣に紛れてコスプレしてる人までいるぞ、おい。暑そうだな。

ちなみに俺は勿論なのだが、姉ちゃんも浴衣は着ていない。理由は至極単純、「面倒臭いから」。俺は普通にシャツにジーパン、姉ちゃんもシャツにホットパンツという超絶ラフな格好で祭りに来ています。「何食べよっかな」

「歩いてたら美味そうなもん見つかるだろ」

「あ、そうだ。理恵さんにお礼も兼ねて何か買って帰ろうか」

ぶらぶらと人の流れに紛れて歩く。出店を覗きながら。

祭りの提灯には狐かなんか、そういう妖怪の魂でも入ってるんじゃないだろうか？ってたまに思う。こう、見るだけでワクワクしちゃうんだよね。だけど、ふとした時に提灯が燃えて消えるんじゃないだろうかかって思ってしまう。

「お、焼き鳥ある。……うわ高っ!?!あの値段ならもうちよい肉厚なところ出せよな……やめび」

「テキ屋だから大体はそんなもんだろ。当たりを見つけたらまでは長期



戦だぜ？……おっ、スーパーボールすくいだ」

「あんたこの歳になってスーパーボール欲しいの？」

「いらねえけどスーパーボールすくいはやりたい」

金魚すくいや亀すくいは貰った後に「育てなくては」という強迫観念に囚われるからやらない。俺結構ズボラだからエサやるのとか忘れそうだし、そういうので後悔するの嫌なんだよね。

その点スーパーボールはエサとかそういうの無いから、気軽に遊んで気軽に貰って帰れるのは強い。祭りで見つけたらついやりたくなっちゃうんだよね。

「おっちゃん、一回！」

「あいよ、三百円ね！」

百円玉を三つ渡してポイと掬ったスーパーボールを入れる小さなボウルを貰う。さて、表面はどっちだ？

「おっちゃん、あたしも一回」

「おおっ、美人さん！三百円だよ！」

姉ちゃんもやるのかよ。

「負けた方かき氷奢りね」

「あいよ」

賭けが始まったよ。

スーパーボールすくいでは大事なことはポイの表面の面を使うことと、なるべくポイが水に浸かっている時間を減らすことだ。あと、紙じゃなくてプラスチックの部分に重心が向くようにする。

必然的にポイを水に浸けている時は斜め向きになる。そして掬うって言ってもポイの上に乗せる、というよりはそのまま勢いで投げ入れる感じ。……よし、上手く出来てる。

「おっちゃん、ボウルいっぱいになったからもう一つボウルくれ」

「うわっ、兄ちゃん上手いなあ！よし、追加だ！」

これ以上掬うとボウルに入り切らないので追加のボウルを貰う。まだポイは少ししか破けていない。久々にやったけど八十個は取れそうだな。

「おっちゃん、あたしにもボウル」

「姉ちゃんも上手だね！ほら、追加だ」

うわ、姉ちゃんもボウルいっぱいにしてやがる。クツソ、ポイ破けてないし。……あ、でももう紙の部分で濡れてない部分無いな。ならまだ勝負は五分の筈だ。

くくく

「あー!!!悔しい悔しい!悔しい!」

「負け犬の遠吠えを聞きながら食べるかき氷ってのは最高だわ……」

しかも負け犬の奢りでっていうのが最高だね。

百二十対百八で俺の勝ちだった。ちなみにスーパーボールは掬った分全部貰える訳ではなく、百個以上掬えたら五個貰える、っていう仕組みだったので二人で計十個貰った。六百円でスーパーボール十個って考えたら驚く程コストパフォーマンスが悪いが、楽しかったので良いのだ。

そしてかき氷を頬張る。一つ二百円、シロップかけ放題。姉ちゃんはいちご、俺はブルーハワイ。

「ブルーハワイって結局何なんだろうな」

「色合いと語感で名前付けたんでしょ?そもそもかき氷のシロップって着色料以外全部成分変わらないらしいし」

「えっそうなの?」

「見た目と名前の先入観で勝手に味を勘違いするんだって。実際は全部同じ甘いシロップらしいよ」

そうだったのか……。だからブルーハワイなんていうよくわからない味が爆誕しているのか。普通に美味いからそれでいいんだけどね。

「てか、俺らちゃんとしたご飯食べてないのに先かき氷食べていいのかよ」

「こういうのも夏祭りの特権でしょ?あ、あの焼きそば美味しそう」  
焼きそばの列に姉ちゃんが吸い込まれていった。俺もなんか腹に

溜まるものが食べたいな……おつ、あれは……とん平焼き？出店でやってるのは少し珍しい気がする。そんなに並んでいないしあまり高くなさそうだしポリウムもありそうだ。買いだな。並ぶか。

ホント、今ってなんでも売ってるよな。テキ屋の当たりくじやヨーヨー釣り、射的なんかは前からあったけど、「なんだそりゃ!？」みたいな出店がたまにある。さっき見つけてビックリしたのはフェイスペイントをしてくれるお店。ほっぺたなんかに綺麗な金魚の絵を描いてくれたりするらしい。すげえな。あれが、インスタ映えってやつなのか。

ちようど今俺が購入してハフハフ言いながら食ってるとん平焼きだってそうだ。前は見なかった気がする。……いや、とん平焼きはどうだろう。記憶に無いだけで前からあったのかもしれない。

「晴人、珍しいの買ったね」

「あ、やっぱとん平焼きって珍しい?」

「あんまり見ないかなー。花火までまだ時間あるしもうちよい見て帰ろうよ」

「あいよ」

こうも人が多いと知り合いが居てもおかしくないのかもな。俺は交友関係が狭いからあんまり出くわす、とかそういうのは無いだろうけど姉ちゃんは割と交友関係が広いのでばったり!とかあるかもしれない。

まあ別にどうでもいいけど。ただ姉ちゃんの友達ってチャラいのが多いからあんまり得意じゃないんだよなあ。

「すみませんお姉さん、花火の観覧場所って何処か知りませんか?」

「ごめんね、知らないの」

うわ、声掛けられた。……なんだよ、姉ちゃんの知り合いかと思ったらただ道聞いてきただけかよ。びっくりしたわ。見た目がちよつとチャラチャラしてたから知り合いかと思った。

「あー、知らなかったんですね、すみません。よかったら一緒にいい場所探しませんか?」

「結構です。あたし連れいるから」

……これ道聞いてる訳じゃねえな？

ナンパか。祭りだし、まあそりゃあ居るわなあ……。そっか、姉ちゃん見た目は美人だから誘われてもおかしくないのか。

うわ、連れいるから、とか言うからこっちめっちゃ見てるじゃん。怖い。睨み返さなきゃ。ダメだ、こういう時なんで俺の顔は女子っぽいのかと思ってしまう。もっとコワモテがよかったなあ。それでいてイケメン。

「……ふーん、彼氏ですか？」

「そうだけど、何か？」

違いますけど!?!何か違いますけど!?!お姉さん?お姉さん!?

いや、こう言った方が引き下がるかもしれないって訳か?なんか逆効果っぽくない?これあんまりいい方向に進みそうにない顔してるよ、ナンパ師!

「へえ……これが?」

「これが。何?ケチつける気?」

「いやあ?ただ……俺の方がいい物件ですよ、って」

「ここでナンパしてる時点で事故物件だろ」

あ、やば。声に出ちゃった。

「あんだと teme エ——」

「その辺にしとけ」

殴られる……!……あれ?なんか割り込んで来た?

背中しか見えないけどガツチリしている。つい最近も見た気がする、この背中……。

「ナンパはもうちよつとお淑やかにやれや。ぶっ飛ばすぞ」

「郁也じゃん。何?まだあたしの彼氏気取り?」

「そんなんじゃないよ。タチ悪そうなナンパ見掛けたから止めただけ」

郁也さんだった。うわー、かけえ。確かにこの工事勤務で引き締まってる身体とかつけえ顔で凄まれたら怖いわ。ナンパさんどっか行った。

「相変わらず姉弟で仲良いのな」

「郁也さんありがと。腹立つけど俺じゃ撃退できてない」

「気にすんな。どうせ俺が入ってなくても雨がボッコボコにしてただらろ」

「ボッコボコにしたかったのに邪魔された。郁也をボッコつていい?」

「いい訳無いだろ脳筋女」

郁也さんも浴衣じゃなかった。やっぱ夏は暑いからシャツだよな。俺と違うところはハーフパンツってところくらい。イケメンだから何着ても絵になる。なんか和柄とか似合いそう。

「郁也さん、一人?」

「家族のアツシー君になってんだ。こういう時だけ「車出せー!」って言うのずるいよな」

「織田も?」

「香澄か? いるぞ。両親、俺、香澄。今は親父のパシリしてただけ。俺以外は場所取りしてくれてんだ」

分業か。織田家も大概家族仲良いよな。車出せー! って言われて素直に出してる郁也さんを見ている限りはそう思う。嫌そうな顔してないし。

「結構いい場所だけど、一緒に見るか?」

「なんでアンタと見なきゃいけないのよ。却下」

「言うと思っただけだな」

「じゃあ聞くな。行くよ、晴人」

そう言っただけでずんずん進む姉ちゃん。あー、お礼くらい言っとけて、もう。

「あー、ごめん郁也さん。また」

「おう、またな」

「晴人、置いてくよ」

そう言いながらどんどん歩いていく姉ちゃんの顔はちよつとだけ嬉しそうだった。

そんな顔するくらいなら悪態なんぞつかずに素直に話せばいいのにさ。まあ悪態ついてる時もそれなりに楽しそうなんだけども。

くくく

「……花火ってさ、最初に考えた奴センスあるよな」

「どしたの急に」

「だつてさ。普通に考えて花つて地面に咲くものだろ？それを空に咲かせようって考えた奴はいいセンスしてると思わねえ？しかもさ、地面に咲いてる花に火をつけたら燃えて無くなるじゃん？なのに空に咲かせる時は火を使おう！って考えたんだぜ？発想力ヤバいだろ、普通に」

「あー、そう言われてみればそうかもね」

爆音。轟音。真つ黒な空に赤色、緑、紫、黄色。

空に向かってカメラを向ける人、はしやぎながら叫ぶ子ども達、腕を組んで眺めるカップル、酒の肴にするオヤジ共。俺も姉ちゃんに話し掛けてるけど、多分一部一部は花火の音にかき消されてろくに聞こえてないんだろうな。

でも、別に今はそんなことはどうだつていいのだ。メインドイツシユはお喋りじゃない。空に咲いてるセンスある花火とかいう爆音の原因だ。

「思ったよりガッツリ花火してるね。正直もうちよつとしよぼいと思つてた」

「だなー。これは来て正解だわ」

花火を見て「こんなのただの炎色反応じゃん」とか言う奴居るんだろうな。確かにそうかもしれないが、そういうのは無粋つてもんだ。寧ろただの炎色反応でここまですげえもん作れるのがすげえんだよな。

ちなみに「花火見に行つてくるわ」つてコバにラインしたら「えっ、あんなのただの炎色反応じゃん」つて帰ってきた。あいつ無粋な奴代表だわ。そんなんだからモテねえんだよ。俺もモテないけど。

花は散るから美しい。散り際が切ないから。本当にそうだろうか？もし、花が散らない世界があったら？永遠の美しさ、つてのもいいのかもしれない。不滅の美学、みたいな。

だけど、やっぱり花は散るから美しい。花火を見てるとそんな気がするな。だって、花火がドカーン！って上がるくせにフワツて消えるんだもん。あんな爆音鳴ってるのに、子どもの泣き声なんかが聞こえてこないのも、無意識的に「あれは怖くない。綺麗なもの」って認識してるからなんだろうな。

「なんかさ」

「んー？」

「綺麗だよな」

「あたしが？」

「花火が」

「そうだね。来てよかったよ。風邪も治ってよかった」

なんとというか、この花火は詩織や理恵さんとじゃなくて、織田や郁也さんとじゃなくて、石黒とじゃなくて、勿論コバや須田とじゃなくて、姉ちゃんと一緒に見れてよかった気がする。

なんだかねで素直なままの自分でいられるのは姉ちゃんだけだから。素直に「綺麗だな」とか言ってるのを他の奴には聞かれない。

それに、すごく家族、って感じがする。家族で祭りに遊びに来て、花火を見る。このまま家に帰って、風呂に入って、花火の余韻で眠れないから、なんとなく夜中までテレビを見る、ゲームをする。そんな、ちよつと特別な日の家族の遊び。

これは姉ちゃんと二人じゃないと味わえない楽しさだろ。

夏休みの思い出が、一つ出来た。

五尺玉が大きくなる。

「綺麗だ」

「そうだね」

作りたい。

「はい、なんかいい案でも浮かびましたか」

「もっちりん」

第二回、実行委員二名による文化祭の演劇コンクールの脚本どうするか決めよう会。ウイズアウト姉ちゃん。会場は当然かのように俺の家。まあ、四人家族がゆったり暮らせる位の一軒家に俺と姉ちゃんの二人で暮らしてんだからだだっ広い訳で。詩織の家より俺の家の方が何かと都合がいいのだ。

で、前回は夜から始めてしまった為、時間的な制約があったのだが今回はお昼からスタート。今日のうちに方向性は決めておきたいよね。

「じゃあ日高詩織さん、プレゼンをどうぞ」

「はい、弊社がプレゼン致しますのは……」

俺から振つといておいてなんなのだが、この「会社で新たなプロジェクトやりたいからプレゼンさせてください」みたいな寸劇調になつてんのはなんなんだろう。というか詩織も乗ってくるのかよ。悪ノリ大好きか。

……まあ、前の夜の出来事があったのに、こうやって二人ともいつも通りみたいに喋れているのは良いことか。

「弊社がプレゼン致しますのは、妖精です！」

「……は？」

頭の中お花畑なのか？妖精ってどういうことだよ。

「一人の妖精が子どもに攫われるの！で、他の妖精がその妖精を助けに行つて、最後は子どもと妖精が仲良くなってハッピーエンド」

あ、口調戻った。

「あー、そういうこと」

女の子が好きそうな超メルヘンチックでピースフルな脚本でした。てか（まあまだ企画段階だから全然いいんだけど）めっちゃくちやアバウト。うーん、まあ、悪くは無いとは思うんだけどもなあ。

「どうやって妖精攫うの。言つとくけど演じるの全員高校生だぞ？」



番ちっちゃい女子……小山かな、小山が攫われる役やるにしてもさ、多分奴隷市場みたいになるぞ」

俺達のクラスで一番小柄な女子、小山でも148センチある。妖精にしてはデカすぎるし、攫うとなるとこう、スピーディにやりたい。となると肩に担いだりするか、二人がかりとかになるわけだが……そんなこと出来るのは運動部男子な訳で。完全に妖精を捕まえた無邪気な子供ではなく人攫いの犯罪者、若しくは奴隷商人に早替わりだ。「むー……確かに。身長的な問題かあ」

「ストリーわかり易いし悪くないと思うけどな。残念ながら却下」「あーじゃあ人攫いに攫われた友達を助けようと高校生が右往左往して、最後は人攫いと仲良くなってハッピーエンド！とかは？」

「アホか」

無理があるわ。人攫いと仲良くなってハッピーエンドとかいうパワーワード生み出すのやめてくれ。

「むー。じゃあ、御社の考えをお聞かせ願いたいのですが！」

あ、寸劇帰ってきた。

「あー、では弊社の意向を説明させていただきます。こちらのプロジェクトをご覧頂きたいのですが」

「プロジェクト？それっぽいものないけど」

「うるせえな！こう言った方がプレゼンっぽいだろ」

形から入るタイプ、神崎晴人。宜しく御願います。

どうせなので脇に置いていた、脚本案を纏めたノートを詩織の目の前に置き、ページを捲る。

「では資料の一ページをご覧ください」

「おお、今度はそれっぽい」

どうせ俺が「こういうのどう？」とか言っても詩織は何回かは「むー……」って唸る。もうそういうパターンが見えているので幾つか案を考えてきた。まずは一つ目。

「歩けメロス」

「うわー、出オチ感凄いタイトル……」

うっせえな。

「基本的には走れメロスと変わらないんだが、一つだけ違うことがある。メロスは過呼吸を起こしやすい体質なんだよ。走ると呼吸が乱れてすぐ過呼吸になる。だからセリヌンティウスの為に走ろうとすると逆に前に進めなくなる。早く辿り着く為に、必死に歩くんだよ」

「絵面地味すぎない?」

「そうか? セリヌンティウスと抱き合って「行ってくる!」って言って走り出した瞬間「げほっ、うえっほげほ! ぜえひゅー! ぜひゅー!」ってのたうち回ってSEで心電図みたいな音鳴らしたら笑い取れると思うんだけど」

「出オチじゃん! その後ずっとメロスが歩いてる絵面が続くんでは!?!」

「ちゃんと盗賊も出てくるし結婚式も挙げる」

「むー……いや、却下」

「なんで。ちよつと自信あったんだけどなあ……確かに「あれ? もしかしてちよつと絵面地味かな?」とは思ったけども。」

「じゃあ次、詩織が案出す番な」

こいつさっきの妖精意外にもちゃんと案用意してるんだろ。うな。下手したら「え? 今のしか考えてない」とか言いそうで怖いんだが。もしそう言いやがったら俺の案で無理矢理通す。

「シンデレラ! ベタだけど普通に良いと思うんだよね」

シンデレラ、か……確かにベタだけど、確かに普通に良さげな気がする。怖いのは他のクラスと被りそうだなー、って事くらいか……?」

「シンデレラそのままやるのか?」

「うーん、改変してもいいと思う。でも私、改変案思いつかなかつたんだよね」

演出的に難しそうなのは魔法でかぼちやを馬車に変える所とかはキツそうだな……あと衣装。衣装どうするかな。舞踏会のシーンは皆ドレスとかタキシードみたいな着せたいしなあ。

でもその辺りを上手くやれたらいいけるんじゃないかなろうか、シンデレラ。

「……アリだな」

「でしよ？」

全然アリだ。うちのクラスにシンデレラみたいな可愛くてちよつとお姉様方からいじめられそうな感じのする女子が居ないことが問題だが。意地悪なお姉様は織田とかその辺にやらせたら完璧だろう。

「話の内容も皆知ってるだろうから説明しやすいし、俺も他の案考えたらけどこつちの方が楽そうで良さそうだな、シンデレラでいくか」「やったー！可愛いドレスー！」

「……いや、まずはそのドレスのアテを探すところからなんだけどな」  
姉ちゃんも流石に持つてないだろうしなあ……普通は持つてないよな。

「あとは出店だよな。ハル、何か考えてるって言ってたけど何するの？」

「んあ？あー、出店な。いや、普通にフライドポテトとかにしようと思ってるけど」

「え、めちやくちや普通じゃん」

フライドポテト作る為の揚げる機会（フライヤー？）も教師が付いてくるもの的小伙伴と借りれるらしいし、作る分にははつきり言つて全然問題無いと思う。

だが、それだけで売り上げ一位を狙えるとは流石の俺も思っていない。当然策は練つてあるさ。

「フライドポテト自体は普通だけどな、チラシをめちやくちや撒く」

「……えっ、普通じゃない？」

「まあ、聞けつて」

俺は渾身の作戦を詩織に話してみた。

~~~~~

「うっわー……それルールに引つかかってないの？」

「引つかかってない」

「よくそんなの思いついたね……」

ドン引きされた。いや、多分このドン引きは良い方向のドン引きだと思う。

去年の文化祭を思い出してみると、例えばバスケット部がやってた出店だと「フリースロー、決めたら50円引き！」みたいな値引き企画みたいなことをやっていて、結構な長蛇の列になってたのを覚えてる。

そう、「値引き」がアリなのだ。

という訳で俺の考えた作戦は簡単。チラシを大量に刷っておき、チラシに「このチラシを持ってきた人には50円引き！」と書いておく。フライドポテトなら食べながら歩ける上に、安くなるなら……とチラシを貰った人はつい足を運ぶだろう。そしてチラシと交換で50円引きでポテトを売る。

こうしてしまえば、チラシを配るから色んな人にフライドポテトの情報が回る。値引きの魔力で人を集める。そしてそのチラシは最終的に俺達の手元に帰ってくる。その帰ってきたチラシをまた大量にばら撒いて、また宣伝&値引きの魔力で客を集める。永久機関だ。

「普通、値引き券やチケットは何度も使われないように端をちぎったり、スタンプを押したりするだろ？それをしないんだよ。そしたら何回でも配れるだろ」

流石にくしゃくしゃにされたり変な方向に折れ曲がったりしてるようなチラシは配れないけど。それでもかなりいけると思うんだよな。

「あとは値段設定だけちょっと考えないとな。基本は「50円引きでもちゃんと採算が取れる」値段でありつつ、「元の値段でも物足りなくない」ことが条件だから、一番難しいのはそこかもしれない」

「ハル、将来会社とか建てたら？」

大げさだわ。しかもこれって経営的なアレでは無く宣伝的なアレだし。アレってなんだ。

「私そんなの考えもしなかったなあ、他のクラスと被らなくて人気の出そうなものばっかり考えてたよ」

「変に奇を衒いすぎると逆にミスしそうだからな、宣伝と付加価値に重きを置くスタンスにしようと思った」

多分付加価値の使い方は間違えていると思うが、それっぽい雰囲気さえ伝われば良い。どうせ詩織俺より頭悪いし。

「あつたま良いー……なんか勉強の出来る頭の良さじゃないね、それ。出店はやっぱりハルに任せられた方がいいかな」

「演劇の方は脚本は考えるし練習も参加するけど俺はキャストで出ないし誰が出るかも詩織が決めてくれ。お前の方がクラスの連中と仲良いだろ」

当初の予定通り、出店は俺がメイン、演劇は詩織がメインで制作していく方向で決まりつつある。まあ脚本は俺がメインなんですけど、出店も手伝ってもらおうつもり満々だし些細な差だろ。

「なんとなく決まってきたね。ドレスどうしよ……」

「そこだよなあ」

目下一番大変そうなのはそこである。クラスの連中にもドレスを持ってそうな奴は居ないよなあ……幾らコバでも流石に持ってないだろうし。家にメイド服があった時はドン引きしたけど。

……一応聞いてみるか。

「ワンチャン、コバに聞いてみる」

「小林君がドレス持つてる可能性にワンチャンかけるの……?」

エロゲー趣味を隠さないせいで基本女子からドン引きされてるコバなので、女子から話しかけに行くことは殆どない。これは俺が電話するべきだろうな。

『もしもし、晴人?どした?』

「おー、コバ。あのさ、演劇の衣装なんだけど」

『俺に全部決めさせてくれるのか!』

「させねーよ」

それをさせたら俺が皆川ちゃんにめっちゃ怒られるんだよ。というか下手すりゃPTAにも怒られるわ。

「シンデレラとかやりたいんだよ、ドレスとか持ってない……よな?」

『シンデレラかよ……ドレスは無い。チャイナ服ならある』

「いらん」

なんでチャイナ服がラインナップに増えてるんだよ。舞踏会で皆

優雅にダンス踊ってる中に一人だけチャイナ服居たらおかしいだろうが。てか前家に遊びに行った時はなかったぞ。買ったのか。

『えー。めちゃくちやスリット入っててエロいのに』

「確かにエロいけど今回そういうのじゃねえから！お前に聞いた俺がアホだったわ」

「ハル、エロいって何よ」

詩織が隣ですっげえジト目で睨んでくる。絶対これ俺悪くないと思っただけです。

『ドレスなあ……流石に型紙があっても作るの難しそうだな。出来んことも無いだろうけど』

「え、お前ミシンとか出来るの？」

『あれ？言ったこと無かったっけ？俺の家にあるメイド服とか全部俺が作ったんだぞ』

変態に技術を与えた結果がこれだよ。

いや、でもこれは良いことを聞いた。型紙と布さえあればワンチャン、コバに作って貰える可能性がある。

「ワンチャンお前に頼むかも」

『エロくしていい!』

「良くない」

これマジでシンデレラいけるんじゃね？

とりあえずこれ以上話すとコバが「エッチなドレス」について長々と語り始めるであろうことがなんとなく予測がついたのでこちらから一方的に切る。

「おい詩織、コバの奴がミシンで衣装とか作れるらしい。シンデレラいけるぞ」

「マジ!?……でも小林君に衣装任せて大丈夫? エッチなやつとか嫌だよ。」

「そこだよな……なんか、こう監視役が必要だよな」

再度ラインの友達一覧を眺める。なんかこう、監視役になりそうな奴……あつ。

「織田を監視役につけるってのは? 女子だからある程度可愛いドレス

とか解るだろうし、採寸とかも女子がいた方がやりやすいだろ」というかコバが「採寸するから女子こっち来てー!」とか言つてメジャー持ってたら下手したら何もしてないのにボコボコにされる可能性あるし。

「香澄ちゃん? あー、確かにいいかもね。小林君ビビリそう」

何より織田は腕っぷしが強いし威嚇が出来る系女子だ。コバは喧嘩が鬼のように弱いので(俺より弱い)、多分反抗の余地が無い。

……やっぱり織田って俺の姉ちゃんに似てる気がする。

連絡してみるかー。

『……もしもし? 何の用』

「よお、花火行つてたんだってな。あれ凄かったな」

『なんで知つてん……あー、兄貴か。何? 暇なの?』

「お前さ、文化祭衣装製作班な。あと意地悪なお姉様の役も」

『……は?』

「ちよつとハル、結論から行きすぎ。……意地悪なお姉様は確かに似合うかもだけど」

しまった。過程をすつ飛ばしてしまった。

「や、文化祭の演劇コンクール、シンデレラとかやりたいなって話になってな。コバの奴が型紙さえあれば難しいけど作れるかもって言うからアイツに任せたいんだけど、アイツに頼むとエロくなりそうだから、そうならない為のストッパーにお前を付けようと思って」

『……てか、アタシ作れるよ。衣装』

「だよなー、作れるよな。……えっ、マジで?」

え? お裁縫とかやろうものなら針を指の力で折りそうなお姉様が? 衣装を? お作りになられるのですか?」

『その……、コスプレ衣装とか作ったことあるから……一応型紙とミシンがあれば作れるけど』

こいつオタクの沼に浸かりすぎだろ。すげえな。

オープンスケベゲームオタクと隠れ腐女子オタクの二人に衣装全部任せて良いのでは?」

「え、じゃあもう任せていい?」

『……まあ、衣装作るのは割と好きだし、いいけど』

「よっしやー！サンキュー織田！じゃあな！」

『でも意地悪なお姉様はやらないからね！ちよっと、聞いているの!?おいかんざー』

やべえ。目下一番面倒臭そうな衣装問題が一瞬で解決した。なんか最後に織田が叫んでたきができるけど。まあ後でラインで聞いてみるか。

「織田も衣装作れるって」

「ウソ!?香澄ちゃん、意外……でもこれでシンデレラ出来るんじゃない!?」

「出来るな。もう今から脚本作っちゃまおうぜ」

一回完成したら皆川ちゃんに見せておきたいし。あの人現文の教師だから色々ダメ出しとか貰えるかもだし。

二学期も少しだけ楽しみになってきた。



喧嘩したい。

七月も終わり、八月に入った。いよいよもって夏休み本番！って感じが出てきて暑さもピークを迎えてる気がする。昼間がクソ暑いのは勿論のこと、朝も暑いし夜も暑い。暑すぎて蝉が鳴いていない。まあ蝉の声って聴くだけで暑苦しいからそれはそれでいいんだけど。朝も暑いものだから、午前九時の現在でもアホみたい暑い。そんなに暑いなら外に出なきゃいいのだが、俺はコンビニへと向かうべくドラドラと炎天下を歩いていった。

物凄く煙草が吸いたくなったのだ。

まだ片手で数えられる程度しか吸ったことは無いのだが、こう、なんとなくめちやくちや煙草が吸いたくなる瞬間ってのは訪れる。初めて吸った時もそういう瞬間が来たから吸った訳だし。

で、今まで俺が吸う時は姉ちゃんの吸ってる煙草を一本貰って吸ってた訳だが。

「あー、あたしも今切らしてんだよね。買ってきてよ」

そして、今に至る。

いや、未成年に買わせるんじゃないやねーよ。未成年が「煙草吸いたい。一本くれ」って言うのも問題なのだが自分のことは棚に上げておく。という訳で姉ちゃん曰く「あたしが高校生の頃に買ったコンビニ」へ向かっている訳だ。店長変わってないしあのおっさん他人に迷惑かけない非行なら見逃す系のおっさんだから大丈夫！って言ってたけど本当だろうか？……まあ、姉ちゃんが煙草買おうとして怒られたり警察のお世話になったことは無いから大丈夫なんだろうけどさ。

「暑っつい……」

まだ朝じやん？なんでこんなに暑いんだよ。アスファルトがゆらゆら揺れる。陽炎も見ると暑苦しいよな。幻覚みたいで気持ち悪いし。電柱が真っ直ぐに見えない。もたれかかっている女の人とか見えるし。

「……とうとう俺の頭が壊れたか」

このクソ暑い中電柱にもたれかかっている女の人……？おかしくな  
いか、これ？というか別に暑くなくても電柱にもたれかかっているのは  
おかしくないか？

夏だし、幽霊とかの類が見えてるのではなからうか……？いかん、  
怖くなってきた。

いや待て、普通に体調不良起こして立っていられないだけの可能性  
もあるぞ？救急車呼んだ方がいいんじゃないか？どうする、一回声  
掛けてみるか？

……あ、目が合った。

「……すみません、お願いがあるんですけど」

話し掛けられた。

綺麗な声だ、って思った。

「ビニール袋とか持ってませんか……？」

「……え？」

なんで？

「あつ無理……ヴォエエエエ！うえつ、ゲホツ」

……は？

「うわきったねえ！くっさ！汚っ！ええ!？」

女の人はその場に蹲ってゲロを吐いた。めちやくちや臭い。汚い。  
最悪だ。

~~~~~

「ホントごめん！吐き気を堪えきれなくて」

「はあ……」

どうしてこうなった。

ゲロ吐いたお姉さんにドン引きしつつも顔色がヤバそうだったの  
で近くの自販機でお水を買って渡してあげたら、なんか喫茶店に連れ  
て行かれた。助けて貰ったお礼の奢りという名目で。助けてないん  
ですけど。

ゲロ姉さんは一言で言う「派手」だった。美人なんですけども

……。

ロングヘアで、金髪にグラデーショナルカラーで毛先はライトグリーン。赤い口紅が少し毒々しく、目もパッチリしていてカラコンも入っている。普通カラコンって茶色とか入れて黒目の部分を大きく見せるもんだと思うんだが、あれ多分別の色入ってるな。両耳あわせてピアスが六つ着いている。

やべえロックバンドみたいだ。とてもじゃないが朝に喫茶店にいるタイプの人ではない。つまり浮いている。同席している俺も。

「アタシ奥村由紀。ちよつと昨日飲み過ぎちやつてさ、ぐったりしてたの。ありがとね」

「いや、別に俺何もしてねえし……」

「その場に居合わせてくれた」

「はあ……」

奥村さんはクリームソーダを飲んでウツキウキだ。俺はメロンソーダを飲む気があんまりしない。頼んだのは俺だけでも。

「てか、朝の九時までずっとあそこでぐったりしてたんすか」

「いや、昨日終電逃しちやつて。仕方無く飲んでた近くのネカフェで寝て、起きて電車乗ってたら気分悪くなっちゃった」

この人多分ダメな大人だ。人は見かけで判断したらダメな事は解ってるけどこの人は見かけ通りの人だ。

「君は高校生？」

「はい」

「夏休みか、なるほどね。何処行くつもりだったの？」

「コンビニ二つすけど。煙草買いに……あつ」

やっべ。

マジでこのすぐに口に出してしまう癖治さないとヤバいな。

奥村さんは俺の「しまった」みたいな顔を見てぷつ、と笑った。

「そっかーいやそんな顔しなくていいよ、アタシも吸ってたし。別に咎めやしないよ、君が思うようにすればいい」

見かけ通りの人だ。未成年の煙草を容認するような大人は口クな大人じゃない。

だけど、そんなロクな大人じゃない人で良かった。ロクな高校生じゃない俺を容認してくれるのだから。

「君、名前は？」

「……神崎晴人っす」

「晴人……カツコイイ名前じゃん」

「そうっすか？」

「うん。ライブとかでギターソロ始まる前に「ハルトオツ！」ってコールしてみたい」

訳分からん。

「バンドとかやってるんすか？」

「そ、バンドやってんの。アタシギター」

だからその見た目か。このルックスでギターは中々に刺々しいものがあるなあ……ヘッドバンとかしそう。

「……奥村さんがギターならコールされる側じゃないすか」

「それもそうか。てか由紀でいいよ」

由紀さんは見た目こそ派手で刺々しいけど、話し方は優しくかった。優しいというよりは、大らかか？そんな感じだ。最初のゲロの印象が強過ぎてちよつと壁を作りたくなるけど。

「終電無くなつてたの、気付かなかったんですか？」

或いは男の家に転がり込むorホテル作戦が失敗したとか？その辺りは高校生だし経験も無いから解らないけども。

「気付かなかったね。バンド仲間と大喧嘩してさ、皆頭に血が上って怒鳴り散らしてたの。それで「もう無理！やってらんない！」って言って店出てスマホ見たら深夜一時。はー、やらかしたー！って感じ」

「大喧嘩っすか」

「大喧嘩っす」

店の方も大概迷惑だったんだろうな……。というかそんな喧嘩しながら酒飲んでたならそりゃ悪酔いするわ。俺高校生だしそんな経験も無いから解らないけども。

「まあ、人って皆考えてること違うからさ、何人が集まって本気で何か

しよう！って思ったなら意見の食い違いもあるからさ。喧嘩するのは当たり前なんだけどねー」

「そうっすね」

本気で、って所がキモなんだろうな。俺は基本的にそこまで本気で何かをしようとしたことが無いから、上手いことギクシヤクする前に相手に合わせる事が殆どだ。

「由紀さんのバンド、なんて名前ですか？」

「addictって名前。中毒って意味らしいよ」

聞いた事は無いな。

「ガールズバンドですか」

「いや、女はアタシだけ。ボーカルもベースもドラムも男」

その中で大喧嘩かよ。無茶苦茶な度胸あるなこの人。

でもやってらんない！って言って出て行ったんなら、もうそのバンドでも無くなるのだろうか。そもそもメジャー？インディーズ？どっちなんだろう。本気で、って言うてるからアマチュアじゃないと思う。

「なんで喧嘩したんすか」

「んー、なんていうかな。メジャーデビューを目指すべきか、インディーズを貫くべきか、みたいだね。他にも色々あったけど一番はそれかな」

インディーズだったのか。

「由紀さんはどっち派なんですか」

「グイグイ来るね」

「すみません」

なんというか、こういう大人は近くに割といるんだけど。こういう仕事をしている大人は近くにいないから少しだけ興味があるというか、なんというか。

「別にいいんだよ。アタシもちよつと愚痴りたい気分だしさ。アタシはインディーズ派。メジャーデビューが嫌だ！って訳じゃないけどね」

クリームソーダの上のクリーム部分を頬張る由紀さん。俺のメロ

ンソーダは減らない。

「アタシらのバンドさ、ちよつと軌道に乗ってきてるんだよ。ちよつと知名度も出てきてさ、いい感じなんだよね。これならメジャーデビューも夢じゃない！って皆が夢見始める位にはね」

ストローでソーダの部分吸う。飲む。俺も少しメロンソーダを飲んだ。

「けどさ、メジャーデビューしたらさ、商業音楽を求められる訳じゃない？歌詞、今は全部アタシが書いてるんだけどさ、ぶっちゃけ万人受けするような歌詞じゃないからさ。……ちよつと、怖いんだよね。今の自分の歌詞が否定されるんじゃないか、って」

今の自分の歌詞。

俺は歌を歌う事は好きだし、聴くのも好きだ。だけど歌詞を作ったことは無い。

作ったことは無いけれど、なんとなく解る。歌詞っていうのはそれを書いた人の心……というか、凶器なんだと思う。誰かに刺され！この自分の気持ちで誰かを殺してしまえ！みたいな、それでもしないと人前に自分の心をぶつけられないから、どうせなら殺してしまえ！みたいな。それはきつと、書く人にとっては押し込めてしまうと自分に刺さってしまうって、自分を殺してしまうことになる。

メジャーデビューしたら万人受けするように書かないといけない！って訳じゃない。でも、その可能性があるなら、自分の心に凶器が刺さってしまう可能性があるなら、確かにそれは怖いと思う。

「他のメンバーも「別にそういうわけじゃないだろ」って言うんだけどねー。ギターが特別上手いわけじゃないのに、シン……あ、ボーカルでリーダーの人ね、シンがアタシを誘ってくれたのはさ、そういう歌詞が書けたからだだったからさ。アタシにとっては誇りなんだよ」

クリームソーダのクリームの部分が無くなった。

「別のパターンの歌詞を書いてみたらそっちの方がいい可能性だつてあるだろ、って言われたりもしたけどさ。そうじゃないんだよね。少なくとも「今のアタシ」はそうじゃない。今のアタシは、この歌詞を、この今の歌詞を書けないならこのバンドにはいられない！って喧嘩

したの」

「……じゃあ、辞めるんすか」

「……どうだろうね。お酒飲みながらの喧嘩だったからさ。アタシも、皆も冷静じゃなかったし。またちゃんと話して、またちゃんと喧嘩して、そうやって次の道を探して行くと思うよ」

それが辞めるって形になっても、その時はその時のアタシにとってそれが一番よかつたんだと思う。

そう言う由紀さんの姿は「派手」の一言には表せない何かがあった。オーラ、とか哀愁、とか、そういうものじゃない。

なんというか、バンドメンバーに対しての信頼と、自分の心に対しての正直さ。

「酒飲んでたから冷静じゃなかった、ってのはなんとなく解ります。……いや、酔うほど飲んだことないからちゃんとは解らないですけど」

「君は中々に正直だな」

「けど、終電無くなるまで喧嘩して、それでももう一回、ちゃんと話して、喧嘩して、って言えるのって、どうしてですか」

正直、俺ならそのまま辞めていると思う。だって、終電が無くなることに気付かないくらいの大喧嘩だ。しかも長丁場だった筈だろ。酒飲んでたとは言え、一度そこで決着しているようにも思える。

それでも、また話し合おうとしている姿がすげえと思ったんだ。

……ちよつと、滑稽にも見えるけども。

「……ハルト、君はアレだね。喧嘩してる友達とかいるね？」

「居ないっすけど」

「……ありやりや、違ったかー。まあいいや。青春真っ盛りのハルトに、ちよびつとだけ先に大人になったお姉さんが教えてあげよう」

クリームソーダはソーダの上にアイスクリームが乗っているものだ。そのクリームが無くなればただのソーダ。俺の目の前にあるメロンソーダと何ら変わらない。

「アタシはさ、addictっていうバンドが好きなんだよ。バンドそのものも、メンバーも、今まで積み上げてきた時間もね。そこに関

してはさ、他のメンバーも絶対変わらないと思うんだよ。いや、「変わらない」。確信出来るね。そりゃあ、ガチ喧嘩もする。昨日より前も、何回も何回もガチ喧嘩した。何回も何回も「やってらんない！」って叫んだし叫ばれた。けど、それが普通なんだよね。アタシら、違う人間だからさ。だけど、絶対にやっちゃいけないことがある。……なんだと思う?」

「……なんですか?」

「絶対、手え出しちゃいけない。喧嘩がどれだけ激しくなっても、殴っちゃいけない。蹴っちゃいけない。相手を罵っちゃいけない。それは喧嘩じゃなくて、戦争だからね」

喧嘩じゃなくて、戦争。

止まるところが、見えなくなってしまうから。

「ぶつかるとは当たり前。大事なものはぶつかった時に、相手を轢き殺そうとしないこと。なるべく痛くならないように道を譲る、つてことをしないこと。すつごく難しいけど、そうしていけば化学反応が起きて、ぶつかっちゃった場所から次の道が舗装されていくの」

なるべく痛くならないように道を譲る、か。

なんとというか、うん。ちよつと思いつた節があるかもしれない。「今、アタシがこれで本当にアイツらと会わなくなったら、「なるべく痛くならないように道を譲る」つてことをしちゃうんだよね。そうしたくないから、またアイツらに会うの」

人を見かけで判断してはいけない。頭では解っていても、多分、皆ある程度は見かけと第一印象で判断するんだろうな。

バンドマンなんて、ロクでもない奴ばかりかもしれない。見かけが派手過ぎて、こんな喫茶店には合わないかもしれない。

けど、この人だって、奥村由紀さんだって、ちゃんと「大人」だ。

「……さて、助けてくれて愚痴まで聞いてくれたハルトにはプレゼントだ。はい、どうぞ」

机の上にぽん、と置かれたのは一枚のフライヤーと、小さな箱。煙



草だ。

「三本くらいしか入ってないけどね。フライヤーは今度やる予定のライブのフライヤー。まあ、これからの喧嘩次第ではアタシは出ないかもしれないけどさ。もしこの日が暇なら観に来てよ。アタシに言ってくれたらチケット代安くするからさ。……あ、ラインやってる?」

「……未成年に煙草渡していいんですか」

「アタシはハルトが高校生、ってことしか知らない。高三で二浪しているなら二十歳だしね」

前言撤回。人は見かけで判断してはいけないが、やっぱり奥村由紀という大人はロクな大人では無い。

けど、最初に比べたら悪い印象は持てなかった。

俺も、少し頑張らないといけない気がする。

初恋。

「珍しいね、ハルが私の家に来るの」

「言われてみればそうだなー」

三本しかない煙草を一本だけ吸い、姉ちゃんに「煙草買ってこいて言っただじゃん！」と怒られ、昼飯を食べて詩織に連絡をして。

珍しく、俺は詩織の家に遊びに来ていた。基本的に俺の家で遊んだりすることが多いから本当に珍しく感じる。

急に「お前今日暇？」って連絡して家に押し掛けるのも悪い気もしたが、暇だったらしいし家も一人だったらしいのでまあ、良しとする。今更急に押し掛けるとか気にしないだろ、多分。

思い立ったらその日がきつと吉日なのだ。

「どうしたの？ハルから連絡してくるの珍しくない？」

「……おう」

なんだろう。少し怖い。

俺は何を言う為にここに来たんだっけ？心臓が跳ね飛ばされそう

だ。  
ちゃんと話せ。普通に話せ。今日ここに來てるのは文化祭の実行委員の為とかじゃない。だからこそちゃんと話せ。これは「俺の為」。

何が言いたかったんだ。

俺は、詩織になんて言いたいんだ。

「詩織」

「何？」

落ち着け。

前みたいになら夜だから、周りが暗いから。歩きながらだから、互いに顔を合わせずに話してた、なんてことは出来ない。今は昼で、ここは詩織の部屋で、座布団に座って顔を合わせている。

譲っちゃいけない。

昔は、小さかった頃は無邪気で、きつともっと真っ直ぐ歩いていた。けど、大人になろうとする過程で、道を譲るっていう逃げ道を知ったんだ、俺は。

今日くらいは、子どもに戻ったっていいじゃないか。相手は子ども頃からずっと一緒だった幼馴染だ。

ちやんと、俺のことを、思っていることを、言う。どれだけ、それが難しいことでも。

「俺は、昔っからお前のことが好きだった」

「……………え？」

あれ、思ってたことと違うこと言ってる？

いや、これでいい。

今日限りは、今だけは。今、俺の口から出ている言葉が全て正しい。「前、夜にお前が俺の事が好きだった、って言われた時に気付いたんだよ。俺も中学生位の頃からお前が好きだった。美味しくも不味くもないお前の料理を毎週食わされてる時は「夫婦になったらこうなのかな」とか考えてたし、夫婦ってからかわれるのも満更でも無かった」そして。今も。

「今も、ちよつと好きだ」

真っ直ぐ、目を見て話す。詩織は、何も言わない。言えないのかもしれないが、何も言わずに俺の目を真っ直ぐ見ている。

「だから、お前が高見と付き合った、って聞いた時はしんどかった。すっげえ病んだ。高見が実は嫌な奴で、お前の事を苦しめてしまえばいいのになー！とまで思うくらいには卑屈になつてた」

俺が卑屈なのはいつもの事なのかもしれないが。

気持ちが色々込み上げてきた。爆発しそうだよ。

ああ、そうだ。そうだったんだ。

俺、しんどかったんだ。キツかったんだ。隠してるつもりで、隠せているつもりだったけど。

こんなに込み上げてくるくらい。自分の気持ちがあったんだ。

「あのな……………俺は！お前が俺の事が好きだったってことに全く気付かなかった！お前も多分そうなんだろうな、俺だって「あ、俺は詩織の

「ことが好きだったんだ」って気付いたのは本っ当に最近の話だ！  
けど！だけど!!」

涙出てきた。

「俺は！お前のことが好きだったので！たとえ嘘だったとしても!!お前のことを振るとか！絶対に出来ねえし！やりたくもねえし!!お前からそんなこと言われたくなかった!!お前にとっちゃ違ったかもしれねえけど!!俺にとっては！俺にとっては!!」

喉が枯れそうだ。こんなに叫んだのはいつぶりだろうか。

「俺にとっては、初恋だったんだよ!!」

「…………えっ」

もし、マキユーシオが女性で、ロミオの親友で、そして気付かぬうちにロミオに恋をしていて。けれど、ロミオの心は急に現れたジュリエットに向けられていると知っていたなら。

シエイクスピアの四大悲劇にも劣らない悲劇だったかもしれない。

あー、頭ん中ぐっちゃぐちゃだ。なんで泣いてるんだ、俺は。

なんで、詩織も泣いてるんだ。二人して泣いてさ。馬鹿みたいじゃねえかよ。

「…………お前がさ、誰と付き合いおうとそれはお前の問題だからさ。俺はただの幼馴染だから、それは何も口出し出来ねえ。高見はイケメンだし、良い奴だし、良物件だと思う。けど、お前が俺の初恋を終わらせる権利は無え。俺の初恋は、俺が納得いく形で終わらせる」

「…………ごめん」

「別に、謝ってほしいわけじゃねえよ」

ただ、俺が納得したいだけだ。

「詩織。無理を承知で言う」

「俺は今でもお前の事が好きだ。「俺と」付き合い合って欲しい」

人生初の告白が、寝取り宣言になるとは思わなかったなあ。

けど、これでいい。

俺の初恋は、俺の勝手で幕を下ろすんだ。

詩織の勝手だって聞いたんだ。俺にだってワガママ言わせてくれ。

「…………ごめんなさい」

知ってた。

当たり前だ。

それでも、なんか悔しかった。

「ハルのことは…………好き。大好き。玲音君と付き合うまでは、異性として好きだった。けど、やっぱり私は、ハルとはきょうだいみたいな、」

「幼馴染の関係が一番楽しい」

二人の声が重なった。

思っていることは同じなのだ。

「…………俺も、そう思う。お前に彼氏がいようが、これからも俺はこうやってお前の家に押しかけるし、理恵さんも姉ちゃんも巻き込んで遊ぶ」

「…………うん」

「だからといって、俺の初恋の相手がお前だったことも変わらない」

「…………ごめん。私さ、ずっと片想いだと思ってたからさ。ハルにひどいことしたし、ダメなこと沢山考えてた」

「…………まあ、病んだのは事実だけだな。お前に振り回されるとか今に始まったことじゃないし」

「ごめん」

「だから、別に謝ってほしいわけじゃないって」

もしかしたら、俺が、詩織が、どっちかが。もう少し前に自分の気持ちに気付いて、告白していたら。詩織と付き合っていたのは高見じゃなくて俺だったのかもしれない。両片想いだったわけだし。

でも、朝の由紀さんの言葉を借りるなら、少なくとも今の俺にとってはそうじゃないんだと思う。その時気付かなかったから、今、俺と詩織はカップルでも夫婦でもなんでもなくて、ただの幼馴染だから、それがいいんじゃないのかな。

「……まあ、お前がしんどくないように楽しくしてるならそれで俺はいいよ」

「……私も、ハルがしんどくないように楽しくしてて欲しい。私、距離置いた方がいい？」

「さつきも言っただろ。幼馴染の関係が一番楽しいからお前が距離置いても俺が押し掛ける。……高見に怒られたら、自重する」

詩織に向かって叫んだの、いつぶりだろうか。

小学生の頃はよく喧嘩してただけだな。中学生位から詩織に振り回されることは多かつたけど、俺がこいつに叫んだり怒ったりしたことは無くなった気がする。

なんか、子どもになった気分。

歳は取りたくなくても勝手に取っていくもんで、三次元にネバーランドなんてものは無いからなりたくなくても勝手に大人になっていく。背は伸びるし、嫌でもワキ毛だって生えてくる。詩織だって昔と比べりや胸も膨らんでる。

だからこそ、こうやって「子どもになった気分」っていうのは嬉しい。それが、すつげえダサイ理由だったとしても、子どもの頃を思い出せるようなことって素晴らしい……気がする。

別にそれがあつたから今までのしんどかつたものの全部パー！とかそういう訳では無い。見てしまった悪夢は見なかったことに出来ないし、心に塗りたいくつた泥も、それを取り繕った絵の具も洗い流せない。

けど、その悪夢も泥も多分今しか見れないから、大人になつてもう一度！つてのは無理なんじゃないかな。高二的、夏の、今だから。もう一回同じ思いしろ、つて言われたら絶対嫌だけどね。

……さて。

「今何時？」

まだ涙を睨ってる詩織に聞く。こいつの部屋、時計無いんだよな。どういうことだよ。

「えっ……えっと、二時半、くらい」

スマホの画面を付けて時間を確認する詩織。ちらつと見えた待ち

受けは高見とのツーショットだった。……くそ、やっぱりちょっと妬いちやうな。

「まだ夜までめちやくちや時間あるな……お前さ、約束覚えてる?」

「約束って?」

「テストの点数、負けた方は飯奢りっていう約束」

「……あっ」

忘れてました、って顔してやがる。そしてそのまま俺から目を逸らしやがった。今までずっとちゃんと真っ直ぐ見てやがったのに。

「俺、今回過去最高点だったんだよな。詩織ちゃんはどうだったんですかね」

「え、えーっと……」

「なんか謝ってほしいわけじゃ無かったけど、詩織的には悪いと思ってるらしい?これはきつと美味しいもん奢ってくれるんだろうなく」  
「あんまり高いのはやだな……?」

やっぱり焼肉か?人の金で食べたら美味しいものランキング一位に焼肉か?いや、ちよつとオシャレなレストランで Pasta とピザ、なんかもいいかもしれない。もしくは寿司?回らない方のお寿司屋さん、行っちゃおう?

「やっぱり夜は焼肉っしょー!!!」

俺の初恋を知らなかったとは言え、私を振ってくれなんて残酷なこと言ったのは焼肉で許してやる。散ったけど、初恋相手には未だ甘々なのだ。……まあ、幼馴染じゃなかったら焼肉程度じゃ許さないけどね。

「あはは……なんかデジャヴ」

「何が?」

「ハルに焼肉奢らされそうになる夢を前見たの」

「奢らされそう、じゃなくて奢らされるんだよ」

「むー……約束だもんね。奢らせてください」

「よろしい」

人の金で食う焼肉は美味い。

まあ基本的に俺達は高校生だし、バイトもしてないから正確には人

の小遣いで食う焼肉は美味しい、なんだが。……あれ、そういや詩織は夏休みだけバイトしてるんだっけか？まあいいや。俺は財布持っていないからいいんだし。

「そうと決まれば今日の夜予約しようぜ」

「ハルがお店決めていいよ。予算は一人三千円くらいまで」

「三千円だったら二時間食べ放題とかのコースか？スマホで調べてみるか」

焼肉とか久々に食うぞ。楽しみになってきやがったぜ。

……あ、この店前に姉ちゃんが行った記憶あるな。店員さんの愛想が良くて可愛かったお店。ここにするか。

「……なあ、詩織」

「何？」

「彼氏出来るってどんな感じ？」

「ええー……？どんな感じって……うーん、何だろ、ドキドキはするけど」

「親に隠れて煙草吸う、みたいなの？」

「私吸ったことないからそれはわかんないけど」

「じゃあさ」

これ、実はちよつとだけ気になっていた。

「俺に彼女が出来たら、どう思う？」

「えー……ちよつと、妬いちやうかもね。むー！私の幼馴染に目を付けるとは中々やるなー！って」

「ブフっ、なんだそりゃ」

「うーん、なんだろ？別にさ、ハルは私の彼氏じゃないし、きょうだいまいだけどきょうだいじゃないじゃん？だけど、なんかハルが彼女作ってる姿は想像したくないかな」

なるほどね。

詩織が彼氏作った時に俺が抱いた感情は、どうやらおかしなものは無かったらしい。

なんとなく、安心。

「……あ、成程。ハルもそうだったのか」



「さあな」

「妬いてたの?」

「……まあ、そりゃあ。幼馴染に彼氏が出来るのは複雑だった。何より好きだったわけだしな」

「むー……」

一丁前に照れてるんじゃねえよ。高見にどやされるぞ。

まあ、嫌いじゃないやつに「好き」って言われたらどう反応したらいいかわからなくなって照れる気持ちは解る。俺、そんなこと経験したことないけども。

……やっぱり、俺も彼女作りたくないな。誰でもいいから付き合いたいとかそういうのは無いけど。なんとなく、こーう、恋がしたい。

コバの言つてた「男ならモテたいだろ!」って真理だと思うけど、なんかそれ以上に。詩織の言つてるときどきとやらは感じてみたい。

というか詩織には高見とかいう彼氏がいるのに俺には彼女がいないのがちよつとムカつく。やっぱり普通にムカつく。

「予約するけど何時から行く?」

「六時半くらいでいいんじゃない? ハルも一回帰って用意しなきゃでしょ?」

「何言つてんだ、外行きの服着てるし奢りだから財布いらねえし俺はこのまま行けるぞ」

「うわ、そうだった。えー、じゃあ結構時間あるね……久々にゲームでもする?」

「乗った。負けた方は……」

「ダメ! もう今日は賭けなし! 私の財布がもたない!」

「あいよ」

二人でリビングに降りる。ちえー、どうせこいつとやるゲームなんてマリカーだろ? 今日は勝てる気がしていたのになあ。

……うん、やっぱりこいつとはカップルとしていちやいちやしてるよりも、姉ちゃんと遊んでる時みたいにこーうやって好き勝手出来る関係の方が楽だ。

改めてサラバ。俺の初恋。

……彼女って、どうやったら出来るんだろう。

おっぱいを揉みたい。

「……マジでどうしようかな」

「何が？」

「大学のオープンキャンパスのレポートだよ。俺特に大学でやりたいこととか無いんだけど」

「あそこ行きやいいじゃん、えつと……なんとか大学。近くにあるやつ」

「上井大学な。いやそこでもいいんだけどさ」

課題はさっさと終わらせてしまいたい系人間である俺は、ただ一つの課題を残して全て終わらせた。八月もまだ上旬、後はぐーたらしたり遊んだりするだけである。

ただ、大学のオープンキャンパスレポートだけは手がつけられずにいた。俺、マジで将来とかあんまり何も考えてないんだけど。なんなら高卒で働いてもいいんだけど。

「……あ、そうだ。明後日から母ちゃんと父ちゃんが帰ってくるって」

「え、珍し」

「珍しくもないよ。盆休みだし」

……あー、そういう盆休みとかあったな。

母ちゃんと父ちゃんが帰ってくるのか。なんというか、嬉しいような、そうでもないような………というか姉ちゃんだけじゃなくて俺にもそういう連絡はして欲しいな？

「あんたさあ、将来がイマイチ決まってるなら母ちゃんと父ちゃんに相談してみたら？ほら、一番近い大人でしょ」

「理恵さんの方が近い気はする」

てかアンタも大人でしようが。何しれつと「あたしは相談に乗らない」みたいな感じで話を進めてるんですかね。……まあ、姉ちゃんに相談しても今更なー、って気はするけど。多分お見通しだろうしさ。

「理恵さんには相談出来ないこともあるでしょ？なんだかんだ言っつてこういうのは家族が一番頼りになるのよ」

「言いたいことは解るけどさー……」

ぶつちやけ俺、母ちゃんとも父ちゃんともどう接したらいいのかわかんないんだよな。姉ちゃんはどう、歳も近いしずっと一緒だったからそれでいいんだけど、姉ちゃんと母ちゃんとはちよつと違うから、同じ感覚で話すことは出来ないし。

皆、どうやって進路とか決めてるんだろうな。詩織……は絶対まだちゃんと決めてない。と思う。コバはどうなんだろうか、あいつ適当に就職してコミケとかに同人誌とか持っていきそうなイメージあるな。須田はなんかよくわからん。織田も決まってそうにないよな……。

そーいや織田も割と家族仲良さそうだよな。郁也さんと絡んでる所しか見たことないけど。……母ちゃんとかとどうやって話してんだ？聞いてみるか？

ラインを開いて文字を打ち込む。

「お前、家族仲良い方だよな？」

返事は意外にもすぐに返ってきた。

『え？悪いけど笑』

『兄貴とは仲良いけど親とは別に。お父さんと三日くらい話してない』

え、マジで？三日も話さないとかあるの？冷戦？

「マジで？」

『まじ笑 あんまり素行の良くない娘にイライラしてると思うよ笑』

笑笑、じゃねーよ。てかこいつ素行があんまり良くないことを自覚してるのかよ。

まあ、普通に考えたら校則ギリギリアウトみたいな赤い髪してて、実際何回か皆川ちゃんに注意されてるのに上手いこと躲してそのままの髪色だし、男子から冗談半分で「ビッチ」って呼ばれる娘にはもうちよいこう、普通にしてて欲しいわな。……あと、まあ流石に擬態してるだろうが重度のオタクだし。オタクが悪いとは言わないけども。

「進路とかお前どーするの」

『考えてない』

『お前オーキャンのレポートまだやってないだろ笑』

バレた。そりゃバレるか。

『アタシ、明日上井大学見に行くけど』

お前も上井かよ!?!……あいつの学力じゃ厳しくね？

『一緒に行く?』

「えっ」

えっ……そうなります?。

くくく

「待った?」

「別に」

集合時間から五分遅れてきやがった。なのに詫びの一言も無く待った? ってコイツ……。まあ俺も寝坊して遅刻ギリギリだったから本当にそんなに待ってないんだけども。

大学のオープンキャンパス(というか学校見学?)に行く為、俺も織田も制服だ。特にこう、見慣れないあれがある訳じゃない。だが、ひとつだけ気になることがあった。

「……お前、髪伸びたな」

「切るのめんどくさいんだよね」

織田の髪が、ちよつと伸びてる。今日はオープンキャンパスつてこともありピアスは付けていないらしく、穴を隠すために耳は髪で覆っていた。穴隠しても髪の毛赤いからあんまり意味ないと思う。

「てか、そういうのちゃんと気付けるんだ。童貞なのに」

「うっせービッチ」

変化に気付けなかったら姉ちゃんにボコボコにされた小学生の頃を思い出す。女性の髪の毛の変化とかに気付けるようになったのはまあ、そのせいというかおかげというか……。

「言っとくけどこの髪色って大変なんだからね。金髪だったらプリンっぽく見えるけど赤で根元黒かったら何？みたいになるから結構染め直すんだから」

「めんどくせえなそれ。髪切る方が楽なんじゃねえの？」

「アンタは根元の黒い部分だけ切って毛先の赤を残せるの？」

……おお、確かにそりや無理だ。どっちにしる染め直しはしないといけないのか。

そう思うとあの由紀さんも大変そうだな。金髪にグラデーションカラーも入れてたから……プリンになったら三色？やばいな。髪の毛ボロボロになりそう。

「てか、お前の学力じゃ上井普通に無理だろ」

「何でアタシの学力知ってんだよ。この課題が一番面倒だから適当に近くの大学選んだだけ」

「俺と同じか」

「最悪高卒でもいいし」

それはどうなんだ。やりたいことがちゃんとあつて高卒ならいい気もするけど、何も考えてないんだろ、お前。

「……着いたけど」

「……アレだよ。大学ってマジでかいよね」

「それな」

うだうだ喋っているうちに着きました、上井大学。

大学のキャンパスってマジででかいよな。高校の倍はあるんじゃないの？って思ってしまう。学校内で暮らせそうなレベルだもんな。えつと、学校内見学の案内はどっちだ？

「……お前、オープンキャンパスのパンフレットみたいなのとか持ってないの」

「持ってないけど」

俺、こいつと来て大丈夫だったのだろうか……？

くくく

オープンキャンパスに来たっぽい高校生達を見つけて、上手いことしれつと後ろをついていくと、ちゃんとそういう受付がありました。学校名、学年、名前、今後のオープンキャンパスや入試情報等の資料請求をするか否か、みたいな簡単な書類を書かされて、そのままなか担当の人の案内の元、講義室みたいな所へ連れて行かれた。あれか、学校説明みたいなあれだ。

「……やば、アタシメモ忘れた」

「お前何しにここに來てるんだよ……」

宿題やる気無さすぎだろお前。

取り敢えずなるべく目立たないように後ろの方の席に着き、メモと筆箱を取り出す。しゃーない、織田にも貸してやるか。

「ほら、メモとペン」

「あー、サンキュ。助かります」

何かさつきから目線を感じるのはあれか。隣に赤髪の女の子がいるからか。周りの制服着てる人皆真面目そうだもんなー、普段姉ちゃんというドギツイ女性を見るから逆にここまで真面目そうな人ばかりだと怖くなる。大丈夫？俺ら浮いてない？

ビクビクしつつもメモは取る。これちゃんとメモ出来てなかったら課題出来ないからね。今日の目的はこの大学に入学するかどうかを決める事ではなく、課題を如何にして終わらせるかなのだ。

くくく

「学食うめえ」

「アタシらの高校より美味しい……アタシここに進学する」

「頭足りねえだろ」

学食体験、実際の講義体験。講義は言ってること意味不明過ぎてダ

メだった。一応メモ取ったけど隣にピカチュウとか落書きしてた。

学食はマジで美味い。え、これ大衆食堂とかでやっていけるんじゃない？普通に金出して食べたいくらいには美味いぞ？この味もメモしておきます？食戟のソーマだったら今頃俺と織田は全裸にされてると思う。

……学食の味は兎も角、まあ、精々オープンキャンパスな訳だし、講義の内容だったり、その他諸々も「来てもらうこと」を前提に内容を組んでるはずだから、それなりに楽しく出来るようにしているんだろう。実際このキャンパスで四年を過ごす、となると絶対にしんどいとだらけで、大変だとは思う。

それでもやっぱ、大学生って少し憧れるな。

姉ちゃんが大学生してた時はやっぱ楽しそうだったし。人生の夏休み、とか言われてるし、それはもしかしたらパリピだけなのかもしれないが、それでもやっぱり夢を見てしまう。

勉強しないとなあ。

「メモ、うまい具合に埋まったね」

「そうだな」

学食体験が終わったら、最後に最初の受付の方に戻って解散らしい。あとは学校内を適当に歩いてみるもよし、帰るもよいらしいが……

「どうする？」

「帰る。アタシ浮いてるし」

「りよーかい」

まあ、別に俺も特に見たいもんとか無いし。

これだけ色々見れたら、課題を埋めるのは充分だろう。

「んじゃ、帰るか」

くくく

時刻は午後四時前位。だが流石は夏、空はまだまだ明るい。クソ暑



い。二人で自販機で炭酸飲料を買い、うだうだ言いながら喉に流し込む。夏の方が炭酸飲料は美味しいと思う。

「思った以上にさ、早く終わったじゃん」

「そーだな」

「暑いじゃん」

「そーだな」

「ゲーセンで涼んで帰らない?」

「は?」

何言ってるのこいつ。暑さで頭イカれたか?

「神崎ってさ、クレーンゲーム得意?」

「……あんまり。てかアームの強さにも拠るだろ」

「そうなんだけども」

……成程。さてはこいつ、

「お前欲しいフィギュアあるけど取れる気がしてないんだろ」

「……そういう事。絶対他の奴にはバラすなよ。ミカとか、楓とか。

勿論詩織も」

「バラさねーし……なんのフィギュアだよ」

「えっと……ルビィちゃん」

女性キャラかよ。こいつの事だから刀剣乱舞とかそういう感じかと思っただわ。……刀剣乱舞がフィギュア化されてるのかどうかは知らんが。ねんどろいどとかはありそうだな。

てか俺もクレーンゲームはあまり得意じゃないんだがなあ……金ないからあんまりゲーセンで遊ばないし。でも暑いし何処かで涼んで行きたい気はする。あと久々にゲーセンには行きたい。

「……取れるかわかんねえけど、乗った」

「ラッキー!期待してるぜ、童貞クン?」

こいつぶん殴ってやりてえ。

~~~~~

「だアアクソ！腹立つな！」

「まだ三クレしか入れてないじゃん……」

ちよつとしか動かねえ！織田の出せる予算は千円らしいので一応あと七クレジット分はあるが、これマジでいけるのか……？アームで持ち上げるよりアームで押し出した方が良さそうだな。

四クレ目。結構ズレた気はする。あと二回くらい押ししたら行ける気が……いや、絶対そう考えたらそれにプラス二回くらいは必要になる気がする。けどここまで押ししたし、あと六クレだろ？行けんじゃね？

五クレ目。かなりいい感じにアームが入った気がする。

「おっ？」

「え、まっつて？いけんじゃね？」

ゆつくりとアームが伸びて、思い切りルビイちゃんのパイプが入った箱を押す。そのままガタンと下に落ちて、すると下の受取口へ……。

「きたっ！いけたっ!!」

「やったああ！お迎え出来た！神崎サンキュー！」

やばい、喜び方がガチなやつだ。ちよつと発狂してるぞこいつ。

……こいつ履修済みジャンル多くね？結構なガチオタじゃねえか。

「やばい、当初の予定より五クレ分も浮いたじゃん！神崎、折角だし遊んで帰ろ！」

織田のこんなに嬉しそうな顔は初めて見たかもしれない。こうして普通に笑っていると、ビッチだのヤンキーだの髪が赤いだの関係なく、普通に女の子で普通に可愛いな。但しガチオタで拗らせてる腐女子。……人のこと言えないけど。

「ほら神崎イ、ホッケーでもやろうぜ？アタシに勝てたらおっぱいくらいは揉ませてやるぜ？ルビイちゃんのお礼も兼ねて」

「そんなこと言っつからビッチ呼ばわりされるんだぞお前」

「何言ってるの。ビッチでも「誰でもいい」って訳じゃないんだけど

「？」

「……は？」

「アンタはまあ、及第点。見返りがあるならちよつと位は許してもいいかなー、つて」

こいつマジで何言ってるの？

「……ほら、ホッケーやるよ。チャンス与えてんだから、頑張つて勝ちな、童貞くん？」

クレジツトが投入され、パックがステージに投入された。

……ちよつと待て、頭が追いついていない。どういうことだ？織田は俺に何を言ったんだ？ビツチだからといって誰でもいい訳じゃない？それはそりゃあそうだろうけど？

「頭パンクしそうになつてる神崎にわかりやすく説明してあげようか？」

ホッケー台を挟んだ先で、赤髪の少女がニヤリと笑う。

「……全部嘘だから」

マツハで一点目を決められた。

……こいつ、童貞をからかって遊んでやがるな？

「……上等じゃねえか！マジで勝つてお前のおっぱい揉み尽くしてやる!!」

「……や、だから揉ませないって……でも全力で叩き潰してあげる！童貞がアタシに勝とうなんざ百年早いことを教えてあげる！」

少年漫画のように叫びながらパックを打ち合う、闇のゲームが始まった。

結局、ボロ負けした。あいつ強過ぎだろ。

童貞がビッチに勝てないのは世界の心理らしいです。

探さない。

「ただいま」

「あー、なんか久しぶり。実家！」

「おかえりー」

神崎家に父ちゃんと母ちゃんが帰ってくる日は一年を通してマジで滅多にないと思う。

がっしりした身体に短髪。だけど眼鏡が少し知的に見える父ちゃん、神崎一郎と少し前に病院で会った母ちゃん、神崎美和。二人共バリバリの働きマンで、仕事に命を捧げてらっしゃる。服屋で働きつつ「あー今日ダルい」とか言ってる姉ちゃんの両親とはホント、思えないね。そもそも俺、父ちゃんと母ちゃんがなんの仕事してるかよく知らないけど。服屋では無いことは確かだ。普通のサラリーマン、OLだと思う。

俺は正直、あんまり何喋ったらいのか解らないから少し憂鬱な気もしていたが、代わりに姉ちゃんのテンションは高かった。……いや、まあそりゃ俺だって久々に会う家族だから嬉しいけどさ。一緒に暮らしてた時って、俺まだ小学生とかで無邪気だった頃だから。今、ちよつと大人になってから喋ると、こう、なんか恥ずかしい？というかなんというか……気まずい。俺コミュ障だし。

「晴人、あんた怪我は大丈夫？」

「んあ？あー、うん。もう治った」

「良かったあ。ホントに心配したんだから」

その割に見舞いの品の果物は俺の好みと姉ちゃんの好み間違えたけどな。そこでちゃんと俺の好みを抑えてくれてたらポイント高かった。

「ほら、母ちゃん！玄関で喋ってないで上がってよ！あたしお茶入れるから！父ちゃんも！」

「すまん、雨。じゃあ先に荷物を部屋に置いてくるか」

県外から帰って来てる訳だし、まあそれなりに疲れてはいるだろう。確かに玄関で喋ってないでさっさと上がれば良かったな。おお、

玄関の靴が多い。なんか新鮮？懐かしい感じもする。

どうせ姉ちゃんに手伝わされることは解り切ってるので何か言われる前に姉ちゃんの後についてリビングへ向かう。

母ちゃん達が帰ってくる日の為に、姉ちゃんはちよつと高めのお菓子を買っていたので、それをテーブルの上に置いておく。その間に姉ちゃんは茶を入れて、同じようにテーブルに置く。なんか、そわそわするな。

「あら、リビング綺麗じゃん！雨、晴人、あんた達ちゃんと掃除してるのね」

「ほほ姉ちゃんだけだな、掃除してるの」

「……お、このバームクーヘン食べたことあるぞ。美味しいよな」

「へっへー。二人が帰ってくるって聞いて奮発して買ったの」

あ、このバームクーヘン、有名なのね。姉ちゃんってそういう情報何処から仕入れてくるんだ……。

くくく

母ちゃんと姉ちゃんは夜ご飯の買い物へ。現在、自宅には俺と父ちゃんの二人だけ。

父ちゃんは厳格、とかそういう感じではなく、かなりフランクな感じだ。学生時代はラグビーをやってたらしく、だからその体格かよと納得がいく。……その体格もあってぱつと見た感じ怖いけど。

俺はなんとなく気まずい（多分そう思ってるのは俺だけなんだが）ので、ソファに寝そべり昼間の大して面白くもないテレビを付けてぼーっと見ている。父ちゃんもテーブルの椅子に腰掛けて俺と同じようにテレビを見ていた。

「晴人、お前詩織を助ける為に怪我したんだってな」

「んあ？……あー、うん」

「俺がこつちに住んでた頃は詩織に泣かされてばかりだったのにな」

「そうだったけ」

そうでした。口では覚えてない風に装うががつつり覚えてる。恥ずかしいこと思い出させるなよ。小学生の頃は詩織の方が背高かったし腕つぶしも強かったんだよ。

「お前、部活は？」

「帰宅部だけど」

「お前、サッカーとか似合いそうなのにな」

「なんだそりゃ」

スポーツに似合うとか似合わないとかあるか？……いや、あるか。俺にサッカーは似合わないだろ。

「父ちゃんはラグビーやってたんだっけ」

「おう。強かったんだぞー」

「ホントかよ」

「おつ、疑ってるな？実は父ちゃんは県大会でベスト4まで行ったことがあるんだぞ？ちようど晴人と同じ、高二の時だったな」

ホントかよ……？こんな所でしようもない嘘を付くタイプじゃないし、マジなのだろうか。

「父ちゃんってさ、昔はラグビー一筋だったわけ？」

「んー、そうだな。それなりにラグビー馬鹿だったと思う。青春を捧げてたぞ」

なんとなく思い出す、姉ちゃんの言葉。

進路相談、両親にしてみたらどうだ、ってやつ。

恥ずかしいし、気まずいけど。まあ、どうせ何の話しても今はなんとなく気まずさを感じそうだし。

「やっぱさ、プロになりたかったの？」

「いや、あまりそうは思っていなかったな。というか、無理だろうなって思ってた」

「今の仕事やりたい！って思った理由って、何かあったわけ？」

「……晴人、お前進路で悩んでるのか？」

当たりです。無言で頷く。テレビの方を向きながら。

父ちゃんはそんな俺の後ろ姿が見えていたのか、ふふつ、と低い声

で笑った。……何だよ、進路で悩むのがおかしいかよ。

「そうか、晴人も大きくなったな。……雨は、進路で相談されたことがなかったから、少し嬉しいかもな」

「……姉ちゃん、俺くらいの時反抗期最盛期だったもんな。髪色ゴリッゴリで」

「お前に悪影響を与えたらどうしようか、母ちゃんと二人でよく心配してたよ」

それについては問題ない。姉ちゃん、両親には反抗期最盛期だったけど、謎に俺のことは今と変わらない扱いだっただし。それに俺もあーなりたいたとはあまり思わなかった。かつこよかったけどね。ある意味影響は受けてるかもしれないけど。

「……晴人は、今やりたいことは無いのか？」

「あつたら悩んでねえよ」

「それもそうだな、すまん。……そうだな、親としてこんな事言うのもおかしい気がするんだが」

父ちゃんは初めて子どもから進路の相談をされているんだ。慎重に、言葉を選んでる雰囲気を感じられた。俺はソファに寝そべっていた体勢から、ソファに腰掛ける体勢へと変え、父ちゃんの顔を見ることにする。眼鏡の奥が、少し嬉しそうだった。

あー。親父って感じ。すごく、自然だ。

当たり前だけど、この人が俺の父ちゃんだ。

「晴人のやりたいことは、そのうち見つかると思うんだ、必ず。だから、今は悩まなくてもいい。いつか、本当にやりたいことが見つかった時、「あー！こんな資格があるのか！」だったり、「えっ、こんなこと出来ないよダメなのか！」ってことがあるかもしれない。その時にその資格を取るだけの、そんなことができるだけの実力が無かったら笑えないだろう？だから、今は出来ることを増やしていればいい。……と、父ちゃんは思う」

果たして、両親が県外で働き始めて家に帰らなくなる前。家族四人でこの家に住んでいた頃。

俺は、父ちゃんのこんな真剣な、綺麗な話を聞いたことがあっただ



ろうか。

昔はよく遊んでくれるいい父ちゃんだった、と思う。仕事で滅多に遊べなかったけど、遊べる時は全力で遊んでくれたいい父ちゃんだった。

今は遊んでくれー！って強請る歳じゃないから。父ちゃんとの距離感を測りそこねている感じはあった。でも、今わかった。父ちゃんは俺の父ちゃんだ。それ以上でもそれ以下でもない。

「だから大学もな、やりたいことを探す為に、出来ることを増やす為に選んだ。多分、雨も勉強が出来ないなりにそうやって選んだんだと思うぞ」

姉ちゃんは内申点も成績も死んでたから必死こいて入れる大学探して必死こいて勉強しただけだぞ。俺は知ってる。

でも、なるほどね。出来ることを増やしておく、か。

「この考え方は完全に俺の考え方だが、本当にやりたいことってというのは探さなくてもそのうち向こうから勝手にやってくる。そんなに悩まなくてもいいんだぞ。本当に悩むことがあつたら、遠慮せず父ちゃんでも母ちゃんでも連絡してこい。父ちゃんに連絡して来たらちよつと空いてる日とか見つけて飯連れて行ってやるから」

「おお……ありがとな、父ちゃん」

「なにお礼なんか言ってるんだ、父親の役目だろ？こういうのって」

「いや、ほら。俺、父ちゃんと暮らしてたのって小学生の頃だったからさ。この歳になって何話したらいいのかわかって解らなかつたんだよ」

「ははっ、そういうことは三十過ぎてから悩め。お前はずっと俺達の息子なんだから、普通のお前のままでいいんだぞ」

それが恥ずかしかつたんだよ。

でもまあ、良かった。やっぱ家族なんだよ。

母ちゃんが帰ってきたら、母ちゃんとも話しねえとな。

くくく

「母ちゃん、暇？」

「晴天。どうしたの？暇だけど。あんた雨と散歩行ってたんじゃないの？」

夜ご飯も終わり、風呂に入る前。俺は姉ちゃんを連れてドラッグストアまで散歩に行っていた。ドラッグストアで買いたいものがあったから。

「母ちゃん、俺の髪染めてくれない？」

「あら、あんたも染めるの？初めてじゃないの？」  
「初めて」

ヘアカラー剤を買いに行ったのだ。姉ちゃんが初めて髪を染めた時は、母ちゃんに染めてもらっていたことは覚えている。最初は暗めの茶髪。ブリーチもしていなかったはずだ。……そこからどんどん明るくなっていったって色んな色になってらしたけど。その時は自分で染めてたんだろうけど。

というわけで、俺も茶色のヘアカラー剤。どれが染まりやすいか、とかよくわからないので姉ちゃんに付いて来てもらったのだ。

別に、今まで染めなかったのも特に理由がある訳じゃない。別段髪色で遊びたいな、とか思ったこともなかったし。

でも、姉ちゃんが初めて染めた時、母ちゃんに染めてもらっていたことを思い出して、なんとなく今染めないと一生染めない気がした。というわけで、染めて欲しいなって。

「……あんたはこれを皮切りにグレないでね」

「グレねえよ。グレるならもうとつくにグレてる」

「……そうね。あんた達は強いよ。ごめんね」

別に謝りを求めている訳じゃないし。なんで謝んだよ。

「その服、汚れてもいいの？」

「うん」

「そ。……じゃあ、そこに座りな」

椅子に座らせられ、ケープみたいなものを着せられる。そしてヘアカラー剤のキャップを開け、何か混ぜてそれを髪に付けていく。

まずは毛先。少しずつ、丁寧に。

「母ちゃん、自分の髪は自分で染めてるの？」

「自分で染めてるわ。意外と綺麗に出来てるでしょ？」

実際母ちゃんの髪は綺麗に染まっていると思う。普通は美容院とかでやって貰うのだろうか？いや、でもそれだとヘアカラー剤なんか売ってないか。どっちの方が一般的なのだろうか。

「まあ、本当に綺麗に染めたいなら母ちゃんじゃなくて美容院で染めてもらった方が良いけどね」

「良いんだよ。最初は母ちゃんに染めてもらうって決めてたから」

「……嬉しいこと言うようになったわね、晴人」

「そう？」

ちなみにドラッグストアへの散歩中に聞いたのだが、姉ちゃんも最初に染める時は母ちゃんに染めてもらう！って決めていたらしい。俺はイマイチ覚えていないのだが、休みの日に自分で髪を染めている母ちゃんの姿が結構印象に残っていたんだって。自分で出来るって、かつこいいなーって思っていたんだとか。

安心しな、姉ちゃん。今となつては姉ちゃんも大概のことは自分で出来るようになってる。髪を染める以外のことも。

「あんたと雨は顔が似てるからね、赤色とかピンクアッシュとか似合うんじゃない？メッシュとかで」

「男子でそこまで色入れるやつは中々いねえよ。校則違反だし」

「あら、そう？男前になると思うんだけどなー。……根元いくわよ」

「あいよ」

いや、俺の顔は男前じゃねえよ。親バカ発動してらっしゃる。なんというか、変に中性的なんだよな。あんまり好きじゃない。……まあ、そんなこと親の前では言えないけどね。産んでくれたことには少なからず超感謝してる訳だし。

「あんた好きな子とかいないの？」

「いない……かな。彼女は欲しい」

「意外。あんたも雨も」恋人作って面倒になるよりは独り身でいいや」派だと思ってた」

「なんだそりゃ」

「学生時代の母ちゃんがそうだったからなんだけどね」

「まあ、面倒なのは嫌だけどな」

うーん、こういう性格なんかは姉ちゃんも俺も、母ちゃん似なのかもしれないな。

「やっぱ、欲しいじゃん？詩織とか楽しそうだし」

「詩織ちゃんの彼氏も男前だったわねー」

あー、そっか。母ちゃんは俺が入院してた時にそれとなく高見の顔とか見てたんだっけか。うん、あいつは男前だ。

「まあ、あんたは本当に素直で良い子なんだから。探さなくてもきつと良い女が寄ってくるわよ」

「父ちゃんにも似たようなこと言われた」

父ちゃんは彼女じゃなくてやりたいことだけどね。

「ある程度ちゃんとやらないといけないことが出来ていたら、報いはちゃんとあるものよ？……はい、ラップ巻いた。十五分位そのまま放置して、その後シャワーで洗い流して。入念に洗ってね」

「あいよ」

母ちゃんも当たり前だけど、母ちゃんだった。

家族って長い間離れてても家族だったんですね。なんか変に構えてた俺が馬鹿みたいじゃないですか。

髪色、どうなってるかなー。

告白されたい？

「……えっ、ハルどうしたのその髪色」

「染めた。似合ってる？」

「うん、似合ってるけど……どうしたの？グレた？」

「グレてねえよ。なんとなく染めた」

時間つてのは早いもんで、お盆休みももう終わりが近づき、明日の夕方には父ちゃんも母ちゃんも向こうに行つちまうらしい。最初こそなんか「どうしたらいいんだ」とか思ってたが、髪染めてもらったり、進路相談に乗ってもらったり、やっぱり家族つていいな！って思ってたわけです。

で、只今詩織の家のキッチン。何をしているかと言いますと、まあキッチンだから料理でして。

折角なので父ちゃんと母ちゃんが仕事場近くの方へ帰る前に、ちよつとしたサプライズケーキ的なものを作ろうと思ったのである。ただ、父ちゃんも母ちゃんも家でのんびりしているので、自宅で作るとバレル。というわけで詩織の家のキッチンを借りることにしたのだ。

……で、詩織と会うのはお盆の前以来なので、当然ながら髪を染めてからは初めてで。びっくりされた。

「ハルはなんとなく卒業まで染めないのかなって思ってた。いいじゃん、カツコイイよ」

「そりやどーも。じゃ、作るからそこどいてくれる？」

「え、私も手伝うよ？」

え、マジで？

えー……マジでか……。

「ぶつちやけ俺一人でやった方が効率いいからいらないんだけど」

「むー……私だつて上手くなっただけ」

「俺も上手くなってるから差は縮まりません」

「うわムカつく！」

なんなら今度俺の手料理と詩織の手料理、高見に食べさせてどっち

が美味かったか決めさせてみようぜ。俺勝つても何も嬉しくないけど。

「じゃあ大人しく退きまーす。……私も暇だから話し相手くらいはいいでしょ？」

「まあ、それくらいなら」

材料は詩織の家に来る前に買ってある。ホント、こういう時幼馴染の家が近いっていいよな。ボウルとかそういうのはお借りすることになっている。大体何処に何があるかは知ってるし問題ないだろう。気分はさながら墨村良守だ。

「ハル、髪染めたらお姉ちゃんみたいだね」

「そうか？」

「うん。顔が似てるからかな」

姉ちゃんも美人だけど、俺の顔は女々しい。うーん、やっぱり女顔なのか？俺は。ボウルに諸々の材料を入れて、思い切りかき混ぜる。意外とこれがしんどいんだよな。力が要るし、長い間混ぜないといけない。電動のやつはすげえよな、スイッチ一つでとんでもない力で混ぜるんだから。

「お前は染めねえの？」

「うーん、茶髪くらいならしてみたいな」

「それこそ似合うと思うぞ」

「そうかな」

というかこいつ、顔立ち整ってるから割と何しても似合う気がする。美人系……というよりは可愛い系の顔立ちだから、唇ピアスとかは流石に似合わないだろうけど。少なくとも俺よりは色々やつても許される顔だろう。

口と共に、腕もしつかり動かす。まあ失敗は無いだろうが、母ちゃんとかに食べてもらおうなら、まあ折角なら美味しいもん食べてもらいたいし。

「……そうだ、ハルってさ」

「んあ？」

「香澄ちゃんと付き合ってるの?」

「……は?」

手が止まった。

えーと。なんでそうなるの?

「ゲーセンでデートしてる姿が目撃されています。しかも制服デート♡……ハル君、真実のほどは?」

あー、あれか。

うわあ、詩織の顔がニヤニヤしていやがる。あれだ。恋バナしてる時の女の顔だ。俺ソノ顔キライ。コワイモン。

てか、付き合ってるないし。付き合ってる……し……し……。

『ビッチでも「誰でもいい」って訳じゃないんだけど?』

ふと、ホッケーゲームをする直前に織田のやつがそんなことを言ってたのを思い出した。

……いやいやいやいや。あいつその後嘘だと言ってたじゃん。ただ童貞の俺をからかってただけだ。仮にあのゲームに勝てることも多分おっぱいは揉めなかったし、織田と俺が付き合ってるなんてことも有り得ない。そもそもあれはデートじゃなくて、織田がクレイジーゲームでルビィちゃんのフィギュアが欲しいって言うから行っただけ……。

「付き合ってるええよ」

「目撃証言については否定しないの?制服デート」

「や、確かに制服でゲーセンに遊びに行ったけどな。けど別にデートじゃねえし」

「えー?二人で遊びに行ったらそれはもうデートだよ?」

「謎理論やめろ」

……いや、それもそうか。それもそうなのか?童貞の俺にはわからん。

「ハルにも春が来たね」

「ドヤ顔で言ってるけど上手くねえから、それ」

そのドヤ顔さっきのニヤニヤ顔よりム力つくからやめてくれねえかな？

「……でもアレだね。なんだろう、ちよつと悔しいかな」

お盆の間にこいつ情緒不安定にでもなったか？

「何がだよ」

「うーん、なんというかな……ちよつとハルの気分になれたかもね」

全く意味がわからない。俺の気分になれた？……ダメだ、理解不能だ。こいつの言ってることが久々によくわからない。取り敢えず手は動かす。

「私が玲音君と付き合った時、ハルはこんな気持ちだったのかー、つて。別に付き合ってた訳でもないし、ただの幼馴染なんだけどね。むー、ハルに目をつけるとは香澄ちゃんも中々やるな！つて気持ちと、むー、ハルが遠くなるー！つて気持ちと、他にも色々こちゃ混ぜ」

「……あー、そういうこと」

やつと理解した。つまり、こいつは俺がちよつと前まで拗らせてた感情を少ないながらも感じていた訳か。俺別に付き合ってたんですけど。というかお前は彼氏いるだろうが。

……いや、多分これは彼氏彼女がいるから、つていうのは関係無いな。「幼馴染」だからなる感情というか……多分、詩織が高見と付き合い前に俺が誰かと付き合ってたとしても、詩織と高見が付き合い合った時に少ないながらも同じ感情は抱いていたと思う。よくわからない、モヤモヤした感情を。俺は居なかつたからその感情を色々拗らせてた？訳で。

「俺の場合それに加えて深層心理的にお前のことが好きだったんだぜ？死にたくなるだろ」

それはそれとして仕返し出来るチャンスなので意地悪をするでしょう。やばい、楽しい。

「しかもそんな時に「私を振ってよーハル！お願い！私を振って欲しいの！貴方にしか……頼めない！」つてお願いされるし」

「ちよつ、そんな言い方はしてないよ！ちよつと誇張し過ぎじゃない



!？」

顔を真っ赤にして怒る詩織。最近はやられっぱなしだったからな。これくらいは許してほしい。

「むー……私知ってるんだからね、香澄ちゃんとデートしただけじゃなくて、リンちゃんのサツカーの応援も行ってたの」

「あー、そういえば行ったな」

「ハル、ちよつと気が多すぎるんじゃないの？モテモテじゃん」

「応援くらい行くもんじゃねえの？」

「ハル、絶対自分からは行かないでしょー。リンちゃんに「見に来てね！」って言われたから見に行った、と私は予想します」

大当たりです。こいつ怖。俺の思考回路丸見えかよ……。テスト勉強見てあげた見返りに、かっこいい姿を見せていただきました。

「リンちゃん、かっこいい姿をハルに見せたかったんじゃないの？実は惚れられてたりして」

「いや……ねーだろ」

「どうかなー。意外とハルって魅力的だし？もうちよつと覇気があつて、思ったことすぐ口に出す癖をやめたらだけど」

「それは多分最早俺じゃないぞ」

俺のアイデンティティが全部無いじゃねえか。コバ曰く喋らなかつたら俺にいい所無いらしいし。……思い出すだけで腹たつてきたわ。俺だってケーキが作れるっていう魅力があるんだぞ！

「ハルはかっこいいよ。惚れてた私が言うから間違いない」

その言い方はずるくないか。ちよつと期待しちまうじゃねえか。

さつきした意地悪を繰り返してやろうか。

「高見と比べてどっちの方が魅力的？」

「そりゃー、……男としての魅力は圧倒的に玲音君だけど。ハルはきょうだいみたいなものだし」

その返し方もずるい気がする。

「……ハル的には、リンちゃんだったり香澄ちゃんは、アリなの？」

アリなの？

アリなの？

……アリってなんだ？

「もし、リンちゃんだったり、香澄ちゃんだったりに告白とかされたら、オツケーするの？」

「……なんでそうなるんだよ」

「例え話だよ」

……ふむ、織田か、石黒から告白された場合か。俺は果たしてどんな反応をするのだろうか？一人ずつ考えてみるとする。

まずは織田から告白された場合。

「………罰ゲームなのかなって思うな」

「どういうこと……？」

いや、織田が俺に告白する瞬間とかどう考えてもドツキリか罰ゲームか、若しくはなんかオタ関連の話を真剣に切り出すかの三パターンしか無いだろ。大穴で郁也さん関連の話くらい。変にそこでテンション上げたら後ろからビッチ集団がやってきて「ドツキリ大成功！」みたいな掲げてくるだろ、絶対。

次に石黒の場合。石黒の場合……？

「石黒って恋とかするのかな」

「今サラッとすごく失礼な事言ったね、ハル」

なんというか、サッカー一筋のイメージが強すぎてな。あいつが誰かに告白した！って言われるより「とうとうファイアトルネードを会得したの！すごくない!？」って言われた方がなんか説得力あるわ。

でも、もし告白されたら？って例え話だもんな。うーん？うーん……。

「……そもそもさ、両想いになったらカップル誕生なんだろう？俺、あんまり好きとかわかんねえんだけど」

「付き合っているうちに好きになっていく、とかもあると思うけどね」

あー、そういえばそのパターンがあるのか。よくよく考えてみれば詩織とかモロにそのパターンだったわ。

付き合っているうちに好きになっていく、ねえ……。なんか釈然と

しないっつーか、なんというか。

「でも、やっぱ付き合うなら好きな人と付き合いたくね？」

「それが出来るならね。ハル、今好きな人居るの？」

「……いない、な。強いて言うなら姉ちゃん」

「……それはラブじゃなくてライクでしょ」

姉ちゃんくらいさっぱりしてる人だと付き合っても楽そうだよな。まあそもそも俺付き合った事ないから楽とかしんどいとかわかんねえけど。

……そういや、織田って何となく姉ちゃんに似てるなー、って思ったことあったな。……いや、でもあいつはなあ、付き合ってもしんどそうだし、そもそもドツキリ粹だし……。

「でも、妬げちゃうな。リンちゃんも香澄ちゃんも可愛いもん。ホントにハルが付き合ったら、私なんて忘れ去られそう」

「記憶の片隅には置いてやるよ」

くくく

ハルが、料理をしている時に手を止めるのはとても珍しい。

面倒臭がりで、覇気があんまり無いのがハルだけど、一回やり始めるとテキパキとこなすのがハルだから。だから、何かをしている時に手を止めている時は、別のことを真剣に考えている時のハルだ。

私がちよつとからかい半分で言った、香澄ちゃんとリンちゃんのこととで考えてるのかな。それ以外にある訳もないか。

幼馴染だから、っていう鼻屑目はあるかもしれないけど、ハルはちゃんとしていたらかなり良物件だと思う。ちゃんとしていたら。だから私も惚れていたわけだし、惚れてた時はモタモタしているとそのうち誰かに取られちゃうかもな、って思ってた。

香澄ちゃんとリンちゃんが、ハルのことが好きなのかどうかは全く

解らない。……正直、ハルの言つてた罰ゲームかと思う、とかあいつ恋とかするのかな？とか、ちよつと解らないでもない部分もあるし……。

でも、好意的な感情があるのは間違いないと思う。

もし、ハルが誰かと付き合ったら。

私は玲音君と付き合ってるし、今は玲音君のことが大好きだ。

言つてしまえば、ハルはただの幼馴染で、きょうだいみたいなものだけど、それ以上でもそれ以下でもなくて。

だけ。

だけ。

……なんとなく、モヤモヤする。

昔は好きだったし、すつごく小さい頃は結婚の約束なんかも、しちゃったつけ。

けど、今は私には彼氏がいて。私に彼氏がいるんだから、ハルに彼女が出来るのもそりゃあ、当然というか、出来てもおかしくなくて。

なのに、何故かハルが奪われるような気がする。幼馴染なんて、言つてしまえばただの友達で、その称号に鎖はついていなくて、彼女が出来たら彼女とイチャイチャするのは当たり前で。

ちよつと、それが嫌な気がする。……おかしいな。彼氏でも無いのにさ。

ああ。

なるほど。

ハルって、ずつとこんな気持ちだったのかな。

胸の奥が痛い。

ハルがそんな思いで私を見ていたんだな。

そして、今度は同じ気持ちをも、同じ寂しさを、私が背負うんだな。幼馴染って、不思議な関係。

彼氏じゃないのに、奪われたと錯覚して。でも、好きなのは彼氏で。じゃあハルは何？って聞かれたら、きょうだいみたいなものって。でも、血は繋がってない。

「……妬げちゃうし、しんどいなあ、これ」

「なんか言ったか？」

「ひとりごとー。」

こんなにチクチクと痛いのに、ハルはずっと私を見ていてくれたから。

私も、甘んじてこの痛みを受け入れて、ずっとハルとは幼馴染。

誰かのご飯を食べたい。

盆が終わった。

だからと言って夏休みに変化が訪れる訳でもなく、俺はもう少し残っているこの休みを満喫する。

……あつたわ、変わったこと。父ちゃんと母ちゃんがまたどっかに帰った。まあ、これは変わったことというよりは元に戻ったこと、なのかな。

最後に作ってあげたケーキは喜んで食べて貰えた。そこそこ真面目に作っただけあって味も申し分無く、まあ親孝行出来たんじゃないかな。

お盆も過ぎてしまえば、夏休みもいよいよ終わりが近付いてきたなあ、という謎の感慨深さを感じる。大体この時期までに課題や宿題を終わらせてない奴は最終日まで終わらない。姉ちゃんがそのタイプだったなあ。

俺は既に課題は終わらせてしまったので、あとは残りの夏休みを満喫するのみだ。

……やる事ないんだけどね。という訳で家で一人でダラダラしている。基本的に俺はダラダラするのがあまり好きじゃないのだが、外に出たってクソ暑いだけだし、勉強もゲームもする気にもならないので、まあたまにはダラダラするのも悪くないと言い聞かせている。

スマホが鳴った。ラインの通知だ。誰だ？……織田？なんか、最近あいつとの絡み増えたなあ。取り敢えずメッセージを開くことにする。

『なんかあたしとあんた、噂にされてるんだけど』

おおぅ……そうだな。噂にされてるな。俺ですら知ってるんだから相当な噂……いや、それでも無いのか？詩織はそういう噂色んなところから聞きそうだし、たまたま詩織から俺が聞いただけかもしれないけど。

『ムカつくからお前誰かと付き合って。そしたら噂が嘘だと証明される』

「無茶言うなアホが」

「どういう思考回路してたらそういう結論に辿り着くのか教えて欲しい。」

「てかお前が彼氏作ればいい話では？」

『めんどくさい』

この人なんなんですかね。めんどくさいってところがムカつくわ。その気になればいつでも作れるんだからね、みたいに言われてる気がする。実際あいつはすぐ作れそうなのが輪をかけてムカつく。

またスマホが通知を知らせる。今度はメッセージでは無く写真の送信だった。送られてきた写真をタップしてみる。

そこには先日俺がクレインゲームでゲットしたルビィちゃんと、その姉にあたるダイヤちゃんのフィギュアが並べられていた。

『姉妹揃った(？▽？)』

……なんの報告？というか俺、ラブライブは残念ながら守備範囲外なんだよ。キャラ位は知ってるけどね。ごめんな。

「ダイヤは自分で取ったのか？」

『兄貴が取ってくれた』

結局人頼みかよ。というか郁也さん妹に甘すぎじゃね？うちの姉ちゃんかよ。

……やつぱあれだな、織田家と神崎家のきょうだいは若干似てる気がするな。

なんていうか、勿体ねえよなあ、姉ちゃんも。郁也さん超優良物件じゃん、俺を理由に振ってんじゃねえよって話だよな。まあ、郁也さんには俺がいるからー、って言って振った訳じゃないのは知ってるんだけど、それでもやつぱりなんか申し訳ないというか、いたたまれない？そんな気持ちになる。

スマホが鳴った。今度はなんだ？

織田からのラインでは無く、今度は姉ちゃんからのラインだった。

『合コン、数合わせて誘われたから夜行ってくる』

……まあ、俺がどう言おうと、姉ちゃん自身に未練も無くて、そんなもって復縁する気も無いんだっただうしようもないんだけど。

付き合ってる時は仲良かったのになあ。今でも顔合わせたら二人とも嬉しそうだし。

今まで付き合ったことが無い俺には、解らない感情なのかもしれない。俺が思っているよりも、彼氏、彼女、付き合った、別れた、っていう感情は簡単じゃないのかもしれない。

なんだかなー。

やっぱり、俺も彼女欲しいな。

姉ちゃんも合コンで夜遅いんだったら、俺も外で飯食うかなー。誰か誘って。

……誰を誘えばいいんだ？やっぱコバか？

取り敢えずコバにメッセージを送信する。今日、夜飯行かね？と簡潔に。

返信はすぐに返ってきた。

『悪い、明日まで親父の実家に帰ってるんだ』

あー、そりゃあ無理だわな。しょうがない。じゃあ須田はどうだろうか？同じようにメッセージを送る。

こちらにも返信はすぐに返ってきた。

『ごめん！従兄弟とおばさんが家に来てるから夜は出れない』

ご丁寧に兎が土下座をしているスタンプも送られていた。まあ、盆明けたとは言えな、そういうこともあるわな。

……。

……誰誘えばいいんだろう。

改めて俺の交友関係狭すぎじゃね？

詩織誘うか？いやでも俺から誘うのは流石にまずいよな？高見が不憫過ぎる、というかまあ色々問題がある。かと言って高見を誘うのもなあ……別に仲悪いわけじゃないけど、二人で飯食いに行って何の話するの？病院の飯は不味かったよなー、とかそんな話するの？アホかよ。

うわっ……私の交友関係、狭すぎ……？

……織田にラインしてみよ。

「夜暇だったら飯食いに行かね？」



……ついさつきラインで「変な噂立ってんだけど」みたいな感じでご機嫌斜めだった織田を誘うのは流石に頭がおかしいな。送信してから気がついたので後の祭りというやつである。アフターフェスティバルなのだ。

そしてこいつもマツハで既読が付いた。まあ織田はさつきまでラインしてたとは言えど、お前らスマホいじりすぎだろ。そんなだから近頃の若者はく、とか言われるんだぞ？

『喧嘩売ってんの？わら』

うわ怖。「わら」を漢字じゃなくて平仮名で打ってるのがなんか怖い。なんかごめん。タイピングが悪かったのは俺も認めるから。どちらかと言うと喧嘩より油を売りたい……それも違うか。

うん、やっぱ俺友達少ないわ。もう切れる手札が無いもん……。

いたわ。石黒。……いやでもあいつこそ無理だろうなー、部活やってるだろうからスマホ見てないだろうし。

それでもダメ元で送ってみる。内容は簡単に「今日夜飯食いに行かね？」のみ。思っている以上に、夜ご飯を一人で食べるのは寂しいのだ。一人暮らししてるOLとかってどんな気持ちで夜ご飯食べてるのかホント気になる。生きていけなくね？俺多分一週間くらい連続でぼっち夜ご飯になったら寂しくて死んじゃうね。

案の定というかなんというか、石黒へ送ったラインはすぐには既読は付かなかった。まあ、これが普通というか、さつきまでの連中が速すぎたというか。特にやることも無いのでソシヤゲの溜まったスタミナを消費しておくことにする。

ソシヤゲの進化も目覚ましいよな、俺が小学生くらいの頃なんてダンジョンに入って、「進む」みたいなボタン押したら効果音も無しに進行度が増えるだけだったのに、今は進もうとしたら敵が邪魔して、クイズに答えたりパズルをしたりしなきゃいけないんだもんな。まあ俺がソシヤゲなんかに触れ始めた時期は既にパズルとドラゴンが合体したゲームだったりメジャーだったけどさ。あと聖杯戦争。姉ちゃんが推し鯖が当たらなすぎ過ぎて辞めたやつ。

最近ハマっているのはバンドリの音ゲー。カバー曲多いし、しかも

このカバーが結構面白い所突いて来るんだよな……たまりに「いやこのアレンジはどうなのよ……」みたいなものもあるけど。ミツシエルの中人可愛い。

元々音ゲーは得意じゃないので、まあ完全に下手の横好きみたいな、お遊びでやっているのだが、それでもやっぱ難しい曲をフルコン出来たら嬉しいし、推しキャラの高レアが当たると嬉しい。ソシヤゲはこういう適当に遊びたい層にもウケてるのがいいんだろーな。……お、フルコンいけそう。この曲フルコンした事ないし出来たら石貰え……

『新着メツセージがあります』

——切り忘れた通知、そして無情なるミス。

「あゝっ」

やってしまった……。スマホの音ゲーあるある、「通知で画面が見えなくなつてミスをする」を発動してしまった。マジか……いや、通知を切つてなかった俺が全面的に悪いんだけどね。今のタイミングはるんつて来ないわ。

このまま音ゲーを続ける気にもならないので通知を開く。メツセージの相手は、まあ当然というかやはりというか石黒だった。

『いいよー？（・ω・）／』

『今部活終わったから先家でシャワー浴びていい？』

まさかの返事はオツケーだった。あれ、今まだ3時とかだけど、もう部活終わったの？意外と早いのかな。いやシャワーくらい全然浴びて頂いて構いませんけども。クソ暑いもんね。

「オツケー」

『どこ行くー？』

ホントだ、どこ行こう。サイゼ……は却下。石黒とサイゼに行ったら勉強しなきゃいけない気になってしまう。俺はもう課題終わらせたし。焼肉……も高いから却下かな。バイトしてない学生のお財布

は軽いのだ。

「誘つといてなんだけど特に行きたい場所無い。笑」

『えー笑　じゃあ私の家の近くまで来てよ』

「なんかあるの?」

『美味しいラーメン屋さん』

「行くわ」

即答で送ってしまった。男子高校生はラーメンが大好き。あいつの最寄り駅ってどこだっけ……三駅先だったか?片道の交通費幾らかな。

『じゃあ6時に駅来てね』

「りよーかい」

片道190円。まあ全然許容範囲内。焼肉食べに行くよりは遥かに安いな。

さて……まあ時間は有り余ってるけどちよつと外に出る準備するか。

くくく

時間ピッタリ。

三駅分電車に揺られてやってきた石黒の住んでる街。

県を跨いでる訳でもないし、なんなら初めて来たわけでもない。だから特に新鮮なものはない。が、この駅は急行列車も停車するそこそこデカイ駅で、降りてすぐ歩けば飲み屋街というか、居酒屋の建ち並んでいる通りに出してしまう為、少し別世界というか、特別感はある。

「お待たせー。ごめん、二分遅刻した」

「それくらいなんともねえよ」

石黒の服装はダボツとしたシャツに、下はショートパンツ。こいつこのタイプの服装好きなのかな、前の時もこんな感じだった気がする。まあ、似合ってるしいいんだけどね。サッカーをする時みたいに、髪の毛を後ろで纏めていた。

「てか、ラインしてから気付いたんだけどさ。ハル君、交通費かかるよね?ごめんね」

「いいよ別に。美味しいラーメン食べたいし」

実際些細な問題だし。両親から仕送り来るし姉ちゃんも働いてるからそこそこお小遣い貰ってるし。

「じゃ、行こっか」

「おう」

石黒に連れられて居酒屋通りを進む。夏だからまだ空はオレンジ色だが、既に居酒屋のかきいれ時は始まったようで、キャッチのお兄さんがメニューを持って「居酒屋ないっすか!?!」と通行人達に声を掛けている。居酒屋ないっすか、って聞き文句はおかしいだろ。居酒屋はあるよ、お前どこで働いてるんだよ。

「お盆休み過ぎたからちよっと人減ったんだよね、この辺り」

「やっぱ休みの日の方が多いのか、この道」

「土日の夜なんか最悪だよ、たまーに酔っ払いが喧嘩するの。まあそんな夜遅くに外出ることなんて殆ど無いけど」

そういう石黒の口調はかなりイライラしていた。よっぽど酔っ払いが苦手と見える。悪酔いした時の理恵さんとかめんどくさいから気持ちちは凄くわかる。

「でもさ、居酒屋でお酒飲むのはちよっと憧れるよね」

「どこで飲んでも一緒だろ……」

「一緒じゃないよー、「とりあえず生で」って言うてみたくない?」

「あー、それはわかる気がする」

「でしょでしょ!私多分お酒あんまり強くないけど」

だろうな。石黒はすぐ酔っ払って……なんか泣き出しそう。泣き

上戸っぽい。うわあ、こいつ酔っ払ったらめんどくさそうだな。

居酒屋通りを抜けて、小さな角を曲がる。するとすぐに小さな建物から提灯が降りているのが見えた。赤い地に黒くデカデカと「ラーメン」と書かれている。間違いなくあそこだろう。

「そういえばハル君、彼女出来たの?」

「……は?何を突然」

本当に突然過ぎて変な声出たわ。

「ほら、誰だっけ?ハル君のクラスの……髪赤い人いるじゃん」

「あー、織田な。あれ別にデートでもなんでもないからただの噂」

「あ、そうなの?なーんだ」

折角面白そうなネタを見つけたのになー、と言いながら口を尖らせる石黒の表情は、何処か安心しているようにも見えた。なんでこいつが安心するんだ。いや俺の見間違いかもしれないけど。

「……なんでちよつと嬉しそうなんだよ」

「あえ?私今ちよつと嬉しそうだった?」

「ちよつとな」

突っ込んでみると、石黒は立ち止まって俺の方をまじまじと見つめる。そして大きく溜息をついた後、頬をポリポリとかき始めた。

「……ごめん。私、ハル君に黙ってたことあるんだよね」

「えっ、何?」

石黒から発せられた言葉は、ちよつと意外なもの。なんだ、俺に黙ってたこと?俺と石黒は正直言っただけで知り合っただけでめっちゃやくちや日が浅いからそんなのあつて当たり前……だと思っただけだ。

「ハル君ってさ、詩織ちゃんに振られたじゃん?」

「振られてねーよ」

いや、振られたけど。少なくともその事実を知ってるのは俺と詩織の二人だけだよ。噂で俺が振られたみたいになってるけど。てか一回それ訂正したよな?

「あ、そうだっけ。まあいいや、私がハル君と仲良くなったのってさ、

丁度ハル君が振られた辺りだったじゃん？つまり詩織ちゃんも玲音が付き合い始めた辺り」

「だから振られてねーって」

こいつ、人の傷えぐるつもりか――

「私、玲音が好きだったんだ」

友達になりたい。

「はい、お待ちどうさま。豚骨ラーメン大盛り二つね」

うわっ、すげえ量。食べ切れるかな。てか石黒も大盛りにしてるけどこいつ本当にこれ食べ切れるのか？

「やっぱ沢山動くと沢山食べたくなるんだよねー。ここのラーメン味濃いいしパワー出るんだ」

いただきまーす！と言うや否や箸で麺をどかっとなぐり勢いよく啜る石黒。こいつ本当に美味そうに食べるよな。こんなに食べてよく太らないよな……って思ったけどこいつサッカー部で動きまくってる上に家で筋トレとかする系女子だった。

俺もラーメンをいただくことにする。真のラーメン通はまずスープから。仮面ライダーカブトでそう教わった。というわけでレンゲでスープを掬い、口に運ぶ。

「あっつ!!!」

「あはっ、そりやそうじゃん！何今の声、ハル君のそんな焦った声初めて聞いた！」

めっちゃめっちゃ湯気出てたじゃん俺。フーフーしろよ俺。舌やけどしたわ。でもスープは美味かった。次は麺だ。今度はちゃんとフーフーして、恐る恐る口に運ぶ。

「……美味いわ」

「でしよー？」

自慢げに口角をつり上げる石黒。なんでこいつがこんなに自慢げなのかは解らないが、確かにここのラーメンは美味いかもしれない。大盛りもプラス50円で出来るし、コストパフォーマンスも悪くないと思う。この店は覚えておこう。

しばし無言でラーメンを貪り食う。美味しい。チャーシューも美味しい。

「私さ、初めてハル君に会った時に安心してたんだよね」

「え、なんで」

石黒の器はもう殆ど空になっていた。早くね？俺まだ半分くらい

あるんだけど。

「玲音が詩織ちゃんと付き合った、って聞いた時さ。やっぱりちよつとシヨックだったの。私、玲音が好きだったからさ。しかも玲音から告白したって、もう完全に私の片想いじゃん？もし先に告白してても駄目だったんだろうなって思って、家で泣きそうになつてたりしたの」

へえ……ちよつと意外、というかなんだろう。不思議な感じがするな、それ。

この店に入る前に知らされた、「高見が好きだった」という事実。なんというか、そう言った石黒の姿に俺はすごく見覚えがあった。

多分、今もちよつと好き、ってやつだと思う。俺が詩織に抱いていた感情に、多分近いんだろうな。前詩織の家で喋ってた時に「石黒って恋愛とかするのかな」って言ってたけどホントごめん。恋愛するんですね。

「でも詩織ちゃんってハル君と付き合ってる説がすごい流れてたじゃん？ってことはハル君は詩織ちゃんに振られたんだな、なんだか似てるなー、ってちよつと思つてたんだ」

「……あー、だから図書室で俺を見つけた時声が出たのか」

ちよつと納得……？したかもしれない。

でも、そうだったのか。石黒は高見のことが好きだったのか……俺がそういうのに気付けないってのもあるかもしれないが、全く気が付かなかった。いや、多分詩織も気付いていないな。

「こんなこと言っちゃったら幻滅するかもしれないけどさ、ハル君に電話した時、詩織ちゃんの声が聞こえた時あつたじゃん？あの時冗談半分で「浮気？」って聞いたけど、もし詩織ちゃんが浮気するような悪い女だったらいいのにな、って思って聞いた節もあつたんだよね。そんなこと考える私の方が悪い女かもだけど」

すつげえ解る。俺も心当たりある。高見がクソみたいなやつだったら良かったのにな、とか思つてた。けど、実際は高見のやつは良い奴で。石黒から見た詩織がどう映っているかは解らないけど、あいつも悪い女ではない。それが、なんか自分を締め付ける。



石黒は多分、多分だけど。詩織に振られた傷心の俺を見て、同じように傷付いている自分を安心させたかったんだろうな。

ラーメンを啜る。大盛りとは言えど、流石に底が見えてきた。食い切れないかと思っただが、それでも無さそうだ。……石黒は既に完食している。フードファイターかよ。

「薄々気付いてると思うけどさ。好きだったって言いつつまだちよつと引き摺ってるんだよね」

「だろうな。俺もそうだった訳だし。」

「……だからさ、ハル君がデートしてたよつていう噂を聞いた時は、結構焦ったし羨ましかったんだよね」

「え、なんで」

「なんかデジャヴ。さつきも同じような返ししなかったか？俺。」

「私はウジウジ失恋を引き摺ってるのにさ、ハル君はもう次に進もうとしてるなんて！ぐぬぬぬ……みたいな感じ。置いていかれそうなのがしたんだよね」

「あー、そういう事だったのか。だからそうじゃないって解った時、安心して嬉しそうだったってことか。」

誤解されているようだが、俺は別に次に進もうとしている訳じゃない。というか進んでいない。ただ後戻りしてた詩織との関係をゼロに戻して、夏休みの課題を進めていただけなのだ。別に石黒が一喜一憂するような話は一切無い。

「……私、結構悪い女でしょ？」

「いや、別に」

「あれっ？」

「それくらい誰でもあるだろ？俺だって、傷心の気持ちを石黒との勉強会で誤魔化してた節あるし」

当時そう考えて石黒に勉強を教えていた訳では無いが、多分あの時は無意識に石黒との勉強会を心の拠り所にしていた気がする。そういう意味で言えばお互い様だ。

……というか、

「てか、俺の聞いた話だったらお前とも噂立ってるらしいけど」

「……………へっ？私と？誰が？」

「いやだから、俺が」

俺が詩織から聞いた話だったら、俺が石黒の出てる練習試合を観に行っただって噂になってるらしいが。よくよく考えたらあの試合、石黒以外にも二年出てたのになんで石黒限定で噂されてるんだろうな？あれか、勉強会してる姿を意外と見られてたのか？まあ食堂でやってたし当たり前っちゃ当たり前か。

「……………ふええっ!?!私と、ハル君が!?!」

「え、うん。俺はそう聞いたけど」

石黒の少し日焼けした肌が紅潮し、唐突にジタバタし始める。なんだこいつ。

そして一通りジタバタし終わるとフツと真顔になり、水を一口含んで、ゆっくり飲み込んだ。

「……………あんまり悪い気はしないね!」

そう言っつて、白い歯を見せてニシシと笑った。

「歯にネギ付いてるぞ」

「えっ嘘?!」

悪い気はしないってどういう事だ。……………まあ、俺もあんまり悪い気はしなかったけどさ。

なんというか、石黒は顔が豊かというか……………普通にこうやって喋っている時はひたすらに元気で、歯を見せて笑う姿が印象的で。だけど、コートの上に立ってプレーしている石黒は、なんかオーラ増し増しというか、すげえカッコいい。でも、当然ながら思春期の普通の女の子だから、人並みの黒い感情や恋愛に対する渦も存在するわけで。

それら全部に本気なのが石黒凜花っていう人間なんだろうな。仲良くなつて日が浅い俺が言うのもなんだけど。

顔は豊かだけど、裏表はあまり無い。だから、発する言葉に嫌味がない。俺とか姉ちゃんとか、発する言葉の殆どが嫌味に聞こえるものな。それはあれか、生き方が悪かったのか？

いつの間にか、俺の器のラーメンも無くなっていた。話をしながらだったから気が付かなかった。意外と食べれるもんだな……美味かったわ。

「ごちそうさまでした。美味かった」

「でしょー？私がサッカーで有名になってインタビュー受けたら「このラーメンを食べて強くなりました！」って宣伝するんだ」

「なんだそりゃ」

確かにスポーツ選手なんかのインタビューとかだったら「勝負飯」とかそんな感じで地元をよく通っていたご飯屋さんをピックアップしていたりするよな。店主さんが「あの子は昔からこのメニューばかり頼んでましてね？」みたいに自慢げに語るやつ。なるほど、石黒選手の強さのルーツはこのラーメン屋か！みたいな。……こいつ、インタビューの受け答えとかめちゃくちゃ下手そうだけど。

「誘ってくれてありがとね、ハル君」

「乗ってくれてありがとな、石黒。外暗くなつてきてるし家まで送るわ」

「わお、紳士的。詩織ちゃんも送ってあげたりするの？」

「そういうこと」

まあ、多分そんな危ないとかそういうのは無いと思うけどもさ。女の子を夜に一人で帰らせてしまうと、姉ちゃんに怒られるのです。一応、酔っ払いとか出るらしいし。ここでお会計も俺が全部支払えたらかつこいいのかもしれないが、そこは少し勘弁していただきたいところである。

豚骨ラーメン、大盛りで720円。あの量とあの味でこの値段はかなり安いんじゃないだろうか。レジで野口を一枚召喚し、硬貨を増やす。ちよつと前に百円玉を少し減らしたからね。ゲーセンで。特に

ゲーセンでゲームはしないが、百円玉はやっぱ二枚くらいは持っておきたい。なんとなくね。

外はかなり暗くなっており、クソ暑い日差しが消えたおかげでほんの少しだけ涼しくなっていた。

「家、どつち?」

「こつちー。……ホントに送ってくれるの?別に普段の帰り道だしいいんだよ?」

「迷惑なら送らずに帰るけど」

「や、迷惑ではない。寧ろちよつと嬉しい。私の方が迷惑なんじゃないかなって」

「迷惑じゃない。寧ろちよつと嬉しい」

「それは変態発言なんじゃないかな?」

「それもそうか」

送ると言いつつ、半歩前を石黒が歩く。まあ、道が解らないからしようがないんだけどね。

いつも元気な石黒の背中は、意外と小さく普通の女子高生でしかないことを物語っているようだ。なんか、変な幻想抱いてたのかもな。恋愛しないサッカー少女、みたいな。女子高生なのだ、恋愛くらいするわな。

「ハル君はさ、本当に優しいよね」

「俺が?」

「うん。なんて言うのかな、優しくない優しさがある」

「は……?」

誰か日本語に直してくれ。誰だよこいつに勉強教えたやつ!もうちよい賢くできただろ!……あ、俺もこいつに勉強教えたことあったわ。

「ハル君は思ったことをオブラートに包まないからさ。全部正直なんだよね。それって、すつごく優しくないんだけど、すつごく優しいなって私は思う」

「……それ、褒めてる?」

「褒めてる褒めてる。私はハル君のそういうスタンス好きだよ」

齒を見せて笑う石黒。

「でもさ、言葉にしているのは全部正直なんだけど、言葉に出さずに自分の中で隠しちゃうよねー。前、詩織ちゃん関連で隠したでしょ？そういうスタンスは嫌いかな」

女子つてのは意外と誰でも鋭いものである。あー、そういうえば一回詩織関連で悩んでた時にこいつに看破されたことあったなあ。ほんつと、エスパーかよって感じ。

「私でいいなら相談乗るからさ。ハル君を勝手に精神安定剤にしてたお詫び」

「石黒に相談しても根性論とかで返されそうだな」

「それ、褒めてる？」

「褒めてない」

「だと思った！」

俺からしたら、石黒も相当優しい部類に入ると思う。姉ちゃんとはまた違う（というか姉ちゃんは俺に優しいというより俺に甘い）優しさというか、言葉を借りるなら全部正直だから、なのかもな。多分、マジで俺が悩みとかを相談したら、答えは出なくても一緒に唸ってくれるんだろう。

「……まあ、覚えとくよ。悩みがあつたら相談する」

「任せなさい。凜花ちゃんがバシツと解決してあげるから」

「その言い方は信用ならねえな……」

「えー？」

ぶーぶーと口を尖らせる石黒の横顔は、何処か会った時よりも楽しそうに見えた。

「……あつ、そうだ。一つ気になってたことあるんだよね」

「なんだよ」

「私、友達からは「リンちゃん」か「リン」、もしくは「凜花」って呼ばれてるんだよね。ハル君も友達だからどれかに変えて欲しいんだけど」

「唐突だな……」

しかも結構ラインナップが恥ずかしいな？その中だったら普通に

下の名前の凛花、でいいんじゃないかな……？確か、高見のやつも凛花って呼んでなかったっけか。他の男子は……ダメだ。他の男子が石黒と話してるところを見たことがない。多分結構話してるんだらうけどな、こいつの性格的に。  
うーん……。

「……リン。これでいいか？」

「バッチグー！友達に苗字で呼ばれるとムズムズしちゃうんだよね。じゃあこれからも改めて宜しくね、ハル君！」

「……ああ、よろしくな。リン」

いつの間にか友達認定されていたらしい。石黒……じゃなくて、リンの家はもうすぐらしい。

## 二学期

頭を下げたい。

世間一般で考えられる「夏休みの期間」というやつは、七月の下旬から八月の終わりまで。それで、九月一日から二学期が始まる……大概の人がそう考えているだろう。

しかし最近の小学校、中学校はなんと八月下旬で夏休みが終わり、九月に入る一週間前から二学期が始まっていたりもするらしい。脱ゆとり教育だとかクーラーを付けてあげたんだから我慢しろだとか、そんなこと子どもに言っても「はいわかりました」ってなるはずがないだろうに。

そんな子ども達に厳しくなった世間ではあるが、どうも我が校は（高校だからかもしれないが）その例には漏れるらしく、八月三十一日までたっぷり夏休みだ。まあ実際のところ部活だの勉強だので休みを丸々満喫したやつは殆ど居ないだろう。俺はかなり満喫した方だと思う。

本日は九月一日。二学期最初の登校日なのである。

九月にもなると満月が「中秋の名月」なんて言われたりもするが、じゃあ気候は秋なのかと言われたら答えはノーで、朝っぱらから真夏かよってレベルで暑い。所謂残暑というやつなのだろうが、もう残らなくていいからとつとどこかへ行行って欲しいものである。

「おはよ晴人」

「んあー」

大して面白くもない朝の情報番組を眺めながらコーヒーを啜る姉ちゃんを横目に、まず向かうは冷蔵庫。朝っぱらからアホみたいに暑いので、取り敢えず冷たいお茶が飲みたいのだ。

「二学期最初の登校日だし、サンドイッチ作ってみた」

「まじ？結構めんどくさかったんじゃないやねえの」

「あたし今日休みだからさ、あんたが学校行ったら二度寝するのー。  
あとドラクエする」

「はあ？俺はこのクソ暑い中学校行かなきゃならんのに姉ちゃん休みなの？」

「ぶっ殺すぞ？あんた昨日までダラダラしてた中私仕事してたんだけど」

「すみませんでした」

よくよく考えたらそうでした。すみませんでした、思う存分ドラクエしてください。

「ほら、サンドイッチ。ハムサンドとタマゴサンド作ったけどどっちがいい？」

「ハムサンド」

「言うと思った。ほら、さっさと食べて用意しな」

当然といえば当然なのかもしれないが、サンドイッチに使われているパンは焼いてあるトーストではなく、ただの食パンだった。耳の部分は丁寧に取られており、柔らかい部分だけを使っているらしい。……これ、耳の部分はあとで揚げパンみたいにしてドラクエやる時のお供にするんだろうな。

「あんた今日昼ご飯いるんだっけ」

「いる。今日は始業式で授業無いから十一時くらいに帰ってくると思う」

「あいよ。……んじや一時間だけ二度寝して、そこからドラクエかな」

現在の時刻は七時四十分。八時過ぎに家を出るので、九時過ぎまで姉ちゃんは寝るつもりらしい。……まあ、俺も始業式寝るつもりでいたんだけどね。

「……ごちそうさま。髪整えてくるわ」

「右の後ろの方、びよんってなってるよ」

「さんきゅ」

普通に正面から鏡を見てもわからない部分の寝癖を教えてくれるのは素直に有難い。



くくく

学校の始業式、終業式ほど退屈で存在意義が解らない式も無いと思う。夏はクソ暑い、冬はクソ寒い体育館に集められて、テンプレみたいな校長の話聞いて、休み期間の部活の表彰なんかをして、生徒指導の教師の軒並みな話を聞く。正直校内放送とかで良くね？つてなる。

舞台上では校長先生が長々と八月に活躍した陸上選手は毎日朝には決まって云々だの、貴方達もあの選手のように決めたことをこなせるようにだの、昨日から話すことをしつかり考えたんだろうなと思わされるお話をしてらっしゃるが、当然ながら面白い話でもないのので適当に聞き流す。俺以外の生徒もほとんどがそうしているだろう。

「……ねえ、神崎」

前でだらけ切った座り方をしている織田が話しかけてきた。出席番号順に座ると、俺の前は織田である。その座り方スカートの中身見えるんじゃないの？

「なに」

「あたし、一昨日誕生日だったんだよね」

「へえ。おめでどう」

「なんかプレゼント寄せよ」

「ちゃんと校長先生の話聞け」

「どうせ神崎も聞いてなかったでしょ」

誕生日プレゼントをたかる女子高生初めて見た。そういうのって寄せさせて言うもんじゃないだろ。

「いや、今俺ガムくらいしか持ってないんだけど」

「誰が今渡せて言ったのよ。ガムとか貰っても嬉しくないし」

「こういうのは気持ちが悪くない？」

「アンタの今の言い方は気持ち悪くないでしょ」

「そうとは限らねえだろ……あ、やべ。皆川ちゃんこつち見てる」

流石に喋り過ぎたか。俺はともかく、織田はちよつとした問題児認定をされているので多少なりともマークされているだろう。校長先生のクソつまんねえ話を聞いている風に装う。織田も大人しく前を向いた。そして前を向いたまま、結局小声で喋る。

「……アンタ、髪染めた？」

「あー、染めた」

我が校は昨今の学校にしては珍しく、染髪が禁止されていない。……とは言つても、ちゃんと「これ以上明るくしたらダメだよ！」という基準は存在するのだが。だから俺は夏休みに髪を染めたまま、黒染めはしなかった。ちなみに当然ながら織田の赤は完全なるアウトである。

「茶髪の方が似合ってるよ。アンタの姉ちゃんみたい」

「それ、褒めてるのか？」

「褒めてる。ちゃんと話したことないけど、アンタの姉ちゃんカッコよかったじゃん」

あー、そういえば一時期郁也さんのラインのアイコンが姉ちゃんとのツーショットだったし、更に言うなら前カラオケの帰りに送ってもらった時、織田も一緒に居たのか。にしてもよく顔覚えてたな……。

「文化祭の出し物で歌う話、考えといてよ」

そんな話したっけ。しても多分俺めんどくさいからヤダ！って言った気がするんだが。

くくく

「提出物出したなー？じゃあ今日最後のやらなきやいけない事、実行

委員のお話な！神崎、日高。あとは進行お前らに任せるから」

始業式が終わったなら、教室に戻って課題とか色々提出物を提出して、その後最後に第一回文化祭会議。皆川ちゃんが脇に逸れてパイプ椅子に腰掛け、代わりに教壇には俺と詩織の二人が立つ。

「どうもー。実行委員になりました神崎でーす」

「日高です、皆よろしくね」

まずは挨拶から。古事記にもそう書かれてるらしいし。

……さて、こういう進行は俺より人望のある詩織の方が確実に合ってると思うのだが、演劇に関しても出店に関しても俺の方が色々説明した方が手っ取り早い、というか演劇の脚本俺が持つてるしなあ……出店に関しては今から触れるのは早すぎるし。

「えっと、早速演劇コンクールで何をやるかなんだけど……先生が「実行委員である程度固めとけ」って言ってたのである程度固めてきました。ハル、黒板お願い」

「俺、字汚いけど」

「いいじゃん、私進行やるから」

そういうことなら任せようと思う。というわけで俺は黒板に「俺が」考えた演劇の題材のタイトルを大きく書く。赤いチョークで。

「えーと、私達二年四組は、「シンデレラ」をやりたいなーって思います」

はい。シンデレラやります。シンデレラとでかでかど書いた。女子がちよつと色めきだち、男子がどよめく。

「お前らアレだな、「シンデレラ？王道だけど他のクラスと被りそうだし……それに今更シンデレラなんてねえ……」とか思ってたんだろ」

「別になんも言ってるねえよ」

だって反応があまりにも予想通りだったんですもん。

まあ、当然ながらシンデレラをそのままやろうとは思っていない。シンデレラというか、正確には灰被り姫だけだ。

「勿論ただのシンデレラじゃねえぞ……その名も「現代版シンデレラ」だ！」

ノリと勢いで叫びながら黒板を叩く。俺のテンションに反して周

りのテンションは驚く程に普通だった。……えっ、なんか恥ずかしい。

「ハル、一回落ち着いて。……はい、ちゃんとハルが説明します」

なんか窘められたんですけど。……まあいいや。

「いや、本当にその通りシンデレラを現代風に改変するだけ。新入社員シンデレラは毎日先輩からのパワハラ三昧。毎日残業を押し付けられ、夜中まで一人で必死に働いていました。ある時、超イケメンの社長が主催するパーティーのお誘いが会社に届きます。シンデレラはパーティーに胸を踊らせていましたが、パーティー当日も先輩達に残業を押し付けられてしまいました。泣きながらシンデレラが残業を終わらせようとしていると……お仕事の妖精が現れ、会社のタスクを全て消し去ったではありませんか!」

「それ単純にシンデレラが怒られるやつだろ」

コバに突っ込まれた。……じゃあここはちゃんと仕事の妖精が仕事を手伝ってくれた、でいいや。

「そして仕事の妖精は魔法をかけ、スーツをドレスに、崩れた化粧を綺麗に直してくれました! パンプスはガラスの靴に! そして会社を出たらそこにはスポーツカーが! シンデレラはそのスポーツカーを運転してパーティー会場へと向かいます」

「そこは運転手も用意しとけよ」

コバに突っ込まれた。……しようがない、運転手も用意するか。

「……あとはまあ、基本的にシンデレラと一緒にです。ただ最後、社長はガラスの靴の持ち主をSNSで探します」

「絶対嘘ついて「私です!」って言う奴いるだろそれ」

「うるせーなー! その後ちゃんとガラスの靴が入るかどうか調べるんだよ!」

お前はSNSで細かいことを全部指摘して白い目で見られるタイプの人間かよ!?

「……どうでしょうか」

ぶっちゃけ結構自信ある。大筋は普通のシンデレラだし、現代風にアレンジしたのがかなりコミカルに演出出来ると思う。普通に面白

いと思うんだが……。

「……いいんじゃないの？あたしはアリだと思う」

最初に賛成の意見を言ってくれたのは赤髪の女帝、織田だった。お、ちよつと意外。あいつ意地悪な先輩やらされるの解って言ったのかな。

「結構面白そう！」

「ねえ、これってドレス着れるの？」

「いいじゃん、俺賛成」

続々と賛成の声が上がっていく。はっはっは、そうだろうそうだろう。俺の自信作は面白そうだろう？

「衣装を作ってくれるのは小林君です」

詩織がにつこり笑いながらコバの名前をあげる。その瞬間、女子の顔が一斉に引き攣り、一部の男子の顔がニヤけた。気持ちはわかる。「落ち着け。あいつ一人に衣装作らせたなら皆川ちゃんがいろんな先生に謝らなきゃいけない」

「先生って呼べつつってんだろ神崎」

「という訳で、織田がコバの監視も兼ねて衣装製作をやってくれます。採寸とかは全部織田にお願いするから。そうしたら女子も少しは安心出来るだろう？」

まあ普通に考えて男女両方いた方が衣装製作は色々と思っ。男子一同が「織田って裁縫出来るのかよ」みたいな目で見ているが、あの子はコスプレの衣装を自作する系オタク女子なのである。そんなこと言ったらぶつ殺されるけど。

「というわけで、異論が無かったらシンデレラ現代版でいこうかなっと思ってるんだけど……いいかな？」

総括して詩織がクラスに総意を聞く。答えは当然イエス。

俺達のクラスは現代版シンデレラをすることに決定した。

「じゃあ、監督はハルね。キャストとかは私がまとめます、よろしくね」

……えつ、俺監督やるなんて一言も言っていないんですけど。

……まあいいや、脚本だけ渡して演技とか演出とかその辺りが俺の解釈と違ったら納得いきそうにないし。解釈違いというものはオタクにとって死活問題なのである。

あ、監督やるなら言っておかなきやならないことあったわ。

「演劇コンクール、俺と詩織は本気で優勝狙う気でやるから。絶対優勝するぞー、おー！とかそういうのは俺がやりたくないからやらないけど……本気でやるのでついてきてください」

どうせなので頭も下げしておく。減るもんじやないし、本当に本気で優勝したいから、最初に誠意を見せておくことにした。ヤクザで言うなら小指詰めてる感じ……違うか。

「……あの神崎が頭下げてるよ、しかも真面目に」

「おい今ボソツと失礼なこと呟いたやつ誰だ。俺をなんだと思ってるんだ」

頭下げたの失敗だったかもしれない。

## 閑話 陰キヤとビツチ

「おい晴人オ！お前はよオ、お前って奴はよオ!!」

「どうしたコバ、ジョジョみたいな叫び方して……発作？」

「死ねっ！お前ホント死ねっ！」

二学期が始まって一週間経つか経たないか。演劇衣装班ことコバと織田は早々からどんな衣装を作るか、予算はどのくらいか、どの店で生地を買うか等を纏まる為に放課後に残る、と聞いたので、実行委員だし様子見に行くかーってことで俺と詩織の二人で食堂の一角に来たのだが。

なんかいきなりコバに怒鳴られた。俺なんかした？

「てめえ！夏休みに二つもフラグ建ててんじゃねえよ!?!俺も須田もびつつつくりするくらい女つ気無かったのに!!なんでお前はビツチクイーンと別クラスのサッカー少女といい感じの噂立ってんだよ!?!殺すぞ!!」

「……あー、それ」

「てか小林君、情報ちよつと遅い……?」

「ほつとけ詩織。陰キヤだからそういう情報回してくるやつが居ないんだよ。……てか、ホントアタシとこいつが噂になってるのムカつくんだけど」

織田のその一言は俺にもグサツと来るからやめろ。ぶっちゃけ俺も詩織から聞いてなかったらその情報回ってくるのめちやくちや遅かったと思う。というかコバもよくその話題を織田がいる前で話せたよな……コイツも大概無神経極まりないと思う。

「ホントふざけんなよ、ちよつと前まで日高に彼氏が出来て沈んでたくせに……」

「えっ、ハル沈んでたの？」

「え、俺沈んでた？」

「沈んでたんじゃないの？結構みてて痛々しかった」

まあ、若干沈んでた自覚はあったけど……マジかー、コバにも織田にもそう見られてたのか。よくよく考えたらあの頃異様に同情され

てたもんなー。というか詩織がいる前でこの話出来るコバの精神は鋼かなんかか？絶対こいつ俺より無神経だろ。俺よりタチ悪いだろこれ。

「……で？進捗はどうなんだよ」

「序盤と終盤で衣装の雰囲気ガラッと変えたいなって話はしてた。最初とはかく現代風、地味なスーツとかでいいんじゃない？って。で、終盤は逆にシンデレラの舞踏会みたいなキラキラした感じの」  
「うわあ、それすっごく良い……！」

織田の説明に詩織が目を輝かせている。女の子はそういうの好きだよなあ。

「詩織、あんたドレス着てちゃんと踊れるの？」

「むー、香澄ちゃんもしかしてバカにしてる？」

シンデレラ役は詩織がやることになった。織田が意地悪な先輩やるのを思いの外嫌がって、「アタシが意地悪な先輩やるならシンデレラあたしに決めさせて！」と謎の交換条件を持ち出してきたのだ。ぶつちやけ俺は誰がシンデレラやろうとどうだつて良かったので許可したら、織田はなんと詩織を選んだのである。詩織も結構な勢いで拒否してたんだが、結局なんだかんだでこの二人の出演は決まったのである。

「頼むからドレスの裾踏んでビリビリ……とかやめてね？」

「しないってば」

まあ、二人ともルックス悪くないしいんじゃねえのかなと思う。

織田とかめつちや似合うし。

「シンデレラと王子様の衣装は作るけどさ、他のドレスなんかはドンキで買った方が安いんじゃない？」

「あ、それは俺も思ってた。まあ安っぽいっちゃ安っぽいけどそこそこ使えると思うぜ」

「そうだなー、全部作っても予算やべえしな……頭入れとくわ、サンキュ」

こいつら衣装系に関しては詳しいな……織田はなんかコスプレ衣装作ったことある、って言ってたから解らないでもないが、コバに関



しては完全に下心のみで身につけてるんだよな、このスキルと知識……頭おかしいだろ。

「日高、型紙と完成イメージ出来たら一回見せるからその時頼むわな。……あ、採寸は織田がやってくれるから」

「はーい、ありがと……ってあれ？ドレスは小林君の担当なの？」

「アタシが王子様の衣装担当で小林がドレス担当」

逆だろ普通。あ、でもコバはチャイナドレスとかメイド服みたいな女性用の衣装ばっか作ってたのか。……織田はアレか。男装衣装とか作ってたのか？あんまり詮索すると殺されそうだからここでは聞かないけど。

まあいいや。思った以上にこいつらはちゃんとやってくれそうで安心した。

「じゃあ、俺脚本皆川ちゃんに見せてくる。詩織先帰ってていいぞ」

「はーい。二人とも、頑張ってるね」

「とつとで行けリア充共。幸せオーラが伝染る」

幸せオーラは伝染ってもいいんじゃないだろうか。というか俺が幸せそうに見えるならコバの心は荒み切っていると思う。

〜

「……なあ、織田」

「何？」

小林は無地のノートにドレスの案を書き出しながら織田に声をかけた。当然、目線はノートにあり、彼女の方を向く素振りはない。織

田も同じように彼女のノートに衣装の案を雑に描いており、声をかけられようと小林の方を見ようとはしなかった。

「お前から見て、晴人ってどう思う?」

「……は?意味わかんないんだけど」

「俺さー、晴人は絶対日高のこと好きだったと思うんだよなー」

「何?恋バナでもしたいの?キモイ」

「ぶっ殺すぞビッチ。そうじゃなくて!」

小林は顔を上げ、イラついた顔で眼鏡の位置を直した。ルックスに限って言えば彼はかなり良い素材を持っている為、その仕草は少し絵になるかもしれない。

「あいつはいいヤツなんだよ。ぶっっちゃけ、絶対日高のことは好きだったと思うんだよ。でもさ、高見ってヤツが日高と付き合ったじゃん?あいつ多分相当心にキてた……キてるんじゃないかねえかなって思うんだよな」

「話が見えないんだけど」

「だから、俺が言いたいことは……」

織田が、ふと顔を上げて小林の表情を見る。

——その小林の表情は、今まで誰も見たことの無い程に真剣で、何か迫ってくるものがあつた。

「お前、その状態の晴人弄ぼうとしてるんだったらマジでぶっ殺すからな。陰キヤでひよろひよろの俺なんかに凄まれても怖くねえかもしんねえけど、マジでぶっ殺す」

「……マジでアンタに凄まれても怖くないわ」

溜息を吐いて作業に戻る織田。小林の瞳の熱はそんな織田の赤い髪を睨んだままだ。

「噂が流れてるのはアタシも知ってるよ。ただ大学のオープンキャンパスに一緒に行つて、帰りにゲーセン行つただけ」

「なんでお前が晴人とゲーセンに行くんだよ」

「……アンタ、前にアタシの鞆に缶バッジ付いてたの覚えてる?」

「……あー、ヒプマイの」

頭の中で灰色の狼を思い浮かべる小林。織田は頭を掻きながら、心底嫌そうに続きを紡ぎ始めた。

「アンタがああ言う時に言ってたみたいだ、アタシ結構オタってるんだ。……この、衣装作るスキルも、コス衣装とか作ったことあるから……」

コス衣装、というワードを聞いて小林の目が輝く。

「マジで!? お前そんなもん作ってたの!？」

「うっさい! 声がデカイ!」

異様な食い付きに織田は半ば引きつつ、晴人だけでなく小林にも自分の趣味を晒してしまったことに多少の後悔を覚える。対して小林の反応は非常に好感的だった。

「まじかあ、俺のまわり衣装作るやつ誰一人いなかったから普通に仲間がいて嬉しいぞ!?! なあ、どんなの作ったんだよ、教えるよ?」

「はあ? あー……最近だと、寂雷先生とか」

「えーと、それもヒプマイだっけか? マジか、お前が着るのか?」

「……そうだけど」

「女性衣装は?」

「ほぼ作らない」

「なんだよ、つまんねーの」

「アンタ結構ムカつく」

男装衣装しかほぼ作らないと解った途端、興味の半分が削がれたと言わんばかりのテンションの下がり方に、織田は本気で引いた。自然と本日何回目かの溜息も出てしまう。

「……まあ、結構オタクだから、アタシも。クレインゲームのフィギュアが欲しかったの。でもアタシ下手だから、代わりに神崎に取ってもらってただけ。別にアイツを弄ぶ気は無いし、アタシなんで周りからビッチって思われてるかもよく知らないし」

「俺はなんか、結構歳上のイケメンという姿をよく見るから、遊んでるんじゃないの? って聞いたけど」

小林のその又聞きの噂を聞いて、織田はまたもや溜息を吐く。

確かに、織田は歳上の男性といることが多い。それも、髪の毛は赤

みがかつた茶髪で、体格も良いかなりの「イケメン」だ。

「……それ、多分アタシの兄貴」

「えっ、お前きようだいいるの?」

噂の真偽等、元を正せば案外当然のことであることが多い。織田が遊んでいる、と噂されていた原因は郁也にあつたのだ。郁也も晴人の姉、雨のように少し妹を甘やかす癖がある上に、織田自身も郁也のことを好いている。その為、余計に遊んでいるカップルのように見えてしまったのだろう。

「だから、アンタが思っているような感じで神崎と絡んでるわけじゃない。まあ……ただのオタ友、かな」

織田はそう締めつつ、小林と晴人に少しだけ感心していた。

晴人がどう思っているかは別として、小林のあの気迫は、本気で友達を心配していた。思ったことを素直に口に出し、尚且つその毒が非常に強く、自らの傷口は隠そうとする晴人のことを、小林が本気で友達だと思い、好いているとは思っていなかったのだ。

彼は、思った以上に友達思いの人間なのかもしれない。

「……アタシからしたら、アンタの方が意外だよ」

「俺が?なんで」

「もつと陰キヤだと思ってた」

「は?」

もう少し、卑屈でひねくれていると思っていた。そう言わなかったのは、織田が少しだけ小林のことを見直したからなのかもしれない。

例えば、小林が本気で織田に突つかかったのは、晴人が学校をズル休みした時だった。恐らく、彼は晴人の欠席がズル休みだったことを知らなかった為、ズル休み扱いした織田が許せなかったのだろう。

「アタシは結構好きだよ、神崎のこと。アンタも、思った以上に嫌いじゃないかも」

「俺知ってるぞ、そういうのを文化祭の魔力って呼ぶんだ」

「なにそれ」

「エロゲとかラノベでよくあるんだよ。あんまり接点ない異性と文化祭の実行委員やって、「あれ?こいつ実はいいやつじゃん」みたいに錯

覚して付き合っちゃうようなアレが」

「あー、そういうこと。まあ学園モノの王道だよね。何？アタシとヤリたいの？」

「……お前、そういうこと言うからビッチに思われるんじゃないのか」  
「別にビッチって思いたい奴は思わせとけばいいし」

暫し、無言のまま作業が進む。

「……あ、アタシが隠れオタってバラしたら殺すからね」

「バラさねーよ別に。あ、でも今度コス衣装見せてくれよ」

「……別にいいけど。そんなに上手く出来てるもんじゃないからね」

——神崎って、変な奴には好かれやすいのかもね。こいつとか、アタシとか、兄貴とか。

時間を潰したい。

世間一般では七月、そして八月が所謂「真夏」に分類され、九月にもなれば月が綺麗ですねだの言われだして「秋」の訪れを感じさせてくれるもんだと思う。

そんな九月なら夕方にもなれば幾分かは涼しくなってくれるもんだろ……と思いつながら帰る準備をしている俺の額にはアホみたいな汗が浮かんでいた。ふざけんな、クソ暑いわボケが。

放課後の学校は部活生のメツカとなり、グラウンドは様々な運動部が叫びながら必死こいて練習、文化部も各々の文化を高めたり喋ったりしてるんだろう。万年帰宅部の俺には一切関係無ければ興味も無いのだが、文化祭の実行委員となつてからはこれが関係の無いものは無くなつてしまった。

「暑っつい……死ぬ」

誰もいない教室で文句を言つても、返してくれる人はいない。詩織は多目的室にて演劇のまとめと指導。俺は模擬店の予算等々の計算。とは言つても最終的には担任の皆川ちゃんに「これでいっすか」って聞いて細かい部分は色々やってくれるらしいからそこまで煮詰めなくてもいい……という訳では無い。ポテトを安く売っている業務用スーパーをめちやくちや探した。安いもんを沢山高く売るのが正義なのだ。お陰で目がしょぼしょぼする。こういうスキルは姉ちゃんに習つたのだが、姉ちゃんは何処からこういうスキルを手に入れたのか……疑問である。

今まで暗くなる前には確実に家に帰っていた俺が、暗くなるまで学校にいる。なんだか変な気分だ。お化けや七不思議なんて噂も無いクソみたいな学校だが、古いだけあって少し暗いとかなり怖い。部活生すげえな、いつもこんな黄昏乙女アムネジアと戦つてんのかよ。階段降りる時のギシギシ音がいつもより三割増で聞こえるわ。

昔姉ちゃんが観てたのを隣で観ててトラウマになつてしまった地獄少女の主題歌が脳内に流れながら靴に履き替え、校舎を出る。気分はさながらいっぺん死んでみて妖怪退治を終えた異能者の気分だ。

安いポテト探してただけだけど。

流石に日が傾いて空が暗くなると暑さは若干和らぎ、額の汗を手のひらで拭いながら校門をくぐったその時だった。

「あれっ、ハル君?」

聞き覚えのある声で声をかけられた。というか、この学校で俺のことをそう呼ぶ奴って一人しかいない気がする。

振り返ると、首からタオルを掛けて髪の毛を後ろで縛った日焼けサツカー少女、石黒凜花の姿がそこにあった。

「帰宅部じゃなかったっけ? 珍しいね」

「文化祭の実行委員だよ。リンはいつもこの時間に帰ってんのか」

「そだよー。いつもこの時間」

相変わらず笑った時の白い歯が眩しい。

「あれ、リンの彼氏じゃん!」

「ホントだ、じゃああたし先帰るねっ」

「凜花先輩彼氏いたんですか!」

「こらっヒトちゃん! 邪魔しないの、帰るよ」

「リン、また明日ね! ごゆっくり♪」

周りの女子サッカー部が俺に気付いた瞬間にもんのすごいニヤニヤした顔で手を振りながらそそくさと帰って行った。あー、なんか既視感あるなこれ。ちよっと前まで詩織といたらこんな感じになっただな俺。

「あえっ!?! ちよ、皆?! あー! もう! 違うって! ……はあ、行っちゃった」

リンが顔を真っ赤にして叫ぶも、女子サッカー部の皆さんはその持ち前の脚力で逃げていった。うーん、女三人で姦しいとはよく言ったもんだよな。三人以上いるけど。

「はあー……なんかごめんね、ハル君」

「いや別に慣れてるからいいけど」

「……追いかけるのもめんどくさいなー。一緒に帰ろっか」

「そうだな」

流れでリンと帰ることになった。まあ一人よりはよっぽどいいよな。こいつと喋るのは嫌いじゃないし。また噂が立ったらこいつには悪いような気もするが……まあ、今更みたいな所はある。あの感じだとサッカー部では結構言われてそうだし。

「委員とか、めんどくさいからやらないタイプだと思ってた」

「やらないタイプだぞ。部活生じゃない男子が殆どいないからしようがなく受け持っただけで」

「あつ、そつか。そういえば部活生は出来ないんだったね。演劇どんなことするの？」

「秘密。そこそこ面白いと思うぞ……そっちのクラスは何するんだよ」

「ひみつー。そこそこ面白いと思うよ」

俺が何するか教えなくて、向こうから教えて貰えるはずも無かったな。まあそりやそうか。あんまりネタバレするのもアレだし、どうせそのうち情報なんぞ出回るだろうし。

「ハル君は出るの？」

「出ない。脚本と演出をちよつと口出すだけだな」

「えー、出たらいいじゃん。ハル君名演技出来るよ」

「何を見てそう思ってたんだよ」

「ティックトックとか真剣にやるじゃん？ 演劇も出るならガチでやるでしょ？ ほら、割と皆恥ずかしいから七割くらいでやるじゃん」

あー、確かにな。演劇コンクールなんぞ、観る相手は同学年や後輩、知ってるやつばかりだ。なんとなく恥ずかしいから全力演技をする奴はほとんどいない。……いや、多分俺も流石に日和そうだけどな。実際はそうした方が恥ずかしいんだけどなあ、解っていても出来ないことってのはある。

「お前は出ないのか？」

「出るよー。チョイ役だけど」

「名演技見せてくれるのか？」

「うーん……恥ずかしいから七割かな」



恥ずかしそうに笑うリン。さつき自分で言ってたそのまんまらしい。

「全部全力でやるもんだと思ってたけどな」

「出来ないものは出来ないのー。というか悪役だから余計恥ずかしいんだよね」

「なんでだよ、お前バイキンマンの人气知らないのか？」

「バイキンマンみたいな可愛い悪役ならいいけど、あんまり可愛くないの」

「シンデレラのお姉様とか？」

「あれだよ、オズの魔法使い」

オズの魔法使いに悪役なんかいたっけ？ 西の魔女だったっけか？

でもこいつ魔女って感じしないしなー……あれか、改変してるのか。俺らのクラスみたいに。

「魔女の手下やるんだ」

「あー、そういう」

魔女の手下なんて役あったっけ？ ……改変か。

「ほら、私ちよつと肌黒いじゃん、日焼けしてて。もう一人めちやめちや肌白い子がいるから、黒白で魔女の手下やるの」

「オセロみたいだな。洗脳には気を付けろよ」

「へ？ なんのこと？」

このネタ通じる同期にここ最近出会ったことがない。まあそりや旬はとつくに過ぎてるからなあ。

ある意味文化祭も洗脳の一種だと思う。文化祭マジックなんて言葉もあるくらいだからな。特別な空気に流されて、遅くまで文化祭の準備をしているうちにあまり喋らなかつた異性と喋るようになり、「あれ？ こいつ可愛くね？」となつて付き合う……みたいなあれの総称だ。彼女が欲しい俺としては是非ともそのマジックにかかりたい所なのだが、俺が一番このシーズンに関わるであろう異性というと、あまり喋らなかつたどころか昔から喋り倒してきた幼馴染であるし、更に言うなら彼氏持ちである。はー、クソじやねえか文化祭マジック。どつき回してやろうかこの野郎。俺にご利益がない魔法な

んてクソだー！ ……このままだと三十になって魔法が使えるようになつてしまう。

「あつ、電話だ。ごめん出るね」

「どうぞ」

リンの鞆のポケットが震える。こいつ絶対学校出る前から電源オンにしてただろ。いや俺もあんまり人のこと言えない……というか大概の奴がオンにしてるけど。というか一回こいつと学校の中で思いつきりティックトック撮ったことあつたわ、今更だった。

「もしもしく、うん今帰つてるとこ……えっ嘘!? えく、どうしよく!

……うん、うん。わかった、ありがと。また連絡するね、じゃ」

通話時間は数十秒。なんだかやけに驚いた声を出した後にテンションが下がっていたが……?」

「なんかあつたのか?」

「うん、お母さんからだったんだけどね。電車、人身事故で止まつてるんだつて。現場検証がどーだこーだであと一時間は動かないつて教えてくれた」

「まじかよ……最悪じゃねえか」

俺にはびっくりするほど無縁な話だが、リンに取っては相当な死活問題である。今から電車に乗って帰ろうにもその電車が一時間以上動かないとなれば、駅でひたすら待ちぼうげだ。ただでさえそこそこな暑さでうだつてしまひそうだったのに。

「どこかで時間潰そうかな……」

「まあ、それが妥当だろうな」

俺がリンの立場でもそうする。丁度ちよつと歩けば、二人で勉強していたサイズもあるわけだし。ドリンクバーで時間を潰すには最適だと思う。

まあ、一人で長々とサイズで時間潰すのも暇だろうし、俺もついて行つてやるか――

「……あ、そうだ。私ハル君の家行きたい」

「……………は？」

——何言ってるのこの子。アホなの？

「ハル君、家近いよね？」

「ま、まあ一応な」

「じゃあ私、ハル君の家で時間潰したい！ ……あ、勿論迷惑だったら断ってくれていいよ」

いや、決して迷惑とかそういう訳じゃない。そういう訳じゃないんだが、そう来たか……いきなり豪速球でフオークボール投げられた気分だ。ホント、メジャーリーグに行っただとは言え、あんな速いフオークボール誰が打てるんだよって話だよな。……じゃなくて。

別に家に来る分は嫌とか、そういう訳じゃない。けど、逆にリンがそれでいいのか？ って思ってしまう。今の陽キャって皆そうなの？ やだ、俺陰キャだから解らないわ。

「…………いや、迷惑じゃねえんだけど、俺ん家でいいのか？ 何もないぞ？」

「うん、どうせサイズ混んでるだろうし。ほら、詩織ちゃんも入ったことあるんでしょ？」

そりやあるけど。何回もあるけど。

「…………ちよつとタンマな。姉ちゃんに一応聞いてみる」

俺は迷惑じゃないにしても、俺の家の全権を握っているのはあの女帝なのである。姉ちゃんがノーと言ったら申し訳ないがリンには諦めて頂かないといけないし、無許可で入れたり何も話さずにリンと一緒にヨネスケもびっくりな突撃隣の晩ご飯をやってしまうともれなく半殺しだ。今日はもう家に帰っているはずなので、とりあえずスマホで通話を掛けてみる。

『…………もしもし？ どしたの』

数コールすると、間延びした姉ちゃんの声が聞こえてきた。

「あ、もしもし？ 俺。あのさ、友達が電車止まってて家帰れないっていうから電車動くまで家にあげていい？」

『別にいいけど。どうする？ スマホでも起動しとく？』

なんでこの人当然のようにスマホ起動させようとしてるんだ？  
いやまあ確かに友達と家に集まったらマリカかスマブラみたいな  
風潮はあるけどもさ。

「いや別にいい。女子だし」

『え？ あんた女の子の友達いたの!? 詩織ちゃん以外に!?』

ぶっ飛ばしてやりてえ。

『いいよいいよ、早く帰っておいで！ 今日はお赤飯だね』

ぶっ殺してやりてえ。なんなの？ めちやくちやムカつくお母さん  
みたいなのりしやがって。絶対ふざけてるよアレ。剣持刀也に母  
絡みする月ノ美兔かよ。

「いらんことしないでいいからな、もしもし？ おい？ おいクソ姉  
貴！ ……切りやがった」

「……もしかしてダメだった？」

いや快諾です。腹立つレベルで快諾です。

「……案内するわ。めちやくちやムカつく姉貴がいるけど、なんかもう、  
いないものだと思ってくれていいから」

「……?? うんわかった……?」

少し形は違うが、小さな小さな文化祭マジックが掛けられた気がした。

熱くなりたい。

あー……めんどくせえ。

電車が止まって帰れない、という若干同情する不幸に見舞われたり。何故か時間を潰すのに俺の家に来たいと言い出し、それを姉ちゃんが無力つく程快諾。俺も若干同情されていい不幸に見舞われている気がした。

とは言えど、やっぱりリンを一人で一時間以上待たせるのは可哀想な気もするので二人で俺の家まで帰ってきたのである。

「ただいま」

「おじやましまーす」

何気に詩織以外の女子が俺の家に入るのは初めてな気がする。まあ俺友達少ないし、女子の友達とかいないし。……織田は友達か？悪友？まあどちらにせよ家に入れたことは無いけど。

「取り敢えず俺の部屋行くか」

「うん」

姉ちゃんにあんまり会わせたくない。絶対面倒なことになる。俺が。だって電話のテンションおかしかったし絶対ウザ絡みしてくるもん。俺に。とつと俺の部屋に避難してしまおう。

二階に上がる階段をそそくさと上がり、早々に俺の部屋のドアを開ける。よし、これで取り敢えず大丈夫——

「おかえり〜」

——ドアを閉めた。

やりやがったな……！俺が面倒な気配を察知してリビングに顔を出さず真っ直ぐ俺の部屋に向かうことを完全に読んでいやがった……！あのクソ姉貴、俺の部屋に陣取ってやがる……！

「ハル君？どうしたの？」

「いやなんでもない。やっぱりリビング行くか」

「えっなんで」

「なんでもないんだ、いやマジで」

早々に面倒事から逃げる為にリンを押しして階段の方へ向かう。あ

の姉ちゃんの目はヤバイ。俺を弄ぶ気満々だ。

俺の抵抗を嘲笑うかのように俺の部屋のドアが開く。そして中からニユルつとクソ姉貴のニヤニヤ顔が顔を出した。

「どうしたの？あんたの部屋にあるエロ本なら今あたしが隠してあげたよ」

「マジふざけんなよクソ姉貴」

持ってねえわ。エロ同人誌ならコバに返したわ。

「てかなんで俺の部屋にいるの」

「あんた絶対あたしを避けると思ったから」

その通りだよ、なんで見えてる地雷を踏みに行かないやならんだ。

「そつちがお友達の子？可愛いじゃん」

「あつ、えつとお邪魔します。石黒凜香って言います」

「神崎雨です、こいつの姉。よろしくね、凜香ちゃん」

リンには至極真つ当で普通の返しをするのな、まあ当たり前か。流石に初対面で意味不明なことをする姉貴でも無い。その辺はまあ、しつかりしている……のかな。多分。

「ゆっくりしていくといいよ、電車動くの遅かったらごはんも一緒に食べていけばいいし。こいつの部屋意外と綺麗だから思う存分くつろぎな、部活大変でしょ？」

「あ、はい。ありがとうございます……あれ？私部活って言いましたっけ？」

「サッカー部でしょ？そういえば夏休みに晴人が女子サッカーの試合見に行くって言ってたから君かなって思っただけ」

「当たり前だよ。よく覚えてたなそんなの」

「今度試合あったら教えてね、あたしもファイアトルネード見たい」

「出来ないです」

そりゃそうだろ。

~~~~~

「面白いお姉さんだね」

「つまらない姉ではないな、まあ」

「ホントにエロ本あるの？」

「ねーよ」

「探していい？」

「見つけたらどうするんだよ」

「いや無いけどもさ。」

「うーん……引く」

無情にも程がないか？

取り敢えず俺のお気に入りのおかふかの座布団をリンに渡し、俺は適当にベッドの上にも腰掛ける。客人だからね、リンは。そりゃ一応ちゃんとおもてなしするよ。俺だって腐ってもジャパニーズサムライボーイなのだ。

「お姉さんも言ってたけど、部屋綺麗だよね」

「そうか？……まああんまり自分の部屋にいないからな、必然的に散らからない」

テスト期間とか、勉強する時くらいしか自分の部屋に入り浸ることがない。あと姉ちゃんと喧嘩した時とか……？しかもテスト期間になつたら部屋片付けたくなるし。

「それにしたって綺麗だよ……あ、高一の美術で作った課題だ。意外、こういうの飾るんだ」

リンが目ざとく見つけたのは彼女の仰る通り、高一の頃に美術の授業で作った作品である。アイスピックみたいな針で真っ黒な板をガリガリ削って、後ろから絵の具入れるやつ。名前なんだっけ……忘れだ。月と兎を描いたのだが、割と出来が良かったのでなんとなくそのまま飾っている。確かにこういうものを俺が飾るのはあまりないかもしれない。

「こういうの捨ててると思ってた」

「俺のことなんだと思ってるの？」

まあ基本的には捨ててるけども。

「なんかこう、結構こういう思い出とか無駄！って言うタイプかと」  
「マジで俺のことなんだと思ってるの……？あれだぞ、俺結構思い出とかは大事にする派だぞ？」

そうじゃなかったら姉ちゃんとか詩織と撮った夏祭りの写真とか残してないし。なんだったら文化祭もいい思い出に出来たらなー、とか考えながら色々やってる訳だし。今んとこ大変な思いが多いけど。

「じゃあさ、私がハル君の家に来た記念で写真撮つところよ。これも思い出」

「は？…どう思う出だよ」

そう言いながらリンがスマホのカメラを起動させた。流石はイマドキ女子と言うべきか、ちゃんと盛れるアプリである。めちやくちや美肌のリンと俺が内カメラに映る。

「いいじゃん、はい笑って……撮れた！」

少し肌が白いリンとめちやくちや肌が白い俺の謎ツーショットが撮れた。いやすごいな今の盛れるカメラアプリ。日焼けゼロじゃんこれ。最早リンのアイデンティティ消えてね？鏡音リンみたいな白さになってる。

「美白効果いれすぎた！私これ私ってわかんないじゃん！」

「俺なんかこれ顔色カオナシじゃん」

リンの肌で鏡音リンみたいになっている、ということは元々日焼けしていない俺は更に白いわけで。なんかもうカオナシみたいになっている。まあ残念ながら俺は掌から砂金は出せないのだが。

……いや、まあこれはこれでありなのかもしれない。なんとというか、ちよつと面白い。

「おいリン、その写真あとで俺にも送ってくれ。なんか笑えてきた」  
「勿論！確かにちよつとこの写真面白いね」

俺が唐突な写真に驚いてちゃんと笑えていないから余計に面白い。なんかマジでカオナシに見えてきたぞ？

「なんかさ、私とハル君はあれだね。写真とか動画が多いね」

唐突にリンがそんなことを呟いた。言われてみればそうだな……：そうか？最初に会った時にティクトック一緒にやったくらいなの



では？

「気のせいだろ」

「いやいやそうでもないって。お近づきの印にくってティックトックやったじゃん？それで、初めて家に来た今も写真を撮ってる。なんかこう、お近づきの印に写真とか動画多くない？」

「最初と今だけじゃねえか」

果たしてそれは多いと言えるのだろうか。

「というわけで今からやる？ティックトック撮影」

「えっ」

なんで？今写真撮ったじゃん。

「まじかよ……何やる？」

すぐに乗り気になってしまう俺サイドにも問題がある気もする。まあ別にティックトック自体はやっても減るもんじゃないし。どうせ何かやることもないし。

俺が割とすぐにやる気概を見せたことにリンはご満悦なのか、ニコニコしながら俺にスマホの画面を見せてきた。あー、これね……これか……。

「これー！」

画面に映っているのはペットボトルを投げている男子高校生。投げられたペットボトルは空中でぐるりと一回転し、蓋を底にして逆立ちして静止していた。割とよく見る、凄技系の動画だ。これを俺がやるの？

「これホントに出来るのか？」

「いいじゃん、私撮ってるからさ、チャレンジしようよー！」

「てかペットボトルは」

「はい、これ使って」

そう言っリンに渡されたのは半分くらいまだ水が残っている天然水のペットボトル（500ミリリットル）。なんでこいつこんなに用意周到なんだ……？

「それ今日の練習の時に買い足した水なんだ」

「あー、なるほどな。暑いもんな」

「よし、じゃあ早速チャレンジしよう！」

「おー」

ベッドから立ち上がり、割と綺麗な俺の部屋の床に向かってペットボトルを投げる時間が始まった。

くくく

「ああああああ！今のめっちゃ惜しくね!?今めっちゃいい感じだったくね!？」

「今惜しかった！かなり惜しかった！いけるよハル君！これいける！」

ペットボトルを投げ続け、格闘すること約三十分。俺はめっちゃくちゃガチになっていた。なんとというか、たまにめっちゃくちゃ惜しいのがあるのだ。出来そうな気がしてくるのだ。でも出来ない。ムカついてくる。何がなんでも成功させたい。ガチになる。当然だよな？俺だって腐ってもジャパニーズサムライボーイなのである。

そしてその俺のガチさに当てられてか知らずか、同じようにガチで熱くなって撮影しているのがリンだ。グラビアアイドルの撮影でめっちゃくちゃおだてるタイプのカメラマンかってくらい俺と同じ熱量になっている。多分今この部屋の暑苦しさは外を超えている。

しかし。男にはやらねばならん時があるのだ。それはペットボトルを逆立ちさせる時。リンは女だけど、やらねばならん時があるのだ。

「よーし落ち着け……いくぞ……これ何回目だ」

「覚えてない。何回目とかそういう雑念は消してねハル君……もう撮ってるよ……」

「よーし………ていつ」

手首のスナップを効かせて、軽くペットボトルを放り投げる。くる

くると回転しながら宙を舞うペットボトルはそのままゆっくりと落下し……そのままガラランガラんと地面をのたうち回った。失敗である。

「うっわ今の惜しくも何ともねえ」

「集中だよハル君！」

なんかもう二人とも変なテンションになっている。二人ともその自覚はあるのだが……このテンションめちやくちや楽しいのでどちらとも口には出さない。ある種のトランス状態、或いはマジックだ。てかこれ本当に出来るのか？

転がったペットボトルを拾い、再度集中。そのまま手首を使ってまた軽く放り投げる。またペットボトルは回転しながら宙を舞い、そして今度は……蓋と地面がゴツンと音を立て、そのままバウンドして地面に転がった。

「あっ今のも結構惜しいっ！」

「だああ、今のは成功するやつだろうがよ！くっそこれだんだんムカついてきたぞ」

こういうニアミスのな失敗が結構増えてきた。まあそりや三十分もあれば上手くなるわな。もう何回投げたか忘れたし。

「なんか後輩のフリーキックの練習見てる気分になってきた」

「流石にフリーキックの練習とこれを一緒にしたらダメだろ……おいリンお前目がマジだぞ」

この子本当にサッカーしてる時はガチの目だよね。ちよつとゾクツとするくらいの集中力に見える。

後輩の真剣な練習とこのティックトゥックを同じレベルにするのは少しその後輩ちゃんに申し訳ない気もするが、俺も実際ガチでやっているし、リンの目もかなりガチなので気合いを入れ直す。ふうー、と息を大きく吐き、ペットボトルを拾い直す。そしてポン、とペットボトルを放り投げ――

――綺麗に回転したペットボトルはそのまま蓋を真下に落下し、そのまま地面に着地した。転がっていることもない、完璧な着地である。これがオリンピックの体操の床部門であれば、たった今オーデイ

エンスが沸き立ち、黄金に輝くメダルを手にしていただろう、という程に。

「やったああああ!!!」

マジで!?!これマジで立つんだな!?!すごくね?!俺凄くね!?

「おいリン、ちゃんと撮れてるか!?!」

「撮れてるーやったやった、成功したよ!ハル君最高じゃん!!」

二人でぴよんぴよん飛び跳ねながら直立不動のペットボトルに狂喜乱舞である。いや、ホントもう、なんだろう。マジで嬉しい。めちゃくちゃ嬉しい。なんだこれ。めっちゃ嬉しい。

ひとしきり飛び跳ねて、疲れてきたので二人してその場に座り込む。しかしまだ成功の熱は冷めず、二人とも謎の達成感と笑顔に満ちていた。

「ハル君のそんな顔初めて見たな」

「そうか?」

「うん。楽しそう」

わかる。今めちゃくちゃ楽しい。楽しさレベルで言うなら姉ちゃんと初めて学校サボった時くらい楽しい。ベクトルは違うけど。

「……でもあれだな、はしゃいだから喉乾いたわ。水貰っていい?」

「いいよ、それどうぞ」

「サンキュ」

あれだけはしゃげば喉も渴くのだ、直立不動しているペットボトルを再度拾い、今度はちゃんと蓋を開けて、中の水を口に含むべく口を付けた。うん、これが一応本来のペットボトルの使い方である。

「温いな、当たり前だけど」

「そりやそうだよ、買ったのだいぶ前だし……あつ」

「んあ?」

リンが何かに気がついたような表情になった。なんだ、何かあったか?」

「あー……いや、まあ別にいいんだけどさ。その……間接、キス」

「……………あ。……………えっと、その……………ごめん」

めちやくちや暑苦しかった空気が、急に素に戻った……いや、これ素か？

「晴人、入るよー。凜花ちゃん、ご飯食べていく？……えっ何この空気が、晴人アンタ何かした？」

今このタイミングで入ってきてしまった姉ちゃんは何も悪くない。悪いのは無意識にペットボトルに口を付けてしまった俺である。多分。

本気になりたい。

結局止まった電車はまだまだ動かないらしく、リンは俺の家でご飯を食べて帰ることになった。

結局間接キスによる若干の気まずい空気はまだ完璧に解けることも無く、更には姉ちゃんのやけにニヤついた顔にイライラしながら飯を食う羽目になってしまった。

食卓に並ぶは鶏の唐揚げをメインに白飯、スープ、サラダに卵焼きというよりどりみどりのボリューム仕様。美味そうではある。

「さて……凜花ちゃんは部活終わりでお疲れだろうし、多めに作つてあるから沢山食べてね。晴人、あんたは罪を償うべく唐揚げを食すことは禁ずる」

「罪が重すぎるだろ」

目の前でメインディッシュお預けとか地獄だろ。いやまあ卵焼きも美味いからそれでいいっちゃいいけど。

「あ、お姉さん、私ももう気にしてないですから……」

「ん？ ああ……ごめんね凜花ちゃん。あたしがこいつをイジメたかったんだけど、そう言葉にされたら気にしてなくても気にしちゃうよね。今のはあたしが悪かった」

あの絶妙なタイミングで俺の部屋に入ってきた姉ちゃんはその空気分、転がっていたペットボトルを見て状況を完璧に理解し、何故か速攻でリンちゃんに「ごめんねうちの愚弟が！」と謝り、そのまま俺を呼んでニヤついた顔で「あくあくやらかしたねえ〜」とイジリ倒してきた。基本的に我が家の（というか俺ら姉弟の）常識は「煽れそうな時はとことん煽る、いじる、イジめる」という最悪の具現化なので、こうしてクソ姉貴と化しているのだ。

「そうだぞ、詩織じゃねえんだから……お客さんもいるんだから普段のノリでいい訳ねえだろクソ姉貴」

「お客さんがいるならお姉様と呼べクソ晴人」

今までお姉様と呼んだことねえだろうよ。

「はい、凜花ちゃんお茶。晴人は自分で入れな？ その方が間違えな

いでしょ」

「だーかーらー！ お客さんいるんだから普段のノリでいい訳ねえだろ!!」

この姉貴は鳥頭なのか？ 思ったことがすぐ口に出るのか？ それは俺もか。

リンが不憫でならん。俺も大概終わってる自覚はあるが、姉ちゃんも大概終わってるのだ。スペックが圧倒的に高いから忘れがちなのだ。俺の思っていることがすぐ口に出る悪癖は姉ちゃんも受け継がれている。神崎家の最悪一子相伝なのである。つまり母ちゃんのせいじゃねえか。

「……ふふっ、面白いお姉さんだね」

「今のやりとりでその着地点に到達出来るのすげえな……」

「じゃあ次は間違えないように私のコップもハルくんから離しとくね？」

「うぐっ……」

即座にニコニコしながら姉ちゃんの悪癖に適応しているリンも相面白い女ではあると思う。というかコミュ強過ぎるだろ。普通姉ちゃんに対して悪印象持つもおかしくねえぞ。そして的確に俺の気にしてるポイントを笑顔で挟らないで欲しい。FF零式ならキルサイト見えてるからその攻撃。

「まあ、冗談はさておき食べな。白飯とスープはおかわりもあるから」  
「やったー！ お姉さん、いただきます！」

「あいよ、召し上がれ」

冗談らしいので俺も唐揚げは食べていいらしい。よかった。これでマジで食べさせて貰えなかったら遅めの反抗期が訪れていたかもしれない。姉に対して反抗期という言葉を使うのかと言われると……まあ少し難しいラインではあるが。

「……んん〜！ 卵焼き超美味しい〜！ お姉さん料理上手ですわ!？」

「ありがと。あたしもそれだけ美味しそうにバクバク食べてくれると嬉しいわ」

マジで姉ちゃんの卵焼き、食べた人全員が「美味しい」って言うよな……実際のめちゃくちゃ美味いんだが。

リンの食べっぷりは相も変わらずとてつもない勢いで、俺の倍くらいの速度で白飯が消えていく。それもまたこいつ、無心で食らうという感じではなく、本当に美味そうに食べるのだ。見ている気持ちがいまいくらいである。ふふ、そうだろうそうだろう。姉ちゃんの飯は美味いだろう。俺はこの飯を毎日食ってるんだぜ。

ちよつとだけ全能感。俺が飯作ってるわけじゃないのにな。

「白飯……おかわり頂いてもいいですか……？」

「勿論。遠慮せず食べな」

「はっや……俺まだ半分くらい残ってたんだけど」

フードファイターかよ……毎回思ってる気もするが。サッカー部の練習、そんなにハードなのか？ やっぱりタイヤ引いたり究極奥義の習得とかするのかな。指笛吹いてペンギン呼ぶ練習とか……いや指笛は別にハードでもないか。

「うくん、作りがいがある子だね……晴人も詩織ちゃんも沢山食べる方じゃないからなあ」

「悪うござんしたね、いっぱい食べる俺じゃなくて」

俺もたまにご飯を作るが、やっぱり美味しいって言ってくれるのがなんだかんだ一番嬉しいからな。姉ちゃんは俺のご飯を美味しいと言わないので家では滅多に作らないが……。

「凜花ちゃん、学校でのこいつの様子教えてくれる？」

リンのおかわりをよそいながら、突如そんなことを聞き始める姉ちゃん。保護者かよ。保護者か。実質保護者だな。

「学校での様子ですか？ う——ん……私ハルくんとはクラス違うから意外と学校では絡み少ないよね」

「一年の時も被ってないしな」

まあリンからしたら絡みが少ないのかもしれないが、俺からしたら学校内の絡みの多さはトップファイブなんだよな……俺が友達少ないだけか。基本学校で絡むの、コバ、須田、詩織、織田、そこでその次くらいにリンだもんな……。



「でもハルくんは超良い人だと思うし優しいと思います。一学期の期末テスト、ほぼ初対面なのに勉強教えてくれたりしたし」

「へえ、あんた勉強教えてたんだ。まあ地頭良いもんね」

「あと、私は後から知って本当に凄くなって思ったんですけど……つてこれはお姉さんも知ってますよね、詩織ちゃんが誘拐されたつてやつ。あれ助けたのがハルくんつて聞いてびっくりしました」

「俺と高見な」

あと姉ちゃん。俺一人だったら多分被害者が一人増えて終わってただけだから。

「あー、あれね。あたしとしてはなんであんな半グレボコせないのつて感じだったけど……まああれはホントよくやったよ」

「言つとくけど女一人で半グレ三人ボコせる姉ちゃんがおかしいんだからな」

いやマジで。姉ちゃん別に子どもの頃空手とか習ってた訳じゃないよな？ 蘭姉ちゃんだつて映画で鬼神の如き強さを発揮できているのは空手やつてるからなんだよ。なんで武道習つてない人がそんなに強いんですかね。

「……つてか、私あの時お見舞いもいけなくてごめんね？ もう怪我は大丈夫なの？」

「ん？ あー。お見舞いは気にすんな、テスト期間真つ只中だったしお前は勉強の方が大事だったろ。怪我はもう大丈夫。高見と違って俺は刺されてないし」

そもそも確か余計な詮索とか入らないようにとかも含めて、学校側が校内の誰にも俺らが入院してる病院が何処かとか言わないようにしたつてなつてた気がする。俺と高見はともかく、詩織に関してはあんなのトラウマになつてもおかしくない事件だったし……あいつよくよく考えたら心療内科とか行かなくていいのか？ まあ、ああ見えて凶太くはあるけど……そういう問題でもない気はするが、大丈夫そうならまあいいや。

「他に学校での様子かあ……意外とハルくんは内々に熱血パワーを隠し持つてるよね」

「なんだそりゃ」

「いやだってほら。練習試合観に来てくれた時も応援に熱籠もって大きい声出してたでしょ？　今も文化祭の実行委員、結構ちゃんとやってるみたいだし」

「丁度家に来るまでの帰り道でその話しただろ。7割くらいで頑張るより全力で頑張った方がダサく見えねえんだよ」

「それがわかってても全力出せるのはすごい、ってことだよ」

実際私は演劇で全力で悪役できないもん、と続けるリン。まあ言わんとしていることは解るが……それに関しては別に学校だけの話じゃねえしな。姉ちゃんに嫌味を言うのも全力、スマブラで復帰阻止するのも全力、ファイナルファンタジーとかにあるサブイベントみたいなミニゲームも全力。俺……というか、これも神崎姉弟の信条みたいなところがある。

「へえ、あんた学校でもちゃんと全力でやってんじゃん。えらいね」

「そりゃそうだろ」

「でもあんた、本気でやってるのに周りからは「適当」って思われがちでしょ？　凜花ちゃんやんはちゃんとあんたの本気を見つけてくれてるわけだ。いい友達じゃん」

「あく、確かにハルくんはキャラ的に本気！　とか熱血！　って感じじゃないもんね」

確かに、俺は結構何でも本気でやるタイプではあるが、周りからは「無気力」「終わってる」と称されることが多い。終わってるに關してはただの悪口だろこれ。まあ実際部活に参加している訳でも無いし、授業に対しても本気！　ってくらい優等生でも無いから何もしてない時の方が多いので、無気力と言われるのはしょうがないかもしれないが……。

言われてみれば、学校の知り合いで「全力出せるのはすごい」なんて俺に言うやつはリンしかいないかもしれない。いや詩織も多分言う時は言うけど、あいつは幼馴染換算なので今回は例外として。

ふむ、まあ確かにそう思うと……リンは本当に良い友達なのかもしれない。

姉ちゃんも俺と同じで、深く関わっている相手には伝わる良い所が沢山あるのだが、あまり関わりがない知り合いからは「冷めてる」「悟ってる」と言われるらしい。そんな姉ちゃんが俺に向かつて「いい友達じゃん」って言うということは、本当にそういうことなんだろう。「まあ、こいつは基本的には愚弟なんだけどさ。なんだかんだ良いところも結構ちゃんとするし、これからも仲良くしてあげてよ」

「はいー。こちらこそ是非仲良くさせてくださいー!」

なんか、姉ちゃんが俺のことを「良いところも結構ちゃんとする」って言うてくれるの恥ずかしいな。

「珍しく普通に俺の事を褒めた?」

「褒めたかどうかはどうだろうね。まあ間違いなくあたしが一番あなたのことを見てんだし、家族だからね。そりゃあんたの良いところの十や二十くらい、簡単に見つけられるってワケ」

「例えば?」

「……………さて、凛花ちゃん卵焼き食べる?」

このクソ姉貴パツと思いつかなかったから逃げやがった!

~~~~~

神崎家 with リンの賑やかな夕食タイムが終わった頃、丁度電車も動き出し始めたという連絡が入った。姉ちゃんはリンがご飯をとにかく美味そうに食べるのが気に入ったらしく、かなりの上機嫌である。

三人で食事、というパターンは詩織が来た時に発生する為そこまで珍しいものではないが、詩織以外での三人での食事は当然超レアケースである為(寧ろ初めてかもしれない)、俺もなんとというかかなり新鮮な気持ちで食卓についていたかもしれない。

まあそんな新鮮でそれなりに楽しかった食事も終わり、電車も動き始めたのであれば、リンは当然ながら家に帰らなくてはならない。上

機嫌でリンのことを気に入った姉ちゃんには悪いけどね。

「駅まで送るわ」

「や、いいいいいよ。すぐそこですよ?」

「だとしても、だ。夜だし、女一人じゃ危ないだろ」

「……ありがとう、じゃあお願いしよっかな」

「おう。まあ俺がいてもそんな頼りにはならないけどな」

「そんなことないよ。お姉さん、夕飯はご馳走様でした!」

「あいよ。またいつでもおいで、凜花ちゃんの為なら美味しいご飯いつでも作つてあげるからさ」

「ホントですか!? ありがとうございます!」

「んじゃ、送つてくる。家の鍵開けといて」

「了解。行つてらっしゃい」

姉ちゃんにペこりと挨拶したリンと一緒に家を出る。流石にこの時間になるとかなり涼しいな。虫の鳴き声も幾つか聞こえてくる。もうそろそろ夏も終わって、秋に入っていくんだなあ。

「ご飯、超美味しかった。素敵なお姉さんだね」

「否定はしねえ。実際親代わりみたいなどこあるしな」

「いいなく。私もあんなお姉ちゃん欲しい」

「リンは確か……お兄さんと妹がいるんだっけか」

「正解。よく覚えてたね……二つ違いだからさ。お兄ちゃんはあるな大人っぽくないんだよね、あんまり仲も良くない」

へえ……リンがきようだとあんまり仲が良くないの、ちよつと意外だな……誰とでも仲良く出来そうなのにな……。

「妹は?」

「まあまああかな、普通くらいだと思う。妹は結構インドアで本とか結構読むからさ、仲は悪くないけど話があんまり合わないって感じかな。意外でしょ? 私の妹がインドア系なんて」

「まあ、意外だな」

正直きようだいたい全員何かしらのスポーツやってると思った。でも多分そういうことなら俺は妹ちゃんの方が話は合う可能性が出てきたな……まあ会うことなんか無いだろうけど。

「……今日はありがとね、無理言つて家まで上げてもらつて」

「んあ？ まあ別にいいよそれくらい。詩織なんか最早俺に連絡せず  
に勝手に上がり込んでる時あるし。そもそもお前の突発的なお願い  
もそろそろ慣れてきた」

「あはは、ごめんね。毎回急だもんね」

全くだよ。

ただまあ、なんというか……正直、傷心だった時にこいつの急なお  
願いでテスト勉強を教えていて。その時間は、割と傷心を癒してくれ  
ていたような気はする。まあ、リンはリンで高見に対する片想いの傷  
心があつたわけだが……。

思えば、奇妙な繋がりだな。偶然とはいえ。

「あ、駅見えた！ ホントに今日はありがとね、楽しかったよ！ あ、  
あとご飯美味しかった！ って改めてお姉さんにも言つておいて！」  
「ん。じゃあまたな」

「うん！ ……演劇、やっぱり私も全力で頑張つてみようかな！ 超  
悪役やるから、楽しみにしててね！」

「あいよ。でも優勝するのはうちのクラスだからな」

「負けないもんね〜！ バイバイ！」

ヒラヒラと手を振りながら駅の改札へと消えていくリン。よくよ  
く考えてみたら、あいつのことで一番意外なのはやっぱりお兄さんと  
仲があまり良くないことでも、妹がインドア系であることでも無く、  
あのキャラで演劇コンクールで割り振られた役が「悪役」ってところだ  
ろ。ドキンちゃんみたいな感じなのか？

「……………悪堕ちとか、女幹部って、そこはかとなくエロいよな」

——いかん。マジで何考えてんだ俺は。

どうしたい？

「ただいま」

「おかえり。良い子だったね、凜花ちゃん」

「そうだな」

リンを駅まで送って、家に帰ってくるまでの時間は十分にも満たなかった。改めて徒歩五分圏内に駅があるというこの家の立地の良さを感じてしまうね。ケロロ軍曹の歌で駅から五分は信用するな、みたいなのがあったなそういえば。

「今洗い物終わったし風呂沸かすわ。あんた先入る？」

「まあ、先に入っていいなら」

「じゃあ沸いたら先どうぞ」

「サンキュ」

先に風呂に入っているらしいので、今のうちにパジャマを出しておくか。まあパジャマといってもジャージにTシャツという超ラフスタイルだが――

「あんたさ、凜花ちゃんとどれくらい仲がいいの？」

――自分の部屋にパジャマを取りに行こうとしたら突然姉ちゃんからの質問で足を止められた。

リンとどれくらい仲が良いのか。どれくらい……どれくらいとは？ まあ、姉ちゃんが突然家帰れなくなつた時に飯誘うくらいの仲……それって俺基準だと結構仲は悪くないとは思っているのだが、向こうはどう思っているのだろうか。リン的には学校ではあまり絡みがない方らしいし……。

「どれくらい……基準がわからん」

「まあそれもそうか……いや、これは凜花ちゃんがいなくなつてからにしないとダメだなんて思っただけどね」

何？ 陰口？ いや姉ちゃんに限ってそんな陰湿なことをする訳がねえか。

「あんだ、今日ペットボトルで間接キスやらかしてちよつと変な空気になったんでしょ？」

「何かと思っただらまた俺をイジる話題かよ。まあ三度目の正直でリンがない時にしてくれてるのは空気が読めてるけど——」

「これはあたしの持論だから皆そう、とは言わないけど。間接キスで変な空気になるのは「その人のことが生理的に無理」なのか、「ある程度その人のことを異性として意識してる」なのか、「潔癖症」のどれかよ」

——あれっもしかして俺をイジメたかった文脈じゃないなこれ？

訳の分からんワードが飛んできて一瞬脳が止まる。

「まあ今日会っただけだから適当なことは言えないけど、あの子見た感じ潔癖症って感じじゃないじゃん。生理的に無理な男の家に上がり込む訳じゃないよね。普通の友達相手なら別に間接キスになっても「いいよ別に」で終わると思うんだよね。もっかい聞くけど、あんだ凛花ちゃんとどれくらい仲がいいの？」

姉ちゃんの言ってることを一つずつ、ゆっくり理解していく——そして、ちゃんとその言葉の意味を理解してもう一度、思考が止まった。ど……どういうことだ。つまり姉ちゃんが言いたいことは……リンは少なからず、俺を異性として意識しているから、間接キスになっちゃった時に、変な空気になってしまったってことか……？

異性として意識してる。流星にその意味が解らないほどバカではない。だが、改めて誰かからその可能性を突きつけられると、その言葉の意味がイマイチ解らなくなる。解らなくなるというか……言葉の信憑性を疑ってしまいたくなる。

「どれくらいって……」

「……ごめん。あたし知らないこと言ったかもね。忘れていい」

そんな簡単には忘れられないくらいの信憑性は、この言葉にはあつた。

くくく

シャワーを浴びながら、頭を洗いながら、身体を流しながら、湯船に浴びながら。ぼんやりと頭を支配し続けていたのは、姉ちゃんのさっきの言葉だった。

姉ちゃんの言葉をそのまま信じるというのなら。リンは俺のことが生理的に無理か、異性として意識してるか、潔癖症かの三択ということになる。姉ちゃんの言ってた通り、潔癖症……ではないと思う。そんなイメージは一切無いし、もしそうだったとしたなら一緒に飯を食いに行った時なんかにそういう素振りのようなものが見えるだろう。

だとしたら、俺のことが生理的に無理か、意識しているかの二択になる。無論、家まで上がっていて尚生理的に無理、という可能性もゼロでは無いが……こういう時に都合良く「意識しているのかな」なんて考えてしまうのは自惚れなのだろうか。

ふと思い出すのは、リンと二人でラーメンを食べに行った時。俺とリンが付き合ってるんじゃないか？　なんて噂を立てられてしまっているらしいぞ、と言った時のあいつの反応。

『……あんまり悪い気はしないね！』

あの時はその言葉の意味が解らなかったが、或いはそれは「満更でもない」という意味だったのだろうか？

——いや、それは無いだろう。あいつはあの時まだ高見のことが好



きだったことを引き摺っていると云っていた。もうあれは一月ほど前の話だから今がどうなのかは別としても……ある意味俺と同じで、あいつも誰かに対して叶わなかった「好き」をどこに蹴り上げたらいかが解らなくなっていた。

ではやはり、リンは俺のことを異性として意識していた訳ではなく、ただの友達ってことでいいのかな。

俺は、リンにどう思われていたんだ？

ふと過ぎったその言葉。俺はリンに「異性として意識されたい」のか、それとも友達なのか。

元々俺は確かに彼女は欲しかった。けれどそれは詩織に対する嫉妬や、失恋の傷心や、色んな感情がごちゃ混ぜになって、コバに乗せられて欲しいと思っていた……んだと思う。じゃあ今は？ ……答えられそうにない。

「……わかんねえ」

湯船に浸かりながら、さらなる思考の海へ身を投げ出す。脳内で響いているのは、今度は詩織の声である。

『……ハル的には、リンちゃんだったり香澄ちゃんは、アリなの？』

あの時も結局答えが出せないまま、うやむやにして逃げた気がする。

『ビッチでも「誰でもいい」って訳じゃないんだけど？』

織田の言葉も蘇ってくる。お前まで出てくるのやめれ。もう今俺の頭の中はいっぱいいっぱいなんだって。

——ハッキリ言って、リンも、織田も、正直ルックスはかなり良い方だと思う。リンは健康的に日焼けした肌が眩しく、天真爛漫で如何にもなスポーツ少女だし、織田も赤髪が良く似合う、キツめだけど美人と言われるタイプの顔立ち。顔の好みで言うならば、間違いなく二人とも「アリ」なのだろう。

じゃあその二人が、もし告白してきたら？ そう考えてみても……俺にはその絵面が全く予想出来なかった。なんというか、あまりにも現実味が薄すぎる気がしてしまう。

そもそも俺はリンや織田と付き合いたいのだろうか。付き合ったとして何がしたいのだろうか。ゴールは何処にある？ 結婚？ それは一体いつになる話だ。

『ビッチでも「誰でもいい」って訳じゃないんだけど？』

『チャンス与えてんだから、頑張つて勝ちな、童貞くん？』

——どうしたいのか、ということを考えている時に「ああ、もし付き合えたら童貞は捨てられるかもしれないのか」なんて考えてしまう俺が最悪なのか、或いは男子なら皆そうなのか。それすらも解らない。

リンとの間接キスから始まって、「リンは俺の事をどう認識しているのか」「俺はリンのことをどう認識しているのか」「俺はどう認識されたいのか」ということを考えていたはずなのに、いつの間にか織田のことも考えている。

というか俺は、リンや織田のことが好きなのだろうか。異性として意識しているのだろうか。

俺は、どうしたい？

どれだけ考えても、今はこの答えが出そうに無い。

答えが出る日が来るかも解らない。

ただ一つ解ることがあるとするなら、その答えが出た時、きっと俺は色んな感情と色んな関係を再構築しないといけないんだろうな、と

いうこと。それがもし、良い方向でも、悪い方向でも。

そしてそれはきつと、取り返しがつかないんだろ。いや、今まで取り返しがついたことなんてないか。どんなに頑張っても、時計の針を戻しても、時間が巻き戻ることなんて無いんだから。

風呂、上がるか。そろそろ姉ちゃんに代わってやらないと怒られそうだ。

くくく

鈴虫達の合唱を聴きながら、ベランダに腰掛けて煙草に火をつける。涼しい風が晴人の姉、神崎雨の髪を揺らしながら、煙草から昇る煙をゆらゆらと踊らせていった。

雨は晴人に言ったことを、ほんの少しだけ後悔していた。それはあの意味では推し量ることも出来ない凜花の想いを先に伝えかねないことでもあったし、同時に誤解を生む可能性すらあった言葉だから。だが、雨はそれでもあの場で晴人にその事実を突きつけなくてはならないと考えてしまった。その理由は凜花の想いでは無く——晴人自身が、言葉を投げかけられても未だ気付くことが出来ない感情にある。

ゆつくりと息を吐く。肺を犯して得る一瞬の快樂は、雨の年長者、或いは保護者、或いは姉としての行動として正しかったのかどうかという命題から、一瞬だけ目を逸らしてくれた。

「凜花ちゃんがどう思ってるかはわかんないけどさ——両方気まずくなってるんでしょ、間接キスで。それってつまりあんたも——晴人も、凜花ちゃんのことを生理的に無理なのか、異性として意識してるかのどっちかってことだよ。あんたが気付いてないだけで」